

# 妖精と白兎の愛育日記

護人ベリアス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

【深層】での決死行にて生と死の狭間を彷徨う妖精と白兔。  
そんな中妖精はその身にある正義希望を授かる。

その正義希望とは子宝。

—これは世界で最も尊い子宝という正義希望を授かった妖精と白兔が愛を育み、我が子を愛しみ育てる物語—

??原作14巻途中からオリジナルです。リユー×ベルの子供が出てきます。ただあくまでリユーさんが主役！（ここ大事）

??糖分たっぷりを目指し、テーマはリユー×ベルがイチャイチャして、愛児に愛を注ぎまくることです。

??長編作品の形式と短編作品の形式を併用して進めていく予定です。

?? お気に入り登録や評価をくださると大変嬉しいです。

??感想もくださると嬉しいです。

??毎週火曜日6：00投稿で進めていきます。

??リユーさんとアリーゼさんの紡ぐIFストーリーを描く姉妹小説『星乙女達の夢の跡』も宜しければどうぞ。

<https://syosetu.org/?mode=ss&id=236732>

??続きの短編作品の形式はpixivで投稿することにしました。  
(完結まで至る見込みは希薄なため、書き溜め分のみ)

<https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=1514962>

## 目次

プロローグ―妖精と白兔の秘密―①	1
プロローグ―妖精と白兔の秘密―②	9
〈懐妊編〉第一章 希望は決死行の最中に	
温もりに身を委ねて	17
妖精が温もりから得たものは	31
希望は二人の手に	46
越えし絶望と守られし希望	60
〈懐妊編〉第二章 手にした希望に気付く前に	
治療院騒動	73
募る危惧は漠然と	82
同じ希望を宿す親友へ	96
親友と恋人の狭間で	109
焦がす想いと焦げる食材	122
募る動揺と揺るがぬ覚悟	133
想いを分かち合った先に	146
〈懐妊編〉第三章 真の希望と過去の希望を巡る迷い	
新居探しを始める前に	162
過ぎし日の正義の軌跡を辿って	173
正義は何処に	183
掴むべき正義は過去に在らず	194
掴むべき正義はその身に	206
その身に宿し正義の導く先	218
並び立たぬ正義に別れを	228

〈懷妊編〉第四章 希望を宿して

何気ない日常を恋人と

—————

241

心と心を繋ぐ愛情料理…?

—————

250

愛を叫ぶは希望を守るため

—————

263

愛の叫びは希望を守るため 〈事後談〉

—————

273

街へ出掛けてお買い物

—————

285

〈懷妊編〉第五章 希望の守り方を手探る中で

秘密を明かして

—————

296

何気ない日常の守り方

—————

305

何気ない日常の守り方 (2)

—————

313

〈懷妊編〉第六章 当世の希望を過去に問う

二人はデートへ向かう道中に

—————

322

懐かしき希望を前に

—————

333

二人だけの夜の森で

—————

344

繋げたい二つの希望

—————

356

分かちたい二つの希望

—————

368

二人で決めた希望の名前

—————

379

〈懷妊編〉第七章 希望を守る旅へ

友の助力を求めて

—————

387

旅支度の最中に

—————

397

希望を守る旅へ

—————

406

## プロローグー妖精と白兔の秘密ー①

「…何をどうしたらこうなるんだ…？」

「え？」

私の愕然とした呟きに『二人の男女』が息ピッタリに声を揃え首を傾げて応じてくる。

…本当に何をどうしたらこうなる？

私シヤクテイ・ヴァルマは治安を司る【ガネーシャ・ファミリア】の団長として、共に治安を維持するために戦ったかつての同志リユー・リオンの密会を依頼していた。

リオンはかつての同志ではあるが、直前まではブラックリストに名を連ね、今は故人と扱われているが故にブラックリストから削除されたという事情を抱えている。よって堂々と会うのは難しいと言わざるを得ない立場の者であった。

だが『とある事情』を聞き出すことを余儀なくされた私はリオンの雇用主である【小巨人】<sup>デミ・ユミル</sup>から許可を貰い、彼女を介してリオンに依頼した。そして今こうしてリオンと密会する場を設けてもらっている。

場所は【小巨人】<sup>デミ・ユミル</sup>が経営しリオンも勤めている『豊穣の女主人』の二階の個室。

床下からは酒場が繁盛しているのがありありと分かる喧騒が聞こえてくる中、私はリオンとの二人だけでの密会を果たし『とある事情』を早々に聞き出せる…はずだった。

だが非常に理解し難いことに私の願望は果たされなかった。

私は確かに『リオンとの二人だけでの密会』を依頼したはずである。それはリオンと私の密会が行われたという事実を出来るだけ隠蔽したいからでもあり、リオンに迷惑をかけないための配慮でもあることはリオンも理解できるはず。

なのになぜここに部外者のはずの【白兔の脚】<sup>ラビット・フット</sup>がいる？

…リオンは私の伝えたことの趣旨も理解できないほどのポンコツ

に成り果てていたのか？

それとも【白兔の脚】<sup>ラビット・フット</sup>が何かしらの事情でこの場にいる必要があるのか？

それはつまり【白兔の脚】<sup>ラビット・フット</sup>が私の聞きたいと欲する『とある事情』に関与しているからなのか？

というかなぜリオンは純白のワンピースというこれまでに一度も見たこともない女性らしい装いをしているのか？…これまでに会う時はいつも『豊穣の女主人』の制服が冒険者の装いであったからどうにも見慣れない…その上リオンは普段ぴつちりとスタイルの良さが分かりやすい服を好んで着ていた記憶があるのに今日は妙にゆつたりとした服を着ている気がするのには私の気のせいか？

さらに言うとなぜリオんと【白兔の脚】<sup>ラビット・フット</sup>は肩を寄せ合っていると表現しても良いほど距離を縮めて座っているのか？私と二人の間に置かれたテーブルは二人にとって窮屈とはとても思えないのだが…

疑問が数えきれぬほど生まれてくるが、私の困惑が理解できないとばかりに二人揃って首を傾げているリオンと【白兔の脚】<sup>ラビット・フット</sup>は疑問に答えてくれない。

よって結局はその疑問を解消するには二人から聞き出す他ないと悟った私は、困惑をひとまず脇に置きつつ尋ねた。

「リオン…色々聞きたいことがあるのだが、一つずつ聞いていってもいいか？」

「もちろんです。シエクテイのご期待に添えるならば、答えられる範囲で幾らでも」

「なら…聞こう。まず【白兔の脚】<sup>ラビット・フット</sup>はなぜここにいる？」

「…え？」

私の問いにまたも声を揃え首を傾げるリオンと【白兔の脚】<sup>ラビット・フット</sup>。

…この息ピッタリ具合は何なのだ？

確かにリオンと【白兔の脚】<sup>ラビット・フット</sup>はこれまでに幾度となく共闘していたのは知っており、関係が深いことは理解する。さらに【深層】<sup>イレギュラー</sup>からたつた二人で生還し、それどころかギルドが隠蔽を図るほどの【異常事態】<sup>イレギュラー</sup>にさえ二人のみの力で切り抜けたと言う正直恐ろしい経歴を持つて

いるのも立場上知っている。

…だがこれほどまでの息ピッタリ、以心伝心と言わんばかりの距離感をあのリオンが築くことができると言うのだろうか？数々の苦難がリオンと「白兔の脚」ラビット・フットを私には理解し難いほどの絆を生んだとも言うのか？…それはかつてのリオンを知る身としてにわかには信じ難い。

だがそんな疑問を二人はあっさり打ち砕いた。

「…ベル？シャクティは何を困惑しているのでしょうか？」

「…うーん。さては僕がいると話にくいことがあるんですかね？」

「そのようなことは恐らくないでしょう。シャクティは信頼のできる方であり、そのような後ろめたいことを話すような方ではありません。まずベルに話せないようなことを私が聞く道理はありません」

「確かにそうですね…本当に何故でしょう…？」

…は？

小声で話し合う二人の会話を聞き取った結果浮かんだ言葉はこれだけであつた。

私はこの会話の中からも驚きを禁じ得ない事実を思い知らされた。

まずこの二人、私の困惑の理由を全く理解していない。…冗談抜きでポンコツの称号を進呈したいのだが、問題ないだろうか？

さらに「白兔の脚」ラビット・フットに話せないことをリオンが聞く道理がないとは一体どのような道理か？それに「白兔の脚」ラビット・フットがあっさり同意しているのも理解不能である。

…この二人の間にはまさか互いの知ることは共有していなければならぬと言う鉄則でもあるのだろうか？

…それではまるで共闘者の域を越えて夫婦のようではないか。

いや、夫婦でもそこまでのことはしないし、そこまでするならば余程の信頼関係が構築されているのか？

そんな自分でも理解不能な考えに至り始めた私は意味の分からない



い思考を打ち切り、このポンコツ達に質問を重ねる。

「…リオン。一応言うが、私はリオンとの二人だけでの密会を依頼していたはずだ。なのになぜ【白兔の脚】ラビット・フットがいるのかを聞いている。この質問の意味が分からないのか？」

「それは…記憶しています。ですが私への話は当然ベルも聞いておくべきことです。シャクテイからのお話であれば、私の今後に関わることである可能性が高い以上尚更。どちらにせよ私はベルに話す以上、ベルの意見もお聞きしベルにもう一度話す手間を省くのは何らおかしいことではないのですか？そもそもそれができないような後ろめたい話を私はあなたの口から聞くのは気が進みませんし…」  
「なぜそこで『当然』【白兔の脚】ラビット・フットが聞くことになっていて、【白兔の脚】ラビット・フットが聞けないことはリオンも聞けないことになっているんだ？私は全く理解できないのだが…」

「…ベル？私は何か妙なことを言っていますか？」

「まさか！僕だつてリユーに隠し事はしないし、聞いたことはみんなリユーに話すからリユーは普通だと思いますよ？僕だつてリユーにファミリアの今後についてを話す時にちゃんと呼びましたし。リユーの今後に関わることを話す場に僕がいるのはおかしいことではないと思います」

「ですよね…そうなれば…」

そう言いつつリオンと【白兔の脚】ラビット・フットは私に疑いの視線を向け始める。  
…まるで私の言い分が異常であるかと言うかのように。

…その視線にはどうして自分達を無理にでも引き離そうとするのか？という怒りと悲しみも籠っているようにも感じられる辺り私の感覚は本当に異常になってきているのではと疑いたくもなる。

だが異常なのは二人の方だと疑いようもないと考える私は、その視線に抗議をぶつける。

「待て。私はそのお前達の距離の近さも理解できない。なぜそうまでして情報を共有したがる？」

「なぜと言われましても…」

「それは…」

抗議とともに尋ねた私の問いにリオンと【白兔の脚】ラビット・フットは眩きと共に一度顔を見合わせると、私の方に向き直ると思わぬことを口にし始めた。

「私（僕）達は一心同体ですから」

「…は？」

いくら私でも流石に愕然とするあまり漏れる眩きを我慢できなかった。

ただの共闘者のはずの二人が一心同体？

これまで絆が深い冒険者の男女は幾度となく見てきたが、ここまで言い切る上に距離が近すぎる者達など見たこともない。

この二人にここまで言わせるのは何だ？

理解が全く追いつかない私であったが、話は進めなければならぬ。…というか今の説明では全く説明になっていない。よって二人の答えにとりあえず確認を取っていく。

「…なるほど。お前達が一心同体と自称するほど親しいことはよく分かった。つまりお前達は心も身体も一つだから、私の話も二人で聞かなければならない。そう言いたいのだな？」

「そういうことです。やつとシャクティは理解してくださいましたね」

「じゃあ僕も同席しても大丈夫ということですね？」

私の確認に二人はようやくやくかと言わんばかりに息を吐く。

だが説明になっていないものは説明になっていないのである。

「いや…全く理解していない。そもそも一心同体など空想の概念ではないか？それではリオンのみに話したいことを【白兔の脚】ラビット・フットも聞かなければならない根拠にはならないのではないか？」

私はそう淡々と二人の述べたことが根拠にならないことを告げていく。

その言葉はあくまで私の疑問を解消するためのものだった。

だがリオンはそうは理解してくれなかった。

「シャクティ!!それは流石に聞き捨てなりません!!」

怒号と共にヒビが入るほどの強い力でテーブルを叩き、その勢いのまま立ち上がるリオン。

思わぬ反応に私はビクリと驚きを隠せぬまま立ち上がったリオンを思わず見つめると、リオンの表情は怒りで顔が真っ赤になりかけていた。

「私とベルが一心同体ではない…?それはどういう意味です?私のベルへの愛が足りていないとでも言うつもりですか!」

…ベルへの…愛?

「それは私への侮辱ですよ。シャクティ…いくらあなたでもそれだけは許しません。私は誰よりもベルのことを愛している!それは誰にも否定させはしない!」

…ベルを…愛している?

「ちよ…リユー!落ち着いてください!そんなに怒ったら身体に悪いですよ…!というかそれだけじゃなくて…」

私がリオンの怒号への理解が追いつかない一方【白兎の脚】ラビット・フットがリオンの怒りを収めるべくリオンの手を握り、諫める声を掛ける。

…待て?

『リオンの手を握り』?

なぜあのエルフで潔癖なりオンが【白兎の脚】ラビット・フットの手を即座に振り払おうとしない?

それどころかリオンは思わぬ行動まで取り始める。

「ベル。止めないでください。シャクティは私達が一心同体であることを否定し、私達の愛を汚しました。これは絶対に許してはならないことです」

またもやりオンの口から飛び出したとは全く考えることもできない『愛』という言葉に驚きつつ私はそれ以上に自身の目を疑う。

リオンは【白兎の脚】ラビット・フットの手を振り払うどころか両手で握り締めたの

である。

…もはや現状を全く理解できない。私は呆然と二人を眺めることしかできなくなってくる。

そんな私を放置して、私に怒りを露わにするリオンとその怒りを収めようとする【白兔の脚】ラビット・フットの会話は続いていく。

「シャクティさんにそんなつもりはないですよ。だからリユーは落ちて着いて席に座りましょう?」

「しかし…」

「大丈夫。リユーが僕のことをすつごく愛してくれているのは僕が一番分かってますし、僕もリユーのことを誰よりも愛してます。でもそれは僕とリユーだけに分かることであって、シャクティさんにも他の誰にも分からないことだと思います。だからリユーはそんな他人の言うことなんかで一々怒る必要はないと思いますよ?」

「それも…確かにそうですね」

【白兔の脚】ラビット・フットの説得にリオンは段々と怒りを収め始めていく。その証に勢いのままに立ち上がったはずのリオンは段々と腰を椅子に戻し始めまでしているのである。

… 【白兔の脚】ラビット・フットの説得力とリオンへの影響力には驚く他ない。

だがそれ以上に二人の会話を聞く中でようやくよく見えてきた答え、一度は勘違いだと切り捨てた答えが再び心に浮かぶ。

あの潔癖だったリオンが【白兔の脚】ラビット・フットとごく普通に手を握り合っていると言う事実。

あの人との距離を常に取りたがるリオンが【白兔の脚】ラビット・フットと至近距離で顔を見合わせ、若干頬を赤く染めていると言う事実。

恋愛とは無縁だと思っていたリオンが『愛』という言葉を連呼していると言う事実。

まさか…

「…お前達…まさか交際してたりするのか? 所謂…恋人という…」

「なっ…シヤクテイ！見誤らないでください！私達は恋人ではなく添い遂げることを誓い合った婚約者です！」

「だからリユーはそれ以上自爆しないでえ！絶対に後で後悔するから！！」

私の推測はまさかの正解だった。

それが私の言葉に応じたりオンの怒号とそれを止めようとする本音の漏れ出した【白兔の脚】<sup>ラビット・フット</sup>の悲鳴からはつきりと分かった。

これであろうやく一つの謎が解けた。

リオンと【白兔の脚】<sup>ラビット・フット</sup>の距離が近過ぎるとい謎。

それはこの二人が交際していたからだったのである。

…正直に言おう。

それを早く言ってくれれば、もっと早く私も理解を示すことができたであろう、と。

## プロローグー妖精と白兔の秘密ー②

「なるほど。つまりお前達は交際していて、ゆくゆくは家族になる予定だから、お互いのことは出来るだけ知っておきたい、ということだな？それなら私も私なりに配慮する。【白兔の脚】<sup>ラビット・フット</sup>の同席を認める他ないだろう」

「あつ…ありがとうございます」

ようやく納得へと辿り着いた私は【白兔の脚】<sup>ラビット・フット</sup>の同席を承認した。ただそれに応じるのは【白兔の脚】<sup>ラビット・フット</sup>のみ。

その理由は先程まで怒号を飛ばしまくり、【白兔の脚】<sup>ラビット・フット</sup>への愛を否定されたと勘違いして激昂していたリオンが【白兔の脚】<sup>ラビット・フット</sup>の隣で轟沈しているため。

…どうやら怒りのあまり自分がどれだけ小恥ずかしいことを連呼していたのか気付いていなかったらしい。今は羞恥で真っ赤に染まった表情を隠すようにテーブルに顔を沈めている。…最も耳先まで赤く染まっているのまでは隠しきれていないが。

そんなリオンを慰めるように【白兔の脚】<sup>ラビット・フット</sup>は優しく頭を撫でているというのは何とも物珍しい光景だ…

リオンも変わった…そういうことか…

と、感慨に耽っていた私であったが、リオンと【白兔の脚】<sup>ラビット・フット</sup>の暴走のお陰で本題をすっかり忘れていたことに気付く。

「それで、だ。そろそろ本題に移らせてもらおう。…リオン？大丈夫か？」

「…大丈夫…です…」

…顔を伏せたままどこが大丈夫なのか是非教えてもらいたいものだが、これ以上話を遅らせるのも正直面倒。そう考えた私は話を続ける。

「ここ最近連続窃盗犯が出没していて、その者に関する情報が欲しいと私に頼んできたのは覚えているよな？」

「…っ」

私の問いにリオンは肩をビクリと揺らす。

当然だ。心当たりがあるに決まっている。

最初に私との密会を求めてきたのはリオンの方だったのだから。

「だがリオンはその後『豊穡の女主人』から行方を晦まし、連絡を絶つた」

「あつ…」

今度は【白兔の脚】<sup>ラビット・フット</sup>が気まずそうな表情を浮かべる。…どうやら【白兔の脚】<sup>ラビット・フット</sup>も一枚噛んでいるらしい。そう疑念を抱きつつ私は続ける。

「お陰でわざわざ【小巨人】<sup>デミニ・ユミル</sup>に呼び出してもらおうと言う形を取るしかなかった。これが私の問いたい事情の一つ目。だがこれだけではない。…それに前後して連続窃盗犯の被害者の元には盗品が密かに返還された。全員分だ。…まさかその犯人が返還したなどということはあるまい。…お前の仕業だろうか？ リオン？」

「…」

リオンは否定もせず顔を伏せたまま沈黙を続ける。

そしてこのタイミングでの沈黙は認めたに程近い。そう考えた私はさらに追及を続ける。

「…リオン。私は情報提供の依頼を受けた時、独断専行だけはせず私への報告を欠かすなど伝えたはずだ。それが情報提供の条件である、と。お前は今は故人だ。かつての同志である私とて独断専行は認められない。オラリオの治安のためにもリオン自身のためにも、だ。それは伝えてあったはずだ。なのになぜ連絡を絶ち、独断で連続窃盗犯を討った？ それだけではない。お前はその連続窃盗犯を発見した場合は私に連絡して引き渡すと言う取り決めだったにも関わらず見逃したか殺害したということにはならないか？…弁明してみろ。リオン」

「…」

私の追及にリオンは沈黙を続けたまま。

視線を合そうともしないリオンとリオンを鋭く睨む私が沈黙の中で対峙する中、それに挟まれた【白兔の脚】<sup>ラビット・フット</sup>がオロオロと私とリオンを交互に見る。

そして沈黙を破ろうとしないリオンに代わって【白兔の脚】ラビット・フットがとうとう私の追及に応じた。

「シャクティさん…リユーは何も悪くありません。その…僕から説明します」

「ベルツ…」

「大丈夫。きちんとシャクティさんに話せば、何にも悪いことは起こりません。だから大丈夫です」

「…ベル…」

【白兔の脚】ラビット・フットが私の追及に応じるのを止めようとリオンはようやく顔を上げるが、【白兔の脚】ラビット・フットは考えを変えない。

【白兔の脚】の判断に納得したのか諦めたのか分からないが、彼の名を呼んだまま再びリオンは沈黙し、【白兔の脚】ラビット・フットは弁明を始めた。

「まず盗品を返還したのは連続窃盗犯の方自身です。リユーの説得に応じて改心してくれました。それだけでなく盗品をお詫びの品と共に被害者の方にお返ししたんです。だからリユーはその改心に免じてシャクティさんに伝えることをやめたんです。これでは弁明になりませんか？悪いことをやめて償おうとした方まであなた達は捕まえると言うのですか？」

【白兔の脚】ラビット・フットの言い分に私は頷きで応じるしかない。…そのような事情があつたのなら、独断専行にも少しは言い分を認められる。私達が赴けば見せしめという意味でも見逃すことはできないのだから。

だが連絡を絶つた理由への説明は何らできていなかった。

「それは分かった…だがその事実を私に伝えれば済んだ話だ。連絡を絶ち、『豊穰の女主人』からも消息を断つ理由には全くならないと思うのだが？」

「そつ…それは並々ならない事情があつて…その…」

「その並々ならない事情とは何だ？私に話せないほど後ろめたい話なのか？」

「うっ…」

今度は【白兔の脚】ラビット・フットも言葉を詰まらせる。

…人に向かつて後ろめたいことを話すのではと疑っておいて、自分



達が後ろめたい事情を抱えているとは全く笑えない事実だ。

私は疑いを強めつつ、リオんと【白兔の脚】ラビット・フットを交互に見る。

するとリオンは小さく息を吐くと、諦めたように話し始めた。

「シャクティィ…その…あまり驚かずに聞いてくださいね？」

「…心配するな。お前達には先ほど散々驚かされたからもうこれ以上驚くことはあるまい」

リオンの心配げな表情と共に眩かれた言葉に私は苦笑いと共に応じる。

あのリオンが交際し、触れ合うことを受け入れられる異性が現れたということ以上に驚くべき事実がどこにあるだろうか？

…本当じゃないよな？

と若干の不安を抱きつつも私はリオンの言葉を待つ。

リオンは一方の手では【白兔の脚】ラビット・フットを握り締め、もう一方の手では自らの腹を優しく撫でるように触れ始める。

そして頬を赤くしつつリオンが漏らした事実は私の想像を遥かに上回る衝撃をもたらした。

「実は…私のお腹には子供がいるんです」

「え…あ…は…？」

リオンの衝撃の告白にもう私は愕然という言葉だけでは言い表しがたい衝撃に襲われた。

リオンに…子供…？

「…やっぱリシャクティィさん。ビックリしすぎて言葉も出てこないみたいですよ…」

「そう言われましても、聞きたいと言ったのはシャクティィですし、これはあくまで事実ですから…それよりもこのことを話すといつもまずい方向に話が進んでいく気が…」

情報の整理が出来なくなる私から視線を逸らしつつお互いの手を固く握りしめるリオんと【白兔の脚】ラビット・フットはそう眩く。

…流石に自らが告げた事実が恥ずかしいという言葉では表現でき

ないほど衝撃的なことは理解しているらしい。

リオンが交際しているという事実に加えて子供ができたという事実は寸分たりとも簡単に受け入れられる事実ではない。だが情報の整理が必要だと考えた私は深呼吸までして何とか言葉を紡ぎ出した。

「リオン…ひとまずおめでどう…そう言っておこうか？」

「ありがとうございます。シャクテイ」

「僕からもお礼を。ありがとうございます」

私の祝いの言葉にリオンも【白兔の脚】ラビット・フットも笑顔で応じてくれる。

そうして段々落ち着いてくるうちにようやく事実が繋がりは始める。

「その子はリオンと【白兔の脚】ラビット・フットの間の子…ということだな？」

「はい。そうです。正真正銘私とベルの子供です」

「それでつまり…子供ができたから安静にする必要があり、調査等が出来なくなると同時に『豊穰の女主人』で働くのをやめていた…ということか？」

「そういうことです。…あまり私達のことを多くの方にお話ししたくなかったので…申し訳ありません。シャクテイ。報告が大変遅れました」

「いや…それはいい。それならもう私から言うことはない。子供の安全が第一だということは私にも分かる」

ようやく全てに説明がついたことで私もようやく追及をやめられる。

ただその時私には再び疑問が湧いてくる。

「…ちなみに聞くが、今妊娠何ヶ月目だ？」

「えつと…それは…」

「アミッドさんの診断によると七週間目だそうです。それが分かったのが大体二週間前でしたよね？…でしたよね？…リユール？」

「ベツ…ベル!? それをお話すると…」

「なるほど。二週間前に分かったのか。そして私に情報提供の依頼をしてきたのは三週間前。対応の変化も致し方なし、と言ったところだな。了解した」

私の問いにリオンが歯切れを悪くする一方【白兔の脚】ラビット・フットがサラリと

私の問いに答える。それになぜカリオンは妙に慌てて止めようとする様子に違和感を覚えさせられる。

なぜそうもリオンが慌てているのか最初は分からなかった私であったが、【白兔の脚】ラビット・フットの言ったことを考えているうちにあることに気付く。

「…待て。七週間目？七週間目と言ったか？」

「えっ…あっ…はい。そうです。七週間目です」

七週間目。

つまりは約二ヶ月前。

約二ヶ月前と言うと…

「…その頃お前達はダンジョンにおいて【深層】を彷徨っていた頃では…なかったか？」

「あっ…」

「ベル…やはり気付かれてしまいました…」

私の指摘に【白兔の脚】ラビット・フットは気まずそうな表情を浮かべ、リオンは観念したように空笑いをする。

私の推測が正しければ、七週間前と言うと【白兔の脚】ラビット・フットとリオンはそもそも交際していたと言う話自体聞いたこともない。

それどころか七週前のこの二人の動向は前半はダンジョンの【深層】を彷徨い、後半には【戦場の聖女】デア・セイントの治療院で治療に専念していたはず。【戦場の聖女】デア・セイントがそのような行いを治療院内で許すはずもない。

つまり機会があるのは私の深く事情を知らないダンジョンの【深層】にいた期間のみ。

私は恐る恐る質問を重ねる。

「まさかお前達は交際に子供を作ってしまった…なんてことはないよなっ…」

「うっ…」

「ガハッ…」

「あっ！リユール大丈夫!？」

「この反応…まさに凶星…」

【白兎の脚】<sup>ラビット・フット</sup>の表情には気まずさがさらに増し、リオンに至つては羞恥心余つてかテーブルに頭を叩きつける始末。それに【白兎の脚】<sup>ラビット・フット</sup>が心配の声を掛ける。

…ただ正直言つて心配なのはリオンの外傷よりもリオンと【白兎の脚】<sup>ラビット・フット</sup>の倫理観の方だと言つてやりたい。

「その上お前達はまさかダンジョンで子供を作つた…なんてことはないよな?」

「…」

とうとうこのポンコツ達は返す言葉さえ失つたよう。

私ももう何も言えなかった。

これらの確認を二人から取り、事実上認めるような反応を見てしまった以上もう何も言えない。

そうしてしばらくして顔を上げたりオン。

叩きつけた額を真っ赤にして、痛みでか羞恥心でかは分からないが瞳に涙を溜めたりオンは苦し紛れに言った。

「これが…私とベルの愛の証です…何か問題でもありますか!正式に交際していなくとも場所がいかなる場所であろうとも愛を育んだという事実の価値は全く変わりません!」

そう逆ギレに近い形で反論してきたリオンであったが、言葉に涙みを遂に与えることはできなかった。

それはリオンも【白兎の脚】<sup>ラビット・フット</sup>も自分達がどんなに未恐ろしいことを成し遂げたのか理解しているからであろう。その証拠に二人とも恥ずかしさで死にそうな表情をしている。

ダンジョン内で子供を作る。

…これは恐らく前例が全く存在しない如何にも神々が喜びそうな

『偉業』であろう。

：このようなことをさせたのは若気の至りかはたまたリオンの言う『愛の証』としてか…

それは愛を育んだことが未だない私には正直分らない。

だが一つ言えることは、この二人の前途はこのような行き当たりばったりでは危ういということ。

子供の安全を考え、身を隠し面倒事から遠かったのはよい判断だ。下手に神々に知られれば格好のネタにされた挙句確実に面倒事に巻き込まれる。

だが正直これまでの経緯を考えれば不安で仕方がない。あまりに軽率に物事を進め過ぎているという評価を与えざるを得ない。

本音としてリオンの安否が分かって安堵していた私だったが、これでは安堵などとてもできない。

せっかく悩みの種が消えたと思えば、今度はより深刻な悩みに直面したことに正直溜息を吐きたくなる。

だがかつての同志のために何かしてやりたい。

あのリオンが愛を囁けるほどの信頼を置く異性と出会ったと言うのなら尚更。

さらにそのリオンがその異性との間に子供を授かったとまで言うのである。

：そんなリオンが子供を授かるという一つの幸福を手に入れようとしているのを助けようと思うのがどうして間違っていないのか？

私はこんな未熟な二人のために何かできることはないかと考えた。

：その思考がダンジョンで未恐ろしい行為に走った二人の情景の想像が頭にちらつくことに邪魔されながら、ではあったが。

## 〈懐妊編〉第一章 希望は決死行の最中に 温もりに身を委ねて

それは七ヶ月前の出来事。

私は仲間を失い、ずっとずっと正義を見失っていた。

私は正義を失ってしまった。そう思っていた。

だがそんな私はベルと出会ったことで転機を迎えた。

そのベルはすぐに私の手を握った唯一の異性となり、私にとって特別な人になった。

そしてその七ヶ月前。【深層】にて。

私はベルから世界で最も尊い正義を授かる。

私はベルのお陰で長らく失いかけていた正義を…いや何物よりも尊くいつまでも守り続けたいと思える正義を初めて手に入れることができたのだ。

これはきつと多くの人々が経験してきた出来事で。

これはきつとありふれた何ら特別ではない出来事で。

でも私にとっては初めてで特別で一生忘れられない…そんな出来事。

そんな出来事を経験させてくださったベルに溢れんばかりの感謝を捧げよう。

そしてこんな私に愛を与えてくださったベルに枯れることのない愛を捧げよう。

これは私とベルが初めて愛を育み、私とベルの間に世界で最も尊い正義を授かった時の話である。

??

私の耳に届くのは静かな水音。

時折私が立ててしまう衣擦れの音。

場所は【深層】の37階層。

偶然闘技場の下にあるのを発見してしまった水源にて。

死闘を潜り抜けた私は九死に一生を得る形でようやく骨の髄まで休むことができる休憩を取ることができていた。

ただ言うまでもなくここにいるのは私だけではない。

隣にはその死闘を二人三脚で何とか共に潜り抜けてきたベルがいた。

ただこの一時間私の耳に届いたのはほぼ水音と衣擦れの音のみ。

：要は私とベルは碌に会話も成立させられずに沈黙を保ち続けていたのだ。

その理由は一重に私とベルの衣服の状態にあった。

先程までに私とベルの衣服は水浸しになり、体温をこれ以上奪われないために乾かす必要が生じていたのだ。

：お陰で私もベルも一糸纏わぬ：とまでは言わないまでもそれに程近い状態に置かれていた。

：このような状態で男女が同じ場所にいるなど私としては考えられぬことであった。

だが私はなぜかベルと距離を取り、この状態を打開しようとは考えなかった。

それはベルとの距離を縮めたままでもいい：そんな思いがあったからか。

それともモンスターが確実に現れないという保障がない以上、身を守るために距離を取るわけにはいかない：そんな戦術的な考えがあったからか。

今の私にはその判断ができない。

ただ：

どれだけ羞恥心が生まれようともどれだけ気まずい雰囲気であろうとベルと離れたくない：そんな考えが私の中にあるのは確かだっ

た。

その証拠に私とベルはこの一時間ずっと肩と肩が触れ合うか触れ合わないかぐらいの微妙な距離を保ち続けている。

それは私自身とベルの手をすぐに取ることができるだけだけの距離を保ち続けているということ。

それはベルが私と距離が近いことに嫌悪感を抱いていないということ。

私がベルに無意識な拒絶を向けていないこととベルが私を拒絶していないということは私にとって何故か嬉しい事柄であった。

ならいつそベルの手を私から握ってしまえば良いのでは…

と、思った所で。思考を停止させた。

…私は何故ベルと手を繋ごうと思ったのだろうか？

私にとって唯一私の手を取れた異性の方だから？

というか私からベルの手を繋ごうなどと、まるで私がベルの手を繋ぎたいと思っっているかのようで…

…一度落ち着きなさい。私。

私はせっかく一度思考を停止させたのに再び不可思議な探求に突入しかけ、もう一度思考を停止させる。

…どうやら羞恥心と気まずさで私の思考はどうにかなっているらしい。

そして取り敢えず私はその二つを打ち払うのが最優先と考え、ベルに話しかけることに決めた。

それと同時に私はベルから離れようとしないう理由に今更思い出した聞き出したいことを据えて、不可思議な探求の続行に終止符を打つことにした。

そして私はさらにしばらく話しかける決心をつけかねた挙句。私はいよいよやくベルに視線を向けて、口を開くことができた。

「…確かめておかなければ、ならないことがあります」

「え…あ、はい。なんですか？」

「どうして、あの時、戻ってきたのですか？」



あの時、とは闘技場でのことだ。

私は自らを犠牲にしてもベルを生き残らせなければならぬ時だ。と今でも思っている。今生きながらえているのは偶然の積み重ねのお陰。一歩間違えれば、確実に共倒れだった。

そう考える私はベルの判断が軽率なものだったと評価せざるを得ない。その判断が仮に私の命を救ったものだったとしても、である。それは私にとってベルの命が私の命よりも大切なものだと思えるからで…

そんなことを考える中、ベルは私と視線を交わすと静かに答えた。

「だって…リユーさんを一人にしたくない…そう思いましたから」

「…っ！」

ベルの言葉に私の胸は唐突に高鳴り始める。

何故？何故？

私を一人にしたくない…それは一体どういう意味？

もし私が死を選ぶなら、共に死を選ぶつもりだったということ？

それとも私のそばにこれからずっといてくれるということ？

そんな甘い考えが私の頭を占めようとし、思考が乱れ、胸の鼓動が収まらなくなる中、ベルは続ける。

「…確かに僕のリユーさんの元に向かうという判断は生き残るという観点では問題だらけでした。…でもリユーさんを一人にしたくないという観点では確実に成功する判断でした。そして今こうして僕はリユーさんのそばにすることができている。リユーさんを一人にせずに済んでいる。僕の判断は正しかった…そう今の僕は断言できま

す」

「…もし闘技場の床が抜けなければ？」

「そうなれば、僕は命懸けでリユーさんと一緒にあのモンスターの群の中を突破しただけのことです。…もし無理なら僕とリユーさんは同じ運命を辿ることになったでしょう。そうだとすると、僕はリユーさんを一人にしないという目標を達成できています」

「…同じ死に場所を得られたから…とでも？」

「そういうことです。僕はもしそうなったとしても決して後悔しな

かったでしょう…まあリューさんを守れなかったことにはもちろん後悔しますけどね」

私が恐る恐る重ねる質問にベルは微笑を浮かべたまま、最後は少し苦笑いを浮かべ答え続ける。

まるでどのような結果であろうと私のそばにいられるなら全く問題はなかった…そうとでも言いたいかのように。

そんなベルの言葉は私の心を温かさで包み込んでくれる。

そうまでして私を必要としてくれている。

そうまでして私を一人にしまいとしてくれている。

その事実は私にとってなぜか何物にも替えがたい言葉だと…そうまで思えた。

だがふと一つの疑問が思い浮かぶ。

「…なぜそこまで私を思い遣つてくれるのですか？その…私はあなたに迷惑をかけてばかりです。今この瞬間も…だからベルがそこまでしてくれる理由が分かりません…」

「そんな卑下なさらないください。リューさん。リューさんは僕のことを何度も何度も助けてくださいました。ついさっきだって僕のために自分の大切な命を捨てても僕を守ろうとしてくれました。なら…僕が自分の命を捨ててもリューさんを守ろうとするのは道理で普通のことです。だってこれは僕からのリューさんへの恩返しですから」

「恩…返し？」

「そうです。リューさんは恩という考えをととても大事になさると思います。だから僕の気持ちも分かってくくれるはずですよ」

「…」

ベルの言い分は私も納得せざるを得ないもの。

ベルが命を投げ打って私を救おうとすれば、当然私も運命を共にしようとしたであろうし、事実上現にそうしているようなもの。

それに恩という言葉を持ち出されては反論のしようがない。なぜなら私がベルに尽くそうと決心できたのも私を受け入れてくれた恩を返したいという思いがあるからに他ならない訳で…

ベルは言い分として恩返しを立てた。

少なくとも私がベルに命を賭けたことへの恩を返すという言い分を。

その恩をベルは私と同じように自らの命を賭けることで返してくれた。

なら今度は返してくれた恩を私が返さなければ。

ベルは私の命を救うという返ししようもない恩を私にくれたのだから。

だから今からでも私は少しづつベルに恩を返さなければ。

そう思い立った私は何か行動しなければとすぐさま考えていた。

「ベル…今何かお困りのことはありませんか？」

「…え？何故ですか？」

私の質問にポカーンとした表情を浮かべつつ首を傾げるベル。

だがそんなベルに構わず私は質問を重ねていく。

「どこか痛くはありませんか？」

「えつと…リユーさんの回復魔法のお陰で何とか大丈夫です」

「ならば喉は乾いていませんか？」

「水は…リユーさんのお陰でたくさん飲みました」

ただ私の質問にベルは特段困っていることを伝えてくれない。

それでは私はベルに恩を返せない。そう少々困り果てかける私にベルは少々気まずそうな表情で呟く。

「あ…えつと…まさかりユーさん、今から僕に恩を返そうって思っただりしますか？」

「…ダメですか？」

「いっ…いえダメなんかじゃないです！そっ…その…！」

ベルの質問に私がベルに恩を返そうとするのが迷惑なのではと疑い、ショックを受けかける私。

その様子を見てかベルは大慌てで否定を始めたかと思えば、小声でボソリと言った。

「…なら言わせて頂きますというか…今更言うのも遅いと思うんですが…今すつごく視線の向ける先に困ってます…」

「…え？」

ベルの視線の向ける先。即ち私？

そう考えて気付いたのは、すっかりロングケープの間から露わになつていた私の胸の存在。

…ベルはこのことを言っている？

そう思い至った瞬間、私は瞬時にロングケープで見せてはいけないものを覆い隠す。

なんて不注意な…

…ベルの顔を見て話すのに集中していたせいですっかり気付かなかった私の不注意に心の底から後悔した。

ただ何故か恐らく不可抗力とはいえ私の胸を見てしまったであろうベルへの怒りは巻き起こることはなかった。

…以前は覗かれた可能性があると言うだけで問答無用に懲らしめようとしたのに。

一体どのような心境の変化か？

そんな疑問も湧いてきたが、その疑問の解消よりも先に小さく咳払いをしてひとまず雰囲気を変えようと試みる。

そして一応は不埒な状態は改善できたのでベルに視線を向け直す、私はあることに気付いていた。

「ベル…あなた震えていますか？」

「震え…え…僕が？」

「まさか…寒いのですか？」

私の中で生まれたそんな疑いは私自身の身体を恐怖で震わせた。

ベルが寒がっている。それも震えを隠せぬほどに。

つまりベルの体温は危険な程に下がっている？

そうなれば、ベルの命に危機が迫っている？

まさかベルがいなくなってしまう可能性があるとしても言うのか？

私を一人にしたくないと言ってくださったベルが？

そう考えただけでも私は恐怖で今にも死にそうになる。

ベルを体温の低下如きで死なせる訳にはいかない。  
連想ゲームの如くそう結論を出した私は即座に行動を開始して  
た。

確かに恩を返すという意味でも体温の低下からベルの命を守るこ  
とは必要なことだったが、私の思考を占めるのはベルへの心配と一人  
になってしまうことへの恐怖ばかりになっていた。

だからその心配と不安が私を突き動かしていく。

「ちよ…ちよ…ちよ…リユーさん!？」

私はベルが驚きを隠せない表情をしていることにも私の背でパサ  
リと何かが音を立てたのにも構うことなく立ち上がる。

そうしてベルの背に立つと、静かに膝を突き、後ろからそつとベル  
を包み込むように抱き締めた。

案の定ベルの背から感じる体温には冷たさを感じる。つまり私の  
方がまだベルよりは体温が高いということ。

だから私は少しでもベルに体温を分け、温めることができるように  
試みる。

その試みの結果私はベルに腕を絡め、出来るだけ密着することを選  
んだ。

「あの…リユーさん? ケープが落ちてますよ? あっ…あと僕の背中に  
当たって…」

ベルは後ろから見ても分かるくらいに耳と頬を真っ赤にしてそう  
狼狽したまま言う。だが私はそれに動揺することなく応じた。

「そんなことは些事です。ベルが命を落とさずに済むならば…羞恥心  
など躊躇なく捨てます。まず視線の向け先に関して私は後ろにい  
る以上解決できています」

「そういう問題じゃ…いえ。リユーさんとしてはいいなら、一応いい  
ですか…」

「…ええ。そんなことより温かい…ですか? これでベルに少しは体温  
を分けられる…はずですが…」

「もちろんです。リユーさんは…とっても温かいです。ありがとうご  
ざいます。リユーさん」

「それは…良かったです」

私の躊躇を見せない答えに納得してくださいましたベル。そしてベルの答えはこんな方法でベルを温めることができるか今更ながら疑問を抱きつつあった私の不安を即座に取り払ってくれた。

そうして私とベルはしばらく密着したままで。

私の僅かばかりに高い体温を身体の冷え切ったベルに渡す。

そんな時ふと私は感じる。

ベルの身体は冷えたまま。だから私の身体は少しずつ少しずつベルに渡していつてしまうから、冷えていつてしまう。

けれど私の心はそれに反比例する様にどんどん温かくなっていくのだ。

どうしてだろうか？

どうしてベルと触れ合うだけで私の心はこんなにも温かくなっていくのだろうか？

私にはその理由が分からない。

だが少なくとも言えることはあった。

私の中にもっとベルの温もりが欲しいという欲が生まれていることである。

そんな欲を抑えつつ私は話す。

「ベル…？私は今ベルを温めるためにこうして後ろから抱きしめています。ベルが温かいと言ってくさって私は本当に嬉しいです。私の身体が少しはお役に立てました。これで少しでも恩をまたお返しできていたら幸いです。ただ私にとってそれだけではないと言うか…」

「リユーさんのお陰で今の僕はとっても温かいです。ありがとうございます。あと言うと…その…身体だけじゃなくて心も温かいというか何と言うか…」

「えっ…？ベルもですか？」

「つまり…リユーさんも僕と同じなんですか!?!…ってあわわ…」

思わぬ意見の一致に私もベルも驚きを見せる。

ベルは驚きのあまり振り返った挙げ句超至近距離にあった私の顔を見て、ポツと顔を赤くしたかと思えばすぐさま前に向き直ってしまった。触れ合う背中からは早くなったベルの鼓動を肌で感じられる。

：言うまでもなくこんなにもベルの顔が近づいたのは初めてのことで私も鼓動が早くなっている。：ベルに気付かれてしまっていないだろうか？

そんな不安を抱きつつも私は先程のようにベルと向き合いたいと思ひ、しばらくの間その後によやく口を開いた。

「その…こちらを向いて頂けませんか？」

「あ…え…でももしかしたら見えて…」

「構いませんから。：お願いです」

「…はい」

私の羞恥心を気にしてか躊躇するベルを強い口調と懇願で押し切った私は、ベルがもう一度振り向いてくださったお陰で再びベルと超至近距離で向き合うことができている。

お互いに顔は真っ赤になっているが、それでも私は先程のベルの吹きへの興味からすぐさま尋ねていた。

「ベル…う…先程の心が温かいとはどういう意味ですか？私には私自身がこう感じている理由がよく分からないので…」

「えっと…僕の感じている理由は、ですが…リユースさんの温もりを背中を感じるとリユースさんが生きていてくれるんだって実感できて…それがすつごく嬉しくて…あとリユースさんが僕のことを抱き締めてくれているというのが僕がリユースさんに気を許してもらえたと考えて…とにかく心がとつても温かいんです。それはきつとリユースさんに抱き締めてもらえているからだと思います」

ベルの嬉しきの籠った笑みと共に告げられた心が温かいと感じる理由。

それは私の心に染み渡るものであり、ベルがそう感じてくれているという事実は私に途方もない喜びを与えた。

それと同時に私はベルの述べた理由を参考に私自身の理由も見出し始めた。

「…分かります。ベルの温もりを感じると私が一人ではないと実感できて…それで私がベルを抱き締めても拒絶されていないということが私にとつて何よりも嬉しくて…そうですね。私はベルを抱き締めていられることに喜びを感じ、だから心が温かくなるような心地がしたのですね」

「つまり僕とリユーさんはお互いに抱き締め合えていることがすつごく嬉しいってことですね。同じ考えを持って僕も嬉しいです」

「私もです。ベル。でも…」

「…でも？」

私とベルの考えが一致したことに私はベルと共に笑顔で喜びを示そうとする。

だが私の思考は不意に不安によって遮られてしまった。

それはベルがいなくなってしまうのではないかという不安。

どんなにベルの温もりを感じようともその不安がどうしても消えないのだ。

どうすればこの不安は消えるのだろうか？

もっとベルの温もりを感じればいいのか？

私はぼんやりとそんな回答を導き出しながら呟いていた。

「私は…ベルがいなくなってしまうかわらないか不安で仕方ありません。この不安はどうすれば消えるのでしょうか？」

「それは…」

ベルは言葉を詰まらせる。この不安を消す方法は流石のベルも分からないようだった。

だから私は導き出した回答をベルにぶつけてみることにした。

もしかしたらベルの温もりを私に刻み込めば、ベルは絶対に私の前からいなくなったりしないのではないか？

私はそんな期待を抱きながら。

だがその期待はベルを温め恩を返したいという思いが建前に過ぎなかつたと証明するものでもある。



だから私はそれまでも吐露しなければ、ベルに偽りを伝えることになる：それも思った。だから私は素直に期待も自嘲も全て言葉にしていく。

「…私はベルを抱き締めることでこの不安が消える：私はベルのためと建前を立てつつそんな私情のためにベルを抱き締めました。：私は本当に醜い考えばかりする。私はベルを自分のために利用しようとしたんです」

「そんなことっ…！僕の存在がお役に立てるなら、その程度のこと気にしたりなんかしません！リユースさんの不安を：僕がいなくならないという安心をリユースさんが得るためなら僕はなんだってします。だってリユースさんを一人にしたくないというこの思いは今の僕にとつての正義と言つても過言ではない思いなんですから！」

私の自嘲にベルは何度も首を振る。そうして私を一人にしたくないという思いがベルにとつての正義希望とまで言い切ってくださいました。私の前で正義希望という言葉を持ち出したということは並大抵の覚悟ではないと示そうという意図があることは言われるまでもなく私には分かる。

だから私はベルのその厚意に甘えさせてもらおう。

そう決心して、その決心を言葉にした。

「ならば…私の頼みを聞いてくださいますか？」

「もちろんです！その頼みとは一体なんですか？」

慎重に呟かれた私の確認にベルは私を安心させようとするように満面の笑みと共に快諾してくださいさる。

そしてその快諾に私はその『頼み』を行動にて示した。

超至近距離で向き合っていた私とベル。

私はその距離を消し去った。

そうして重なる私とベルの唇。

温かい。

柔らかい。

気持ちがいい。

そんな簡単な感想しか思い浮かばないほどの心地よい感覚に襲わ

れながらも、私はふわりと唇と唇が触れ合うに留め、すぐに距離を取る。

私の行動で示した『頼み』を理解できないのかそれともこの行動に衝撃を受けているのか分からないが、頬を果実のように赤く染め上げたベル。

ベルは言葉が出てこないと言わんばかりについて先程触れ合ったばかりの柔らかい唇をパクパクさせたまま何も言わない。

そんなベルを眺めながら私は確信する。

やはりベルの温もりをより感じるにはこれしかない。

抱き締めるだけでは足りない。

もつともつとベルの温もりを感じないと私は安心できない。

私の身体にベルの温もりを染み渡らせないと。

私にとってこの触れ合いは序の口に過ぎない。そう私の身体に宿る直感は告げていた。

私はその直感に従い、とうとう『頼み』を伝えた。

「ベル：？私をどうかベルの温もりで満たしてください」

私はその『頼み』を告げると同時にもう一度ベルとの距離を消し去っていた。

??

それからのことは私自身よく覚えていない。

私とベルは触れ合って。

私とベルは絡み合って。

私とベルは一つになった。

ベルの温もりは私を包み込んでくれた。

罪を繰り返すこんな私の全てを受け入れてくれた。

だから私もベルの温もりを全身で受け止めることで応えた。

ベルに触れられた私の身体は蕩けてしまうような心地を覚えた。

ベルの吹きかける吐息は私の身体に痺れるような感覚を味合わせた。

怖いことなんて何一つない。

ベルに一度触れられるだけで私の中に渦巻いていた不安も絶望もスツと消えていく。

ベルに一度甘い息を吹きかけられるだけで私は何も考えられなくなる。

でも今はそれでいい。

ベルの温もりを感じることができれば。

ベルが私を受け入れてくれて。

ベルが私のそばにいてくれる。

それさえ感じる事ができれば、何の憂いもない。

だからただベルの温もりに身を委ねてしまえばいい。

だから今だけは現実か空想か分からないような夢心地に身を浸す

ことを私自身に許した。

今だけは全てを忘れて、ただベルだけのことを考え、ベルだけを感じ、ベルだけを想っていたかった。

そんな一途な想いと共に私はベルの温もりに身を委ねたまま本当の夢の中へと落ちていった。

妖精が温もりから得たものは

温かい。

ずっとこの温もりに包まれたまま眠りに就いていたい…そうまで思えてしまうほどに。

だが私の閉じられていた瞳は唐突に周囲が明るく照らされたことで否応がなく開かれる羽目になる。

そうして見開いた私の視界に入ってきたのは、純白の世界。

私はどうしてこんな所にいる？

そんな当然の疑問を抱きつつ辺りを見渡してみる。

そうしてぐるりと見渡して、私の背を見た時。

そこには今は亡き私の大切な大切な仲間達がいた。

「久しぶりね。リオン」

「アリー…ゼ…？」

アリーゼだけではない。

輝夜もライラも…みんなそこにいた。

私の大切な大切な仲間達が。

けれど彼女達は皆本来現世では出会えるはずのない者達であって。

私は彼女達にようやく会えたことに深い喜びを感じる。

だがそれと同時にふと思ひ浮かんだことにより私は思わずあることを疑い始める。

「私は…まさか死んだのですか？」

今は現世では会えるはずのない彼女達と私はこうして向き合っている…

それはつまり私が彼女達と同じ場所に辿り着いてしまったということになりうる。

それは私が死を迎えたということ。

私は早々に不安が積もり始めるその疑問を解決すべくすぐさま彼女達にこうして尋ねたのであった。

そうして私の質問に彼女達は互いに顔を見合わせて何か小声で話し合ったかと思えば、アリーゼが二カりと笑って思わぬことを言った。

「何？リオン？あんた死にたくない…そう思ってるの？」

「…え？なぜそのように思うのですか？アリーゼ？」

「…相変わらず自分の顔に出てるのが分からんのだなあ…このポンコツエルフは。はつきり顔に書いてあるぞお？『私は死ぬ訳にはいかない』、とな」

「…本当ですか？輝夜？」

アリーゼの確認に私自身が驚かされる。それこそ輝夜のポンコツエルフ呼ばわりをスルーできるほどに。

私はずっと彼女達と同じ場所黄泉に逝きたい。そう思っていたはず。

なのに彼女達は私の表情を見て、『死にたくない』という私の感情が読み取れると言う。

私は今この瞬間彼女達と巡り合えたことに喜びを感じているはずなのに、である。

何故？

そう思いかけたが、私はぼんやりと気付き始める。

私は…何か大切なものを手に入れた気がするのだ。

失う訳にはいかない。決して手放したくない。

そんな大切なもの。

私はそれが何なのか具体的にはよく分からない。

だがぼんやりと察するのだ。

その大切なものは今まさに私の身体だけでなく心まで温めてくれるものと繋がりがあつたもので。

今まさに私を包み込んでくれているこの正体の分からぬ温もりに答えに繋がるヒントが隠されているのでは、と。

私がそう推測を立てていく中、アリーゼは先程までの笑みを崩さず言う。

「そう。リオン。あんたが『死にたくない』って思っているのは、あんたを優しく抱いてるこの温もりのお陰」

「このあつつ苦しい温もりの、な？全くあたしらまで暑くて上せちまうよ」

アリーゼはその私の推測が肯定すると共にヘラヘラと笑ってライラがよく分からないことを口走る。

ただアリーゼに肯定されても、この温もりの正体を掴めなければ、私が彼女達の元に逝きたくないと考えようになりつつある理由は説明できない。そのため私はこの温もりの正体を彼女達に尋ねてみる。

「その…このとても温かくずっと包まれていたくなるようなこの温もりは一体なんですか？」

「ずっと…ずっと包まれていたくなる…だと…」

「あちやーこのポンコツはそこまで末期だったかあ…」

「あらあら。リオンったらサラツと爆弾発言しちゃって。流石リオンね！」

「…あの…まず私の質問に答えて頂けませんか？」

私の質問に輝夜は衝撃を受けたような表情を浮かべ、ライラはケラケラと笑い、アリーゼは揶揄っているのか褒めているのか分かりにくいことを親指を立てつつ言う。

…結局三者三様に答えになつてないので私は早く教えて欲しいとばかりに苦言を漏らすと、小さく溜息を吐いて答えてくれたのはアリーゼであった。

「いい？リオン？あんたはここがああの世なんじゃないかって疑ったけど、ここはあんたの夢の中なの。つまりあんたはまだ生きて心と身体は繋がったまま。だからあんたが今感じて私達まで巻き添いを食らってるこの暑苦しい温もりはあんたの身体が感じているものなの」「私の身体が感じているもの…というかそんなに暑苦しいですか？私的にはとても心地よいのですが…」

「暑苦しいわ。どうせこの色ボケには分からんのだろう…」

「あたしもちよつとご遠慮かなーあたしはここまで色ボケてないというかそこまでやらかす度胸はないと言うか」

「いつ…色ボケ？一体何のことです？」

私がまだ死んでいないとアリーゼが答えてくれたことに安堵を覚えつつもライラと輝夜の言ったことの意味を理解できない私。

：私はいつの間にか死に急がなくなっていたのだろうか？

そんなことを思いつつも、この温もりが私の現実の感覚と繋がっているというヒントを与えられる。：それに加えて輝夜とライラによつて『色ボケ』というよく分からない称号も。

与えられた称号の意味を図りかねたが、そんなことよりもこの温もりの正体を知りたい。そう思った私は何か思い当たることがないと考え込む。

するとアリーゼは考え込む私を見かねてかもう一度溜息を吐くとさらにヒントを与えてくれた。

「：はあ。まだ分からないの？リオン？あんたが夢を見始める前、何をしていたの？それくらい覚えているでしょ？」

「何をしていた、というか何をやってたの？、だな。アリーゼ？」

「：エルフの癖になんて破廉恥な…」

何やらライラと輝夜がまたも余計なことを言った気がしたが、私の意識はさらにアリーゼの与えてくれたヒントの方に向いていた。

私が夢を見始める前、何をしていたか。

それは【深層】を彷徨い、九死に一生を得てそれで…  
待て。

私は今までどうしてこんな大事なことを忘れていた？  
そうだ。

私はこの【深層】でベルと共に死闘を潜り抜けてきたのだ。

そして私はベルの温もりを求めた。

私はもう二度と一人になりたくなかったから。

私はもう二度とこの温もりを手放したくなかったから。

そうか…だから私は『死にたくない』という感情が表情に現れていたのか。

ベルの温もりを肌で感じる事ができたから。

そして今この瞬間私を包み込むこの温もり。これはきつとベルのものだろう。

今こうして私はベルの温もりを感じ続けることができている。

それがきつと私に…

「そうよ。リオン。あんたのお察しの通りこれはあんたの大好きな白兎君の温もり。気づくの遅すぎないかしら？」

「だだだ…大好きな!？」

「…なんだ。このポンコツエルフは相変わらず自分の感情も碌に把握できていないのか？」

「かつ…輝夜!?だから私のことをポンコツとは呼ぶなど…!」

「いや…割と真面目にポンコツじゃね?あんなことやらかしておいて、自分がどうしてあんな素っ頓狂なことをやらかしたのか分からないなんて…」

「ライラ…!?あなたまで便乗して…!」

アリーゼのお陰で私の予想通り私を包み込んでいるのがベルの温もりだと分かる。だがアリーゼの爆弾発言に加えてお決まりのように輝夜とライラがツツコミを入れてきて、私は顔を真っ赤にして反論する。

私が…ベルのことが大好き?それは一体どういうことで…

「リオンねえ…あんた、自分がどうして白兎君の温もりが欲しいって思ったのか分かってないの?」

「…え?それはベルが私のそばからいなくなってしまうのが嫌だからで…」

「…まず私はそのベルという呼び方自体にツツコミを入れたいんだが、いいか?」

「そうそれ。今までのリオンだったら限界で名字か二つ名で呼ぶぐらいだったよな。特に男には」

「はい。清く正しく聡明な私がいつも通り真面目な話をしようとする時はちよつと静かにしなさいね?輝夜。ライラ」

「…どこがどういつも通りなのか?アリーゼはいつも適当に話せばかりで…」



「はい。リオン。あんたまで愚痴らずに私の質問の意味をちゃんと考えなさいね。要はね。なぜリオンがその白兎君の温もりを感じるこ  
とによって一人にならないという証を欲したか…挙げ句あんな血  
迷ったことまでやらかしたか…その答えをあんたはきちんと考える  
必要がある」

「ちっ…血迷った?」

輝夜とライラの度重なるツツコミをとうとう黙らせたアリーゼは  
私にアリーゼの質問の意味を考えることを求めてくる。

何を『血迷った』などという形で表現されたか分からない私であつ  
たが、それよりもアリーゼに求められたことを考えるべきだと結論を  
出す。

そうして考えるのはなぜ私はベルの温もりを欲し、なぜベルがそば  
に居続け、私を一人にしないという証を欲したか。

それを考える中私が辿り着いたのは一つの暗い事実。

今まさに私とアリーゼ達の間横たわっている距離。

こんなことは言つてはいけないのは分かっている。

それでも…

私はアリーゼ達にただ一人遺され、絶望しかない孤独へと突き落と  
された。その事実が消えない。

だから私は彼女達と同じ場所に逝こうと、何度も死に急いだ。

だから私は生きるための正義を見失っていた。

でも…

今は違う。私はもう死に急ごうなどという気はない。

正義が私の中にあるのではないか。それをベルの言葉からも私自  
身の中でもぼんやりと思うことができている。

だって今も私を包み込むこの温もりが正義の存在を教えてくれて  
いる気がするから。

そしてこの温もりを私に与えてくれるのは今はベルだけで…

だから私はベルにそばにいて欲しいと思つた。

つまり…

「あんたは正義を見出した。ベル・クラネルという正義を。結局リオンにとつての正義はリオンのすべてを受け入れて、温もりを与えてくれる存在のことなのよね。それがその白兔君に代わった…そういうことなのよ」

「…あ」

アリーゼの言葉はなぜか私の心にすんなりと入ってきた。よく考えればそうかもしれない。

私が気を許すのは私の手を握ることのできた人だけ。

私に温もりを与えてくれる人だけ。

私に正義があると教えてくれた人だけ。

その一人目がアリーゼで。

その二人目がシルで。

その三人目がベルだった。

アリーゼの言う通り私にとつての正義とはそういうものなのかもしれない。

口では色々御託を並べようと、結局は私にとつてそういうものなのだろう。それはこれまで私が続けてきた努力と繰り返し返された過ちの数々が証明しているように思える。私は納得せざるを得ない。

だがそこでふと疑問を抱く。

それはなぜベルに私にとつての正義が代わった…そうアリーゼが断言した理由である。

すると…

「なぜその白兔君に代わったかって？それはね。さつきも言ったけど、そもそもリオンはずっとずっとあんたの全てを受け入れてくれる存在を求めてたからよ。リオンが嫌ってる自分の性格とか表面上美しいだけと思ってる容姿とか犯してしまったと思込んでる罪とか諸々全てをずっと重荷と思ってた。だからそれを一緒に背負ってくれる人を求めていた。違う？」

「それは…」

否定できない。

アリーゼは私が偏屈なエルフであろうと友人として受け入れてくれt。

シルは私が多くの方を苦しめた罪人であろうと友人として受け入れてくれた。

そしてベルは…

「白兔君はリオンの過去も性格も全て知った上で今こうして受け入れている。それができたのは疑いようもなく白兔君だけ。正直言ってみてリオンにとって白兔君は私達以上の存在になったってことよ」

「もっとも私達はその少年の領域に至るのは絶対に無理だった気もするがな」

「それな。あたし達はリオンを友人として受け入れることまではできてもそいつ並みは流石に…」

「何言ってるの！私はリオンとお風呂も入ったし、一緒に寝たのよ！私はリオンの身体の隅々まで知ってるのよ！だから白兔君の領域まであと一歩手前まで来てるじゃない！きつと惜しかったのよ！ね？リオン！」

「なっ…私のかっ…体の隅々まで!?!アリーゼは一体何を言っているのですか!?!」

アリーゼの意味の分からない発言に私は羞恥心を覚えさせられ思わず叫ぶ。

ベルがアリーゼ達以上の存在になり、私の生きるための正義希望となった。その意味はすんなりと理解できる。

ただそのアリーゼやシル以上の存在になったその理由は分からないまま。輝夜とライラが苦笑い気味でぼそりと漏らし、アリーゼが羞恥心しか生まない摩訶不思議なことを言ったのを聞いても全く私には分からない。

すると私の恥ずかしがる様子をアリーゼは面白がりつつも言う。

「まあつまりね。リオン。私達はあんたにとっての友人にしかかなれなかった。だからリオンが望むほどの温もりをあげられなかった」

「私達が既に温もりを持つ存在ではないから、という意味でもな」

「そうそう。リオンがどれだけあたし達に温もりを求めようともあたし達は絶対に応えられない」

「それも…そうです」

言う通りだ。彼女達と私ではもう生きる世界が違う。だから私は生きること自体を止めればいいという判断に至っていた訳で。

「だけど白兔君は違う。あんたが望む分どころかそれ以上の温もりで今もこうしてあんたを満たしてくれている。白兔君はリオンの望みによくやく応えてくれた人。だから白兔君はリオンにとって友人以上の存在になった」

「リオンがそんな温もりを求めるような淫乱だったとはな…」

「リオンの欲しかった温もりってのが温かいそいつの体液だったとか真面目に笑えねえ…」

「輝夜。多分このポンコツエルフちゃんはそんなことしたつもり全くないから言っても意味ないわ。あとライラ。乙女がそれ言ったら流石に下品すぎ」

…ライラと輝夜が『いんらん』だの『たいえき』だのよく分からないことを言い、アリーゼがそれを窘めているのを首を傾げて眺めつつ私は考えを整理しようとする。

ベルが私にとって友人以上の存在になった…

確かにそれもそうだ。

私がここまで触れ合った相手なんてベルしかない。そして私を温もりで満たしてくれた相手も。

今の私にとってベルが何物よりも大きな存在になっていることは疑いようもない。

そしてそれをアリーゼは…

「…だからアリーゼは『大好き』と評した…ということですか？私がベルに温もりを求めたのはベルを愛していて恋人になりたいと心のどこかで思っていたから…なのですか？」

「んーそういうことだと私は思うわよ？リオンは白兔君と恋人になってイチャイチャしたいのよ！あー私もリオンとイチャイチャした

かった！白兔君ズルい！」

「今更気付いたのか：待て。さり気なく愛を表現する言葉が重くなってるのは気のせいではないよな？ついでに言おうと団長は一体何を言っている？」

「どうかアリーゼと輝夜は順序を色々吹き飛ばしてるこのポンコツエルフの暴走っぷりを突っ込んだ方がいいとあたしは思うんだが？」  
色々余計なことも言われた気がするが、私がベルのことが好きだという感情が存在しているということを確認した私。

そうか：

私はベルの事を愛しているのか：

そう考えると心がさらに温かくなった気がした。

何故だろう？

ベルを愛しているというこの気持ちは私にとってとても尊く正しく正義である<sup>希望</sup>とまで思えてきた。

私はベルを愛している。

私はベルを愛しているのか。

ふふ…ふふふ…

「…なんかりオンがニヤケ出した…」

「まあ幸せそうで何よりじゃない！リオンのこんな笑顔初めて見たわ！」

「…好敵手のこんなならけた情けない表情…そう言いたいところが、私は何も言うまい…」

「…というかあたし達ってリオンがこっちに来ないように励ます役割じゃなかったか？」

「そういえばそうね…本当はあのモンスターの恐怖と自分の抱いちゃった恋の感情に憶病になったリオンを励まして、白兔君の手を離すなくとか逃がしちやダメとかいうつもりだったんだけど…」

「このポンコツはもう完全にその少年を愛することに躊躇がない上に

手に入れた温もりを手放さないために死に急ぐ感情を完全に捨て去り、生きることに向き合えるようになっていくように見える…」

「それな。もうリオンは大丈夫そうだな。ちよつと安心した。…つていうのはともかくさ。手を離すというかさ。啞えこんじやつたと言うか何と言うか…」

「はい。ライラはせっかくだかいこと言いかけていたのにそれ以上品のないことを言わないの。あとなんかリオンのニヤケ顔見ると、こんな表情にさせてる白兔君が無性にムカつくわね。リオンの心も身体もずつと私の物だったのに」

「…だからさつきから団長は何を言っているのだ？」

なんて会話が行われていることを知りもしない私は始めて抱いた感情に幸福を感じ、一人だけの世界に浸っていると…

「さありオン！最後にほんの少し私の話を聞きなさい！」

「えっ…あつ…はい！」

唐突に上げられたアリーゼの声に私はびっくりとしつつ応じる。そして私がきちんと反応したことを確認したアリーゼは笑みを絶やさずそのまま言う。

「いい？リオン？あんたはようやくあんたがずっと求め続けたものを与える存在に出会えた。あんたはようやく正義を見出したの。だからあんたはその正義を失っちゃダメ。一応それを念押ししておく。いい？」

「…はい。分かっています。だから私は…アリーゼ達の元に逝きたいとはもう考えません」

「それでいいわ。リオン。これで私達のリオンを見守る役割はもう終わり。これからはすつごく不本意だけど、白兔君に任せるとするわ！リオンの正義になるのもリオンを守る役割もみんな、ね」

「え…」

アリーゼ達が見守る役割はもう終わり…

つまり私は夢の中でもアリーゼ達に会うことができない…そうい

うこと？

「ちよつとりオン！そんな悲しそうな表情しないの！えーと何と  
言  
か…ね？」

「リオンがそんな表情をするとは…あれだけがみ合っているもそれ  
なりに親愛の情を抱きあつていられたのだな…私達は…」

「おい。輝夜。さらつと実はリオンの事が好きなツンデレでただな  
んて暴露してないでなんかリオンを慰める方法を考えろ！その…あ  
たしもしリオンのこんな表情は見たくない！」

「そつ…そうだ！あんな大事なことを伝え忘れてたわ！」

茫然とする私を前に大慌てで話し合う何かを話し合うアリーゼ達。  
そうして何か閃いたような表情をしたアリーゼは私に指を突きつ  
けながら叫ぶ。

「大丈夫！私達は近いうちにあなたに会いに行くわ！多分！恐らく！  
この中の誰かが！きつと！できれば私が！」

「…え？」

「…団長？そんな不確かなことをリオンに伝えていいのか？違ったら  
リオンは途方もなくショックを受けるぞ？」

「ついでに言うとなリーゼの欲が駄々洩れだし」

「うつ…うるさいわね！輝夜！ライラ！多分大丈夫よ！多分！」

アリーゼの叫びに輝夜は不安そうな表情をライラは呆れ顔を浮か  
べる。確かにアリーゼは不確かだと強調するかのように『多分』等々  
を連呼していて、相変わらずのアリーゼの適当さにそんな表情を浮か  
べるのは納得だが…

アリーゼ達が私に会いに来る？それは一体どういう意味か？

そしてその疑問に答えたのは輝夜とライラであった。

「えつと…な？貴様は先程まで何をやらかしていたのか分かっていな  
いようだから、具体的なことは私には伝えられない。だがリオンに覚

えておいて欲しいのは、今のリオンは二つの正義<sup>希望</sup>を手に入れることができるということだ」

「二つの…正義<sup>希望</sup>? つまりベルの存在だけではなく…ということですか?」

「そうだけ。リオンが気付くのはもつと先になるだろうけど、リオンはそいつのお陰でもう一つ正義<sup>希望</sup>を手に入れた」

「そして貴様にとってその正義<sup>希望</sup>はその少年以上に大切になる。だから今のうちから自分の身体には気を遣え。そしてもう少しその短絡的に行動する所を直せ」

「そうそう。意味の分からないところで暴走して、その正義<sup>希望</sup>を失うなんて馬鹿のやることだぜ? リオンはもつと慎重さを持つべきだ」

「輝夜とライラの戒めは肝に銘じますが…私の…もう一つの…正義<sup>希望</sup>? それは一体何ですか?」

輝夜とライラは漠然とした言葉を並べるばかりでその正義<sup>希望</sup>の正体を掴めない。それで私はその正体を尋ねてみる。

私の質問に輝夜とライラは一度顔を見合わせたかと思えば、静かに言った。

「言うなればリオンの幸せを体現する何か。少くない奴がその何かを見て幸せだって思える。幸せってものには色んな形があるだろうけど、それは代表的な一つの形だと思っぜ?」

「そして私達がとうとう手にすることのできなかつた幸せでもある。オラリオにいる冒険者のほとんどが手に入れることのできない幸せ。それを偶然か必然かりオンは手に入れた」

「輝夜達が手に入れることのできなかつた…幸せ? 輝夜、ライラ…? それでは私には意味が分かり…」

私はその意味を理解できず、質問を重ねようとする。

だがなぜか目の前のアリーゼ達の姿が次第に霞んでいく。

まるでアリーゼ達と話せる時間はもう本当に終わり…そうとでも言うかのように。



「みんなっ……！待って！私にその意味を教えて……！」

私は彼女達を引き留めようと叫ぶ。

だが彼女達は笑みを浮かべながら首を振る。

「ごめん！リオン！時間がもうないの！だからその答えは白兔君と見つけて！」

「団長も私達も適当なことばかりして本当にすまない……！今も……これまでも……だが私達がリオンの幸せを願っているというのは本心からだ！それは疑わないうで欲しい！」

「そう！だからリオン！あたし達の間も幸せになれよ！今のリオンは本当に一人じゃないんだからさ！」

申し訳なさも含ませつつ首を振る彼女達。

もう引き留めることはできない。アリーゼの言ったことの意味は分からないが、もう夢の中でも会うことができなかもしれないといううことは伝えられた通り。

なら私は霞に消えていこうとする彼女達に何を伝えればいいか？

それは私の中で明白だった。

せめて最後にそれを伝えなければ、私は絶対後悔する。

そう思った私は純白の光に向かって叫んだ。

「アリーゼ！輝夜！ライラ！みんな！あなた達はずっと私にとっての正義希望でした！ずっと守り抜き、共に生き、温もりを感じていたい……その心から思える正義希望でした！今は確かに私の正義希望はベルかもしれない！でも私は決してあなた達に私の心が救われたことを忘れません！そして過去の過ちを決して繰り返しません！ベルの事も……そしてあなた達の話す『もう一つの正義希望』のことも！だからたとえこれから会えなくとも幸せを掴むために生きる私の事をどうか見守っていてください！これまで私の正義希望として支えてくださり本当にありがとうございます！私……！大切な愛する人達……！」

私の言葉に返事は返ってこない。もうアリーゼ達の姿も見えなくなっていた。

だが私を包み込む温もりと純白の光が優しく受け止めてくれた……そんな気がした。

それに安心した私は温もりに再び身を委ね、瞳を閉じた。

希望は二人の手に

「アリーゼ……」

小さく漏れるリユーさんの今は亡き仲間を呼ぶ声。それを聞きながら僕はリユーさんの頬をそつと撫でる。そうするとリユーさんはくすぐったいのか少しだけ身体を揺らした。

少し前ほどではないけど、今まででは考えられないほど縮まったリユーさんとの距離。

リユーさんの綺麗な唇はすぐに触れ合えるほどで。

リユーさんの白い肌はほんのりと紅潮しているのが一目で分かるほどで。

リユーさんの小さな寝言がこの耳に届くほどで。

今僕はリユーさんに膝枕をしていた。

そんな僕に膝枕されたままのリユーさんは時折ぼそりぼそりと寝言を呟くけど、僕が触れても目を覚ます気配は一向にない。

眠りにつくりユーさんの表情はとても安らかそう。だから悪い夢を見てるようにはとても見えない。それは僕にとって心安らぐ事実だった。

だってこれまでの眠っている時のリユーさんはいつも苦しそうだっただけから。

僕の存在がリユーさんの苦しみを和らげるのに役に立ったなら、それほど嬉しいことはない。

そして気を張り詰めてばかりのリユーさんには今だけは休んでもらおうと思った。

だから僕は夢の世界に在るであろうリユーさんの邪魔をしないように心掛ける。

：目の前のリユーさんが愛おしくて思わず今のように頬を撫でたりと身体が動いてしまったりすることはあるけど、それくらいは許し

て欲しい。

それはそうとリユーさんと僕が初めて一つになって心も身体も通わせてからしばらくが経っていた。

何度もキスの雨を降らして。

何度もお互いの温もりを感じあつて。

何度も気持ちよさの極致に達して。

リユーさんも僕もみんな忘れて快感に身を任せ、お互いの温もりをひたすら求め合った。

その一時は今までの短い人生の中で一番幸せな一時だったと言っても過言ではなくて。

僕はこんな一時を僕にくれたりリユーさんには一生感謝しないといけない。そしてその感謝をリユーさんには一生を掛けてでも伝えていかないといけない。そう思いながらリユーさんを包み込んだ。

そしてリユーさんと僕が一つになったまま一緒に何度目か分からない極致に達した時。

リユーさんはまるで糸が切れてしまった人形のようにぱたりと僕の胸板に身体を預けてしまった。

その時僕はリユーさんの身に何が起こったかと心臓が止まりそうなくらい動揺した。だがリユーさんが小さく寝息を立て始めたのを聞き、心底ホツとしたものだった。

そうしてリユーさんが眠りについてしまったのを境にリユーさんと僕が一つになる心温まる時を終わらせることにした僕。

名残惜しさを感じながらも距離を作った僕は、心地よい気怠さに身を浸すのも程々に動き始める。

一糸纏わぬリユーさんの姿に改めてしばらく見惚れてしまった後に当の昔に乾いた服を被せ、僕もまた服を身につけていく。

それで身支度を整えた僕は無造作に地面に眠ったままのリユーさんを横たえておくのは申し訳ないと思ひ至る。

それはほんの僅かな間でもリユーさんとの間に距離を作ってしまったのは申し訳なかったし、僕自身直前まで全身で感じていたリユーさ

んの温もりを感じられなくなることには心細さまで感じたから。

その結果辿り着いたのは、膝枕。

僕とリユーさんが触れ合うのは僕の膝とリユーさんの後頭部だけ。

全身で温もりを感じられないのは残念だけど、今更リユーさんの身体を起こして抱きしめるのもリユーさんを夢の世界から呼び戻してしまいうそで危険だった。よって妥協点が膝枕だったのだ。

だけどリユーさんの綺麗な寝顔が見れる。

リユーさんの鼓動を間近で感じられる。

僅かだとしてもリユーさんの温もりを感じることはできている。

僕の心はそれだけでも温まった。

僕は考える。

どうしてなのだろうか？

リユーさんを一人にしたくないと思って。

リユーさんのそばにずっといたいと思って。

リユーさんの温もりを感じたいと思って。

その結果リユーさんと僕は心も身体も一つにした。

その事実が僕の心を温める。今までに感じたことのないようなポカポカとした感覚を覚えるのだ。

どうして？

リユーさんの寝顔を眺め、リユーさんの頬を撫でながらその温もりを感じる中僕は考えを巡らせる。

そうして至ったのは一つの答え。

その答えは僕にとつての正義希望になり得ることだ。

その答えはリユーさんにとつての正義希望であることも願わずにいられないことで。

その答えの名前は…

「んん…」

「あつ…リユーさん？」

僕があと少しで答えを出そうとした所でリユーさんは小さく声を漏らしてうつすらと目を開いていく。

それを見て、思わずリユーさんの頬に触れたままりユーさんの顔を上から覗き込んだ僕とリユーさんの視線は自然と絡み合うことになった。

「ああ…ベル…」

リユーさんは僕の名前を呟いたかと思うと、ゆっくりと手を伸ばし頬に触れたままだった僕の手に触れる。その反応にリユーさんの頬を撫ですぎてリユーさんが目を覚ましてしまったのではと不安を抱く僕だったが、その不安は杞憂でしかなかった。

「…なるほど。ベルが私に触れていてくださったから夢の中でもあんなにも温かく心地よかったですね…ありがとうございます。ベル」  
リユーさんはそう言うと、感謝の印とばかりに僕の手をリユーさんの口元に引き寄せる。

そしてリユーさんはその柔らかい唇で僕の手の甲に優しくキスをしてくれる。

あまりに自然にリユーさんが動いたので僕の方が上手く反応できず恥ずかしさまで覚えさせられる。

そうして恥ずかしさで頬を赤く染めているであろう僕を見てクスリと笑ったリユーさんは呟いた。

「…ベル？私は眠ってしまったのですか？」

「あ…はい」

「ふふ…そうですね。ベル…？私はベルに温もりをたくさん感じて頂けるようにできましたか？」

微笑みと共に告げられたリユーさんの確認。それに僕は即座に頷いて応える。

「ええ。もちろんです。僕の心も身体もリユーさんの温もりでいっぱいです」

「ありがとうございます。ベル。そう言って頂けて私は嬉しいです」

「その…僕はリユーさんに温もりをたくさん感じてもらえるように頑張りましたかね？」

「当然です。私の心も身体もベルの温もりで満たされています。こんなにベルに温もりを与えて頂けるなんて…私はとても幸せです」

「そっ…それは良かったです」

僕が答えと共にリユーさんと全く同じ質問をリユーさんに告げる。

そうするとリユーさんは同じように応えてくれて、僕の答えにリユーさんが微笑みで喜びを示してくれたように僕も笑顔で喜びを示そうとする。

だがリユーさんがその言葉を無意識にか意識的にかは分からないが、お腹を撫でながら言うものだから僕は思わずドキツとして言葉を詰まらせてしまう。

…その…リユーさん？そんな嬉しそうにお腹を撫でないでくださいね？僕の温もりが直接リユーさんを満たしているのは事実と言えば事実ですけど…

その何と言うか…エッチです…

そんなリユーさんが聞いたら怒るか怒らないか不安になることを考えていると、リユーさんは続けて言う。

「ベルのお陰で私の不安も和らぎました…だから私はもう逃げません」

リユーさんは先程までとは打って変わった真剣な表情でそう宣言すると、ゆつくりと身体を起こす。

もう少しリユーさんに膝枕をしながら距離を縮めたままでいたいと心で思っていた僕は何かまずい展開になっているのではと、小さな不安を抱く。

だが真剣そのもののリユーさんの言葉に横やりを入れる訳にもいかず、身体を起こしたリユーさんを見つめる。

…せっかく真剣な雰囲気を作り出そうとしたリユーさんが申し訳の素肌はすっかり僕の目の前に露わになってしまい、今更のように耳まで真っ赤に染め上げて慌てに慌てるリユーさんを見なかつたことにしながら。

「んっ…んっ…させてベル。ここに来てから如何ほど経ちましたか？」

「えつと…恐らく四時間ほどかと」

「分かりました。あまりここに長居するのは得策ではありません。そろそろここを発つ準備をしましょう」

リユーさんは雰囲気を見事に壊した自らの失態を誤魔化すために小さく咳払いをしたかと思えば、この休憩の場を発つことを提案し、身体を起こすだけでなく立ち上がろうとまでし始める。

リユーさんの言葉は理に適っている。いくら安全そうとは言え、いつまでもここに留まっても状況は打開できない。

…というかりユーさんと僕はお互いの温もりを求め合うあまり自分達がどれだけ危険な状況に陥っていたのかすっかり忘れていた。

僕だけではない…よね？

そうぼんやりと考えながらリユーさんを眺めていると、リユーさんは時折僕の付けた赤い跡に驚いては頬を緩め撫でて…という何とも進捗が進まない着替えを進めていた。

僕に背を向け替えを進めるリユーさんの時折垣間見える表情に悲壮感を感じられない。

これから悪夢のように辛かった【深層】の戦いに身を投じなければいけないというのにリユーさんはまるで躊躇や恐怖を感じていないかのよう。

リユーさんは驚いたり顔を赤くしたりと表情をコロコロと変えて、先程は一瞬真剣な表情を見せてくれたけど張りつめているかのような様子は一切見られない。

…確かにこんな表情をリユーさんができるといふことは、リユーさんにとってとてもいいことだとは思う。リユーさんがこんな柔らかい表情をいつもしていられたら、と思ひもする。

だがこの状況下でその表情と雰囲気はあまりに奇妙だった。

ダンジョンと向き合う時のリユーさんは緊張を絶やさず冷静で…そしてどこか死を受けているような雰囲気があった。

なのに今のリユーさんはいつものリユーさんとはまるで違う。…申し訳ないけど、何とも言い難い違和感と不気味さを感じずにはいられない。



見慣れないからこそその違和感だろうが、見慣れない表情と雰囲気を感じさせているリユーさんに何かしらの変化があったのは明らか。

そして見慣れないリユーさんがどう行動するかはリユーさんの変化を明確に理解できない僕では読めないとなる。すると不測の事態もあり得ないとは言えない。

…つい直前にも僕はリユーさんの気持ちと覚悟を見抜けずに危うく命を落とさせてしまうほどだったのだから。僕はリユーさんの心の動きをきちんと掴んでおかないと後悔すると思った。

だから僕はここを発つ前にリユーさんにきちんと今の心境などを聞き出さなければならぬと決心する。

そしてその一端が僕にあるのではと疑うからこそ尚更リユーさんがこうなった理由を探ろうと、身支度を整えつつあるリユーさんに声を掛けた。

「リユーさん？ここを発つのは僕も賛成なんですけど…ちよっとお時間を頂けませんか？」

「…えっ…？」

僕の求めにリユーさんはピタリと動きを止め、僕の方を振り返る。ただなぜか頬をポツと赤くして。

そのリユーさんの表情に僕は不思議に思っていると、リユーさんは思わぬことを口にした。

「…もう一度…はダメですよ？確かにもつとベルと触れ合いたいの山々ですが、流石に身体が持たないというか何と言うか…」

…

…なるほど。

リユーさんは確かに思わぬ所で盛大なポンコツっぷりを発揮するけど、これは流石におかしい。今のリユーさんは完全にダンジョンと向き合うための心構えを欠いているように思える。

「リユーさん。一度座ってください」

「だから…ベル…」

「リユーさん。とにかく一度座ってください」

「え…はっ…はい」

僕はリユーさんに有無を言わせず座ってもらうように求める。

リユーさんは僕の断固とした態度に動揺したようだったが、僕の求めに素直に応じ僕の前に正座で座った。

そうして再び距離の縮まったリユーさんの目をじつと見ようとして…先程までの事をつい思い出して思わず二人揃って視線を逸らすという間の抜けたことをしながらも僕はリユーさんに尋ねた。

「…リユーさん？今のリユーさんは何と言うか…いつもと雰囲気が違うように思えます。気が緩んでいるというか何と言うか…一体どうしたんですか？」

「そう…ですか？それは…」

僕が咎めるような視線を向けつつ尋ねると、リユーさんはやはりと言うか気付いていなかったようで驚きを見せつつ目を伏せて考え始めた様子。

そしてリユーさんの言葉の続きを待っているとリユーさんは視線を僕の元に戻すと語り始めてくれた。

「それは…気が緩んでいるのではなく正義が私に再び宿り、心の支えを手に入れることができたお陰で精神的に余裕ができたからだと思えます」

「心の支え…つまり今までのリユーさんがいつも張りつめた表情をしていたのは心の支えがなかったから…ということですか？」

「…言うなれば。私はお察しの通りいつも死に急いでいました。ずっと今は亡き仲間たちの元に逝きたい…そう願ってきました。そのため常に死を求めると同時に死の恐怖と戦っていたと言っても過言ではないと言わざるを得ません。そのためベルには私の表情が常に張りつめているように見えたのでしよう。…今回のベルとの逃避行では特に。しかし…」

「しかし？」

僕は少しだけ言葉を出すことを躊躇するリユーさんを急かすように繰り返す。

その言葉の続きには僕が聞きたい言葉が続く。そんな直感があつたから。

「しかし…今の私は違います。私には正義希望があります。私は未来が欲しい…時間が欲しい…そう久方ぶりに思うことができました。だから…私は決して死ぬ訳にはいきません。どんな苦難であろうと、乗り越えられるか否かではなく乗り越えなければならぬと考えています。よって今の私にとっては【深層】のモンスターであろうと、【厄災】であろうと恐れる理由がありません。私の正義希望を汚そうとする物は何物であれ正面から突破します。ベルと私が支え合えば…不可能などありません」

リユーさんは確固とした決意を込めつつそう語る。

つまり…リユーさんから張りつめた雰囲気が消えたのは生き残るための絶対的な正義希望を手に入れたから？

リユーさんの頭の中からは死という可能性自体が消し去られた…そういうことか？

そうリユーさんの言葉から推測を立てた僕はホッと小さく息を吐いた。

良かった…本当に良かった…

リユーさん自身吐露した通り今回の逃避行でリユーさんはずっと死に急いでいるような行動が多いことが気になっていた。そしてリユーさんは実際僕を助けるために躊躇なく命を捨てようと何度もしていた。

それはリユーさんにとっては本望なのかもしれないけど、僕は全く望んでなどいない。リユーさんを犠牲にして生き残るくらいなら運命を共にする方が何倍もいい。そう僕は思っていた。

だがリユーさんの心の中から死という選択自体が消えている。

根拠のないただの精神論であるという指摘ができなくもない。それでも死に急いでいたリユーさんがとても強い生への渴望を抱いている。これが大事だった。

僕もまたリユーさんと一緒に生きて帰るといふ生への渴望は強い。そしてリユーさんもまた僕と共に生きて帰るといふ生への渴望を

抱いてくれた。

つまりようやくリユーさんと僕の考えが一致したのだ。ようやくリユーさんと僕は同じ目的の下協力し合える。

少し前に起きたあつてはならない齟齬ももう起きない。リユーさんが一人で僕の前からいなくなろうとしない。僕はそう思うだけで心の重しがかなり消えたように感じた。

さらに言うとも心も身体も繋がって一心同体になったリユーさんと僕にもはや敵などいない。

僕の考えも早々にリユーさん色に染め上げられていく感覚がした。その楽観的な考えを疑う自分もいた。

だがそうでなければ僕かりユーさんのどちらかが一方を一人にしてしまうということであり、お互いに温もりを交換し合うこともできなくなる…

そんな最悪の展開など論外である以上、憂いなく戦い抜くためにはその楽観的な考えに染まるしかないとも思えた。

僕が懸念を示しリユーさんの不安を煽れば、リユーさんの決意が揺らいでしまう。

そうなればリユーさんが再び正義を失ってしまうかもしれず、その後に行き着く先は最悪の結末。

そうならないためにも僕がリユーさんの決意を肯定し、リユーさんを支える必要がある…そうも思えた。

だから何より目の前で確固とした決意で語るリユーさんを信じ、僕もまたリユーさんと決意を共にしようと決心した。

「その通りです。リユーさんと僕が共に生きて帰ると決めた以上僕達の決意を邪魔できる物なんてありません。リユーさんの正義のため。僕自身の正義のため。僕達はどんな苦難だって乗り越えます。ですよね？リユーさん？」

「ええ。ベルの仰る通りです。それで…私からも一つ確認をさせて頂いてもよろしいですか？」

「もちろんいいですけど…何でしょうか？」

僕の言葉にリユーさんは満足げに頷く。リユーさんはさらに自信

を深めた様子で戦い抜くための覚悟をより強固にしているようだった。

ただその後続いたのは僕の目を伺うように告げられた許可を求めめる言葉。

その確認の内容に関心を抱きつつ答えた僕にリユーさんは遠慮がちに尋ねてきた。

「その…ベル？ベルは私にもベルにも正義希望があり、そのために苦難を乗り越える…そう仰いました。ならばその正義希望は…私とベルを繋ぐ正義希望は…一体何だと思えますか？」

リユーさんが尋ねてきたのは僕にとって、リユーさんにとって、そしてリユーさんと僕を繋ぐ正義希望とは何か。

リユーさんはあえて『私とベルを繋ぐ正義希望』は何かと尋ねてきた。

それはつまりリユーさんと僕の心が繋がっている証であり、リユーさんと僕の身体が繋がったきっかけになったもの。

お互いの温もりを求め合っている間は僕には何だったか分からなかった。

リユーさんの温もりを感じるので一生懸命で。

リユーさんに温もりを感じてもらうのに一生懸命で。

考える余裕もなかった。

だが落ち着いてリユーさんと視線を交し合うことができている今の僕にとってそれは明確なこと。

僕は確かに今僕の中にある正義希望をきちんと見据えることができている。

僕の正義希望は…

それを言葉にしようと口を開きかけたものの、それよりも先に僕の沈黙を受けて待ちきれなかったのかリユーさんが言葉を紡ぎ出していた。

「ベル？私は私とベルの正義希望が一致していると信じています。だからベル？一緒に答え合わせをしませんか？」

「…っ！もちろんです！」

リユーさんが言葉にしたのは僕への信頼。

それと同時に見つめ合う僕達の正義希望は言葉にせずとも同じもの。  
そう心が通じ合っているのかりューさんも僕も分かっているのか  
もしれない。

だがリューさんも僕も言葉にして確かめたい。そう思ったのだと  
思う。

実は違う、なんてこともあるかもしれない。  
だけど僕もリューさんも確かめたかったんだと思う。

リューさんと僕を繋ぎ、僕達に生きて帰りたいと思わせる正義希望の正  
体を。

「リューさんと僕を繋ぐ正義希望は…」

「私とベルを繋ぐ正義希望は…」

「愛だと思いません」

「…っ！ベル！」

「リューさん！」

リューさんも僕も溢れる喜びを抑えきれず互いの名前を呼び、その  
まま距離を縮めて抱き締め合う。

リューさんと僕の心が繋がっていることを証明するように綺麗に  
重なり合った言葉。

僕達の考えは完璧に同じだった。

リューさんにとっても僕にとっても正義希望は同じ。

それは愛であった。

愛を確かめ合うために温もりを求め合い、愛を失わないために生き  
て帰ることを決意したということ。

リューさんにとっても僕にとってもいつからその正義希望が愛になっ  
たのか今となっては分からない。

だがこれまでリューさんと僕が自身の命よりも相手の命を尊び、進  
んで死地に赴いた理由によろやく説明がつく。

リユーさんも僕もお互いを結ぶ愛という正義希望を守るために戦い抜いたのだ。

そしてその正義希望がリユーさんと僕の間で一致したということは…

「つまりリユーさんは僕の事を愛して…」

「ベルは私の事を愛している…それは所謂…」

「私（僕）達は両想いということですね」

お互いの温もりを確かめ合っていたリユーさんと僕は一時的に距離を作り顔を見合わせる。

それは確認のため。

僕達を繋げているのが愛ならば、僕達はどのような関係なのかの確認。

その確認でも見事に声を揃えて考えを共有できていることを確認できたリユーさんと僕はその『両想い』という事実を噛み締める。

そしてリユーさんがゆつくりとその瞳を閉じたのを見て、僕はリユーさんの意図を瞬時に察する。

リユーさんは誓いのキスを求めてるんだ。

僕達を繋げる正義希望が愛であるという証明を。

その正義希望が決して消えさせないという誓いを。

それをキスという形で果たそうとリユーさんは提案してくれているんだ。

リユーさんは言葉にはしなかった。

けれど僕はリユーさんと心で繋がっているから、そして僕自身それを望んでいるから僕は行動に移すことにした。

キスなら少し前まで何度も何度も交わしてきた。

だが今回のキスは意味合いが大きく違う。

これまでのキスはただお互いの温もりを感じあうためだけのもの。けれど今回のキスはリユーさんと僕が確かめ合った愛という正義希望

のためのもの。

その正義<sup>希望</sup>が僕達二人の物であることを証明するため。

その正義<sup>希望</sup>をこれからも守り抜くという誓いのため。

僕はその意味を深く噛み締めながら距離を縮めていく。

そして再び触れ合うリユーさんと僕の唇。

何度目か分からないキス。

だけど今回のキスは今までで一番心に染みわたり、幸福を感じさせてくれるキスだった。

お互いの背に腕を回し、お互いの温もりに貪欲だけど優しさに満ちた抱擁と共に降らされるキスの雨。

どれだけの間触れ合っていたか覚えていられないくらい僕の思考が蕩けてしまったかと思うほどの甘い甘いキス。

僕はこのキスを一生忘れない。そう心に誓った。

…何か大事なことを忘れている。そうぼんやりと感じながら。



## 越えし絶望と守られし希望

「…」

「…」

音一つない暗闇の中。

私とベルは無言で迷宮を進んでいく。

二人並んで周囲を警戒しつつ進んでいく私達の距離は心も身体もここに辿り着くまでより何倍も縮まっていたのは気のせいではない。

場所は未だに37階層。

ただし水源らしき場所は既に後にして、今は37階層の正規ルートに入った。

長い長い休憩をようやく終えた私達は決死行を再開していたのだ。

気の休まる時間をあまりに長く過ごしてしまったせいかイマイチ緊張感が戻っていないかもしれないというベルからの指摘通りの不安もあつたが、私達は何事もなく進み続けることができている。

…そもそも緊張感が足りないのは私だけの話ではない。ベルもだ…そう言いたい。

お互いの想いを確かめ合つたことが原因で思わず想いが昂り、キスの雨を降らせまくって出発時間をさらに遅らせるという盛大なハプニングに見舞われたのは私とベル二人の責任。

二人揃つてお互いの温もりに溺れかけたのは緊張感を欠いていたことを何よりも証明していた。

…そのお陰で余計に気持ち昂らせないようにということで私とベルの間ではあの後不用意な会話を避けるようにと取り決めをする羽目になった。

ただベルだつて緊張感を欠いているという点では私と大して変わらないのではないか？

その理由としても私とベルは身体だけでなく心も繋がっているから当然とあつさりと納得をする私。

それにしてもベルの苦言はともかくベルと触れ合つたことで心も身体も温まり、私に宿る正義を再確認することができた。

これなら私は絶対に生きて帰ることができる。

この正義<sup>希望</sup>を守り抜くために。

…こんなにもベルが近くににいるのに温もりを感じられないのは何ともじれつたい。せめて手くらい握ってくれてもいいのに…

と考えたところで私はそのお気楽な思考を遮断した。

…今はダンジョンの中。モンスターの蠢く死地にいる。

にもかかわらず武器を握らないといけない片手を拘束するとは何事か？

ただ私がベルを守れば何ら問題ないのでは？と生まれてくる余計な考えを抑えつつ意識を周囲への警戒に私が注ごうとしていると、ベルがピタリと立ち止まると眩く。

「…リユーさん？ここはどこか分かりますか？」

「恐らくは第四円壁です。この先が【下層】への連絡路ですが…」

そう答えつつ私は何か不穏な空気を感じ取り、言葉を切る。

その正体はその瞬間までの私には判然としなかった。

そして円壁を潜り抜けたその時。

私とベルに突き刺さった殺意の籠った眼差し。

私からかつての正義<sup>希望</sup>を奪った仇敵。

そして今まさに私とベルから正義<sup>希望</sup>を奪おうと爪を研ぐ仇敵。

『ジャガーノート』が私とベルの頭上に現れていた。

「オオオオオ!!」

「…っ！リユーさんっ！」

威嚇のつもりか騒々しい雄たけびと共に降下してきた影が爪を突き立てんと突貫してくる。

その爪の向く先は私。

顔を振り上げその影を認めたベルが悲鳴に程近い声色で私の名を呼ぶ。

だが殺意を向けられた私自身は動じなかった。

私には正義<sup>希望</sup>がある。

だから私は動じない。  
だから私は揺らがない。

「…ふっ」

小さく息を吐くと共に腰に差した双葉を引き抜く。

私は『ジャガーノート』の姿を直接見なかった。

もう『ジャガーノート』の行動パターンは掴んでいる。

風の動きが奴の動きを教えてくれる。

殺意の籠った『ジャガーノート』の視線が私の身体のどこを狙っているか知らせてくる。

そして私の正義が私の心と身体を守ってくれる。

だから負けようはずもない。

ベルの不安に満ちた視線と『ジャガーノート』の殺意の籠った視線が私に刺さる中。

私の双葉の一双と『ジャガーノート』の必殺の爪が交わった。

だが必殺など私の恐怖が生み出した幻想でしかなかった。

冷静に向き合えば。

ただ正義が心になれば。

必殺の武器など容易に慢心を呼び起こす無用の長物と化すのである。

恐ろしいほどに速い速度に乗せられて突き付けられた暴力。

真正面から受け止めては私などの力では到底敵わない。

だが私はその暴力による衝撃を双葉の一双に込める力の調整と背を反らせていくだけで受け流して見せた。

ただ私に蓄えられた直感と経験にこの身を委ねて。

こんなこと私が生き残ることに絶対的な自信を抱いていなければできないことであつただろうと、実践しながらぼんやりと考える。

そしてその結果その勢い任せの暴力は私に突き立てられることなく私の背を任せていた壁面に轟音と共に突き立てられた。

それにより深々とその爪は容易に抜けぬほど壁面に突き刺さる。

その隙を私は見逃しはしない。

瞬時に奴の爪を受け止めていないもう一双の双葉でその爪を根元

から両断する。

そうして突き刺さった爪によって何とか一瞬だけ浮いていた身体を落下させ始めた『ジャガーノート』に私は回し蹴りを馳走した。

私の力はそれほど強くないが、受け身を取れていない油断多き『ジャガーノート』相手に無力な訳もなく。

『ジャガーノート』はいとも簡単に広間の中央へと吹き飛ばされた。「なっ…なっ!？」

私によってあっさりとおしらわれた『ジャガーノート』の姿に驚きを隠せない様子のベル。

だが私はそう奇妙な光景ではないと考える。

なぜならこれまで『ジャガーノート』と向き合ってきた私には<sup>希望</sup>正義がなかった。だから立ち向かうだけの闘志も実力も発揮できなかった。

だが今の私は違う。私には<sup>希望</sup>正義がある。

だからこの展開は私にとって何ら奇妙ではなかった。

一方の吹き飛ばされた『ジャガーノート』も流石にこんなに簡単に敗れるほど弱くはない。

籠る殺意を何倍にもしながらむくりと身体を起こしたかと思えば、残された右腕から尖った白骨の槍を打ち出した。

「あれはっ…! 『スカル・シープ』のっ!」

ベルは動揺を隠せぬまま飛んできた白槍に回避行動を取ろうとする。

だが私はベルと同じ行動を取らなかった。

私に向けられる白槍がある時は身体を反らせて避け、ある時は双葉で軌道を変えて。

私は『ジャガーノート』相手に逃げ回るのではなく正面から睨み合った。

その私の動じぬ動きに『ジャガーノート』は闇雲さを感じるほど白槍を連射してきたが、それでも私は動じない。

私は飛んでくる白槍に注意を払いながらも一歩また一歩と『ジャガーノート』との距離を縮めていったのだ。

そして一方の『ジャガーノート』相手にすっかり弱腰に回避行動を繰り返すベルに喝を入れる。

例えばベルが速度頼りの戦法が得意としても守勢ばかりでは勝てない。そう改めて伝える必要を感じたのである。

「ベルッ！なぜそうも弱気なのです！気を引き締めなさいっ！」

「でもっ！『ジャガーノート』があんな姿でっ……！」

私の喝にベルは恐怖でひきつった表情のまま応じてくる。

確かにベルの恐怖は分からなくもない。

目の前の『ジャガーノート』は前に向き合った時とはまるで違う形相。何をしたらこんな醜悪な姿になるのか理解できない。

もしかしたら私達の予想を越える卑劣な罠を仕掛けてくるかもしれない。そうも考えられる。

だがそんなことなど今はどうでもよかった。

「だからなんですか!? 私達には正義希望があるではないですか!」

「……っ！」

私の言葉にベルが大きく目を見開く。その様子に私は畳みかけるように言葉を連ねる。

「私は確かに伝えました！ベルも確かに同意したはず！私達には正義希望がある！だから私達に敗れる可能性など寸分たりとも存在しない！」

「……あ」

「だからベル。何の迷いも憂いもいらぬ。前に進みなさい。正義希望を奪わんとする物を全て消し去りなさい。ベル。少なくとも……これまで私が授かった全ての温もりに報いるために……私は戦う」

「もしあなたに本当に正義希望があるならば私に続きなさい。正義希望のため！私達は決して逃げない！そうでしょう!?ベル!」

そうベルに告げると共に私は白刃を煌めかせ駆け始める。

ベルの返事はもう待たなかった。

なぜならベルは間違いなく私に続いてくれる。

共に私達の正義希望を守り抜くために戦ってくれる。

そう信じていたから。

そしてベルは…

「ぐっ…その通りです！リユーさんつつ!!僕も共に戦います!僕達の正義のために!!」  
希望

それでいい。ベル。

恐怖を吹き飛ばし、声を張り上げたベルは私に呼応して駆け出す。忌避行動を繰り返し奇しくも私から離れた場所に移動していたベルとほぼ移動をしていなかった私は『ジャガーノート』を挟撃する位置取りを取ることに成功する。

偶然だとしても有利な位置取り。これを生かさぬ手はない。

こんなモンスター如きに時間など使うにも値しない。

仲間の仇。

希望正義を脅かす敵。

そんなものには早々に消えてもらおう。

私は短期決戦を心に決めて、ベルと目配せで連携を心掛けながら『ジャガーノート』と白刃と爪を交わす。

『ジャガーノート』得意の一撃離脱などさせるはずもない。恐ろしく速い速度さえ相手にせずに済むならこんなモンスター敵ではない。

逆に私の方が速度を生かして『ジャガーノート』を翻弄していく。一撃離脱戦法はもはや『ジャガーノート』の領分ではなく私の領分だった。

ベルが押されれば、私がカバーに入り。

私が押されれば、ベルがカバーに入る。

心の繋がった私とベルにとってもはや連携など余裕。

速度が上がれば上がるほど力を増幅させていく私に押され続ける『ジャガーノート』。

速度を保ち続けるために疾走距離を確保しようと、時折『ジャガーノート』相手に距離を取るといふ隙が生まれるが当然その隙を利用させはしない。

私が距離を取れば、ベルが代わりに『ジャガーノート』を相手取る。私と同じく速度を生かした戦いを得意とするベルもまた長所を生かせずもがく『ジャガーノート』を翻弄し続けた。ベルも先程までの及び腰から打って変わり積極的に攻勢に打って出ていた。

『ジャガーノート』は常に飛び回り纏わりつく私とベルに闇雲に蛮勇を振るい続けたが、そんなものに私達を傷つけられるはずもなく。

逆に『ジャガーノート』の方が長所を奪われ続けながら私達二人掛りの攻勢に鱗を少しずつ削ぎ落されていく。

そして何分続いたか分からない命のやり取りを繰り返した末に。

もう白槍は打ち尽くされ、全て壁に突き立ったまま。

身を守っていた鱗も削りつくされた。

『ジャガーノート』を守る武器はもはや消え去った。

一方の私とベルは数えきれない擦り傷を作り、疲労が身体を蝕みはしたものの、致命傷は負わないまま。

これで終わりだ。

視線を交わし連携を示し合わせた私とベルは一度『ジャガーノート』と距離を取る。

その唐突な私達の動きに態勢を整えようと試み始める『ジャガーノート』であったが、そんなことなどさせる意図は毛頭ない。

『ジャガーノート』は気付いていないのかもしれないが、私とベルは対角線上に陣取っている。先程までの入れ替わりながらの一撃離脱を狙っての位置取りでは当然ない。

殺気の籠った視線を私に向け、私の動きに対応しようとする『ジャガーノート』。

だが私が見ていたのはその先にいたベル。

もう私に見えるのは絶望とトラウマではなく正義<sup>希望</sup>だけであった。

示し合わせて、再び挟撃の態勢を整えた私達は声を揃え、動きを合わせて、突貫した。

「はああああ!!」

私の動きに対応しようとする『ジャガーノート』であったが、後方より迫るベルの動きに気を取られる。だがそんなよそ見をしている余裕をこの私が与えるはずもなく。

結果私にもベルにも対応し損ねた『ジャガーノート』の腹と背には二振りの白刃が深々と突き立てられた。

そして間髪を入れずに叩き込まれる私とベルの横蹴りをまともに受けた『ジャガーノート』はとうとうビキビキと音を立てて白骨を砕かれた。

速度のお陰で増幅した私とベル二人分の蹴りの力を受け流せなかった『ジャガーノート』は砕けた白骨の粉を振り撒きながらはるか遠くへ吹き飛び、壁面にめり込む。

ミシミシと音を立てて、めり込んだ壁面から抜け出そうとするも、突き立てられたままの二振りの白刃がその足搔きを妨げる。

『ジャガーノート』にはもはや抵抗する余力も失い抜け出すこともできない様子。

その様子に私とベルは自然と近寄りつつ『ジャガーノート』に視線を釘付けにしたまま並び立つ。

そして私達は呼吸を整えながらもゆっくりと顔を見合わせた。

「勝ったんですか？リニューさん？」

「…ええ。正義は守られました。他でもない私とベルの力によってですが…まだ終わった訳ではありません」

そう言う私と私はベルを抱き寄せて、ベルの腰にそっと腕を回した。それはベルの温もりを再び肌で感じるためで。

ベルが左腕に怪我を負っているために手を繋ぐことができないことによる少々不本意さの残る身振りだ。

そして私とベルが二人で協力して『ジャガーノート』という正義を脅かす敵を撃ち滅ぼすため、言わば必要な身振りだった。

ただ…

「共に正義を脅かす敵を撃ち滅ぼしましょう。…つてベル…?」



「…っ！はっ…はい！そそ…そうですね！『ジャガーノート』にとどめを刺さないですね！」

…ベルはただ私が距離を縮めただけなのに顔を真っ赤にして私を凝視するばかり。

ベルは私の名前を呼ぶと動揺を全く隠せていない反応を返し、大慌てで視線を背けた。

…どうかしたのだろうか？私は何か問題のあることをしてしまっただけ？

そう疑問を抱くが、少なくともベルはこれから為すことを理解してくれているということは分かった。

よって私はベルから『ジャガーノート』に視線を移す。

そして私はポツリと呟いた。

「…私達が両思いだと分かってから、初めての共同作業ですね？ベル？」

「え？…確かに。もうちよつと僕的には楽しい共同作業が良かったというか何と言うか…まあいいです。リユースさんも僕もこうして生き残ることができているので」

「私達二人での楽しい共同作業は後々の楽しみに取っておきましょう。私達にはこれからいくらでも時間はあります。その時間を二人でゆっくり楽しんでいけばいい…そうでしょう？」

「それもそうです。リユースさんと僕はこれからずっと一緒ですから、ね？」

「その通りです。私とベルはずっと一緒です」

『ジャガーノート』から一度視線を外し、互いの笑顔を確認しあいながら語り合う私とベル。

改めてお互いを一人にしないという決意を固めると、私達は視線を絡めて頷き合う。

そして再び『ジャガーノート』に視線を向け直すと共に私達はこの忌まわしき戦いによろやく終止符を打つ時だと心に決める。

希望  
正義を脅かす敵を私達の魔法で抹消する。

私達は空いたままの方の手を『ジャガーノート』に向ける。  
ベルは魔力の畜力チャージを始め。

そして私は歌を紡ぎ始めた。

「今は遠き森の空。無窮の夜天に鏤む無限の星々」

この歌は私にとって忌まわしき過去を思い出させるもの。

正義希望を守ることもできなかった非力な歌。そう決めつけてもいた。  
だがそれは違った。

私<sup>希望</sup>がただ正義希望を信じていることができなくて。

私に正義希望を守り続けるための意志が足りなかった。

だからこの歌もまた力を失ってしまっていたのだ。

だが今は違う。

私は正義希望を信じ、守り抜くための揺るがぬ意志を持っている。

だからこの歌はもう無力などではない。

私達の正義希望を守るための力を秘めた歌。

「愚かな我が声に応じ、今一度星火の加護を。汝を見捨てし者に光の  
慈悲を」

ベルの生み出した光と私が生み出した風が私達を包み始める。

ベルの温もりを感じたままだからだろうか？

私を包み込む光と風はとても暖かく感じる。

この光と風が私達の正義希望を守ってくれる。

この光と風が私達の正義希望の敵を撃ち滅ぼしてくれる。

「来れ、さすらう風、流浪の旅人。空を渡り荒野を駆け、何物よりも  
疾く走れ」

そうして忌まわしき仇敵を前に思い出すのは、仲間達の存在。

無慈悲な仇敵のせいだ。

無力だった私のせいだ。

彼女達は無念の死を遂げてしまった。

彼女達はもう戻ってこない。

あの時私が今のように戦えていれば…なんてことは考えない。

あの時の私は何があるかと立つことはできなかった。

今のような揺るがぬ生きるための正義<sup>希望</sup>を欠いた私は彼女達の脚を引つ張るばかりで助けになど到底なれなかった。

これは手の施しようもない後悔で一生私は心のどこかをこの後悔に蝕まれ続けることになるに違いない。

だがこの後悔があるからこそ強く心に誓える。

この心に正義<sup>希望</sup>が宿っているからこそもう迷わない。

私はもう過去に囚われない。

過去を言い訳に逃げ回ることにはしない。

私は今この心に宿る正義<sup>希望</sup>を守るために生きる。

かつて正義<sup>希望</sup>を失ってしまった後悔を繰り返さないよう私はこの身に宿る力全てを投じて生き抜いていく。

その最初を飾るのは目の前の仇敵『ジャガーノート』を撃ち滅ぼすこと。

ベルの示す光と一つになって。

かつて星屑の下に集った光にその背を支えられて。

私を取り巻く風は未来へと歩む。

「星屑の光を宿し敵を討て」

ベルが小さく息を吐く。それは畜力<sup>チャージ</sup>が終わったことの合図。

私もまた一息置く。それは詠唱が完成する直前であることの合図。

そして私達はようやく悪夢に終わりを告げさせた。

「ファイアボルト」!!」

「ルミノス・ウインド」!!」

放出される風に包まれた光弾達は迷うことなく『ジャガーノート』へと殺到する。

その光弾達に呼応するように熱気と共に直進していく光に包まれた炎。

それを正面から受ける羽目になった『ジャガーノート』はもはや断末魔も上げることさえできなかつた。

壁面の碎ける轟音が響き、土煙が立った先には『ジャガーノート』を

思い起こさせる遺物は何も残されていなかった。

正義<sup>希望</sup>を脅かす仇敵は跡形もなく消滅したのだ。

その事実を噛み締める私とベルが顔を見合わせた時にはもう我慢がでなかった。

互いに飛びつくように抱きしめ合う私達に言葉はもういらなかった。

助け合い共に戦い守り抜いた互いの温もりを感じあうだけで私達は心を通わせられる。

そして悪夢からようやく脱却し、未来を掴み取った私はベルの温もりに再び包まれたら感情が抑えれなかった。

喜びとも安心とも表しようがないこみ上げる感情。

それは私の許容量を遥かに超え、涙になって溢れ出していた。

「……っつ。ベルウ……よかったっ……！本当によかったあ！正義<sup>希望</sup>を……正義<sup>希望</sup>を私は守り抜くことができましたあ……！！」

「……ええ。そうです。リユースさんは正義<sup>希望</sup>を守り抜くことができました。よく頑張りましたね。本当によく頑張りました。僕の愛するリユースさんはやっぱりすごい」

「ベルウ……！！」

抑えが効かず涙をポロポロと流しながら鼻声で言葉を紡ぐ私。

そんな私をベルは背中を優しく撫でながら褒めてくださる。

その抱擁は私にとって何よりも温もりを感じさせてくれるもので。

その言葉は私にとって何よりも心を温かくしてくれた。

悪夢は打ち払った。

夢から覚めれば次に訪れるのは、私達を照らし目覚めへと導いてくれる朝日の光であつて。

その光が正義<sup>希望</sup>を心に宿す私達に差し込むのはまさに必然でもあつた。

「ベル様あ！！」

「リ्यूー！」

この耳に届く友人達の声。

その声に私とベルは顔を見合わせて呟いた。

「私達は生きて帰れる」

<sup>希望</sup>正義はここに紡がれたのである。

## 〈懐妊編〉第二章 手にした希望に気付く前に 治療院騒動

「検査は以上です。しばらく入院して頂く必要はありますが、お二人とも大方の処置は済みました」

「この度は本当にありがとうございました。」デア・セイント【戦場の聖女】

「僕からお礼を。ありがとうございました。アミツドさん。こんな凄惨な義手の準備まで…」

「私は治療師として当然のことをしたまでです」

清潔感漂う純白の部屋で。

ベッドに横たわり、身体を起こしていた私とベルは治療師として今の今まで私達の治療に力を尽くしてくれた【戦場の聖女】デア・セイントに感謝の言葉を告げた。

『ジャガーノート』という悪夢を消し去るにとどまらず、ベルのフアミリアの方と私の同僚達という頼もしい救援の到達によって私とベルは真正正銘正義希望を掴み取った。

…正直散々生きて帰る生きて帰ると宣いながら、「下層」にひとまず到達するという目標しか立てないという見事なほどに先の見えていない計画であったことに後になって気付いたのは閉口ものであった。

それは溢れんばかりの生き残るための意志とは対照的に総力を挙げて挑んだ『ジャガーノート』戦は勝利したとは言え身体に与えた悪影響は甘く見れるものではなかったことから明らか。

疲労が限界近くまで蓄積し、負った傷は数知れずという満身創痍の状態では「下層」まで辿り着いてもとてもではないが、脱出行を継続することができなかつたような状況だったのだ。

だが頼もしい救援はその悲観的な現実を私達に思い出させる前に姿を現してくれた。

皆さんの配慮と気遣いにより私達は戦闘を皆さんに任せ、移動に専念させてもらった。

…もちろん私とベルの満身創痍だろうとパーティに身を置く以上共に戦うという要望を一蹴されるという経緯を経た上で、ではあるが。

それはともかく皆さんの護衛の下私達は37階層からの脱出を果たすことができたのである。

37階層まで命懸けで助けに来てくださったベルのファミリアの方々や私の同僚達には感謝してもしきれない。

そして私達は脱出後早急にバベルの治療院に担ぎ込まれ今に至る。

私もベルも治療が遅れれば命を落としかねなかつたと【戦場の聖女】<sup>デア・セイント</sup>に評されると同時にこんな満身創痍の状態で意識を失うこともなく生きて戻ってきたという事実には流石に舌を巻かれた。

確かに私自身よくこんな苦境を乗り越えられたと他人事のように関心するが、私にはその理由をはっきり認識できている。

それは私とベルの間に正義<sup>希望</sup>が宿り、温もりを交換し合った所謂両想いという関係に発展し合えたから…

「リオンさん。クラネルさん。念のため…念のため確認に申し上げてもよろしいですか?」

私がベルの温もりで満たされた思い出に浸ろうとしていた所を遮ったのは【戦場の聖女】<sup>デア・セイント</sup>の声。

はつと自分の世界から抜け出して、【戦場の聖女】<sup>デア・セイント</sup>に視線を向けると、確認という名の詰問のような問いと共に厳しい視線が私とベルに向けられていた。

そんな視線を向けられる理由を理解できない私とベル。

一度顔を見合わせ視線を交わし、ベルが小さな頷きから【戦場の聖女】<sup>デア・セイント</sup>の問いを断る意思がないことを感じ取る。

それに私は頷き返すことでベルの意思に同意を示すと、互いから視線を外すと共に【戦場の聖女】<sup>デア・セイント</sup>に視線を戻した。

「問題ないです。何なりと仰ってください」

「大丈夫です。アミッドさん」

「ありがとうございます…では申し上げましょう。幾つか申し上げさせて頂きたいのですが…」

私とベルの同意に【戦場の聖女】<sup>デア・セイント</sup>は感謝を示しつつ小さく息を吐く。  
：そんなに言葉にするのに覚悟が必要なことなのか？と疑念を深め  
つつ私は【戦場の聖女】<sup>デア・セイント</sup>の言葉を待った。

そうすると【戦場の聖女】<sup>デア・セイント</sup>の口から飛び出してきたのは、思わぬ言葉であつた。

「まず一つ。お二人を別々の部屋にすると一度申し上げた時の件です。その点に関して少々苦言を申し上げたく…」

「…え？」

【戦場の聖女】<sup>デア・セイント</sup>の言葉に思わず私とベルの言葉が重なる。

：私とベルが別々の部屋にされそうになるという不愉快な決定が行われた時に一体どのような苦言を告げられるようなことを私達が生じたというのか？

そう思いかけた所、【戦場の聖女】<sup>デア・セイント</sup>は私の間抜けな考えに見事にグサリと言葉を次々と突き立てた。

「何を言っているのか分からないと言わんばかりの表情ですが：まずここは治療を行う場であり、この場においては治療師の言葉が第一であることはご理解頂けないことではないかと思えます。にも関わらずお二人は私の言葉に反発しました。それも本来なら許可し難い理由と不適切な態度を以てです」

「…うっ…」

「なっ…何を仰るのです!?!私のベルと離れたくないという想いは考慮に値しないと仰るのですか!?!」

「リユ…リユーさん!?!」

【戦場の聖女】<sup>デア・セイント</sup>の指摘に私は自身の想いを踏みにじられたような感覚を覚えて激昂する。

ベルが慌てて宥めようと激昂する私の名前を呼ぶが、その宥めが発せられる前に【戦場の聖女】<sup>デア・セイント</sup>が言葉を発していた。

「今のように激昂するリオンさんが問題だと私は申し上げようとして  
いるのです!ただでさえ重い怪我を負い不必要に感情が昂るのを控  
えなければならぬ身にも関わらず、何という沸点の低さ!リオンさん  
はご自分のお立場が理解できないのですか!」



「…っ！…ぐう」

【戦場の聖女】の言葉に私は碌に反論もできない。【戦場の聖女】の言葉が私にとつての冷水となり、冷水を浴びせられたことにより私の激昂はあっさりと沈静化される。

その様子に【戦場の聖女】は溜息を吐くと怒りを抑えつつという表情を隠さぬまま言った。

「…それには他の患者の皆さんもいます。どうか他の方のこともご配慮ください。あなた方が騒ぎ立てたことで少なからぬ方が迷惑を蒙ったことは隠しようがない事実です。その点をどうかお忘れなきよう」

「…お助け頂いた身にも関わらず僕達が多大なご迷惑をおかけしました。申し訳ありません」

「…私からも謝罪を。すみません」

【戦場の聖女】の指摘する正論にベルが即座に謝罪を口にし、私も致し方なく続く。

…私はただベルから離れるのが嫌だったただけなのに…と不満が渦巻く中、【戦場の聖女】は呟いた。

「…あなた方がどのような経緯でここにお越しになったかを詮索するつもりはありません。ただ私にでも分かることはあなた方をいつ何時も引き裂くことを望まなくなるほどの絆を築き得る苦難をお乗り越えになったことです。…それは今お二人が負われている怪我からもお察しします」

「アミッドさん…？」

「なのである意味特例として今回はこのようにお二人に同室という形を取らせて頂きました。本来男女が同室の病室など考えられないことです。ですがお二人の感情が怪我に悪影響を及ぼす可能性…先程のように暴走される可能性、それら全てを鑑み、許可を出しました。…私が薄々お二人のご関係をお察しし、配慮したいと思ってしまった私の私情が絡んでの結果なので、いつでもこのように上手くいくとはお思いにならないように」

【戦場の聖女】が漏らしたのは私達の立場への配慮。

治療師の立場としては私達の行動は許し難いが、【戦場の聖女】個人としては配慮してもいいと思えたということ？

それに私とベルの関係を察したとはどういうことか？

…まさか私達が恋人同士にきちんと見えるということ？

もしそうなら私はベルの恋人として相応しいと見られているということであり…

「リオンさん！」

「…はっ…はい！」

「…まだ話は終わっていません。自分の世界に入って行かず、きちんと私の話をお聞きください。まだ終わっていないので」

「…もっ…もちろんです…」

「リユーさん…」

一人考え事をしていた所、【戦場の聖女】の注意を食い意識を引き戻された私。

…【戦場の聖女】の注意だけでなくベルにまで心配そうな視線を向けられ、私がどのような表情を浮かべていたのか疑いたくなる。

…私は決して【戦場の聖女】の話を聞いていなかった訳でも惚けていた訳でもない…はず。

と思った私であったが、【戦場の聖女】の続く指摘はその考えをごく普通に叩き潰した。

「それでもう一点。それは仮にお二人が同室だからとは言え、お二人には出来るだけ余計なことをして頂きたくないということです。その意味がお分かりになりますね？」

「…分かります」

「…え？一体どういう意味ですか？」

【戦場の聖女】の言葉にベルが一瞬言葉を詰まらせながらも答える一方私は【戦場の聖女】の言葉の意味が分からない。

…私とベルに余計なことをして欲しくない…それは一体どういうことか？

「どうやらリオンさんはお分かりにならないようですね…仕方ないの。これまでお二人がなさってきたことをお話ししましょうか？」

「ダメです。アミッドさん！ちよ…リユースさん…とにかく僕達が必要なことをしなければいいということですから…」

「ベル？必要なことは一体何ですか？それが私には分からない以上【戦場の聖女】にお聞きするしかありません。【戦場の聖女】？どうかお聞かせください」

「だからリユースさん!？」

ベルが何故か私が【戦場の聖女】から彼女の言葉の意味を聞き出すのを止めようとしてくる。ただ【戦場の聖女】の真意を汲み取れない以上何を止められているのかさえ分からない。

よって私はベルの制止にも構わず【戦場の聖女】に尋ねた。

そんな私に【戦場の聖女】はわざとらしく大きくため息を吐くと、その『余計なこと』が何なのか話し始めた。

「簡潔にまとめるならば、治療の場においてイチヤイチャしないてください」

「…ああ…」

「イチヤ…イチヤ?」

「そうです。身に覚えがないならば、一つ一つお伝えしましょうか?」  
ベルが放心したように諦観を表情に露わにする。

…そしてその時になって私はようやく【戦場の聖女】の言おうとしていることを察した。

イチヤイチャ。

男女がくつついて仲良くすること。

…私はベルと私が引き離されそうになったことに怒りを示す以外にどんな問題のあることをしたのか分からないつもりだった。

だがそもそもベルとの距離を縮めようとする事自体が問題と捉えられているとしたら?」

そう考えれば、今更のように私の頭に様々な事実が蘇る。

診察中のベルが心配でずっと手を握り締めようとしたり…

私の診察の番でもベルから離れないとしなかつたり…

…その他にも色々問題視されるようなことをした気が今更のようにしたが、もはや思い出せなかった。

それは私を憤死させかねない事実で。

決して【戦場の聖女】に口にさせる訳にはいかない事実で。

私は【戦場の聖女】に尋ねたことを後々になつて心底後悔し始めた。

…これ以上恥をかかないためにも【戦場の聖女】が語り出すのを阻止しなければ、と決心を固める私。

「どうやらようやくご理解頂けたようですね。リオンさん…あなた方が私の前で何をしてきたかを。どうやら私が細かくお伝えするまでもなかったようで何よりです」

だが私が阻止のための言葉を発する前に私の表情が青ざめていくのを見て取り、私の恐れを取り除いてくださった【戦場の聖女】。

ただ【戦場の聖女】は私の願い通りには全く動いていなかった。

「お分かり頂けたならば、今から入院生活における注意点を全て話させて頂きます」

??

「…ニヤ？リユーはどうしてちよつと前まであんなに騒いでたのにそんな静かなのニヤ？」

「…あの【戦場の聖女】があれだけ怒ってたんだから当たり前でしょ」

「リユーはポンコツだからあれくらい怒られても仕方ないのニヤ。ちよつとだけミヤーは済々したのニヤ」

「あは…あははは…」

口々に話すアーニヤ、ルノア、クロエに彼女達に愛想笑いをするべし。

そして布団を被つたまま意気消沈した私。

…あれから結局【戦場の聖女】に安静にし、不要な行動を控えるよう厳しく言い含められた。…それもこれまでの恥ずかしい行為の数々の糾弾も込みで。

何が問題なのか全て説明まで加えられてだから反論など寸分も生

まれるはずもなく。

羞恥心の余り私はベルの顔さえ見られないような心境になっていた。

…これだから周囲に暴走妖精と呼ばれても仕方ないのだ、と自嘲したくなる。

そんな憤死したままの私を放置して見舞いに来てくださった同僚達はベルとの会話を進めていく。

「それで？おミヤー達の怪我はどうだったのニヤ？白髪頭の尻は無事ニヤ？」

「えーつと…僕もリユースさんも入院が必要だと言われましたが、後々に響くような問題はないそうです。あと…僕のお尻は無事です」

「ほんと良かったよ。冒険者君もリユースもさ。生きて帰ってきてくれて。どうやったら二人は戦い抜けるんだか。正直私だったら諦めちゃいそうだよ」

「それは…ですね？…まあ色々あったんです」

「色々ねえ…まあ…詮索は…しないけど…」

「…うん。ミヤーも面倒は嫌だから聞かないでおくニヤ」

ベルとの会話は円滑に進んでいるかに思えた。

だが急速に雰囲気が悪くなり沈黙が訪れ始めるのを流石の私も感じ取らざるを得ない。

みんなの表情を見れないため、その雰囲気が悪くなり始めた理由を掴めない私。

ただその理由はアーニヤが口を滑らしたことによって露見した。

「それにしても白髪頭とリユースはどうしてそんなに距離が近いのニヤ？まるで付き合ってるみたいなのニヤ！」

「バツ…バカ！余計なことを…！」

「…逃げるニヤ」

「ニヤ？ルノアもクロエもシルも気にならないのニヤ？白髪頭とリユースはどう考えても今までよりもずっと仲が良くなってるのニヤ

その理由が気にならないのニヤ？」

：この時の私はアーニヤが口を滑らしたこの意味を理解して  
いなかった。

何故これほどまでに同僚達が動揺していたのかも理解してい  
なかった。

一人だけただの一度も口を開かなかった人物がいたかも把握して  
いなかった。

そしてそんな間抜けな私に人影が近づいてきた時。

そしてその人影が私の耳元で囁いた時。

私はようやく気付く。

「：リユー？ベルさんとのこと：怪我が治ったらゆっくり聞かせても  
らうから。：覚悟しておいてね？」

背筋が凍えるような声が私の背に刺さって。

今まで感じもしなかった罪悪感が全身を襲って。

その時私はようやく自分が犯した罪を思い知らされたのだ。

## 募る危惧は漠然と

【深層】を脱出してから、二週間が経った。

あれからアミッドさんの忠告と叱責のお陰もあって、ある意味真剣に自分の身体の療養に注力するようになったリユースさんと僕。

療養に注力しアミッドさんに言われた通りに余計なことをしないようにしつつたまに僕の方からこっさり手を繋ごうとしてみたり、お互いのベッドの距離を少し縮めたりと自制あるイチヤイチャで収めるように努めた。

これまではリユースさんの方から求めてくるが多かった分、ときどきとは言え僕から求めるのは中々に気恥ずかしいものがあった。だがその気恥ずかしさもリユースさんの笑顔が見られるなら全く問題はない。：アミッドさんのお怒りを買うのを避けられたという意味でも。

だってその時だけはリユースさんに笑みが絶えなかったから。

見つかるか見つからないかのスリルを楽しんでいたからなのかもしれない：と思ったりもする。確かに僕自身アミッドさんに見つからないように触れ合うのは中々に楽しかったというのは否定できない。：何だか妙な趣味が生まれてしまいそう。

ただこのことに関して大事なのはリユースさんが『その時だけ』笑みが絶えなかったという点。

つまりリユースさんは他の時はほとんど笑顔を浮かべていなかったということ。

：リユースさんの様子がアミッドさんによる応急処置が終わってからおかしいのだ。

それから療養に専念できるようになったのはリユースさんが面会謝絶をアミッドさんに求めたから、という点は大きい。確かにアミッドさんは僕達が変な行動をしなくなるならとあっさり許可を出してくれたけど、別にアミッドさんが面会謝絶にすべきと言ったわけでは決していない。

即ちこれはリユースさん自身の望み。

…その望みを無視できない僕が賛成した結果は以後の面会をした回数が二回しかないというだけでもはつきり分かる。

一回目はファミリアのみんながお見舞いに来てくれた時。

…ただこの時もリユーさんは必要最低限の挨拶をした後は何かを考え込むようにほぼ沈黙を保ったまま。

一応事前にリユーさんは僕にファミリアの仲間としつかり話すことを勧めてくれていたから、気を使ってくれていた…とも考えられるけどそれだけとはあまり思えない。

リユーさんは単に僕に気を使っただけなのか。それとも何か別の意図があつてのことなのか。そこはリユーさんに尋ねないとまずいかもしれない…のにきちんと聞けないまま時が経っているというのもまた事実。

そしてそのリユーさんの態度に何とも言えない不安を抱いてしまった僕であつたが、それ以降は誰が気を利かせてくれたのかは分からないがファミリアのみんなが面会を求めてくることはなくなった。そのお陰でリユーさんの違和感ある振る舞いを以後見ることはなくなった。

…それが良かったわけでは決してない。

リユーさんがなぜあのような態度に出たのか探る機会を失った上に、リユーさんと恋人になつたことまで伝えそびれた。

…みんながリユーさんと僕の無事を心から喜んでくれているのを知っていたら話す機会を逃してしまつたのだ。お陰で二週間も経つてから伝えるとなると遅い気もして少々気が重い。

ただリユーさんの表情が憂いで満ちるよりは何倍もマシだとは考えられる。

だが一回目のファミリアのみんななどの面会で感じた問題以上の問題が二回目の面会でははつきりと突き付けられた。

二回目の面会の相手は「ガネーシャ・ファミリア」団長のシャクティ・ヴァルマさん。

リユーさんのかつての戦友で同じ正義のために戦つた方。

このシャクティさんがわざわざお忍びで僕達の病室を訪れたのは、



僕達の置かれた立場を伝えるため：

その伝えられた立場から分かることは僕達の前途には【深層】で考えていたより：いや、予想さえもしていない苦難が待ち受けていたことを思い知らされた。

：その苦難にどう立ち向かうか考えるのを結局のところ療養を名目に避けていたのもまた事実。

シャクテイさんの話を聞いた前後にリユーさんの様子に変化は特別感じられなかった。

だがそれはリユーさんはそれ以前から何かを考え込んで表情を陰しくしていることが多かっただけのこと。

リユーさんが僕と同じショックを受けたのは多分確実にリユーさんがシャクテイさんの話を聞いて悩んでいるのは确实。良いことなど全くない。

今日でようやく退院の許可が出る。

それはようやく誰にも邪魔されずリユーさんと触れ合えるリユーさんにとつても僕にとつても喜ばしい日ということ。

それはそろそろ苦難の待ち受ける前途と向き合わないといけない時が来た日ということでもある。

僕はその前夜寝ずにひたすら考えた。

すやすやと眠るリユーさんの寝顔を眺めながら考える。

リユーさんは起きている間は何かに悩んでいる様子は明らか。

だがその眠る様子を見るに悪い夢に魘されたりということとはこれまでずっと見ていた限りなかった。それは僕にとつてのせめてもの救い。

だがこれから襲ってくる苦難を考えれば、こんな風にリユーさんが気持ちよさそうに眠ることもできなくなってしまうかもしれない。それは一番避けなければならぬこと。

リユーさんを再びつらい立場に追い込むことがないように。

リユーさんに幸せだけを感じてもらうために。

リユーさんに笑顔でいてもらうために。

僕は決めた。

退院の前にリユースさんとこれからどうしていくかを二人で決めよう、と。

☆

「…ベ…ル…？」

「おはようございます。リユースさん」

考えをまとめた後ずつとリユースさんの寝顔を見守っていると、リユースさんはゆっくりとその瞼を開く。

どうやらもうリユースさんが目を覚ます日の出近くになっていたよう。

…リユースさんの寝顔があまりに美しすぎて時間も忘れて見惚れていたというのはリユースさんには秘密。

リユースさんは目が覚めてすぐに僕の姿を認めると、ふわりと微笑んだ。

「…何とというか…朝起きてすぐにベルとお話しできるのは…安心します。私は一人ではないと分かるからというか…」

リユースさんは笑みを浮かべたままそう呟く。

今のリユースさんはとても朗らかそうな様子。

これは今日退院であることを楽しみに思い、前途に憂いを抱いていないから？

それとも単に朝目覚めてすぐで思考があまり働かず、前途を直視できているから？

それは分からないが、少なくとも僕が思うことは一つ。

このリユースさんの笑顔を守りたいということ。

僕は静かに布団から手を伸ばし、リユースさんを包む布団の中に滑り込ませる。そして隠れたままのリユースさんの手を探した。

その僕の動きに気付いてくれたリユースさんは不思議そうな表情を

浮かべつつも滑り込ませた僕の手をそつと握ってくれた。

「どうしたのですか？ベル？いつもは私が求めないとアミツドさんが…とばかり言つて、滅多にベルからは率先して手を繋ごうとしてくたさらないのに…」

「いやあ…あは…あははは…」

リユーさんは駄々をこねるかのように頬を今にも膨らませそうな表情でそう漏らす。

…可愛い。

リユーさんがわがままっぽいことを言うイメージがないからこそそのギャップ？

リユーさんがこんな表情で駄々をこねてくれたら手を繋ぐどころかぎゅーと抱きしめてしまいたく…

…とリユーさんの魅力に悶えかけたところで何とか冷静さを取り戻す。

…そういえば朝はリユーさんがいつもあどけなさ一杯でその可愛さに悶えるあまり重い話を先延ばしにするというのが毎度の展開であつたと、冷静になつた今だからこそ気付く。

リユーさんのこの悩みのない表情でいてくれるのを見ると無理に悩みを与える必要はない…ついそう思ってしまうのだ。

だが今回ばかりは避けることはできない。

前途を見据えず対策も取らずにいれば、望ましくない結末に辿り着くのを避けられない。

僕はリユーさんの可愛さに溺れて愛でていたくなる甘えを抑え込む。

そして一度目を閉じて深呼吸をして感情を整理すると、僕はリユーさんの手を握る力をほんの少し強くしながら言った。

「素直に言うならば、リユーさんの温もりを感じたいなって思ったからです。そしてリユーさんを決して一人にしないという覚悟を少しでも証明するためにリユーさんと手を繋ぎたいなって。…その…た

まにリユーさんのお願いを断ってしまつてすみません」

「その点はお気になさらず。今こうやって私の願いを叶えてくださるだけでも私は嬉しいです。ありがとうございます。ベルの覚悟はしっかり私に届いていますよ」

リユーさんはそう言うのと、笑みを浮かべたまま両手で僕の手を包み込む。

…今のリユーさんの表情を歪めるのはすごく気が引ける。

だがそれでも僕は話さないわけにはいかず、覚悟を決めて語り始めた。

「そう言つて頂けて何よりなんですけど…その…リユーさん？少し退院する前に話し合いたいことがあるんですけど、よろしいですか？」

「…今後に関してですね。分かつてます」

「…え？」

リユーさんは小さく息を吐きながら、僕が話すことを事前に予測していたかのように僕が切り出す前に呟く。

リユーさんも今後に関して話さないといけない…そう思っていたということ？

驚きを覚えつつもそう僕が考える中リユーさんは目を閉じて言う。

「…すみません。ずっとベルときちんと話し合わなければならぬ…そう思つてはいたんです。ですが…いつい現実から目を背けたくなつてしまつて…何よりどうすればいいか分からなくて…ベルが今切り出してくれるまでずっと話をする…ことができませんでした。ですが…」

「ですが？」

リユーさんは言葉を切る。それに思わず僕は聞き返すと、リユーさんはゆつくりと瞼を開き言った。

「ようやく決心がつかしました。そしてどう現実と向き合い、どうすればいいかも段々と漠然とですが見えてきたように思えます。…私の話を聞いてくださいますか？そして私の判断の是非を共に考えてくださいませんか？」

リユーさんは僕の目をじつと見つめながら、揺るぎのない視線を向

け、僕の助けを求めてくれる。そしてそのリユースさんの求めへの答えは言うまでもなく決まっていた。

「もちろんです。僕からお聞きしたいこともいくつかあると思うので、その点も含めてだと嬉しいんですけどよろしいですかね？」

「当然です。共に話し合い解決策を見出し：私達の前に存在する苦難を乗り越えなくてはなりません。私達はお互いを支え合うことを誓い合った恋人同士なんですから」

「…っ…はいー」

リユースさんの言葉に威勢よく僕は頷く。その僕の反応にリユースさんは満足げに頷くと共に早々にこれまで触れることを避けていた苦難へと切り込み始めた。

「まずシャクティから教えて頂いた私の処遇に関してですが…」

「：リユースさんが今回の事件で命を落とした：という設定ですよ。ブラックリストから削除することの引き換えとは言え：あんまりです。生きてる人を：それもリユースさんを死んだことにするなんて…」

リユースさんが最初に触れた内容について僕は不快感を露わにせずにはいられない。

リユースさんが命を落としたことにするなんてまるで表舞台でリユースさんに一切活動するなど言わんばかり。それはリユースさんの居場所をオラリオから奪おうという結果的に状況とリユースさんの立場に一切の変化は与えないという意思表示と大差ないのではないか？

そう考える僕はこの対応に不満を覚えていたが、一方のリユースさんは僕とは考えが違うようでホッとしたかのような表情で言う。

「いえ…これがシャクティを始めとしたオラリオの治安を司る方々のできる最大限の譲歩だったのだと思います。シャクティに連絡さえすればこれまでのように人助けもしてもいいと聞いたのは私としては大きいです。これまではブラックリストに乗っていたがために情報収集から困難を極め、活動に制限がありました。ですが今後はそれがなくなる。今後は非力ながら少しでもかつてのように困っている方々を助けるためにこの力を生かしやすくなると考えると、嬉しく思

います」

「人助け…ですか？リユーさんは今後も続けるつもりなんですか？その…何というか…」

僕は言葉を詰まらせる。なぜなら続きを話すのは流石にやめておこうとつい思ってしまったから。

…リユーさんは人助けとなると相手が僕に限らず無理をすることが多い。

リユーさん自身のことを第一に考えて欲しいと思い始めた僕からすれば、今後もしリユーさんが人助けを続けるのにはあまり賛成し難い。

…何かがあつてからではもう遅いから。

僕がリユーさんのことを守つて、リユーさんが僕のことを守る：

【深層】で戦い抜いた時のような支え合いだけでも十分なのではないか？

そう思いかけるが、リユーさんの続く一言で僕はその思考を打ち切ることになった。

「…私の仲間達の正義でしたから。【アストレア・ファミリア】の正義は…彼女達の願った幸福な世界は…まだ実現できていません。困っている方が一人でも残っているならば…彼女達の願った幸せは掴めません。それにこれはこれまでに迷惑をかけてしまった方々への贖罪という意味もありますから。私はその機会をシャクティが与えてくれたことにむしろ感謝を覚えます」

リユーさんの仲間達。【アストレア・ファミリア】。そして贖罪。

…その名前が出されてしまうと僕はもう反論できない。

命を落としてしまった仲間の方達をとて愛していたリユーさんを否定することなんてできない。

リユーさんに自身が迷惑をかけた方々がいて、その贖罪をしたいと言われたら止められない。

リユーさんの思いを否定して止めたらリユーさんは今後も苦しみ続けてしまうから。

その苦しみを早々になくせるならば、リユーさんは思うままに動い

てもらった方が良いように思える。

ただこんな思いも消えなかった。

その正義希望は本当にリユーさんの正義希望を守るために必要なのか、と。以前リユーさんはリユーさんと僕を繋ぐ正義希望は愛であると確かに言っていた。

：今リユーさんが言った正義希望は明らかに関係ない。

それは本当にリユーさんの正義希望ですか？

仲間の方々の正義希望であってリユーさんの正義希望ではないのですか？

そう問いたい。

だが僕はあくまでリユーさんの考えを尊重したい。

だから僕は小さな領きと共に納得したフリをした。

「：分かりました。リユーさんがそう仰るのなら僕は止めません。ただシャクテイさんだけでなく僕にも絶対連絡してください。どんな時でも僕は駆けつけますから。リユーさん一人に辛い思いをさせたりはしません。何かする時は二人で一緒にやりましょう。いいですよね？リユーさん？」

「そうできれば何よりなのですが…私が命を落としたという設定のせいで…」

リユーさんはそう言いかけた所で表情を歪め言葉を詰まらせる。

：：そう。『リユーさんが命を落とした』という設定はリユーさんと僕の関係に深刻な影響を与えていた。

それは…

「：僕と一緒にいるとリユーさんが生きてることがバレるかも…ということですね？」

僕の問いにリユーさんは辛そうに小さく頷く。

：僕の無駄に高い知名度が心底恨めしかった。

この知名度のせいで僕は四六時中周囲から注目されていると言っても過言ではない。

そのせいでリユーさんと不用意に接触すれば、僕と仲のいいエルフとしてリユーさんも注目を集めてしまいその行き着く先はリユーさ

んの正体の露見。

命を落としたはずのリューさんの生存が露見すればどうなるか？

つい最近までリューさんをお尋ね者扱いしていたギルドが対応を迫られる。

リューさんに恨みを抱く商会や闇派閥イッツイルスの残党が復讐に動き出す。

そうなれば：リューさんは以前の辛い環境に逆戻りする。

：リューさんの笑顔は失われる。

それだけは避けるために何としてでも僕は手を打たなければならなかった。

だがその僕自身がリューさんに害をもたらしかねないというのが凄く恨めしかった。

それでも打てる手は必死に考え、僕は一つの答えを導き出したのだ。

「リューさん？僕の本拠と一緒に住むのはどうですか？」

「ベルの本拠に：ですか？」

僕の提案にリューさんは目を丸くする。

これが僕なりに考え出した最善策。

リューさんと一緒にいるのを他の人に見られて問題なら見られない場所に住もうというある意味単純な解決策。

その解決策を提案する理由をもちろん僕はすぐに付け加える。

「そうです！まだ部屋も余っているのでリューさんのお部屋も準備できますし、何なら僕と同じ部屋ということも当然可能です」

「ベツ：ベルと同じ部屋!？」

「さらにリューさんと僕の信頼できる方々しかいない僕の本拠なら二人で一緒にいるのが見られても何の問題ありません。今までのように鍛錬とかで外で待ち合わせ：みたいなのもせずに済みます。リューさんと僕は本拠の中ならいつでもずっと一緒にいられるんです！」

「ベルと：ずっと一緒……」

「どうですか？リューさんは今日から僕の本拠と一緒に同居するんです。『豊穰の女主人』には後で僕が連絡しておきますから、取り敢えず



今日僕の本拠に来ませんか？」

僕の説得にリユーさんは表情を蕩けさせる。リユーさんが僕の提案に乗ってくれると確信しつつ僕はリユーさんの言葉を待つ。

要はこの提案はリユーさんを一人にしないという僕の約束とリユーさん自身の願いに沿った提案。

そして本当は別の意図もあるが、僕はあえて口にしない。

リユーさんの表情から察するにリユーさんは僕の提案を受け入れてくれる。そう確信していたが…

「いえ…申し訳ありませんが、お断りせざるを得ません…」

…あ…れ？

リユーさんは蕩けた表情を一変させて悲しげに目を伏せつつそう言う。僕は完全に想定外の反応に言葉が出てこない。

僕のシヨックを受けた表情を見てかりリユーさんは少し慌てて付け足す。

「あの…！決してベルと一緒に暮らすのが嫌な訳ではないのです！ただ…」

「ただ？」

リユーさんが言い訳のように付け加えようとするのでついつい若干食い気味に僕は聞き返してしまう。

が、僕は大事なことをいくつも見落としていることを気付かされることになる…

「ただ…私とベルが恋人になったことをベルのファミリアの方々にお伝えしていないので、いきなり移り住むとお伝えすれば多大なご迷惑をお掛けしてしまいそうです…」

「…あ」

…確かにそう…だ。

神様とかリリが簡単には納得してくれなさそう…そしてその口論をリユーさんに聞かせてしまうと、リユーさんが一緒に住みたくなないと考えてしまいそうなだけでなくリユーさんを苦しめてしまう結果

に終わる…

ファミリアのみんなにリユースさんと僕が恋人同士になっっていないことを伝えなかったことが早々に問題として露見した瞬間であった。ただリユースさんが述べたのはそれだけではなかった。

「それに…私はまだ『豊穰の女主人』の店員ですので勝手に辞めることはできません。…ベルと一緒に暮らせないのは非常に心苦しいですが…私は『豊穰の女主人』に戻ります」

「でも『豊穰の女主人』にはたくさん冒険者の方が来ますし、普通に店員をして顔を見せているとまずいのでは…」

「そこは恐らく問題ないかと。ミア母さんがいますので」  
「あっ…はい」

リユースさんが『豊穰の女主人』に帰ると言ったことに対してリユースさんの安全面で反対しようとしたものの、『ミアさん』の名前が出された瞬間に僕はあっさり論破されてしまう。

…確かにあのミアさんがいる時点で僕の本拠よりも安全な…気がしてくる…

ただその安全はリユースさんの身体的面の話であって。

リユースさんの精神的な面で安全かは話が別で。

リユースさんの態度に異変が生じ始めた『あの時』を考えれば、僕は『豊穰の女主人』に戻ることを反対し続けずにはいられなかった。

「でもリユースさん…？やっぱ僕の本拠に来ませんか？僕が絶対すぐに話を通してリユースさんと一緒に住めるように手配しますし…」

「ベル。それはまだ無理です。私には『豊穰の女主人』で解決しないといけないことがあります。…それが解決できるまでは私はベルと共に暮らせません。…ベルは二人で暮らすことが如何に危険か理解しています。…にも関わらずその危険を犯す手段を敢えて取ろうとしています…これは恐らく私が『豊穰の女主人』で解決しようとしていることが何か察しているからではないですか？」

「…そうです」

…リユースさんの言う通り僕には分かっている。

リユースさんの態度になぜ異変が生じ、リユースさんがなぜ『豊穰の女

主人』に戻ることにこだわっているのか分かっている。

それは明らかにシルさんがリユーさんの耳元で何か呟いたのが原因であることが。

何をシルさんが言ったのかは分からない。

だがその言葉の影響でリユーさんが考え込むようになったのは明らか。

：問題がない訳がない。

リユーさんとシルさんが向き合えば、『何か』が起こってしまう。

取り返しのつかない『何か』が。

だから僕は一時的でもなんでもリユーさんに僕の本拠に住んでもらい、シルさんと距離を取ってもらおうと考えた。

『何か』が起こってからでは遅い。

だけど…

「ベル？心配は一切ありません。何があろうと私のベルへの愛は変わりません。だから何の心配もなく私を送り出してください。私は迷惑をかけることなくベルと共に暮らすことができる環境をまず整えたいのです。私の考えは分かかって頂けますか？」

「…もちろん…です」

「ならば二人で一つずつ問題を解決していきましょう。そうすれば私達の前に立ち塞がる苦難を乗り越えることができます。急ぐ必要はありません。一つ一つ確実に解決していくべきです。私達には時間はいくらでもあります。だから危険を犯してでも一緒に暮らすのは策として望ましくありません。…もちろんベルと一緒に暮らしたいのは山々ですが…」

リユーさんは僕の手を包み込む力を強くしつつ言葉を紡いでいく。僕と一緒に暮らせないことに口惜しさを隠し切れていない様子がありありと分かるからこそ僕はリユーさんの考えを尊重しなければならなかった。

「…リユーさんのお気持ちは重々理解しています。…分かりました。ひ

とまずリユーさんは『豊穡の女主人』に戻るといふことにしましょう。ただ一応僕達がお付き合いを始めたことはみんなにお伝えして、いつでも一緒に暮らせるように話を通しておきますが問題ないですか?」「ええ。そういう形でお願いします。もし私からの説明が必要であれば、いつでもお伝えください」

「分かりました。…じゃあ…取り敢えず決めることはこれくらいですね?そろそろ起きる準備しますか?」

「そうですね…すっかり外も明るくなってきてますから」

そうしてリユーさんと僕の繋がれていた手は離れた。

リユーさんの考えを尊重したいと考える以上僕は仲間の方達の正義を引き継ぎシルさんと向き合うことに反対する訳にはいかない。

だが…リユーさんに『何か』を引き寄せてしまうのではないか…? そう思わずにはいられない。

ただでさえリユーさんの立場は不安定なものなのに、である。

不安をどうしても拭いきれない中、僕とリユーさんは退院への最後の準備を進めることになった。

## 同じ希望を宿す親友へ

日は昇り、辺りは明るい光に照らされる昼時。

私は退院を済ませた後ベルと別れ、久方ぶりに『豊穰の女主人』に帰った。

だが昼時というタイミングが悪く『豊穰の女主人』は昼の開店に向けて準備で忙しい。

結局派手な出迎えを受けることなく今は私が部屋を借り受けている離れへと足を運んだ。

離れはほぼ無人。

ここには火の光もあまり差し込まずぼんやりと暗い。

そう感じるのは私自身の心に影が差しているからかもしれない。

それはきつと今から私がしようとしていることのせいなのは間違いない。

『豊穰の女主人』で働く同僚達に帰還を告げることなく真っ先に離れに来たのには理由がある。

そして同僚達の出迎えは受けなかったが、誰の出迎えもなかったというのは嘘。

私の帰還を待っていたかのように離れの外に立っていたミア母さんと一言だけ言葉を交わしていた。

それはシルの居場所に関して。

シルはまだ出勤せず自室にいる。

そして他の同僚達は全員既に働きに出ている。

そうミア母さんは言うのと、すぐに調理場へと戻っていった。

目の前にそびえ立っていた離れに用意されたのは私とシルしかない状況。

…まるでミア母さんとシルに凶られたかのような状況。

これは二人による意思表示に他ならなかった。

ベルとの関係についてシルと決着を付けるように、と。

私は胸元に手を当てて小さく息を吐く。

：今こうして過去を振り返っているのも躊躇の現れ。

離れの前で逡巡した流れと同じ流れを今私はシルの部屋の前で繰り返している。

私はシルと向き合うのがはつきり言って怖かった。

ベルとのことを話すのに『覚悟』を求めたシルが怖かった。

：『覚悟』を求めた理由など今更考える必要もない。

【深層】では忘れていた。

ベルの温もりに溺れ、正義希望を得られた喜びに身を浸していた私は思  
い出せなかった。

だが危機を乗り越えた今では目を背けることさえできない事実が  
横たわる。

シルもまた私と正義希望を抱いていたということベルへの愛という  
正義希望を。

：再び胸元に手を当てる。

心臓の鼓動早くなるばかり。

シルは私の親友で。

ベルは私の恋人で。

シルは私の恋人を愛している方で。

ベルは私の親友の愛する方で。

今顔を合わせて正面から向き合えば『何か』を失う。私にとって何  
物にも替え難い『何か』を。

退院するまでの間ひたすら悩んでいた。

それこそベルが懸念した私の身の置き場などよりもずっと悩んで  
いた。

日陰者で生きるのはもう慣れている。だからそれはいい。

だが私は尊敬し恩を授かり心を救ってくださった親友との関係が

壊れることは心の底から怖かった。

かと言つて唯一無二の正義<sup>希望</sup>を宿してしまった私はもう引けない。引けば親友との関係の代わりに全てが壊れる。

私の心も。

私の生きる意味も。

私の正義<sup>希望</sup>も。

全てが壊れる。

だからこそ判断がすぐに下せなかった。

そしてだからこそ私は正面から向き合う他ないという結論に至つた。

…結局私は下手な言い訳や小細工をするより正面から挑む以外に常に選択肢を持たないようだ。

そう自嘲しつつ私は胸元に手を当てたまま空いたもう一方の手を戸の前にかざす。

…覚悟を決めなさい。リユー・リオン。シルの求める『覚悟』を私はもう既に見出したはず。

そう自身に言い聞かせつつ私は戸を叩く音を響かせる。

そしてゆつくりと喉を震わせた。

「…シル。ただ今戻りました。…少し話をするお時間を頂けませんか？」

??

「お帰り。リユー。完治して何よりだね。あつ…あとお見舞いにあれから行けなくてごめんね！みんな忙しくて…」

私に部屋に入る許可をくださったシルは私が入室すると共に口々にその言葉を並び立てる。

だが私でも気付かないわけがなかった。

私のことを心配しているような言葉や陽気な声色とは裏腹にその視線がとても冷え切って私を射すくめているかのようなことを。

今浮かんでいる微笑みがただの作り物でしかないことを。

だから私は早々にシルの上辺だけの言葉を遮った。

「…シル。私のことなどよりベルのことが…話したいのではないですか？」

そう静かに尋ねる私を見て、シルは即座に言葉を切った。

そしてその瞬間シルの表情からは笑みが消えた。

「…そうだね。変に取り繕っても時間の無駄。話は単純明快に…そうリユーなら言うのかな？」

「…それが私達にとって望ましい手法ならば」

シルは感情の消えた表情を浮かべて私に尋ねてくる。そんなシルに私は思わず一瞬だけ言葉を詰まらせてしまう。

…覚悟していたとはいえ、実際に相対すると私の心は揺らぎ始めていた。

そんな私の心を見透かしてか見透かさずかシルはすかさず言葉を重ねてくる。

「じゃありユーは私達にとってベルさんのことをリユーが私に話すのが望ましいって思ってるんだ。じゃあ遠慮なく聞こうかな。私前お見舞いに行った時にリユーに伝えておいたもんね？ゆつくりベルさんのことを聞かせてって。話す覚悟をしておいてって」

「…その通りです。全て洗いざらいお話ししましょう」

「そう。じゃありユーの話したい順でいいから私に話せる範囲で全て…」

私はシルの要望に応じた。

それは元より覚悟の上。

そして今から取る私の行動もまたその要望に応じる上で必要なものであった。

「…いきなり私の前に跪くというのは一体どういうつもりなのかな？リユー？」

「…私の覚悟を示す上で必要だと思ったまでのことです」



私はシルの言葉が終わる前に静かに跪いていた。  
シルに見下ろされる私。

シルを見上げる私。

この状況こそが私とシルが話す上で必要な状況だと思ったから。  
非があるのは私であり、これから私を責めるであろうシルには何ら  
非はないと思っただから。

この状況がシルの言葉を全面的に受け止める…そんな覚悟を示す  
ことができると思っただから。

ただ私の覚悟を示すのはそれだけではなかった。

私はシルに見下ろされる中自らの懐に手を差し込み、あるものを取り出す。

そうして取り出したあるものをシルに捧げた。

「…本当にどういふつもりなの？リユー？私にこの小太刀を受け取れ  
と言うの？それは一体どういう意味で？」

「その小太刀の銘は双葉。私の仲間の大切な遺品です。私の意図は  
追ってお話します。今はただお受け取りを」

「…ふーん。言われなくとも何となく察するけど、リユーの説明を待  
つことにするね。じゃあ話して？リユー？」

私がシルに捧げたのは双葉。

…武器を捧げる理由など説明するまでもなくシルも察していると  
はつきり言った。

生殺与奪の権をシルに捧げる。そういうことだ。

私はそういう形でしかシルに覚悟を示せなかった。

私はそこまでの覚悟をしなければ向き合うことさえもできない。  
そう結論付けていた。

シルは双葉を等閑に受け取ると、私に説明を催促してくる。

…それに私は顔を一瞬だけ床に落とし一息置く。そしてシルを改  
めて見上げ、小さく息を吐くとその催促に応じた。

「…シルもご存知のことだと思います。そして私は今更言い逃れをす

るつもりもありません。…シルがベルのことを愛していると知りながら、私はベルの恋人になりました」

「…うん。知ってる。それで？」

「…私はこれまでシルのベルへの恋を応援していました。それは同僚達にもシル自身にも周知の事実。そして私自身そのつもりでした。私はベルはシルの伴侶になる。そう思っていました。…ですが私の心はそうなることを許さなかった。これはシルへの裏切りです。恩を仇で返す卑劣な所業です。私は親友を裏切り、恩人に仇を成した。その罪から逃れることは到底できません」

「そう…なら…」

私が紡ぐのは罪の告白。

私がシルに対してどんな仕打ちを働いたか。

私は一切の粉飾もなく淡々と私の成したことを言葉にしていく。

そして辿り着いたのは罪から逃れられないという言葉。

その言葉にシルは表情を変えることなく行動で応じた。

小さな金属音を響かせながら。

「今ここでリユーを私からベルさんを奪った罪で裁いてもいいということ？」

引き抜かれた双葉が私の眼前に突き付けられる。

そうされることは最初から覚悟の上。

双葉を渡した時点からこうなる可能性は折込済み。

今度ばかりは私も動じなかった。

私は剣先を眼前に突きつけられながらもシルに視線をぶつけ、シルの質問に答えた。

「ええ。…もしシルがそれを望むならば」

「ふーん。私が望めば、リユーの命を奪ってもいいんだあ…すごい覚悟だねえ…なんて私が納得すると思った？何？リユーはそれだけの覚悟があるなら、私は諦められるの？仕方ないね…って私がベルさんを諦めると思った？そんなに甘くないよ？私？そこまでお人好しで

も善人でもない」

シルは私に剣先を向けたまま言葉を連ねる。

私はシルの責を甘んじて受け入れなければならない立場である。私がシルを今苦しめているのだから。

だがそう自分を抑える私でもシルの次の一言には感情を抑えられなかった。

「何？ベルさんを諦めることがそんな簡単なことだとリユーは思っているの？」

違う。

そんな訳がないからこそ私は今こうして私なりに覚悟を示している。

なのにどうしてシルはその私の意図を汲んでくれない？

気付けば声を荒らげ私は即座にシルの言葉に応じていた。

「簡単なことなどとは思ってませんっっ!!私はベルとのが重大なことだと思えばこそです!!」

唐突な私の感情の昂りにシルは少しだけ驚いた様子。だがすぐに表情は無となり再び責の言葉を紡ぐ。

「…じゃありユーは一体何を考えてこんなことをしてるの？説明してみてよ。まあ私が納得できるとは全く思えないけどね」

「…私はシルの立場に立って考えてみました。私の仕打ちにシルならどう考え、シルは何を私にしようとするか考えてみました」

「その答えがこれ…リユーと私が逆の立場ならリユーは私を殺す…そう考えたの？」

「…少なくともそれが答えの一つとなり得ると考えました。ですが…私はいくつかの答えを見つけることはできても一つの答えを見出すことができませんでした。私がシルに双葉を渡したのはその答えを例えシルが選ぶとしても否定する権利はない…そういった意味合い

でしかありません」

私の言葉にシルは目を細める。

私は確かに双葉をシルに渡した。

だがこれは『殺してくれ。親友を裏切った罪を裁いてくれ』という意味ではない。

私にとってそれは確実に選び得る答えではなかったから。

私とシルが逆の立場だった場合私はシルの命を奪おうという結論に確実に至るかは分からなかったから。

そう。

私の真の答えは…

「私はシルの立場に立つてもどうするか分かりませんでした。よってシルが今何を考え、私に何をしたいのかは全く分かりません。そのため私がシルに何をすればいいのかもまた分かりません」

「…は？」

私が出した答えにシルはポカンとする。

…それもそうかもしれない。

私は結局の所シルとどう向き合うか結論を導けていないままシルと向き合おうとしているのだから。

私は今この瞬間の私とシルの判断に全てを委ねようとしか考えてこなかったのである。

長い間悩み続け、ベルに心配までさせたにも関わらず、である。

だが私にはそれ以外の選択を持てなかった。

「私はシルの命を奪ってでもベルと結ばれたいと思う衝動に駆られる可能性もあると思いました。ベルと結ばれないことに絶望して命を絶つ可能性もあると思いました。ベルとシルが結ばれるのを見届ける可能性もあると思いました。ベルとシルを引き裂くために手を打つ可能性もあると思いました。私の中で様々な可能性が生まれたのです。恐らくそれはシルも同じでは？」

「…否定はしない…かな？」

「ならばその可能性を最初から拒絶するべきではないと考えました。私はシルにベルとの仲を応援して欲しいとは言いません。私はシルに私を恨むなとも言いません。シルの思うようになさってください。私はシルがどのように思おうと止める資格はありません」

「…つまり？私の判断にリユーは全てを委ねる…ということ？私がリユーの命を奪ってでもベルさんと結ばれたいと思えば、命を奪われてもいい。私がリユーにベルさんと別れて欲しいと言ったら別れてもいい。そう言いたいのか？」

シルはポカンとした表情を打ち消すと私の考えを汲み取り、私の考えの要約の確認をしてくる。

シルの思うようにすれば良い。

それは私の考えよりもシルの考えの方が優先。そうとも取れる。シルの言う通りだ。

だが私の考えはそうではなかった。

「それは少々違います。確かに私はシルの考えを尊重します。ですが私自身の考えを無碍にするとは言っていません。私は私の考えに基づいてシルの考えに向き合います。ただ私はそのシルが出した答えにどう反応するか私自身のことなのに分かりません」

「…」  
…私の曖昧な態度にシルはもう言葉も出てこないようだ。

とは言っても表情は未だ無のまま。シルは私に双葉の剣先を突き付けたまま。

少なくとも私の話に異論はないと解釈した私は、シルから視線を背けず続けた。

「もしシルが私の命を奪おうとすればどうするか…潔く親友を裏切った罪を償うかもしれない。罪を償うことよりも命を守ることが優先するかもしれない。もしシルがベルへの想いを諦めると言えばどうするか…罪悪感でベルから離れようとするかもしれない。気にもせずベルのそばに続けるかもしれない。私は仮にシルが答えを出したとしても自らの答えがどう出るかその時が来るまで全く分かりません」

「…要は今のリユーは私とどう向き合うか全く答えが出せてないということなんだね?」

「…恥ずかしながらそういうことです」

シルの忌憚のない指摘に私は素直に頷く。

何の答えも出さずに親友と向き合う…これは間違いなく不遜なこと。

裏切りを何とも思っていないかのように思われても仕方ない行い。

私は確かにシルとの向き合い方を見出せていなかった。

だがまだ私の話は終わってはいなかった。

「ただ…こんな愚かな私でも確実に分かることはあります」

「確実に分かること?それは何?」

「可能ならば恋人であるベルも親友であるシルも失いたくないということですよ」

私は率直にそう告げる。

…これが本音だった。

これが私が答えを見出せない理由だった。

そしてこれが私の考えが定まらず歪んでいる理由だった。

そしてその歪みにシルが気付かぬはずもなく…

「…ふふ。それ矛盾してるって分かってる?私もベルさんもそばに置きたいってさ。今までの話から考えると、無理な可能性が高いんじゃない?私の考えを尊重するとリユーが言うなら尚更さ」

シルは鼻で笑いつつそう言う。

…シルの言う通りだ。シルの考えを尊重するならば、ベルとシル二人ともを失わないというのは難題だ。

だが…

「そうかもしれません。ですが今の私はベルとの約束がある以上ベルへの愛を決して捨てられません。仮に死に至るとしても…私はベルへの愛を貫くつもりです」

「ベルさんへの愛ねえ…リユーがそんなこと恥ずかしげもなくサラリ

と言うのは正直驚き。それと同時にそんな風に意志が固いなら私の考えを尊重するのは無理だと思うけど？」

「それでもありません。私の中ではシルへの尊敬の念は変わっておらずシルの考えを尊重すべきという思いは強いですし、私の心を小さくない罪悪感が巢食っているのもまた事実。なので…」

私は改めてシルの目を見る。

決して物怖じせず目を逸らさぬように。

私はシルを見上げる。

見上げているからと媚びるような視線でも懇願するような視線でもなく。

シルと対等に向き合うべく迷いのない堂々とした視線をシルに向ける。

あとは私の直感を信じ、その直感がシルにどのような反応をするかに委ねる他ない。

私は改めて私なりにシルと向き合う覚悟を示した。

そんな私にシルは薄ら笑いを消す。

シルもまた私を見下ろし、私の瞳をじっと見つめる。

そうして絡み合う私とシルの視線。

一瞬の沈黙の後。

私ははつきりと宣言した。

「シル。私達の今後の関係を決めるため…今ここで決着を付けましょう。シルはシルのお心のままに。私は私の心に従う。それが最善の解決策。長話も長考も不要です。私もシルも今すぐに決断を下しましょう」

「やっぱリリユーは何があってもリリユーだね…どこまでも真っ直ぐ…どんな苦難であろうと正面から突っ込む…私がどんな反応を示すかわかりもしないのに、先手を打つのを許すなんてリリユーはお馬鹿さんなんじゃないのかな？仮にリリユーがどんなに強い冒険者でも目の前に突き付けられた剣先は一瞬でも迷えば反応できないんじゃないか

な？」

「…その一瞬の迷いこそがベルへの愛よりもシルへの罪悪感が優ったという証拠となり得るでしょう。逆に私がシルの動きに即座に反応できれば、ベルへの愛が優ったという証拠になります。確かに愚かかもしれません、シルの考えを尊重するならば私の命を奪える環境を整える必要があるかと思えます。何よりシルがそのように動くという確証もまたないのではないですか？」

「…それもそうかあ…」

シルはそう言うと言を閉じて大きく溜息を吐く。

それが何を意味するのかは分からない。

だが私が決断を求めた以上シルはその目が閉じられている間に恐らく決断を下す。

シルがどのような決断を下すか。

そしてそのシルの決断にどのように私が応じるか。

どちらも私には分からない。

だから如何様にも対応できるように私自身決断を下せるよう気を引き締めた。

そしてシルは目を閉じたまま静かに呟く。

「じゃあ…私の答えを教えるね…」

シルの言葉に私は思わず固唾を呑む。

一秒一秒が永遠かのように思えるような心地でシルの続きの言葉を待つ私。

そんな私にシルは間を置いてから続きの言葉を紡いだ。

「…と言いたい所なんだけど、残念ながらそれは無理みたい」

「…えっ？」

シルは目を閉じたままそう言う。

シルの出す答えを教えられない？

それはどういう意味か？

私はその言葉の意味が理解できずシルを凝視する。

だがシルは目を開けようともせず表情を変えもせずその言葉の意味をその表情から測ることはできない。



私はシルの思わぬ反応に困惑し、状況を測りきれない。

だがそのシルの言葉の意味は次の瞬間には分かった。

シルも私も言葉を発さず静寂を保っていたシルの部屋に響き始める足音。

その足音は段々と大きくなり、近づいてきているかのよう。

：誰かがこの部屋に近づいてきている？

そう結論付けた時には既に部屋の戸が勢いよく開かれていた。

それも私の心を揺さぶる声が張り上げられると共に。

「リ्यूさんっっ!!」

「ベツ…ベル!?!」

唐突に姿を現したのは自身の本拠に帰ったはずだったベル。

ベルはシルの前に跪く私とその私に剣を突き付ける歪な状況を目の当たりにして。

その状況にベルは瞬時に眈を決してしまつて。

そんなベルを私は驚きと共に迎え、シルはゆつくりと目を見開いたものの表情は無のままベルに視線を移す。

シルはシルの考えに従い、私は私の考えに従う：そんな私なりに最善の解決策を相互に受け入れた直後に唐突に訪れたベルの介入。

：ベルの介入がようやく動き出したかに見えたシルと私の関係の決着に思わぬ横槍を入れるのは自明なことだった。

## 親友と恋人の狭間で

「…一体どういう状況ですか？リユースさん？シルさん？」

殺意も籠っているのではと思えてしまうほどの鋭い視線を私とシルに突き立てるベル。

ベルの言う状況とは、私がシルの前に跪きシルがその私に剣を突き付けているという状況。

周囲から、ベルから見ればあまりに異常な状況。

ベルが不快感を露わにし、説明を求めてくるのは当然ではあったのかも知れない。

「…どうとは一体どういうこと？ベルさん？」

シルはベルから視線を外し、ベルの剣幕にも動ぜず平然とベルに聞き返す。

だがそのシルの態度はベルの逆鱗に触れた。

「何を意味の分からないことを言ってるんですか!?シルさんがリユースさんに剣先を向けていることがあくまで何らおかしくないことだとも言うんですか？ふざけないでください!!今すぐその剣を鞘に戻してください!」

ベルはそう声を荒らげる。

もしシルがベルの求めに応じなければ、シルから無理矢理でも双葉を奪いとらんとしそうなほどの勢いだ。

私の安全を気にかけてのことだろう。

私の身を守るためだろう。

だが…

「ねえ？リユース？ベルさんはこう言ってるけど、私はどうすればいいかな？」

「そんなことっ…!」

ベルの求めに対し、シルはベルに答えるのではなく私にシルがどうすべきかを問う。

それにベルは『そんなこと言うまでもない。』と言いかける。

その続きには恐らく『僕の求め通りにすべきです』。

そんな言葉が続くのかもしれない。

だが私はそのベルの紡ぎかけた言葉を遮っていた。

「…ベル」

「なっ…なんでしよう!?!リユースさん!?!」

私が呼んだベルの名前にベルは身を乗り出さんばかりの勢いで応じてくる。

恐らくベルは私の安全を確保せんと逸っているのだろう。

恐らくベルはこの状況に冷静さを欠きつつあるのだろう。

なぜならなぜこのような状況になったかの原因も聞きもせずこの状況を『異常』だと即断しているから。

なぜならこの状況が私とシルの意によって生み出された可能性を考慮しようとしてもしないのだから。

だから私はそんなベルの浅慮を断じなければならぬと思った。

私とシルの今後の関係に決着を付けるための機会を潰すかのような愚行が許せなかったから。

ベルの介入で一時凌ぎをしても私とシルの関係は本当に壊れてしまっただけだと私は直感で分かっていたから。

私はベルから視線を背け、ベルに言い放った。

ベルの浅慮に対する抑えきれぬ怒りと共に。

「控えなさい。ベル。これは何らおかしくないことです。これは私とシルの合意の上で生み出された状況。ベルの介入は不要です」

「なっ…何を言っているんですか!?!リユースさん!?!この状況を僕が見過ごせるわけ…」

私の反応が完全に想定外だったとばかりに動揺を見せるベル。そう。

ベルは恐らくこの状況を見過ごせない。

私が傷つけられようとしていること自体も本来親友であるはずの私とシルがこんな状況にあることも見過ごせない。

だがベルはもつとも肝心なことを見過ごしていた。

「ベル？まずなぜここにいるのですか？」

「…え？それはミアさんにリユーさんとするさんの居場所を聞いて…」

「違う。そんなことを聞いているのではない。なぜベルの本拠に帰っていないのかと聞いているのです。ベルと別れてから時がほとんど経っていない以上ベルは本拠に戻らず直接ここに来た…違いますか？」

「…その…通りです…」

「なぜです？私とベルの話ではベルはファミリアの方々に私とこの話を話すことが急務ということになっていました。そして私もまた『豊穣の女主人』に戻って、解決しなければならぬことがあると言いました。それがシルとこのことです。シルとこれからどのように向き合うか決着を付けることです。私は今まさにそのすべきと事前に話していたことを解決しようとしています。その結果辿り着いたのがこの状況。ただの解決に至るまでの過程であり、『異常』などではない。…そもそもベルはなぜ自らの役割を放棄してここに来たのですか？」

「それは…リユーさんのことが…心配だからで…」

「それが自らの役割よりも重要だったと？私が解決できぬとでも？解決できずにベルへの愛とベルの信頼を裏切るとでも？私はその程度しか信頼されていなかったのですか？」

矢継ぎ早に吐き出される詰問と共に噴き出すのは怒りと失望。  
今ここにベルがいることの意味。

それはファミリアの方々へ私達の関係を説明し認めてもらうように尽力する役割を先送りにしたということ。

私は即座にシルへの説明を果たし私とシルとベルの関係の更新のために覚悟を決めたにも関わらず。

それは私が『豊穰の女主人』における問題を解決できないと思われたということ。

即ち私はベルに信じて任せてもらえなかったのである。

ベルがこの場にいることが示す二つの意味は私に自制を忘れさせた。

その二つの意味はベルの私に向ける愛と信頼が私の思い込んでいたよりも軽かったと証明しているに他ならないと思えたから。

だから私はベルの顔を見る気にもならず嘔き出す失望を垂れ流し続けた。

「これはシルと私の問題です。ベルが介入しても解決するどころか話が歪むだけ。今すぐ立ち去りなさい。そしてベルはベルの役割を果たしなさい」

「でもっ……！」

「これ以上時間を無駄にしないでください。ベル。今私とベルが話している時間は明らかに無駄です。私とシルのために全くなならない。ベルが早急にこの場を立ち去ることこそ私とシルのためになる。そんなことも理解できないのですか？」

「ぐっ……！」

ベルはもはや反論の言葉も紡げない。

そしてそんなベルに私は視線を向けさえない。

一瞬の静寂が部屋に訪れた末にベルは叫んだ。

「…分かりました。もうリユーさんの勝手にしてください！僕はもう知りません！」

捨て台詞と戸が勢いよく閉まる音だけが残される。

ようやくシルとの決着に話を戻せる。

そう息を吐き、ひとまず少しずつ落ち着きを取り戻し始めた私にシルは呟いた。

そしてその呟きは…未だ怒りを収められていない私に冷水を浴び

せるものであった。

「…いいの？ベルさんどう考えても怒っちゃったよ？それこそリユーのことを嫌いになるくらい」

「…え？」

シルの指摘に急速に怒りが消えていく私。

そして怒りに代わって私の頭を占め始めたのは怒りに我を忘れていてすっかり鳴りを潜めていた恐怖であった。

「…あえ？わたつ…私は…ベルに…ベルに何を言った？」

ベルを罵倒した。

ベルの心配など不要でベルに目の前から消えるように宣告した。

ベルとの会話自体が無駄だと吐いた。

私は…なんてことをしたのだ…

「…そんなショックを受けるくらいならベルさんの言葉を受け入れれば良かったのに…まあリユーがそれだけ私のことを大事に思ってるって分かったのは決して悪いことだとは思わないけど。リユーはベルさんに解決してもらおうじゃなくて自分の力で納得する形で解決したかったんでしょ？」

「そうっ…ですがっ…」

ベルを傷つけてしまつたらなんの意味もない。

私は自らの短気を呪った。

私はどうしてこうも怒りに我を忘れやすいのか…

私はこんな愚かな私自身を許せなくなる。

そしてそんな私の心境を見透かしたようにシルは言った。

「確かにね。今のは私はベルさんが悪いと思う。ベルさんはリユーの言っただけのことから考えると、全く期待に沿ってなかった。ベルさんはリユーが如何なる形であれ私とのかたきをきちんとして解決するのを黙って待っていた方が良かった。そうじゃないとリユーは納得できない。」

そして私も納得できない。だってリユウの言う通りこれはリユウと私の問題。二人で解決できないと絶対後悔する。でもベルさんに怒りに任せて追い払うのは流石にまずかったと思う。取り敢えずベルさんとのことは後でゆっくり向き合うとして…リユウ？今更自分の作った現実に向き合ってショックなのは分かるけど私の話を聞いて？」

放心しかける私を前にシルは剣先を私の目の前から動かすことなくしゃがみ込むと、私の目をじっと見つめる。

それに私も応えぬ訳にもいかず動揺を何とか押さえ込んでシルの目を見つめ返した。

「じゃあベルさんのせいで話そびれた答えを話すね？心と体の準備は大丈夫？」

「…少々時間をくださいませんか？」

「もちろん。リユウの準備が整うまで待つよ？だってリユウと私のこれからが本当の意味で決まるんだもん。リユウが正面から向き合うと決めたなら私も卑怯な真似はできないよね」

「ありがとう…シル」

シルから許可をもらい私はひとまずベルとのことは頭から消し去り、何度も深呼吸を重ねて気持ちを整える。

…今だけはベルに犯した愚行を忘れなければ、シルと向き合うことさえ出来なくなる。

それではベルに対して罪を犯してまでしてシルとの決着を追い求めた意味がなくなる。

なんとか落ち着きを取り戻した私はコクリと頷いてシルに準備が整ったことを伝えた。

それを見て、シルは自身の覚悟を決めるかのように小さく息を吐く。

それと同時に振り上げられる双葉。

…やはり私をシルは許せないのか？

時間が引き延ばされているような感覚を覚えながら私はそうぼんやりと考える。

そうして私の視界にゆっくりと振り下ろされていく双葉が映る。

…反射的に私は双葉を避けるか？

…その刃を自らの身に受け入れるか？

その判断を私は直感に任せる。

私自身瞬時の思考ではその直感がどう出るか分からなかった。

そして双葉を見上げていた視界から双葉が姿を消した時。

その直感の答えは出た。

感じるのは痛みではなかった。

感じるのは避けた時に生じる僅かな風でもなかった。

代わって私の身に届いたのはガキツという鈍い音だった。

「…はい。これでもう私の知るリユーはいなくなりました」

シルのその静かな呟きを聞くと共に気付いたのは、シルが双葉を振り下ろしたのは私の身体ではなく床板だったという事実。

双葉は私とシルの間に突き立てられていたのだ。

そしてシルの言う『私の知るリユーはいなくなりました』というのは…

「…命を奪うのに代わって私とシルの間に双葉を突き立てた…これ私とシルの関係は終わり。私はもうあなたの知る親友ではない…という理解で良いのでしょうか？」

私はシルの反応をこう解釈した。

だがその解釈にシルは首を振る。

「そうじゃないよ。確かに今までの関係を続けるのは無理だと思っただ。でも私はこれから新しい関係を築いていけたらなって思ってる。『親友』として、ね？だって私はリユーの口から私のことを『親友』だっと思ってくれているのが分かったのが嬉しいから。そしてベルさんと同じくらい私のことを大事に思ってくれてるのが分かったから。



…とは言ってもリユー的にはかなり不本意だったかもだけど」

「えつと…ああ…それは…つまり…私はシルの親友のままでもいい…と？」

「そうだよ。リユーと私の関係をこれからは本当の意味で『親友』にしていけたらなって思ってる。その意味がリユーには分かる？」

シルの問いに私は考える。

…つまり私とシルは本当の意味で『親友』では今までなかった…と  
いうことか？

私としては密かにシルをそう見做していたが、シルとしては違った  
…と？

そう考え込むが、私はシルの意図までは凶れず首を傾げることで答  
えとする他なかった。

「リユーってさ。ずっと前に私に恩を返すために『豊穣の女主人』に残  
るって言ったじゃん？そしてリユーはずっと私のわがままを聞いて  
くれた。私の要望でベルさんを何度も助けてくれた。でもこれって  
友達としてどうなんだろう？私はいつもリユーにわがままを聞いて  
もらってる感じでちよつと不本意だったかな」

「…とは言え私はシルに私の心を苦しみから救ってくれた恩が…」

「だからそういう恩とかで結ばれた関係は終わりってこと。リユーは  
自分の意志で行動すればいい。ベルさんを助けるのにも私のため  
じゃなくてリユー自身のためにすればいい。これからは私のことは  
強く意識せずに自分の意志に従って？リユー？私は今回私に話に  
来てくれたことがその第一歩だと考えてる。私は私の意志に従って、  
リユーはリユーの意志に従う。私の意志に従う必要なんて全くない  
んだから。そうでしょ？リユー？」

「それも…そうです」

…シルの指摘は的確だった。

これまで私はシルへの恩返しを『豊穣の女主人』に留まる理由とし、  
ベルを助けるのもシルのためを理由としてきた。

だがベルを助けることの意味が変わった瞬間が確かに存在した。

シルのために助けるのではなく私自身のために変わった瞬間が

あつた。

それは【深層】でのこと。

：今考えればベルへの思いからシルのことが完全に抜け落ちるなど本来は考えられない。あの時の私はシルのことをすっかり忘れ、私自身のためのみに行動した。

そして想いを告げることを決意し、ベルと結ばれた。明らかにあの時の私は私自身の抑えられない意志に従っていた。

その延長線として私とシルは今こうして向き合い、決着を付けようとしていた。

そんな私の意志の発露をシルは望んでいた：とでも言うのか？

そんな疑問が浮かぶ中シルは続ける。

「それでね？リユー？リユーが私の思いを尊重してくれたように私はリユーの思いを尊重する。だからリユーのベルさんへの愛には一切異を唱えたりなんかしない。私はリユーに幸せになって欲しいと最初から思ってた。私からリユーを奪ったベルさんにはナイフを突き立ててもいいけど、リユーに突き立てようだなんて私は全く思わないよ？」

「え？あ…はあ…それでつまり先程までの言葉は…」

：一瞬間こえた不穏な発言は聞かなかつたことにしよう。

そう心に決めつつテヘツと舌を出して笑ったシルを見て、ぼんやりと察した私は呆れ顔をついつい浮かべてしまう。

もしかして先程までのシルの剣幕は…

「そう。リユーの本心を引き出すための演技。私はリユーとベルさんのことを応援するし、リユーのことをこれっぽっちも恨んでないんだから！全部リユーの本心を引き出すための演技！どう？私中々の演技派でしょ？もしかしたら演劇の役者さんになれるかもーなんて！」

「はは…ははは…そう…だったんですか…」

私はそのシルの言葉に思わず深々と息を吐いてしまった。

先程までのシルの言葉は単なる脅し。本心からではなかつたということになる。

それに思わず安心してしまい、吐息が漏れてしまったのだ。

それくらい私はシルを失うのが怖かった。…つまりはそういうことだ。

…ただ結局シルがベルのことをどう思っていたかは話すことなく私とのことばかり話すので若干の違和感は拭えない。

その違和感を念のため拭おうと尋ねようと口を開きかけた私。

だがその言葉を発する前にシルが言葉を紡ぎ始めていた。

それも先程までの悪戯っ子のような笑みでも感情の起伏のない冷徹な表情でもなく。

その表情は不安と心配で満ちているかのようにだった。

「ただ…ね？リユー？私から言いたいことがある…：かな？」

「…何でしよう？」

シルの表情に私はシルの提案を受け入れずにはいられなかった。

一瞬間を置きながらも私がシルの提案を承諾するとシルは表情を変えぬまま言った。

「…確かにリユーが私と真摯に向き合ってくれたのは嬉しい。命を賭けてでも私との関係に決着を付けたいと思ったんだよね？そして同時にベルさんへの想いの強さも見せてくれた。その想いが見れたからこそ私はリユーの思いを受け入れたというのは少しあるかな。…もしリユーが私とベルさんに生半可な気持ちで向き合っているようだったら正直私はどう反応してたか分からない、ね」

その言葉に私は苦笑いで応じるしかない。…一応は私は最善策を取れた…ということでもいいのだろうか？

…もちろんベルの介入は完全な想定外だからこそ最悪の失敗を犯してしまったのだが…

そう考えると私の気は急速に重くなってくる。

そしてシルが触れ始めたのもまさにベルとのことであつた。

「ただ言えることはね…：安易に命を賭けるのは決断していいことではないってこと。確かにリユーは今までそうやって自分の信じる正義<sup>希望</sup>をそうやって守ってきたのかもしれない。でも本当にその方法でこれからも守れるのかな？そのやり方が誰かを傷つけてしまうこともあ

るんじゃないのかな？」

「…っ。…その通りです。…私はシルと向き合うために命を賭けた結果…ベルに心配をかけ、心配してくださったベルに非道な言葉をぶつけてしまいました…」

「そうだよね。もしベルさんとの愛を重視するなら私を無視しても良かった。それをできないのがリユウの優しさでもある。でもベルさんとの関係という意味ではかなり問題があった。だってもし私はリユウの命を奪おうとしてリユウが私への罪悪感で避けようとしなかったらどうなったの？ベルさんはどんな気持ちになった？リユウは私のことをたくさん気にかけてくれたことの引き換えにベルさんのことを考えられなかった。リユウの正義がどこにあるのか考えれば…その判断は本当に正しかったのかな？」

「…」

返す言葉もなかった。

私は確かにベルに私の今の正義はベルへの愛だと言った。

その正義を最優先するならば私は確かにシルのことを気にかける必要はなかった。

ベルに不安と心配を与える必要など寸分もなかった。

私の判断が間違っていたとは思いたくない。

シルとの友情もまた私にとっては大切であったから。

問いかけるシルも私を非難しているというよりは心配しているようにも見える。

シルがこの指摘を以て何を私に伝えようとしているのか…それが私には分からなかった。

「今は相手が私だったから良かった。でもリユウはもつと難しい選択に迫られることもあるんじゃないのかな？そしてその時リユウに宿る正義以外に気を取られていたら、判断を間違えてしまうかもしれない。…そうならばリユウは確実に後悔することになる。そうならないためにはリユウはリユウに宿る正義以外に気にする必要もないのかもしれない」

「…ベルを愛することだけを気に向け、なりふり構う必要などない…」

と?…流石に人として問題があるのではないですか?…それは…」

「そこはリュウの判断次第、かな?…の前にリュウの今の正義希望はベルさんを愛することなんだーふーん。リュウはもう既になりふり構わなくなりつつあるんじゃないかな?普通人前で愛とか小恥ずかしいことを言ったりしないと思うよ?」

「なっ?!?!しっ…失言です!忘れてください!」

「じゃありユウはベルさんのこと愛してないの?」

「…愛してます」

「じゃあベルさんを愛することはリュウの正義希望で決定だね!」

シルは悪戯つ子のような笑みでそう宣言する。

…私の心の中ではそう思っているとは言え、他人の口から聞かされるのは逃げたくなくなるくらい恥ずかしい。

恥ずかしさから私はシルからとうとう視線を外してしまう。

だが視線を外してもシルがぼそりと漏らした言葉を聞き逃すことはなかった。

「…リュウの正義希望はそれだけじゃないと思うけど…早めに気付いてくれるといいんだけどなあ…」

…私の正義希望はベルを愛することだけではない…?」

そのシルの小言の意味を図りかねた私は考えを巡らそうとする。

だがそれもまたシルの重ねた言葉によって途切れることになった。

「さて…私とリュウは親友のままでもいいよ!…ってことになったからいいとして…問題はリュウがボコボコに論破しちゃったベルさんの方なんだよねー」

「うぐっ…」

シルの言葉によって思い出される思わず忘れなくなる事実。

…つい先程私が引き起こした失敗だとは言えなぜあんなことをしたのか自分でも分からない。

怒りで我を忘れるのがどれだけ恐ろしいのか改めて思い知り、戦々恐々といった気分だ。

そしてシルに言われても私はベルにどのような声をかければいいのかどう謝ればいいのかさえ全く分からない。

なぜならシルとこうして親友のまままでいられるのもシルと覚悟をもって真摯に向き合ったから。

それは私自身の考えとシルの言葉から考えるに确实。

：私はベルの介入が不要でベルの言い分を飲んでいれば取り返しがつかないことになっていたと確信している。

だからこそ尚更ベルにどのような声をかけ、どう謝ればいいかわからない。

早々に息詰まる私の思考。

その思考はベルに嫌われたかもしれないという恐怖で尚更機能不全に陥る。

そんな私にシルはニタニタと笑いながら言った。

「リ्यूー？どう？私に考えがあるんだけど、聞いてみる？」

「何ですか!?!シル!?!」

シルの言葉に飛びつかんばかりに聞き返してしまう私。

考えの行き詰まった私にとってシルのその言葉は救いのようにまですで聞こえていた。

そして一瞬で食いついた私に驚くを見せつつもシルはその『救い』を言葉に変えて私に告げた。

「リ्यूー？ベルさんにお詫びのご飯を作ってあげよう！」

## 焦がす想いと焦げる食材

『豊穣の女主人』閉店後のこと。

シルとの話に決着を付けた私は改めて退院したことを同僚達に伝えることができた。

：以前の私とベルをみんながお見舞いしてきてくれた時に垣間見えた私とシルの間に生まれかけた亀裂のお陰でアーニヤを除いて同僚達は異様なまでによそよそしかつた。

：これは正直私の責任と言わざるを得ないかもしれない。

なぜなら同僚達の目から見れば、明らかに私のベルへの態度が豹変したように見えるからだ。

だがシルの気遣いはそのよそよそしさを吹き飛ばしてくれた。

シルはこれまで通り(?) 私に抱き着き、私達の距離感が変わっていないことを明確に示してくれたのだ。

その気遣いに私は感謝せずにはいられない。

よってその感謝の証として私なりに行動で示そうと思った。

それは別に大したことはない。

これまではシルに抱き着かれて振り回され顔をスリスリされたりと、されるがままだった。

それがシルが私とシルの関係が一方的なもので友人関係として違和感を抱いていた理由かもしれないと思った。

シルが私との距離を縮めようと求めてくれるなら、私もまた積極的にシルとの距離を縮めるべきだと思った。

そうやって互いの温もりを交換して。

そうやって互いの友情を確かめ合う。

ベルの時と大差はない。

ベルもシルも私の温もりことを求めてくれるならば、私もまたベルとシルの温もり求めよう、と。

そう考えた結果私は抱き着いてくるシルの腰に手を添え、抱き寄せてみることにした。

そうすればシルとの距離がさらに縮まるのでは?と思ったから。

ベルにも同じことをしたから問題ないだろうと私は思った。

：だが周囲の反応はなぜか問題なくはいかなかった。

相変わらず状況を把握できていない様子のアーニヤはともかく：ポカンと言葉を失うルノアに何かブツブツと呟き始めたクロエ。他の同僚達も妙に騒めていた。

そして当のシルはなぜか唐突に鼻血を吹き出し出す始末。

：シルが鼻血を出すという異常事態に私は恐ろしい失敗を犯してしまったのではと動揺の極みに陥った。

だがシルは塵紙を鼻に詰めながらなぜか幸せそうに満面の笑みを浮かべてお礼まで言い出すものだから私は尚のこと状況を把握できなかった。

：結局シルと私の距離感が変わっていないことを示せたというよりは状況が混乱して暗くよそよそしい雰囲気吹き飛んでしまっただけというべきかもしれない。

そんな滅茶苦茶な退院報告を済ました後、私はシルの要望によりシルの付き添いの元ミア母さんと話をしていた。

場所は閉店後で使い手の普段ならいない厨房。

その目的はベルと仲直りするために手料理を振る舞おうというシルの提案を実践することであった。

??

「なるほど？坊主のために手料理を振る舞いたいからアタシに料理を教わりたいって？」

「その通りです。お頼みできないでしょうか？」

「それで：シルは何で一緒にいるんだい？」

「んーリユーの付き添いかな？」

一通り私が話をした後ミア母さんは再確認にそう尋ねてくると共にちやつかり隣でニコニコしているシルにも問いかける。

そしてミア母さんは私とシルの答えを聞いた後、何やら少し考え込んでいる様子なので私は事情を重ねて伝えた。



「その…実はベルと仲違いをしてしまつて…なのでシルの提案で手料理を振る舞おうという結論に至りました。なのでそのベルに振る舞うのに相応しい料理が知りたく…」

「坊主に振る舞う料理ねえ…あの大食漢でも満足できる料理…」

「…ベルは大食漢なのですか？食は細いと勝手に思っていたのですが…」

「うん。初めて『豊穡の女主人』に来た時からそう言つてたからリユーが一杯料理を振る舞つてあげるとベルさんは喜んでくれると思うな」

ベルはたくさん食べるのが好き…

確かにベルは未だ成長期。量を食べる方が好きなのは理解できるし、第一に男性は山のように食べるのをよく見かける。ならベルもそうなのだろう、と思つた。

…ただ料理があまり上手ではない私がそんなに大量の料理、即ち多くの品目を作れるのかすぐに不安を抱く。

そしてそんな私を他所にシルは付け加えた。

「あとこれまで私が作つてたベルさんの弁当もリユーがやったほうがいいんじゃない？」

「確かに…当然その通りです」

「…あの坊主シルの料理をずっとダンジョンで食つてたとか言うのかい…」

「…リユーもミアお母さんもどうしてそんなに複雑そうな表情なのか？まるで私がベルさんの弁当を作つてたのがおかしいと言わんばかりな気がするのはいのせい？」

シルの口から出た『ベルさんの弁当』という言葉に私もミア母さんも非常に複雑な表情を浮かべる他ない。

それにシルはジト目で私とミア母さんを睨む。

あの…何とも言えない…いや、滋養強壮にはいい想像を絶する味の弁当をベルは…

やはり私が料理をできなくならなければベルの胃袋にはいつか穴が空く…

そうシルに失礼だと理解しながらも結論を出した私はミア母さんに料理を教わる決意を強めていく。

一方のミア母さんはシルから視線を背けつつも呟いた。

「リユートの事情は分かっていたとしても…最近あんたには厨房を頼んでなかったからねえ…まず教えられる料理の幅を考えるためにも一人で最初はやってもらおうかねえ？」

「えっと…ミアお母さん？そんなこととして大丈夫なの？その…厨房が…」

「ちよ…シル？それは一体どういう意味ですか？まるで私が料理ができないかのような…」

「だってリユートできないでしょ？まあ最後にリユートが料理するの見たのは結構前だけだよ」

「なっ…私だってやる時はやります！ベツ…ベルのためなら私はどんな苦難でも乗り越える覚悟なんですから！そもそもシルだって私と同じように料理ができないはずです！」

「何言ってるのリユート！私は料理でき…！」

サラリと私に厨房を任せると心配かのようなことを言うシルに私は思わず反論した結果、段々と私とシルの口論に発展していく。

が、次の瞬間に木がミシミシと鳴る音に届いた怒号がその口論を即座に打ち辞めにさせた。

「ごちやごちやうるさいねえ！リユートもシルもあたしから見れば、どっちも料理ができないポンコツさ！喚いてる暇があるならまずは実力を見せてみな！」

「はっ…はい…」

…こうして私はひとまずミア母さんの言う通り一人で料理をしてみることにした。

だが…

「ちよ…リユート！まな板が真つ二つになってる!？」

「もうちよいナイフの力加減を考えな!? モンスターみたいに一刀両断すればいいってもものじゃないんだよ!」

「…くっ…」

「きやああ?! リュー?! 火が強すぎ?! 強すぎ!」

「何やってんだい?! 厨房を焼き払う気かい!」

「…くうう…」

「ちよっ…シル!? あなたは何を加えているのですか!」

「え? だってリューの黒焦げの苦味をより生かすために隠し味を加えた方がいいかなーって」

「他人のミスのカバーよりもあんたは自分がミスしないようにしな! バカ娘!? ただでさえ黒焦げなのを劇物に変えて悪化させて一体どうするんだい!」

真つ二つになつたまな板。

元が何だったかを想像させることもできない黒い炭。

鍋に水分を失ってこびりつくスープの成れの果て。

黒煙が充満する厨房。

顔を真つ黒にした私。

へし折れた木のへら。…いや、これは私の責任ではないが…

目の前に残されているのは比較的難易度が低い『はず』の雑炊であつた。

だが…目の前にあるのは黒い物体がいくつつかのみ。雑炊に存在するはずの水分は今私の周りを蒸気として漂っている…のだろう。

「…何をどうやったらこうなるんだい…」

「ほんとそうだよ。私でもこんなことには…」

「この酷い料理に余計な調味料加えてさらに劇物に変えようとしたポンコツ娘は黙ってな」

「…はい」

「…返す言葉もありません」

ミア母さんの絶句に私は言葉も返せず沈む以外に選択肢がない。  
：便乗しようとしたシルが即座にミア母さんに沈黙に追いやられた  
ことだけがせめてもの救いか？と思う程度には絶望していないが…  
私は料理ができない。

ベルに手料理を振る舞えない。

ベルと仲直りすることができない。

論理の飛躍ではない。

私にはベルに誠意を見せる方法が見つからない以上手料理を振る舞う以外にどうすればいいか今分らないのだ。

この考えが私の思考を蝕み始め、私は段々と本当に絶望し始めていく。

そんな時ミア母さんは今更思い出したかのように私に尋ねた。

「そういえばあんたはあの坊主に何を作りたいって思ってたんだい？

…この惨状で碌な料理が作れるとは思えないけど、一応聞いておこうじゃないか」

「さっ…惨状…私はただベルに傷つけてしまったお詫びに料理を…」

「このバカ娘は人の話を本当に聞いているのかい？その料理として何を作ろうとしたのかって聞いてるんだよ。お詫びをする時用の料理なんてある訳なんだから、あの坊主が喜びそうな料理を作ろうとか思ってたんじゃないのかい？」

「え…？」

ベルの…喜びそうな料理？

「そうそう。例えばベルさんの好物とかさ！そういう料理でベルさんの胃袋をガチツと掴んじゃえば、ベルさんとの話も進みやすくなるかもしれないよね？」

ベルの…好物？

ミア母さんとシルが私に何の料理を作ろうとしていたのかの問いに私は言葉を詰まらせた。

…私は何を作ればいいかまでミア母さんから教わろうと最初から考えていたのだから。

ベルにお詫びするのに相応しい料理がある。例えば豪華さや美味

など：そんな基準で作れば、ベルを喜ばせられると思っていたから。だがミア母さんはお詫びに相応しい料理などないと否定した。即ちベルに振る舞うべき料理の完璧な正解は存在しないということである。

そしてシルは『ベルの好物』を作るべきと言った。この事実には私に重大な欠落を気付かせた。

：私は『ベルの好物』を知らないのである。

料理だけの話ではなくあらゆるベルの好きな物を知らない。その瞬間そう気づいてしまった。

それこそ分かるのはベルの愛するのが私自身ということぐらいである訳だが、そんなことに惚気ている精神的余裕はもはやなかった。

私は料理の技量がないというだけでなく、ベルのことを何も知らないという意味でもベルにお詫びを果たしベルを喜ばせる方法を探し出すことさえできないような現状に置かれていることに気付いてしまったのだから。

「：これはリユーはベルさんの好物を知らないのかなあ？：：表情的に」

「なんだい：：シルは知らないのかい？」

「私は確かにベルさんの身体に良い食材を弁当に使ったけど、好物を聞き出して入れたことはないかな？」

「：確かに好物をあんな劇物に仕立て上げられたらあの坊主でも何か言いそうだからねえ：：」

「だからミアお母さんはどうしてリユーの料理の話なのに私の料理の悪口を言うんですかー？」

ミア母さんとシルの話が私の耳に届いたが、もはや右から左。ぼんやりとしか聞こえてこず反応も返せないほどショックに私は襲われ

ていた。

するとシルは手をパンパンと叩いて無理矢理にでもシルに私の意識を引き寄せてから静かに私を諭し始めた。

「要はリユーはベルさんに手料理を振る舞うことでお詫びの誠意を見せようと思っただよな？」

「…そのつもり…でした…」

「でも私とミアお母さんが言った通りその手料理がベルさんの喜ぶものじゃないとダメなんだよ。一方的に『美味しくて豪華な料理』を押し付けてもリユーの誠意は多分ベルさんには伝わらない。ベルさんは一応は笑顔で食べてくれるだろうけど、心のどこかで嫌だと思っちゃう。だってそれはベルさんにとって本当の意味では嬉しくないもん。下手するとあーリユーは僕の好みを気にもしないんだーって気づいちゃう。それじゃあ意味ないよね？」

「…その通りです」

「…それは今までのシルの弁当も大して変わらないんじゃないかい？」

「ミアお母さん！今は私がリユーにいいお話をしてるんだから口を挟まないでくださいー！」

シルの私への諭しに私は頷いて同意する他ない。私は確かにベルのことをよく考えずに手料理を振る舞えばベルを喜ばすことができるとシルの言葉を鵜呑みにしていた。

私はベルのことをよく慮ることができていなかったのだ。

そしてミアお母さんのツツコミを静まらせたシルは一度息を吐き調子を整え、続けて話したのは私が気付き始めていた私の決定的な問題点であった。

「リユーはベルさんのことをきちんと言葉で伝えてなかったと思うな。一方的に誠意や善意を押し付けていれば問題ないと思っただと私は思う。それはベルさんの好物も知らずに料理をしようとしたことからベルさんの好みを無視していたのが分かる。それは誠意かもしれないけど、ベルさんには届かない可能性が高い。それはベルさんを追い返した時も一緒じゃないかな？確かに私との関係をはつ

きりさせれば、ベルさんに余計な心配をかけずに済む。それは善意でもあの時のリユーは明らかにベルさんのリユーへの心配を無視してた。リユーの問題点はベルさんのことを愛しているという割にベルさんのことをちゃんと気遣えてないことじゃないのかな？」

「…」

反論など一言も思い浮かばなかった。

もしベルに手料理を振る舞うことで誠意を見せようと思うならば、最初にすべきはミア母さんに教わろうとすることではなかった。ベルに好物を聞き出し、その好物を作るために改めてミア母さんの教えを乞うべきだったのだろう。一歩間違えれば私にとっての誠意はベルに届かないかもしれない。

もしシルとの関係に決着を付けてベルに心配を与えないようにしたいならば、有無を言わずベルを追い返すべきではなかった。ベルの言い分をきちんと聞き、ベルのその時の心配をきちんと取り除いた上でシルと向き合うべきだったのだろう。あの時明らかに私にとっての善意はベルを傷つけてしまったのだから。

私は結局の所所ベルのことを理解できていなかったがために不必要にベルをあの時傷つけ、それどころかさらに傷つけようとしていたのだ。

つまり私は…

「まずすぐにでもベルさんと話さないかね？リユー？ベルさんのことをもっと知らないよ。そうじゃないとすぐにでもすれ違ってリユーの望まない結果に辿り着いちゃうかもしれないよ？リユーがまずすべきなのは一方的に誠意や善意を押し付けることじゃなくて、ベルさんのことを理解することなんじゃないかな？その上でベルさんが何を望んでリユーは何を望むか…それを元に行動していかないといけないと思う」

「なる…ほど…シルの言う通りです。私はまずベルが何を望んでいるのか聞かなければならなかったですね…分かりました。手料理云々の前にまずベルに会いに行き、ベルの考えを聞いてみることにします」

「それがいい気がするな。ミア母さんはどう思いますか？」

「…んまあ。何があったのかをあたしはよく知らないけど、もしあんな達が将来夫婦になろうって言うならお互いのことをよくよく理解するのが一番だろうねえ。何せ味付けの好き嫌いで夫婦に亀裂が入ることまであるんだ。料理一つ取ってもあまり軽く考えちゃいけないと思うね？ま、リユースのすべきと思うことをするのが一番いいと思うね」

いつの間にやら手料理からベルと如何に向き合うかに転換していた話題。

特にシルの口振りから鑑みるに恐らく最初から私にこのことを話すつもりでいたのだろう。

…要は手料理という話題自体この話に繋げるために利用していた訳だ。

だがそんな導入があったからこそ私はその意味を深く理解できた。

私はまずベルときちんと話をしなければ、すべきことさえ分からな  
い。そしてベルの考えを少しでも理解し、何とか仲違いを終わらせなければ。

そう固く誓う私にシルは小さく微笑み、安心したかのような表情を  
浮かべる。そしてシルはミア母さんの方を向いて尋ねた。

「どうやらリユースの心も決まったようだから、手料理を教えるのは延  
期かな？どうしよう？ミア母さん？」

「…確かに具体的な料理の作り方を教える必要はなくなりそうだねえ  
…でも流石に…料理の基礎もまともじゃないのはどうにかした方が  
いいかもねえ…」

「じゃあまず料理の基礎を学ぶところから？どうする？リユース？」

シルの問いに私はしばらく考え込む。

確かに料理の技能云々よりベルと向き合うことの方が余程ベルと  
仲直りするのに繋がるということは分かった。

だが先程ミア母さんは味付けの好き嫌いで夫婦に亀裂が入ること



もあるとも言った。

もし私とベルが夫婦になるならば…と考えるとなぜか身体が熱くなってきて頭がボーッとしてきてしまうので考えるのはやめるとして。

何にせよ料理が全くできないということは後々ベルとの関係に問題を生じさせかねないのである。

よってその危惧から私の導き出す答えは一つであった。

「やります。まだ時間はありますよね？…もし宜しければお願いできませんか？」

「仕方ないねえ…もしあの坊主に明日会いに行くなら早めに切り上げるけど、やる以上は短時間でビシバシ叩き込んでやるから覚悟しな？」

「…はい。お願いします」

そうしてミア母さんによる手料理特訓は再開された。

その特訓はミア母さんの宣言通り私の悲惨なレベルに低い料理技能とミア母さんの失敗した時の慈悲のない鉄拳制裁によって過酷を極めた。

…文字通り身体で覚えさせられたと言っても過言ではないかもしれない。

## 募る動揺と揺るがぬ覚悟

「それで？僕だけに話したいことって何だい？ベル君？さつきまで以上に衝撃的なことを僕に話そうってのかい？」

「…はい。その通りです。神様」

神様の指摘に僕は素直に頷いた。

言うまでもなく神様に隠し事をしてもすぐにバレてしまうからであり、何よりこれからどうせ話すことだから隠す意味もないからでもある。

その話すこととは当然リユースさんの関わる話であった…

??

リユースさんとシルさんの修羅場に踏み入ってから、半日。

僕はリユースさんに有無を言わず部屋から追い出された。

…いや、僕の方から部屋を飛び出したという方が正しい。

要は僕は逃げ出したのだ。

リユースさんの言葉に応じるといふ形は取つても実質は逃亡と同じ。捨て台詞を残して尻尾を巻いて逃げ出した。

リユースさんの元に赴いた目的を果たすこともなく、である。

…それでも部屋を飛び出した後『豊穰の女主人』の離れの前を右往左往してしまった僕。

その時はリユースさんが『何か』を方が一起こしはしないかと後ろ髪を引かれていたのだ。

だがそんな僕の優柔不断を終わらせたのも他ならないリユースさんだった。

あの時のリユースさんの表情が今でも僕の脳裏から消えない。

僕への怒りを隠しきれずに怒りに打ち震え、低い声色で僕を問い詰めたリユースさん。

：途中からリユーさんは僕の顔を見ることさえなくなった。

それはリユーさんに信じて任せようとしなかった僕に失望したから。

それはリユーさんが僕の愚行を自身への愛が欠如している証と見てしまったから。

：その結果僕はリユーさんの怒りを買ひ、リユーさんの表情を歪めた。

僕はリユーさんに絶対してはならないことをした。

リユーさんを笑顔にするどころか怒らせてしまった。

：僕は取り返しのつかないことをしてしまった。

その決して消せない厳然たる事実には僕は心を折られそうになった。だが僕はリユーさんに役割を果たすように強く求められていたことを思い出す。

それはファミリアのみんなにリユーさんと僕の間を伝え、二人の関係を認めてもらうこと。

：せめてこれだけは果たさなければ。

僕は動揺を打ち消せぬままそう心に決めた。

せめてもの贖罪になるように。

リユーさんに決して不安を与えないように。

『何か』が起きてしまう恐怖を無理矢理心の奥底に追いやり、リユーさんを信じようと心に言い聞かせた。

僕の犯してしまった罪は消えない。

だが罪を償うことはできる。

：僕の心をリユーさんに嫌悪され失望されたという絶望が巣食っていたが、その絶望に囚われ惑ってばかりはいられない。

そんなことをしてリユーさんに求められた役割を果たさなかったらリユーさんに本当に見限られてしまうから。

リユーさんのあの時僕に視線を向けさえもしなかったという事実は僕の心で生まれたその可能性に現実味を与えた。

…そんなことが起きては僕はどうなってしまうか分からない。それだけは絶対に避けなければならぬ。

例えもう手遅れだったとしても。

『何か』が起きてしまい全てが泡沫の如く消えてしまっていたとしても。

僕はリユーさんに求められた役割を果たさなければならなかった。

そんな退路を絶たれたに程近い覚悟共に僕はリユーさんの言付け通り『竈火の館』に戻っていた。

そして帰ったことをみんなに報告すると共にリユーさんと恋人になったことを話した後、僕はこっそりと神様と二人だけで話す機会を設けてもらった。

それから他のみんなが寝静まり、月明かりだけが部屋を照らす中。

僕と神様は神様の部屋で二人だけで向き合っていた。

神様にあることの許可をもらうために…

??

「まあねえ…」

僕が目を逸らさずに答えたのを見て、神様は小さく溜息を吐く。

そして神様は諦観を醸し出しているかにも見える表情で呟いた。

「…ベル君の表情を見ればよく分かるよ。君が今何を感じているのかよく分かる。それこそさっきまでサポーター君達を交えて話した時以上に、ね？君がさっきまで話していたこと以上のことを話そうとしているのは明らかだ。エルフ君と恋人になった以上のこと…ということだね？ベル君？」

「…その通りです」

再び僕は神様の確認に頷いて応じた。

神様の言う通り僕はリリ達にも伝えた『リユーさんと恋人になった』ということ以上のことを話そうとしていた。

僕は一度深呼吸をすると神様がどう反応するかに不安を抱きながらもリユーさんの未来のために覚悟を決めて話し始めた。

「僕は…『竈火の館』を出てリユーさんと二人で暮らしたいと思っています」

僕ははつきりとそう言い切った。

これが僕の答えだった。

そしてその答えの意味は…

「つまり…ベル君は万が一の時はファミリアを出て、迷惑をかけないようにするつもり…ということだね？ベル君？」

「…はい。できれば万が一がないことを願いたいです、万全を期すためにそうしなければならぬと考えています」

「うううーん…」

そう答えると神様は腕を組んで低い声で唸る。

…つまりは神様としては賛成し難いという意思表示。

…この反応は想定内だった。

リユー案と恋人になったということだけでもさつき神様もリリも思いつき顔を顰めた。

それにリユーさんと二人で暮らしたいと付け加えれば神様の態度が硬化してしまうのもはや必然だった。

そしてそうまでして伝えたのには当然理由があるわけでそれを神様は既に見通していた。

「…君の表情にはまず焦りが全く隠しきれていない。まるで一刻も早く僕から許可をもらって、すぐにでもエルフ君に会いたっていう気持ち溢れ出ている。それはどうしてなんだい？」

「…えつと…実は帰ってくる前にリユーさんと喧嘩してしまつて…」

「はああ…つまりこれはエルフ君の御機嫌を取るための手土産って訳かい？」

「…はい」

神様の大きな溜息と共に見せられた盛大な呆れ顔に僕は碌な言い

訳もできない。

すると神様はぼそりと言う。

「まーさ。ベル君がそうすべきだと思うならいいかもしれないけど、ちゃんとエルフ君にこのことを相談したのかい？エルフ君はベル君と二人で暮らすことを承諾したのかい？あの堅物のエルフ君がそう簡単に雇われてる『豊穰の女主人』を辞めるとは思えないけど…」

「…相談は…してないです。リユーさんには神様達にリユーさんと僕の関係を確認してもらえるように話をするのを頼まれただけで…『竈火の館』で一緒に暮らすことは一度お話して断られてますし…」

「つまりベル君は断られた『竈火の館』で一緒に暮らすことの代案としてベル君もこれまで暮らしてた『竈火の館』を出て二人で新居に住むことを僕に許可を取ると思ったということだね？ただそれをエルフ君に確認もしていないし承諾ももらってない…それが実はエルフ君と喧嘩になった理由だったりするんじゃないかな？ベル君？」

「…」

神様に本当に痛い所を突かれて僕は言葉を失う。

…神様の言う通りだ。

リユーさんがあの時怒りを露わにしたのは、僕が独断でリユーさんとシルさんの話し合う場に割り込んだから。…完全に相談していなかったことが原因。

神様は仮に自分が許可を与えてもご機嫌取りの手土産になるところか火に油を注ぐことになる…そう暗に言おうとしているのは僕でも分かった。

それでも…僕は…

「…どうしても許可が欲しいのかい？なら僕は止めないよ。君が望むなら僕はもう何も言わない」

「…えっ？」

神様が告げたのはあまりにも呆気ない許可。

…神様はかなり反対すると思っていた僕からすれば完全に拍子抜

け。

僕は思わずポカーンとした表情を浮かべてしまった。

そんな僕に神様が告げたのは呆気なく許可を与えた理由であった。

「…これまで無茶なことをしようとするベル君を僕やサポーター君だつたりが止めようとして…でも結局ベル君の意志を尊重した…なんてことは多かつた。でも今のベル君はこれまでとかなり違う」

「…どういうことですか？」

「だって君は周りの誰が止めようと聞くつもりはないんだろう？君の頭はエルフ君のことでいっぱいだ。これまでもサポーター君や春姫君、ウィーネ君だつたりを助けようとする時、君は周りの静止にも関わらず助けようと頑張った。でも一人で助けようだなんて思わなかつたはず。君はエルフ君を自分の力だけで守ろうとしているんだ。…君は明らかにエルフ君に独占欲を抱いてる」

「…独占欲…ですか？」

僕が気付きもしなかつた事実を告げた神様。

だがその事実は考えれば考えるほど僕の心に染みわたっていく。

## 独占欲

その言葉は僕のリユーさんに抱く思いを一番うまく表しているのではないか？

そしてそれを証明するかのように神様はその証拠を並べ始めた。

「まず君は絶対にエルフ君を自分のそばに置こうと考えている。どうしてだい？エルフ君にはエルフ君の生活があるんじゃないのかい？いつかはベル君と結婚して二人で暮らす…なんてことを考えているのかもしれないけど、そう急ぐことじゃないんじゃないのかい？」

「…それは…リユーさんを一人にしたくないからで…一人にしてしまうと危険だからで…」

「ならどうして君はその危険を僕達に話さないんだい？それは君が一人でエルフ君を守ろうとしている意志の現われなんじゃないのかい？」

「…あ」

…その通りだ。

リユーさんにだつて自分の生活がある。

『豊穰の女主人』での生活がある。

なのに僕はリユーさんがそれを捨てることを勧めた。

…これはリユーさんと僕の一緒にいたいという望みを叶えるためという名目を立てていたとしてもあまりに一方的。

…神様の言う通り僕はリユーさんを『豊穰の女主人』から引き離してでも独占しようと考えていたのではないか？

その証としてリユーさんとシルさんの接触を防ごうとしたのではないか？

「まあ話したくないならそれでもいい。話せないこともあるのは分かっている。エルフ君はすぐ複雑な事情を抱えているようだからね。だから僕は無理に詮索したりはしない。僕が無理に介入しても話がおかしくなるだけかもしれないからね」

「…神様」

「さらに言うと君の表情には恐怖と不安が見え隠れしている。エルフ君を失うかもしれないという恐怖。エルフ君に嫌われるかもしれないという不安。…恐らく色々ある。それはきつとあのエルフ君の置かれてる立場とかベル君との今後の向き合い方とかが関係しているんだろう？ただ大きな枠で括るならその感情はエルフ君を独り占めしていたいという独占欲から来るとも考えられるんじゃないかな？」

「そうかも…しれません」

静かに神様の告げる指摘は一つ一つが僕の心に突き刺さった。

考えれば考えるほど神様の言う僕の独占欲の存在に心を乱されていく。

その結果漏れたのは一つの不安であった。

「…僕はおかしいんでしょうか？神様の言う通り僕はリユーさんに独占欲を持っているのかもしれない。…この気持ちはリユーさんには迷惑ですかね？リユーさんに余計な負担を与えるだけですかね？」



…僕はこのリユーさんへの想いを抑えられる気がしません。抑えられたら、するはずもないことを僕はたくさん既にできてるので…僕は…」

僕は神様に救いを求めるように見つめる。

現に僕はリユーさんと喧嘩をしている。リユーさんを怒らしてしまっている。

…もしそれが僕の独占欲によって引き起こされているなら僕の気持ちはリユーさんにとって邪魔でしかないことになる。

そう思うと僕の胸が痛くなってくる。

僕自身がリユーさんを苦しめる存在だなんてあつてはならない。

僕はリユーさんを守り愛する唯一の人でありたいのだから…

そんな風に心揺らぐ僕に神様は言った。

小さな笑みを浮かべゆつくりと首を振りながら。

「いいや。僕はおかしいとは思わないぜ？凶と出るか吉と出るかはベル君次第だけど、決しておかしい訳ではないと思う。…これは愛を司るフレイヤにでも聞かないとはつきりしたことは分からないけど、ベル君とエルフ君が恋人で愛で結ばれていると言うなら…独占欲も立派な愛を形作る要素の一つだと思う」

「そう…でしようか？」

「そうだとも！制御は必要だとは思うけど、あつても問題ないと思うぜ？というか僕がエルフ君だったらあつて欲しいと思うなあ。だつてそうだろう？ベル君だつてエルフ君に『ベルは誰にも渡さない！キリツ！』つて言われたらすつごく嬉しいんじゃないかい？」

「…ええ…もちろんです」

嬉しいんですけど…リユーさんは『キリツ！』だなんて言わない気が…

なんて余計なことを考える余裕があるだけ僕の不安が和らいでいるというのもまた事実であつた。

すると神様は笑みを消して静かに言った。

「…要はベル君がそこまでの感情を向けたのはエルフ君が初めてだつた。だから制御もできないし、その感情に不安と恐怖を抱きもする…

ということだと思う。君はこれまでかなり無茶をして僕を含めてた  
くさんの女の子を助けてきたけど、何かエルフ君だけ違った。その  
何かが生まれたきっかけが恐らく【深層】の出来事であって、そこで  
君はエルフ君と誰よりも絆を強くした。その何か君のエルフ君へ  
の独占欲に繋がった。：だからエルフ君と恋人になつた：といった  
所かな？その何かを：聞いてみてもいいかい？」

神様は興味：というにはあまりに無に近い表情でそう尋ねてくる。  
そして神様の質問に答えられないわけにはいかない僕はしばらく考え  
てみる。

これまで助けてきたみんなとリユースさんの違い：

つまりは僕が向ける感情はこれまでのみんなとリユースさんでは違  
う何かがあるということ？

それも愛してるとか好きとかよりも前の段階で。リユースさんを愛  
していると気付く前の段階で。

そうして気付いたのは【深層】で下した一つの決断であった。

「：リユースさんのためなら死んでもいいと思いました。ずっと誰かの  
戦つて傷ついてきたリユースさんとその痛みを分かち合えるなら、この  
命を捨ててもいいと思いました。リユースさんと運命を共にできると  
考えると、なぜか心が躍りました。それが：多分リユースさんだけに向  
けた初めての感情だと：思います」

思い返されるのは【深層】でリユースさんが闘技場コロシアムで橋を落とした時  
のこと。

リユースさんは僕一人を逃がすべく橋を落としてモンスターの追手  
が来れないように魔法を使った。

そしてリユースさんは僕の盾となつて死のうとしていた。

そんなリユースさんを僕は救うべく闘技場コロシアムへと舞い戻つた。

成算があつたはずもない。

リユースさんの指摘通り闘技場コロシアムの下に空間があるなど知るはずもな  
かつた。

だがそれでも僕はリユースさんの元へと向かった。

リユースさんを死なせたくなかった。

リユースさんを一人にしたくなかった。

リユースさんを守りたかった。

この気持ちは嘘ではない。

そして実際にその気持ちを僕は幸運にも成就させることができていた。

だがそれはあくまで結果を見れば、の話。

僕は絶対にリユースさんを守れるという確証など持っていなかった。

：あつたのはもつと後ろ向きな感情。

リユースさんを僕のせいで死なせずに済む。

リユースさんと一緒に死ぬことができる。

リユースさんのために命を捨てられる。

リユースさんにせめてもの恩返しができる。

そんなリユースさんが望みもしないし、繋がる結末が全く幸福にならない感情。

だがそれでもあの時僕の心を占めていたのはこんな感情達であった。

僕はリユースさんのために死ぬることを。

リユースさんと一緒に死ぬることを。

確かに嬉しく光栄に思っていた。

リユースさんと運命を共にできているという事実が僕の心を躍らせた。

僕はリユースさんにとってただ一人の最期を共にした者になれた、と。

：恐らくこれが今抱いている僕のリユースさんに向けられる独占欲の原点なのだろう：そう僕は頭の中で結論付けた。

「なるほどね：確かにベル君はいつも生き残って助ける相手を笑顔にすることばかり考えていた：その時のベル君には成功するための自

信があつた：でもエルフ君の時は違つた。エルフ君の時は本当に窮地で：だからこそ他の女の子の時を越えた感情が芽生えた：そういうことなのかな？」

「多分：そうだと思います」

神様は僕の説明に納得したように頷く。そうして神様は付け加えた。

「：僕はその本質までは見抜けなかつたんだけど、ベル君のエルフ君への強い感情を感じ取つた。それこそ今までに見たこともないベル君の覚悟を感じた。それがエルフ君のためなら死さえも厭わないという感情だつたなら：僕は納得かな。そのエルフ君のみに向ける感情は制御がすごく難しいと思う。そのエルフ君を守るための強い覚悟になると同時にエルフ君を傷つけかねない危険な感情だ。制御に気を付けることを忘れないようにね？ベル君？」

「：はい。肝に銘じます」

神様の助言を僕は強い決意を込めて力強く頷く。

そうすると神様は大きく息を吐くと、雰囲気を変えるように表情を変えて語り始めた。

「さて：話をまとめようか。まずベル君が『竈火の館』を出て、エルフ君と二人暮らしのための準備を進めることは認めよう。そしてその間はダンジョン探索は中止。そして二人暮らしの準備が整つた後のことは追つて相談ということでもいいね？」

「はい。そういう形でお願いします」

「それで二人暮らし云々の前に話忘れてたんだけど、ヘルメスからなんかベル君に話したいことがあると聞いてたんだけど：エルフ君のことを考えると…」

「：今はリユーさんのことで頭がいっぱいなのでヘルメス様には忙しいと伝えておいてください。ヘルメス様に構っている暇はありません」

「だよねえ：じゃあベル君が『竈火の館』を出ることはサポーター君達ファミリアの仲間だけに僕から説明しておこう。下手に知っている人が増えるとエルフ君にも迷惑が掛かる。：それにサポーター君の

説得だけでも骨が折れそうだからね。…もしベル君に任せるといっぞやの騒動の時と同じようなことになりそうだし…エルフ君との間に火種をこれ以上作らないためにも説明の方は僕が引き受ける」

「その…すみません…」  
いつぞやの騒動…それはフィンさんがリリに結婚を申し込んだときの話で…

あの時も僕の中途半端な態度がリリを苦しめて、話が望ましくない方向に進みかけた…

…今も同じようなまずい展開を起こしていると考えたと、頭が痛くなる…

それが謝罪となって僕の口から洩れると、神様は僅かに微笑んで言ってくれた。

「いいき。僕にとってはベル君の幸せが一番大事だからね。ベル君のためだったら何でもしようじゃないか！」

「神様…」

神様の快活で力強い言葉に僕は思わず僕は感極まりそうになる。

だがそんな僕に神様は笑みを消したうえで警告するように言った。

「…だけどエルフ君との問題を解決できるのはベル君だけだ。まずはどうするかきちんと話し合うんだ。そうしないと恐らくエルフ君の機嫌をさらに損ねると思うぜ？何を話すかはベル君の自由だ。但至少なくとも今のベル君はエルフ君に話すべきことを話していないんじゃないかな？」

「…神様の言う通りです。きちんとリユーさんとお話しします」

「困ったことがあればいつでも僕達に相談してくれよ？エルフ君をベル君は自分の力で守りたいっていう気持ちは分かるけど、力を借りなければならぬ時は自分の感情に流されないこと。いいね？ベル君？」

「…はいー」

神様の警告と戒めを心に刻み、力強く返事をする僕。

そんな僕に神様は再び笑みを浮かべて言った。

「さあ行ってくるんだ。ベル君。エルフ君の元に、ね」

「…っ！はいー！」

神様の送り出しの言葉に僕は威勢よく返事をして勢いよく立ち上がる。

当然向かうのはリユースさんのいる『豊穣の女主人』である。

僕は背を翻してその勢いのまま部屋を飛び出そうと動き始める。

「…ああ。ベル君の心はエルフ君の元に行っちゃったかあ…」

…神様の寂しげな呟きを僕は聞き逃せなかった。

横目に見てしまった神様の寂しさの隠しきれない笑顔を見落とすことはできなかった。

…それでも僕は後ろ髪惹かれるわけにはいかなかった。

今の僕にとってリユースさん以上に大事な存在はいないのだから。

僕は振り向くのをぐつと堪えながら部屋を飛び出していった。

…ただしその直後に神様に大声で呼び止められることになったが。

何せ神様と話していたのは深夜。

…僕はリユースさんと今すぐお話ししないといけないという焦りにあまり今頃リユースさんも寝てしまっているだろうということすっかり忘れてしまっていたのだ。

こうしてリユースさんのお話と仲直りは翌日へと延期になり、神様にはその盲目っぷりを散々に呆れられることになった…

想いを分かち合った先に

「…」

「…」

「何黙り込んでるんだい？早く話せばいいじゃないか。リユーは碌に仕事に手を付けられない程度にはそわそわしてたし、坊主だってあんな勢いで店に駆けこんできたんだから何も話すことはない…なんてことはないだろうに」

日が昇って間もなくのこと。

まだ『豊穰の女主人』も開店準備さえも始めていないような早朝。

…そんな時間にも関わらず私とベルはなぜか向き合って座っている。…それもミア母さんが腕を組んで見守る中で。

そして私もベルもミア母さんの指摘通り向き合いつつも視線を交わすこともできずに黙り込んでいる。

その理由として早朝で人と会うための準備を何ら整えていなかった私は未だ寝間着だから…という言い訳は一応立つ。こんな格好でベルと会うのはあまり好ましくない。

確かに【深層】で言葉で言い表せないような醜態でベルと共に過ごし、その後の入院生活でも同じ部屋で過ごした私とベルの間柄を考えても今更？

しかしせめて髪を整え身を清めるくらいはした方が…

いや、いつかはベルとこんな無防備な格好でも会えるほど親密な関係になれるはず。

そう思うと、心が躍る。

これももしかしたらいつかベルと共に暮らすための予行練習に…そう考えが行き着いたところで壁に衝突する。

…私とベルは数日前に仲違いしてしまったばかりだという事実の壁に。

…私はとんだ楽天家か愚か者なのか？

今まさに私はベルと親密な関係どころか破局寸前という最悪な状況に置かれているというのに：

現実私の甘い考えを一気に忘却の彼方へ追いやる。

：そしてこの思考のループを私は頭の中で何度繰り返したか分からない。

その結果の私の沈黙。

：素直に吐露するならば、現実逃避してベルとの甘い生活を考えなければこの場にとどまり続けられないのだ。

それくらいに今ベルと向き合うのは気まずく、そして掛けるべき言葉を見つけれない。

：要はベルにどう謝り、和解すればいいのか分からない。

私が悪いのは分かっている。

ベルを罵倒し追い出すなど言語道断だった。

最善策はシルが言ったようにベルと話し、ベルの事を理解できるように努めること。

そしてその上で私とベルの双方が納得できる結論を導き出すこと。

そのためにはまず謝罪して和解しないとイケないのに：言葉が出てこない。

：私が選んだベルを追い出すという行いがシルとの関係を繋ぎとめるのには最善だった：そう思ってしまうからだ。

ベルの介入を許していれば、今頃シルとの関係にひびが入っていたのは明白。私はこの点では間違ってた：そう思ってしまう。

ただ自らの過ちを認めベルに謝罪するだけでは同じことを繰り返してしまう：だからベルの行動にも過ちがあったことを指摘しないとイケないのに：

そんな都合のいい言葉は思い浮かばない：

うう：私は一体どうすれば：

そう迷いに迷う私の耳元に飛び込んできたのは盛大な溜息であった。

「はあああ：あんた達は一体いつまでそうしているつもりだい？一生無言でいるつもりかい？確かに気が進まないことを話す必要もなく



一緒にいられるんだから、別にいいかもしれないねえ」

「ちっ…違います！私はそんなつもりでは…！」

「じゃあどうして二人揃って何も言わなんだい？二人ともお互いに何が問題か分かっているはずじゃないのかい？特にリユーが何をすべきか分かっているのはあたしは知ってるつもりだけど？」

「くっ…くうう…」

…ミア母さんの指摘に私は言葉を詰まらせる。ミア母さんの言う通り私は何を話すべきか分かっている。

とにかく話を切り出さないと何も始まらないのに…

「本当に見てられないねえ…このバカツプルは。要はお互いに自分の間違いには気付いてるけど、相手の間違いも気になるから謝れないってどこかい？リユーの融通の効かなさは知ってたけど、坊主もだとは思わなかったよ」

「いや…その…はい。ミアさんの言う通りで…僕がやってはいけないことをしたのは分かっているんです…でも…その…」

「はいはい。あんた達の言い分はあたしからしちやなんだっていいんだよ。あたしからすれば、大事なのは過去の失敗じゃない。これからあんた達がどうしていくか…違うかい？」

「…っっ!!」

ミア母さんの言葉にハッと気付かされる。

…それもその通りだ。

私の中で謝罪はあくまで話をするための過程。欠かすことはできないという考えはあっても…本当に重要なのは過去ではない。

私達がこれからどうしていくかの未来であった。

「…あんた達が過去の失敗のせいで話を進められないと言うなら、ひとまず脇に置いておくのも悪いことじゃないと思うがねえ。リユーの話の聞くに過去で失敗したのは、リユーと坊主の間で考えに食い違いがある上にお互いにその考えを理解していないから。これからどうするか話せば自ずとそれも分かるし、過去になぜ失敗したかも分かる。一石二鳥で話が行き詰まらずに済む。あたしはその方がいいと思うけど、あんた達はどう思う？」

「…ミア母さんの言う通りかと」

「…僕も同感です」

ミア母さんの提案は名案のように聞こえた。

過去の失敗を蒸し返してお互いに話を進められなくなるくらいなら、未来の話をした方が有意義…ミア母さんの言う通りだ。

その時ようやく私とベルの視線が絡み合う。

…お互いによくやく話をする決心がついた…と言ったところか？

…と思いきや話はそう簡単には始められなかった。

「では…まずはベルのお考えをお聞かせください。ベルはこれからどうしていききたいか…」

「いっ…いえー僕は後でいいのでリユーさんから！」

「…遠慮しないでください。…というかベルはファミリアの方々私たちのことをきちんと認めて頂けたのですか？その前提が分からない限り私は自分の考えを示すこともできないのですよ？」

「とっ…当然ですよ！リユーさんだって僕のこと信頼してくれてないじゃないですか！そう言うリユーさんだってシルさんとの話はきちんと決着付いたんですよね？僕を追い出しといて進展なかったか言い言ったら…」

「しっ…失礼な！言うまでもなく私はシルと話をしました！ベルに心配をかけるような結果には至っていません！そもそもベルは話を逸らさないで…」

…話を始めようとしたにも関わらず早々に爆発したのは双方の不満。

お互いに和解したいという意志はある…はず。少なくとも私はそれを切実に願っている…つもりである。

だがお互いに自らの過ちに気付く一方相手の過ちに気付いてしまっているから始末に負えない。

先にどちらから考えを話し始めるか遠慮し合っていたはずが、いつの間にもやら非難の応酬に変わり果てる。

これでは結局話が進められない…

ベルに憤りをそのままにぶつけながら、心のどこかにいる冷静な私

がそう自らに警告する。

が、私自身では制御もできず。

最終的に見事に脱線した私とベルの軌道修正は私とベル以外に委ねることになってしまった。

「ゴチャゴチャやかましいよ！あんた達!？」

「ひっ…」

…この時ばかりは私とベルの漏らした悲鳴は揃ってしまった。

ミア母さんの怒号に壁にヒビが入る轟音が響けばそうもなってしまう…

そうして『ゴチャゴチャやかましい』私達が黙り込んだのを見て、ミア母さんは呆れ返ったような溜息と共に呟いた。

「なあ…あんた達…あたしの話を聞いてたのかい？あたしは未来の話をしろと言ったんだ。現状報告は必要なのは分かるけど、あたしは一度たりとも相手を責めろだなんて言った覚えはないよ？違うかい？」

「…その通りです」

「…そうです」

「じゃあとつととあたしの言われた通りにしな。先に話す方が決まらないなら…坊主の方から話しな。そしてリユーは不平は漏らさず大人しく聞く。いいね？…今度余計なこと喚いたら埋めるよ？」

「…はい」

…ミア母さんの庄には私もベルも異論を挟めなかった。

こうしてお互いに和解を願っている反面不満を溜め込んでいるのは明らかと言わざるを得ないとしつつも話はやつのことで進み始めようとしていた。

最初に話すのはミア母さんの指示通りベルであった。

「…えっ…えっ…えっ…まずさっき話しかけたんですけど、ファミリアの皆にはリユーさんとの関係に関して話しました。そして皆に認めてもらうことができました。さらに神様にはリユーさんとの今後について許可をもらえました」

「…その許可とは？」

「…リユースさんと二人だけで暮らすための許可です。リユースさん。僕と一緒に新居に移りませんか？」

「なっ…なっ!？」

ベルの突拍子もない提案に私は目が飛び出んばかりに驚いてしま

う。  
…ベルは私の求め以上の答えを神へステイアから勝ち取ってきてしまったことに驚きが隠せない。

だが状況は何も変わっていないのだ。

私のそばにいればベルに迷惑がかかる。その厳然たる事実揺らがない。

だからベルがそんな答えを得てきたのはあまりに軽率だと思ってしまった。

よつて私は思わず反論しようとして口を開こうとする。

「黙りな。リユース。坊主の話はまだ終わっちゃいない。言ったらろう？余計なことを言ったら埋めるって。反論はあんた自身の意見が終わった後にしな」

「…はい」

だがそんな反論ミア母さんが許すはずもなく。

私は声を上げる間も無く口を閉ざす。

その間オドオドと私に何を言われるかと戦々恐々としていたらしいベルは私とミア母さんの顔を交互に見た末に間を置いて再び話し始めた。

「…この際僕の考えをはっきり言います。僕は…僕はリユースさんを僕

の力で守りたいんです！…失礼かもしれませんが、ミアさんにお任せしたままにはしたくありません。自分の愛する人を自分の力で守れずしてどうして恋人を名乗れますか？僕は…誰かにリユースさんを任

せることなんてできません。そして相手がリユースさんを恨んで命を

狙う人でもシルさんであろうと僕にとっては何ら変わりはありません

ん。リユーさんに危険をもたらした時点で僕の敵。絶対に許しません。その考えは変わりません」

「ベ……ル……」

「僕は僕の方でリユーさんを守るために一緒に暮らしたいです。僕がいつでもリユーさんのそばにいれば、どんな障害があろうともリユーさんを守れますから。僕自身ダンジョンに行くのをやめて、今後は目立たないようにするつもりです。リユーさんを守るため……一緒に生きていくためだったらなんだってできます。そんな覚悟を僕は抱いている……それをリユーさんには知っておいて欲しいと思います」

自らの思いを伝えようとする切実さと時折垣間見える冷徹さ。

……優しいベルらしくない。

思わずそう思ってしまうほどに予想外の言葉が混ざっていた。

私に危険をもたらした時点でベルの敵と見做し、許すことはない……

これはつまり相手がベルにとって知り合いであるシルであろうと私に刃を向けた時点で容赦する余地はないということ。

そしてベルは私が何物よりも私を守ることを第一に考えている。

……それこそ私を守るためなら、周囲になど一切構わずという過激さを伴う程に。

私とシルの話への介入や私との同居を強硬に進め神へステイアからその許可を得てきたことがその過激さを反映していると言える。

ベルは私の身を案じ守ることを優先するあまりにシルや神へステイアだけでなく私自身の思いさえも無視してしまった……ということか？

……私はこれまでこのようなベルの一面を見た記憶がない。

確かにかつて私の死に急ごうとする意志に構わず私を生かそうとしたという行いからその片鱗は見えるとも言えるかもしれない。

だがそれは人として当然の考えと言える。

……だから今回のベルの行動は少々過激さを帯び過ぎている。

これは優しかったベルを私を変えてしまった……ということなのか？

これは私の前だから見せてくれる本当のベル……ということなのか

？

そこまでは私には読み取れない。  
だがベルが何を考えているのかはようやくはつきりと分かった。

ベルはただ私の身を案じ、守りたいと思ってくれているだけなのだ。

過激さを伴おうとそれがベルの私への『愛』の証。  
ベルの私への『愛』が軽かったという訳ではない。

まして私への信頼云々ではなく言うなれば私と向き合うシルを信頼していなかった。

私を守るといふ強い覚悟。

それが恐らく目の届かない場所にいる私の身を案じる不安に繋がってしまった。

そしてその不安がベルを突き動かし、ベルと私の衝突を招いてしまった：

ベルの話を聞いた今の私はそう結論付ける。

私はベルの言い分をようやく納得して受け入れることができたのだ。

ベルは私を納得させてくれた。

ならば今度は私がきちんと私の言い分を話し、ベルに納得して頂かないといけない。

：そしてベルの言い分には納得できても私の言い分上ではベルの提案は受け入れる訳にはいかない。それをきちんと伝えなければならぬ。

主張すべき言い分は終わったとばかりに口を閉ざし、私をじつと見つめるベルに今度は私が口を開こうとする。

だがその前にミア母さんが唐突にベルへと指摘を飛ばしていた。

「…坊主？今あたしは聞き捨てならないことを聞いたような気がするんだけど、気のせいかい？あたしにリユーを任せることはできない？つまりうちの店員を拐って行こうとでも言うのかい？リユーはあた

しと店員としての契約も結んで借金だっしてしてるんだ。それでも意地でもリユーと暮らしたい…そう思ってるのかい？」

「はっ…」

ミア母さんの指摘に私ははっと息を呑む。

その指摘には私自身懸念していた事項が混ざっていたからだ。

…ミア母さんの元にいる方が安全。

確かにベルにはそう伝えたが、私はミア母さんの言う通りの事情を抱えている。この事情がある以上私は『豊穰の女主人』を離れることができないのだ。だからベルの提案を断らざるを得ない理由の一つとなっていた。

それをミア母さんが先に指摘してくれたことにより結果的にそれへの反応をベルから先に聞き出せるということになった。

私がベルの反応に意識を集中する中、ベルはミア母さんの指摘に淡々と答えた。

「関係ないです。僕はリユーさんと一緒に暮らしたい。その思いは寸分たりとも変わりません。細かい点はリユーさんの考えを聞いてからですが、リユーさんがもし僕の提案を受け入れて一緒に暮らしてくれると言ってくれたら…借金は僕が絶対に返すとお約束します。そしてミアさんにはリユーさんが『豊穰の女主人』を離れ、店員を辞める許可を頂きたいです」

「あたしが嫌だと言ったら？」

「…リユーさんのお気持ち次第では荒技を使ってもリユーさんを連れて行きます」

「べべべ…ベル!?!」

最後に告げられたベルの衝撃の宣言に私は目を白黒させてしまう。

『荒技』を使っても？

それはミア母さんを打ち倒してもと言うのか!?

借金云々の話よりも想定を遥かに上回るベルの断固とした態度に私は驚きを隠せない。

…ベルのミア母さんにぶつける視線を見れば、その言葉が全く偽りでないことが分かってしまうから。

ベルは私の気持ち次第ではミア母さんと一戦交えることさえも辞さない：

この発覚した事実は私のこれより告げる言葉が決定的な重みを持つと規定したも同然だった。

…あのミア母さんが素直にベルの言い分を認めるわけがない。そう思ったからである。

が、ミア母さんは小さく溜息を吐くと、これまた思わぬ反応を見せた。

「…だそうだよ？リユー？坊主はそれだけの覚悟を持ってリユーと向き合ってる。それを絶対忘れずに坊主にあんたの考えを話しな。先に言うと、あたしはリユーと坊主の決断の邪魔は絶対しない。それこそ契約だろうと借金だろうとどんな事情があろうと、ね？あんた達が望むようにすれば良い。良いね？」

「あ…はっ…はい」

つまり…私が望めば『豊穣の女主人』を離れることも不可能ではない…そう言われているのか？

ミア母さんの言ったことの意味は理解してもミア母さんがなぜそうもあつさりしているのか測りかねる私。

だがとりあえずミア母さんも私に話すように促し、ベルも私の言葉を待っているかのように眼差しを向けている。

…今度は私が自らの言い分を話す番であった。

一度深呼吸を挟み気持ちを落ち着かせた後に私はゆっくりと話し始めた。

「…まずは報告を。シルとは蟠りなく和解することができました。その点のご安心を。そしてベルがファミリアの方々と話をきちんとしてくださったと分かったお陰でようやく心の整理ができました。…ベルは自らの思いを忌憚なく話してくださいました。そして私もこの機会にきちんと話すことにします。聞いてくださいますか？ベル？」



「…っ！もちろんです」

私の確認にベルは真剣な表情で頷きつつそう言ってくれる。

その真剣なベルの表情に背中を押されつつ私は私の思いを語り始めた。

「…私はベルのことを愛しています。私はベルに愛されたいし、ベルを愛したい。私はベルの恋人としてそばにいられると考えると、いつだって心が躍ります。私はこれまでで一番の幸福を手に入れようとしている…そう確信しています。…ですが私にはそれ以上に不安が大きいのです。私の立場はベルに迷惑をかけてしまう。…私はベルに絶対に迷惑をかけたくない。ベルに不幸をもたらしたくない。…私の思いはただ一つ。ベルの幸せの邪魔には絶対になりたくないという事。私自身の存在がベルの邪魔なら、どこか遠くでベルを愛し続けるといふ選択肢もない訳ではない…そう考えることもできました」

「そっ…そんな…リユースさん！」

ベルは悲鳴のような声を上げ、表情を歪める。

…私の言葉は暗にベルの提案を断るところかベルとの関係を途絶えさせることを認めるかのようであったから。

ベルは恐らく私が最悪の選択をすると予期してしまったのだろう。

…こんな声をベルに上げさせ、表情を歪めさせる私は本当に罪作りだ。

だが私は自らの思いを忌憚なく話すとしたのだ。だからこの考えを避ける訳にはいかない。

これもまた私の心にある考えの一つ。

私はシルと向き合った時確かにその考えを選び取る可能性があったと記憶している。

…だが話はまだ終わりではない。

考えを整理する中で辿り着いた結論を話し終わっていないのだから。「ですが…今の私はベルの覚悟を明確に知っています。お陰で今まで私の中にあつた迷いは消えました。ならば…私も覚悟をきつちりと決めましょう。ベル…私はあなたに迷惑をかけ、不幸をもたらすかも

しれない決断を下します。それでも…本当に大丈夫ですね？ベル？」  
「当然です。リユーさんのためならどんな苦難だって迷惑なんかじゃ  
ないです。リユーさんのためならどんな苦難だって立ち向かう…そ  
う【深層】で決めましたから。僕達は互いを支え合う恋人同士です。  
そうでしょう？リユーさん？」

「…その通りです。…結局は二人で解決すると宣いながら、一人で問  
題と向き合おうとした私の過失。私とベルは恋人同士なのに私は互  
いに支え合うことを拒絶してしまった。…私の覚悟が足りなかった  
ばかりにベルとの仲を危機に陥れてしまった…ということですね。  
…私はベルの恋人失格です」

…私はそう力なく自嘲する。

【深層】で確かに誓い合っただけだったのに。私とベルは互いを支え  
合い、共に苦難を乗り越えていくということ。

にも関わらず私はベルの介入を拒絶し、共に苦難を乗り越えていく  
という意志を示さなかった。

シルに言われたようにお互いの思いを話し合い、理解し合うことこ  
そがそのための最善策だったのに、あの時はそれさえも拒絶した。

…私とベルの関係を思えば、本当に正しかったのはベルの方だった  
と言わざるを得ない。私の方が間違っていたのだ。

私はその過ちをこの機会にはつきりと認めなければ…

「そんなことないです…リユーさんは僕の自慢の恋人ですよ…ただ  
これからは一緒に問題を解決できるようにしていけたらなあ…と思  
います。…ってリユーさん。過去の話で気が滅入るより未来の話を  
しましょう？その…リユーさんのお気持ちは分かりました。リユー  
さんは僕を茨の道に連れて行ってくれるんですね？」

「…なぜ嬉しそうなのですか？ベル？私のせいで茨の道を歩むのは決  
して嬉々として語ることはないと思います…」

ベルは自らを自嘲し気分が沈んでいく私を大慌てで励まそうとし  
てくれる。…とは言っても自らの不満は早々には消せなかったよう。

ベルが漏らしてしまった不満を心に刻み、改善を心で誓いつつ私は  
ベルに苦笑いを浮かべてしまう。

…どうしてベルはこうも嬉しそうに話すのだろうか？

そんな私の疑問にベルは一瞬考える素振りを見せると、サラリと答えた。

「だって…そうすればリユースさんの背負ってきた痛みを分かち合えるかなって思っています。それにリユースさんと一緒にいられるなら茨の道でも火の中でも水の中でも僕は幸せですよ？あの【深層】で僕はどう生きるも死ぬもリユースさんと一緒って心に決めましたから」

何の戸惑いもなく笑みまで浮かべてそう告げるベル。

ベルが私の痛みを背負う。そう言ってくれた事は素直に嬉しい。そんなベルの優しさを私は愛している。

…だが死さえも私のためなら厭わないと何の躊躇もなく言えるベルはある意味怖い…そう思ってしまった。

そしてそんなベルに呆気にとられかけるが、私自身を鑑みた瞬間に気付く。

…私もまたベルがいないとどのような行動を起こすか分からない…そう思ったことを。

私自身ベルを失うとなれば、茨の道の道にも火の中にも水の中にも身を投じるだろう。死さえも厭うことはない

なら…私の答えもまた明白であった。

「ふふ…私も同じであると素直に白状しましょう。ベルのため、ベルへの愛を貫くためなら死さえも怖くはありません。もちろんベルと共に過ごすために死は望んでいるはずもないですが…ベルとの愛を守るならば、どんな苦難でも乗り越えられると誓うことができませぬ」

「じゃあ僕と同じ考え…ということですよね？」

「ええ。ベルと同じです。私達はお互いのためならどんな苦難だって立ち向かえる。私はもうベルの側から離れません。今ここでそう誓います」

「…リユースさん！」

「遅ればせながら私が覚悟を決めたことようやく私とベルの考えは一致しました。…これまで余計な迷いを抱いてしまい申し訳ありません」

せん。ベル」

私もまた笑みを浮かべ、ベルと同じ境地にいることを素直に吐露すると共に誓いを口にした。

もうベルの側から離れないと言う誓いを。

そして同時に同じ境地に至れていなかったことを素直に謝罪する。その謝罪にベルは首を振ると、期待の眼差しと共にベルは尋ねてきた。

「いえ、今この瞬間リユースさんと僕の考えが一致しただけで僕は十分ですよ。なら…リユースさんの僕の提案への答え…聞かせて頂けますよね?」

「…もちろんです」

ベルの私と一緒に暮らしたいという提案の答え。

私が覚悟を決めることができた今その答えはただ一つ。

私は覚悟を決めて、ベルの提案への答えを告げた。

「ベル…私はあなたと一緒に暮らしたいです。ベルの提案を心より歓迎します」

「…っっ!!やったああ!!」

微笑みと共に告げた私の答え。

それを聞いたベルは喜びを爆発させて歓声を上げる。

それほどベルが私と一緒に暮らすことを待ち望んでくれていたことに嬉しさを覚えつつも私にはまだ触れなければならぬ事項があったため、緩みそうになる頬を自制しつつミア母さんに視線を向けた。

「…という決断を私は下しました。本当に私は『豊穰の女主人』を離れても問題ないのでですね?」

「きちんとうちの馬鹿娘達に話を通したら、ね。あたしは事情を理解しているから止めないよ」

「その…ありがとうございます。そして…すみません」

「礼も謝罪もあたしになんかいらないよ。少なくとも坊主のことに關してはあたしは大したことはしてない。あんた自身の言葉で決めて話したんだ。まあ…雇い主としてはその謝罪しつかり受け取っておこうかね?」

「…すみません」

「ま、何かあればいつでも来な。料理を振る舞うことや相談に乗るくらいはあたしにもできるからね」

「…ありがとうございます」

ミア母さんの快活な笑みと共に贈ってくれた言葉に私は感謝の念を抱くことぐらいしかできない。『雇われた者』としては申し訳なきで一杯だが…

それはともかくミア母さんの承認を得られた以上『豊穣の女主人』を離れる上でも障害はない。

よって次は喜びに浸るベルに視線を向けていた。

「ベル。共に苦難を乗り越えるのはいいのですが、正直私とベルが同居することで何が起こるか分かりません。よって慎重に慎重を期して…」

私の口にしたのはやはり不安に関して。

共に苦難を乗り越える覚悟を互いに行っているのはいいが、対策を練れるものは練っておきたい。

そんな考えを伝えようとした私であったが、喜びに浸るベルは笑みを崩さず答えた。

「確かにリユーさんは不安でしょうけど、まずは新居をどこにするか決めなきゃ何も始まらないですよ!なので同居する準備が落ち着いてからそのことは考えませんか?リユーさん?」

「…それもそうですね。そうしましょうか」

…私は笑みを浮かべて気付けばそう答えていた。

ベルの樂觀的な考えに乗っては危険だ…心のどこかでそう言う自分がいる。

だが私にとってはそれ以上にあんな非情な言葉を突きつけたベル

があれ以上私を責めることなく私を許してくれたことが嬉しくて。

ベルがこうやって私と一緒に暮らせることを心から喜んでいる様子を見れるのが微笑ましくて。

：ベルとの関係が破綻するのではと地獄にいるかのような思いをしていた私からすれば、そのベルの楽観的な考えは魅惑的過ぎた。

だから私は現実から目を背け、新居探しより始まるベルとの同居という誘惑に負けた。

こうして私とベルは互いの考えをひとまずは共有し合い同居という私達の関係の新しい段階へと足を踏み入れ始めた。

：その様子をミア母さんが複雑そうな視線で見守っているのを見なかったことにしながら。

## 〈懐妊編〉第三章 真の希望と過去の希望を巡る迷い 新居探しを始める前に

「…お時間頂きありがとうございます。お昼時はまだお仕事忙しいかもって思ってたので」

「…いえ。ミア母さんにはベルとの相談のためと許可を頂いていますし、仕事に関してはお気になさらず。今休む分はきちんと他の時間で既に補完したので」

「なら…大丈夫そうですね」

「ええ…これだけの量の料理を注文すれば、ミア母さんのご要望にも適うことでしょう。どうぞベルがたくさんお食べください。私はあまり量は食べられないので」

「はははは…」

リユースさんの言葉に僕は苦笑いするしかなかった。

それもそのはず僕とリユースさんの向かい合うテーブルには所狭しとミアさんお手製の料理の数々が並んでいる。

…ついさつきリユースさんとの相談をさせてもらう引き換えに料理を注文するようにミアさんに要求…いや、頼まれたのだ。

…先日はリユースさんと僕の仲違いを事実上仲介してもらったという恩がある。

これぐらいの恩返しはしないと…というのが一応のリユースさんと僕の共通認識。

ただこれだけの量を食べられるかは正直不安…

リユースさんはすっかり僕がたくさん食べるから大丈夫…みたいに思っているようだけど、僕だってこれだけの量を食べるのは…厳しい気がする…

それはともかく本題は料理を食べられるか否かではない。

そもそも僕はただ単にミアさんの料理を食べたくて『豊穰の女主人』を訪れた訳ではないのだから。

僕はリユースさんとの相談の時間が欲しくてここ『豊穰の女主人』を

訪れ、一席お借りしている。

そしてその相談とは先日リユーさんと話した時に僕が提案した同居に関して。

まずは新居を探すために条件を話し合おうと考えたのである。

…にも関わらず料理が配膳されるまでの間もポツリポツリと言葉を交わすだけ。話は一向に進まない。

…何となく気まずい空気が漂っているのだ。

それは決して先日までリユーさんと仲違いしていたことにある訳ではない。まして目の前の山盛りの料理にある訳でもない。

ならその原因が分からないのかと尋ねられれば、僕にもリユーさんにも言うまでもなく分かっていることは明らか。

…いつまでもその原因に触れずにおくことは出来ず。

僕は先手を打つために口を開いていた。

「あの…！」

…先手を打つはずが、リユーさんと僕の声は見事に重なっていた。

やっぱりリユーさんと僕の心は繋がっているから、話始めるタイミングも重なったんだ！

…なんて呑気なことを考えている余裕は流石になく。

お互いに声が重なったことで続きの言葉を詰まらせた僕達は一瞬の妙な静寂の後、確認をし合っていた。

「あの…ベルの言いたいことはもう分かっています。恐らく私と似た疑問なのだろうと…思います」

「…同感です。確実に僕の疑問とリユーさんの疑問は似ていると思います。なので…一緒に確認しますか？」

「ええ…そうすべきでしょう」

そう確認し合って僕とリユーさんは互いから視線を離す。そしてその視線が向かったのは、互いの席の隣。

その隣に向かってリユーさんも僕も怪訝な視線と共に尋ねていた。



「なぜあなたがいるのですか？シルさん（アーデさん）？」

何となく気まずい空気が漂っていた理由。

それはこの食事の場に僕とリユーさんだけでなくシルさんとリリがいたからだだったのである。

??

「なぜってどういうことですか？リユー様？リリがいることに何か問題でもあるのですか？」

「そうですよ。ベルさん。どーして私がいてはダメなんですかー？」

「それは…」

「えつとですね…シルさん…」

速攻で返ってきた質問にリユーさんも僕も揃って言葉を詰まらせる。

リリはリユーさんにジト目を向け、シルさんは頬を少し膨らませつつ僕の顔を覗き込む。

…二人がいることに問題がある訳では…ない。

そもそもリリと僕は一緒に来た訳でリリがここにいる事情は嫌というほど知っている訳で…

逆にリユーさんはシルさんがいる理由はきちんと把握しているのだろう。

ただ僕はシルさん本人からその事情を聞きたい。

…何せシルさんはリユーさんに剣を向けることに躊躇もしなかったという無視できない過去がある。なぜリユーさんと僕の新居探しに関わるのかその理由をきちんと知らなければならぬ。

そして同じようにリリがここにいる理由をリユーさんは知らなければならぬと考えているのだろう。

よって僕はリリに、リユーさんはシルさんに説明をしてもらうように説得するのが妥当だと思った。

「…取り敢えずリリが今ここにいる理由を先に話してもらっていいか

な？リユーさん？シルさんにも後でここにいる理由を話してもらってもいいですか？」

「もちろん大丈夫ですよ？シル？」

「うん！今はちよつとベルさんをからかっただけ。大丈夫だよ！」

僕の求めにリユーさんは即座に応じてくれると共にシルさんは二タニタと楽しそうに承諾する。

そうして後はリリ次第。

そのリリはリユーさんとシルさんの答えを聞いた上で何とも言えない複雑そうな表情を浮かべたまま僕の求めに応じてくれた。

「いいでしょう。ベル様がそう仰るなら、リリの口からきちんと言明しましょう」

リリはそう言うと、小さく息を吐いた上で話し始めた。

：その話には僕自身も聞かされたリリの覚悟も含まれている。

：神様を通じて事情を伝えてもらうことで無意識に僕が避けようとしていたリリの覚悟を。

それを僕は察せずにはいらなかった。

「：ベル様はリユー様とお付き合いなさって、これからは『竈火の館』を離れて家を借りてそこにお住みになる…でしたか？全てヘステイア様とベル様からお話を聞き、ファミリアの皆さんは納得なさいました。もちろんリリもです」

「なのに今ここにいるのはどうしてですか？アーデさん？まるでベルさんに未練があつて口を挟もうとしているようにも見えますよー？」

「シツ：シル！？あなたは何を言つて…！」

：意地悪そうな笑みを浮かべてリリに尋ねるシルさん。

その言葉は言つていい言葉のはずもなくリユーさんは信じられないといった様子でシルさんを止めようとする。

だがリリがそんな大したこともない言わば挑発に乗るはずもなかった。

リリはキツとシルさんを睨みつけると、はつきりと言った。

「なんですか？まさかりリリがベル様とリユー様の仲を邪魔するつもりも思つてるんですか？リリはそんな情けない真似をするつもりは毛頭

ありません。リリがベル様に同行したのは、ベル様が間違った判断をしないか監視するためです」

「どうしてアーデさんはベルさんが間違った判断をする前提なんですか？それはまた変ですよね？」

リリのキツパリとした反論にもシルさんは意地悪そうな笑みを崩さず問いかけるシルさん。

確かに僕が間違った判断をする前提なのは変だと事前に指摘されていた僕自身も思った。

：だがその次に告げたりりの根拠はまさに僕の心当たりのあることであつたから、僕も納得せざるを得なかつたのだ。

それをリリは再びリユーさんとシルさんの前で口にした。

「だって…最近のベル様はいつもリユー様第一ではないですか？それこそベル様自身よりもリユー様を優先しているように見えます。それは本当に正しいんですかね？」

「…」

「あつ…あー」

リリの言葉にリユーさんは複雑そうな表情と共に沈黙を保ち、シルさんはその意味を理解したかのような表情になつて続きの指摘をすることはなかつた。

それでようやく反論を封じられて済々したとばかりに溜息を吐いたりりは一瞬の間を置いた後に続きを話した。

「…まあそれは一応いいんです。ベル様がリユー様とそういう関係を望んでいるなら別に。リリにとってはベル様の幸せが第一ですから。その幸せをリユー様もたらすと云うならば、リリは邪魔などしません。むしろベル様が幸せになるための手助けを惜しむつもりはありません。ですがこの際です。リユー様。この場ではつきりとリリの考えを言わせて頂きましょう」

「なつ…何でしょうか？」

リリは自らの考えを述べた上で姿勢を正しリユーさんに視線を向

ける。

そんなリリの真剣な様子にリユースさんもまた姿勢を慌てて正し背筋を伸ばして応じる。

そうして告げられたのは僕さえも聞かされていない衝撃の宣言であった。

「もしリユース様がベル様の幸せの障害になるならば…リリはその障害を如何なる手段を用いても排除します。例え仮にベル様に恨まれてでも、です」

「え…ええええ!?ちよつとりり!?何を言ってるの!?リユースさんを排除するなんて…」

「ベル様は黙っていてください。これはリリとリユース様の間で取り決めるべき契約です。そう思いませんか?リユース様?」

「…アーデさんの仰る通りかと」  
「うっ…ううう…」

…つい最近にも同じような展開を迎えていたことを思い出す僕はそれ以上介入するのを控えざるを得ない。

また同じようにリユースさんと仲違いしても何の意味もないから。

…恐らくリリはリユースさんが僕と一緒にいる覚悟を試しているのだと…思う。

そしてそれにリユースさんがリリの納得してくれる形で応じてくれるのを信じるしかない。

そう半分諦めつつリユースさんとリリの会話を眺めるしかない立場に僕が追い込まれる中二人の話は進んでいく。

「リユース様?もし恋人としてベル様のことを考えているなら、これぐらいの契約当然できますよね?」

「つまり私とアーデさんがベルのためにする契約…なのですね?」

「ええ。ベル様の前で行うのは身勝手かもしれませんが、ベル様の幸せを守るためのリリとリユース様の契約です。リユース様のお言葉次第ではリリはベル様だけでなくリユース様にも力添えします。どうで

「しょう？リユー様？」

リユーさんにとつても決して悪い訳ではない条件まで付けて言葉巧みにリユーさんに契約を持ちかけるリリ。

…僕としてはリユーさんが幸せなら僕も幸せだから何も問題ないのに…と思いつつもリユーさんがどう返事をするのか気になりリユーさんをついつい凝視する。

そのリユーさんは一度目を閉じ大きく深呼吸をしたかと思うと、ゆっくりと見開き決然とした表情でリリの求めに応じていた。

「…このようにベルに迷惑をかけてばかりの身でアーデさんにとつてはさぞご不愉快でしょうが、私もまたベルの幸せを願う身です。…もし私がベルの幸せの邪魔になると判断したならば躊躇なく排除してください。…恐らく私はもう自らの意志で退くことはできない…それくらいにベルの存在が大きくなってしまっているのです、誰かの力を借りざるを得ない可能性が高い。アーデさんがベルの幸せのために最善を尽くしてくれるのが私の願い。アーデさんの契約を何の戸惑いもなく受け入れましょう」

「リユツ…リユーさん!？」

「はああああ…」

リユーさんの回答は案の定というか僕としては聞きたくない言葉。

僕の幸せをリユーさんが大切に思ってくれてるのは当然嬉しい。

だがそこまでの言葉を僕が求めているはずもなく。

僕は悲鳴に程近い声でリユーさんの名前を呼んでしまう。

そしてシルさんも同じようなことを思ったのか大きくわざとらしく溜息を吐く。

そんな不平一杯の反応が周囲で起こる中リリは満足そうに頷いて二人の間で契約が成立したことを宣言した。

「なら契約成立ですね？リリはベル様のためにもリユー様がベル様の幸せの障害にならないことを心から願っています。リユー様もリリも今取り決めた契約を決して忘れないようにしましょうね？」

「ええ。当然です。全てはベルの幸せのために」

…何だか二人の間では納得のいく結論に辿り着いたらしくリリも

リユーさんも満足そうな表情を浮かべている。  
が、除け者になっっている僕とシルさんはあっさり納得できる訳もなく。

一瞬の沈黙が訪れた際にシルさんは火を吹くように話し出していた。

「もうっ！リユーが契約すると言うなら、私もベルさんと契約します！私にとって一番大事なのはリユーの幸せです！ベルさんもそうですよね！」

「そっ…そんなこと言うまでもないですよ！」

「じゃあベルさんがリユーの幸せの邪魔になったらミアお母さんに埋めてもらいます！それでもいいですよね!？」

「とっ…当然です!?!リユーさんの幸せのためならそれくらいの覚悟は当然してます！」

「なら私とベルさんの間でも契約成立ですね！」

…勢いで恐ろしい契約をシルさんと結んでしまった…気がする。

とは言ってもリユーさんを幸せにしたいという思いには欠片たりとも偽りは無い。

僕がみんなの力を借りつつもリユーさんを幸せにすれば何の問題もない。

だから僕はシルさんが有言実行しそうだとか心の何処かで戦々恐々としつつも後悔だけはすることはなかった。

そしてシルさんはリリが話し終わったのを受けてか流れるように自分の事情も笑みを絶やさず話し始めた。

「あ、ちなみにリユーから事情は全部聞いてます。私はリユーの親友としてリユーが幸せになれるように手伝います！それで新居探しもリユーとベルさんの愛の巣が出来る限り素晴らしい物件にできるといいなーって思っつて、リユーに頼んで参加させてもらいました！」

「なっ…あっ…愛の巣!?!シルは一体何を言ってるのですか!？」

「そのままの意味だよ?リユー?リユーとベルさんがイチャイチャして愛を育む場所。あ、ちなみにベッドはもちろんベルさんと一緒だよね?」

「確かにそれは是非とも…ではなく!?!私は決してイチャイチャするた  
めだけに新居を探す訳ではありません!?!」

「…リユー様っていつもこんなデレデレしてましたっけ?リリの記憶  
では先程までのようなもつと凛々しいお方だったような…」

「…あは…あははは…」

シルさんのからかいにすっかり顔を赤くして動揺するリユーさん  
にリリは白い目を向けてそう呟く。…それに僕は返す言葉もない。

…僕のことの時だけ…なんて独占欲の垣間見えることを言ったら  
リリに引かれそうだし、自惚のような気もするから胸の中にしたま  
まにしておく。

そんなことはともかくシルさんはとんとん拍子に本来の相談の内  
容である新居探しについてに話をすり替えてしまっていたのは確か  
であった。

「…はい。お戯れはそれくらいに。そろそろ本題の新居探しに本格的  
に話を進めましょう。ベル様?リユー様?何かお二人の中でお考え  
の条件はあるのですか?」

シルさんがすっかりリユーさんを揶揄うのに専念し始めたのを見  
て、仕切り直すようにそう言うリリ。

リリはそのままリユーさんと僕の考えを尋ねてきた。

が…

「…リユーさんと安心して二人で住める場所…かな?」

「…ベルと一緒に住める周囲の目に触れにくい場所…でしょうか?」

「…まさか終わりですか?お二人とも…?」

早々に言葉が詰まったリユーさんと僕にポカーンとした表情で愕  
然とするリリ。

…大したことは考えていなかった。

ぼんやりと条件というものは少しは見えても場所はどこがいいと  
かどういいう立地条件がいいとか何が必要かなどはさっぱり分からな  
い。

そんな実情を早々に知る羽目になったリリは盛大な溜息と共に  
言った。

「お二人がどんな条件の新居をお望みなのかさっぱり分かりませんが、少なくともお二人の考えをまとめると安全かつ周囲の目に触れにくい場所…ですか？どこがありますかね？」

「うーん…目に触れにくい、ならダントツでダイダロス通りですよーでも安全かと言うとすつごく難しいです」

「治安の悪さはお二人にとってのステイタス的には問題なくても、未だに残っているに違いないリユー様に恨みを抱く人にリユー様の存在を知られる危険はありますからねー今のような多くの方の注目は集めないでしょうが、そこはかなり問題です」

「じゃあオラリオの中でもちよつと町外れの城壁の近く辺り…がベストかな？どう思います？アーデさん？」

「シル様の仰ることがベストですね。その線でまずは考えてみましょう。あと何かありますかね？お二人とも？」

「…リユーさんと僕をすつかり放置して話を進めていくリリとシルさん。」

本当に頼もしいなーこの二人は。なんて他人事のように考えていると、二人の間の話は終わったらしく再び僕とリユーさんに話が振られる。

だがすぐにリリに視線を向けた僕と違ってリユーさんはリリではなくあらぬ方向に視線を向けていて、リリの言葉は聞こえていないかのよう。

なぜリユーさんがそんな風になっているのか気になった僕はリユーさんの視線の向く先に振り返って見る。

そしてその視線の先にいたのは…

「…シャクティ？」

僕がシャクティさんを認識するのとリユーさんがその名前を呟くのはほぼ同時だった。

シャクティさんが何故か『豊穡の女主人』を訪れている。

それもあまり芳しい表情ではなく、である。

その嫌な予感を避けられない状況が視界に映る中、リユーさんは即座に席を立っていた。



そしてシャクテイさんに近寄ったりリユーさんはすぐさま尋ねて  
た。

「どうしました？シャクテイ？あまり顔色がよろしくないようですが  
…」

「ああ。お前か。丁度いい。少し話を聞かせてくれないか？今聞き込  
み調査をしている所で誰かから話を聞かなければならなかったのだ」  
「…一体何事ですか？何か事件でも？」

リユーさんが早々にシャクテイさんの話に関心を抱き始めている。  
それも何かしらの『事件』では？という関心か期待か心配かも分か  
らないリユーさんの言葉を添えて。

まずい。

何かまずいことになる。

僕はそう直感する。

リユーさんは何か『事件』があれば…誰かが困っていることが分か  
ればそれを見過ごすことはできない。

それを知る僕は僕達の身に『事件』が起きてしまうのではと危惧が  
止まない。

だがそんな僕の危惧を他所にリユーさんとシャクテイさんの話は  
進んでしまっていた。

「ああ…残念ながら事件だ。お前も知っているかもしれないが、最近  
連続窃盗犯が出没している。それも推定で第三級冒険者でただの窃  
盗犯ではない。…我々も未だに足取りも正体も掴めていないのだ」

「第三級冒険者…ですか？」

僕を置いて二人の話は進んでいく。

この時のリユーさんはまだ気付いていなかったのかもしれない。  
だが僕はこの時既に漠然と気付いていた。

…これから僕達の身に『事件』が起きてしまうということ。

そしてそれを避けられなかった僕自身を呪うことになるかもしれ  
ないということ。

## 過ぎし日の正義の軌跡を辿って

「はあ!?!リユー様はその連続窃盗犯とやらを捕まえるためにシャクテイ様に協力なさるおつもりなのですか?」

「…ええ。それが良いかと私は考えています」

…リユーさんとシャクテイさんによる僕の不安を駆り立てる邂逅からしばらく。

僕の嫌な予感は見事に的中し、リユーさんがシャクテイさんに協力するという結論に至った今。

静かに自らの出した結論を告げたりユーさんにリリは衝撃のあまり叫び声に程近い声色で確認をしていた。

当然リリがこんなにもリユーさんの結論に衝撃を受けているのはリユーさんの立場を理解しているから。

だからこそリリは張り上げかけた声を抑え僕達にしか聞こえないくらいまで声を落としてくれて。

その立場を考えればリユーさんの結論は…

「リユー様はお忘れなのですか?リユー様は【深層】命を落としたことになっているのですよ?なのに自らノコノコと注目を集めかねないことをするなんてどうかしていませんか?リリはそのような面倒ごとに関わるのは絶対反対です。なぜ危険を自ら招き寄せるような真似をしなくてはならないのですか?」

リリは厳しくリユーさんの結論の異常さを咎める。

…今回ばかりは僕もリユーさんの擁護はできなかつた。

リリの言うことは至極真つ当。リユーさんの結論の方がおかしい。

今はまず周囲の注目を集めない辺鄙な場所に新居を用意して落ち着く…それがついさっきまでのリユーさんと僕の間で共有していた考えだったはずなのに。

…今のリユーさんは…違う。

今のリユーさんは過ぎし日の正義…<sup>希望</sup>

【アストレア・ファミリア】にいた頃の正義に<sup>希望</sup>すっかり囚われてしまっ

ていた。

だからリユーさんには迷いが無い。

その当時の「アストレア・ファミリア」の方々と共に行った行動が正しかった。

そして過去の一時期に犯してしまった過ちを償わなければならぬ。

恐らくそんな考えでリユーさんの頭の中はいつぱいなのだろう。

リユーさんは自らの信じる『人助け』という正義<sup>希望</sup>を遂行することに一切の疑問を抱いていない。

それはリリの厳しい咎めにも動じず鋭い視線でリリを見返し、躊躇いもなく即座に応酬したことから明らかだった。

「その作られた設定を覆すためにシャクテイへの協力が必要なのです。今回の協力での功績によれば私のオラリオにおける立場を正式に回復することも検討してくださいとのこと。この機会を逃すのは望ましくありません」

「べつ…別に平穩に暮らせればオラリオでの立場なんて平穩に暮らせれば…」

「ええ。ベルは確かに私が自らの立場に関して迷惑をかけてもいいと言ってくれました。ですが先程の新居を考える際も検討の障害になったように私の不安定な立場はこのままで放置していいとは思えません。放置すれば不測の事態を招く恐れもあると私は考えます」

「それは…ないとは言えませんが…それでも…」

「まず第一にその連続窃盗犯の行いによって困っている方々が数多く存在する。そしてその困っている方々の手助けをするだけの力と機会が私にはある。なのにどうして見過ごすことができるでしょうか？ その方々のために尽くすのが道理というものでしょう。それに…」

「それに何ですかあ？」

淡々と反論してくるリユーさんにリリは最後の辺りは投げやり気味に言う。

…今のリユーさんにはリリの危惧は届かない…だろうなあ…と

遠い目で見つつ僕は続く言葉をぼんやりと予想する。

その言葉にはきつと今リューさんの考えている正義希望のことが含まれているのだろう…という僕の予想はあっさり的中することになった。

「…私はかつての罪の償いたい。そして私の仲間達…」アストレア・ファミリア」の正義希望は…まだ実現できていません。その実現の一助を私は為さなければなりません。彼女達の最期とその遺志を知るのは私だけ…ですから」

「リュー…様…」

「アーデさんはこんなことを言えばお笑いになるかもしれませんが。ですが私は夢で彼女達に言われたのです。私には私とベルを結ぶ愛以外に正義希望が存在する、と。彼女達が手に入れることのできず今の私には手に入れることができる正義希望…それは『人助け』を為した先にあると考えています。私は…今は亡き彼女達に代わってその正義希望を手に入れなければなりません」

「…」

…リューさんの今は亡き仲間の方々の話を持ち出されてはリリもこれ以上何も言えない。

リリは不本意さを隠せていない表情を浮かべつつもボソリと言った。

「…リュー様のお考えは分かりました。ではベル様はどうお考えですか？」

「…ベル。私の我が儘になってしまいましたが…ご協力頂けませんでしょうか？」

「…だ、そうですよ？ベル様？」

リリの僕への確認に合わせてリューさんは何うような視線を僕に向けて協力を頼む。

一方のリリは僕に視線を向けることもなく。

…それは僕の答えを察してしまっているからだろう、とその態度から理解してしまう。

…ごめん。リリ。僕は…リューさんの思いを尊重したいから。

そう心で謝りながら僕は最初から出ていたと言っても過言ではない答えをリユーさんに告げた。

「…もちろん僕は協力しますよ？リユーさんのためならなんだからと決めてますから」

「…はあ」

「すみません。ベル。そしてありがと…」

「ただ」

僕の回答にリリが大きな溜息を吐く一方リユーさんは頭を下げてお礼を言おうとする。

が、僕はそれを遮った。

その理由は…

一言だけ…

一言だけリユーさんに言っておかなければならないことがある…そう思ったから。

前にも思った。

それは仲間の方々の正義希望であつて、リユーさんの正義希望ではないのは、と。

それはリユーさんの幸せの障害になりかねない不必要な正義希望なのではないか、と。

僕はそんな心に燻る懸念を言葉にせずにはいらなかった。

「…ただ僕は本当は反対です。リユーさんが僕に協力を頼んでくださったので賛成する…僕がリユーさんのそばにいる機会を残してもらえるから賛成する…ぐらいの意味しかないことを覚えておいてください」

「それは…一体どういう意味ですか？」

「つまりは…そのリユーさんの判断がリユーさん自身の幸せの障害になりかねないと思う…ということですよ。…そうなるのを防ぐために僕が常に同行することを条件としてお願いしたいです。それなら僕も少しだけ安心できるので。その点受け入れてくださいますか？」

「…ベルに協力を求めている以上それは是非お願いします」

僕の条件にリユーさんは一瞬僕が本来反対であつたと言つたため

か戸惑いを見せるもその条件を承諾してくれる。

だが本来は反対な以上承諾してくれることも期待していた訳はな  
く。

すつかり過ぎし日の正義<sup>希望</sup>で頭の中がいっぱいのリユーさんにも少  
しは僕の言葉が響いてくれただろうか…

と僅かながらに期待するもリユーさんから僕の期待する答えは得  
られず。

リユーさんの意志は揺らがない。

リユーさんは自らの信じていた過ぎし日の正義<sup>希望</sup>に背を向けられな  
い。

『人助け』という正義<sup>希望</sup>よりも『リユーさん自身の幸せ』という正義<sup>希望</sup>を優  
先することができない。

それは僕からすれば最初から分かりきっていたことであつた。

「…それで？なぜずっとシル様は黙っておいでなのですか？…シル様  
？」

そうして僕とリユーさんの話がまとまったのを見て、リリがシルさ  
んに話を振る。

…そういえばリユーさんがシャクテイさんとの話を終えて席に  
戻ってきてからシルさんは一言も話していない。

そのシルさんは心ここにあらずと言うような表情で何を考えてい  
るか分からない。

だがその表情はリリの二度目の呼びかけによって崩され、シルさん  
は打って変わって笑みを浮かべていた。

「あつ…ああ。ごめんなさい。ちよつと考え事を…えつと…それで  
リユーの連続窃盗犯を捕まえるかどうか…ですよね？いいんじゃないや  
んですか？リユーとベルさんが問題ないなら」

「…シル様も反対なさらない…と？」

「ええ。それがリユーが望ましいと思う結論なら、私は反対しません  
よ？」

シルさんは特に問題意識もないかのように笑みを崩さないまま賛  
成した。

だがその賛成には理由が添えられず。

：僕の勝手な思い込みかもしれないけど、何か言わずにいるのでは…？なんて思っつてついついシルさんをじーつと見つめてしまう。

そんな僕の様子にあっさりど勘付いたシルさんはニヤリといやいな笑みを浮かべて呟いた。

「それにもし問題が起きたとしてもベルさんが何とかしてくれますよね？というか何とかしてくれなきゃリユウの恋人として話にならないと思いますよー？」

「…それもそうです。そうです！僕がリユウさんのそばにいる限り万が一なんてあり得ません！だからリリは何にも心配する必要なんてない！」

「…ベル。頼りにしてます」

「はあ…そんな精神論で何とかなればいいんですけどねえ…」

シルさんの煽りに僕は威勢よく応じる。

それにリユウさんは僕の示した覚悟に感極まったような表情で僕に期待の言葉を贈ってくれる一方リリはもうダメだと言わんばかりの諦め顔。

：正直言っつてリリの不安はまさに正論。こればかりは精神論で解決できる代物じゃないかもしれない…：そう僕の直感も告げている。

だがリユウさんの方は僕の協力を得られることにさらに自信を得てしまったかのよう。

：リユウさんを支えるためとは言え、こういう一言がリユウさんを止められない要因になってくるのかも…：なんて心の何処かで自嘲が生まれている気もしたが、気付かなかったことにする。

そうして結果三対一でリユウさんの結論に賛成という流れになり、ただ一人正面から反対してくれたリリも諦めてしまったことでリユウさんの結論がそのまま実現する、という運びになることは確定となつたのは明らかであった。

それを感じ取つたのは僕だけでなくリユウさんもだったようであり、リユウさんは間を置かず確認を取つた。

「…ではシャクティには私とベルが協力することを承諾したことを後

で伝えておきます。シヤクテイはまだミア母さんにも話をしては  
はずなので伝える時間はあるでしょう」

「ちよつとリユー？リユーとベルさんだけじゃなくて私もアーデさん  
もだよ？忘れちゃダメなんだからね！」

「…お待ちを。どうしてシルまで…」

「あーさては連続窃盗犯の調査をすると見せかけて本当はリユーはベ  
ルさんとイチャイチャしたいだけだったりー？それだと私がいると  
邪魔だもんねーベルさんと二人の共同作業でラブラブしながら連続  
窃盗犯をボコボコにしたいんだもんねー」

「ベルと二人でイチャイチャしながら…なるほどそれはそれで…つて  
違います!!私はただ私の正義のために人助けをしたいだけで!!」

…と言いつつも直前に凄く僕とイチャイチャすることに心揺らい  
でいませんでした…？リユーさん…？

表情がなんというか…凜々しい表情から完全に蕩けていた気が…  
現にリユーさん凄く慌ててるし…

なんて心の中でツツコミを入れながら傍観しているとシルさんは  
リユーさんを手玉に取るように話はポンポンとシルさんの望む方向  
に進められていく。

「じゃあ私とアーデさんがいても問題ないよね？情報を集めるなら人  
は多ければ多いほどいいもん。そうでしょ？リユー？」

「それも…そうですね…」

「リユーとベルさんがいる時点で私に危険が及ぶはずもない。そして  
リユーとベルさんがイチャイチャし過ぎて暴走した時の抑え役にも  
なれる。どう？私達がいた方がいいんじゃないかな？」

…シルさんの言うようなリユーさんと僕がイチャイチャし過ぎて  
暴走するかはともかく。

…とかイチャイチャしながら暴走するって何？と頭の中で  
ツツコミを入れつつも、シルさんの言葉には僕も一理あると思った。

…場合によっては僕だけでは判断を誤るかもしれない。

正直これからリユーさんが取り組もうとしている情報収集とかに  
僕は疎いと思うし、冷静に第三者として僕達の行動が危険に近付いて



いないか判断してくれる人はいた方がいい気もする。

リユーさんがどう判断するか分からない以上僕が意見を出すのは後にしようと考えつつも僕はシルさんの提案に賛成だった。

「確かにシル様の仰ることには一理あります。リユー様もベル様も何をしでかすか正直分からないので心配です。リリもお目付役で同行したいと思います。宜しいですよね？リユー様？」

そしてリリも僕と同じようにシルさんの提案に賛成のようだが：リユーさんと僕が何をしでかすか分からないってどういう意味：？

そんなツツコミを僕が心の中で入れる一方シルさんがリユーさんの顔をじーつと覗き込みつつ念押しを加えた。

「アーデさんも賛成みたいだよ？リユー？どうする？どーしてもベルさんと二人でイチャイチャしながら調査したい？それなら私は止められないなーリユーはベルさんとどーしてもイチャイチャしたいんだもんねー」

その念押しにリユーさんは困惑した表情でしばらく黙り込む。

：恐らくリユーさんはシルさんを多分巻き込みたくないんだろう。そんな予想を立てるもリユーさんはそれを口にしなない辺り何か別の考えもあるのかもしれない。

リユーさんの考えは僕には分からないわけだが、シルさんにずっと見つめられるという半分拷問かのような時間にリユーさんは耐えられとも思えず。

リユーさんは目を閉じて大きく溜息を吐くと、僕を含めたみんなの要望に沿った答えを出してくれた。

「：分かりました。お二人にもご協力お願いします。わっ：私はっ！あくまで私の正義のために困っている方々のお力になりたいのであって、ベルとイチャイチャしたい訳ではないのですから！：お二人のご協力を拒む理由は最初からありません」

：明らかに動揺して感情の起伏がおかしくなっているリユーさん。

：うん。分かっています。リユーさんは困っている方々をお助けしたいんですもんね。僕とイチャイチャするのは二の次ですもんね。

：と自分で改めて反復すると心にグサグサくるなあ：と、一人悲し

くなる僕。

と思いつつも僕とのイチヤイチャと人助けの間でリユーさんが揺らいでいるのも垣間見えているので少しだけ悲しみは取り除かれるけど…

…結局は『人助け』の方が優先されている訳で僕の悲しみは完全に消えることはない。

リユーさんの愛を受け取れる見知らぬ人はいいなーなんて何の意味もない嫉妬まで僕はしてしまう。

ただその一方で僕とイチヤイチャしたくて人助けをする訳ではないことを証明するためにシルさんの提案を飲まざるを得なくなったリユーさんはシルさんの手のひらで転がされているだけのようないきも。

…逆に言うとりユーさんをこうも意のままにしておきながらリユーさんがシャクテイさんに協力することを反対しなかったのは奇妙だと僕は勝手に思ってしまう。もちろんこれは僕が今回の協力が望ましくないと思っているがための違和感なのは分かりきっているのだが。

そんなことを一人考えているうちにもリユーさんは僕達三人の協力の確約を取れたこともあつてかどんどんと自らの考えをまとめていき…

「さて…シャクテイへの協力が決まれば、新居に関しても自ずと条件が生じてきます。何でも「ガネーシャ・ファミリア」が窃盗事件の多発する区域を洗ってみた所ダイダロス通りの周囲が妙に発生件数が多いとのこと。よってダイダロス通りに新居を構えるのが望ましいと思われれます」

「…リユー様？先程までの話はすっかりお忘れで？ダイダロス通りより城壁の近くの方がいいと…」

「ああその点はお気になさらず。正確には新居と言うより仮の拠点と言うのが相応しいかと考えています。まずはダイダロス通りに拠点を構えた方がいいということですよ」

「…あれーリユーはベルさんとの愛の巣を築くための新居を探してい

たのであつて、仮の住む場所を探していた訳ではないよな……」

：こうして僕のリュウさんと二人で過ごすための新居を探すという計画はリュウさんが人助けをするための拠点を見つけると言う目的にすり替わっていった。

リリとシルさんの反応から明白な通り：結局シヤクテイさんと話す前の相談の内容がリュウさんの独断で吹き飛ばすという芳しくない結果ももたらされた。

リュウさんがそれを望むなら：それでいい。

リュウさんにとつて正義希望が一番大切なのは言うまでもない。

こんな風に心に正義希望を宿しそのために生きるリュウさんは一番生き生きとしていて、カツコよくて、その瞳は鋭く輝いているようにも見える。

僕はそんなリュウさんが大好きだ。

だが：僕は気にならずにはいられない。

そして今のリュウさんに問わずにはいられない。

だがリュウさんに直接問い掛けることはできず。

結局僕は心の中でリュウさんに問いかけるしかなかった。

それは本当にリュウさんの本当の正義希望なのですか？

## 正義は何処に

『豊穡の女主人』でのシルさんとリリを交えたリユーさんとの相談から一週間。

物事はリユーさんの思うがままに進んでいた。

ダイダロス通りに調査のための拠点を構えて。

リユーさん、僕、シルさん、リリの四人での聞き込み調査は順調に進んで。

リユーさんは確かに今調査の中で探している連続窃盗犯に着実に近付いていた。

それはリユーさん的には望ましかつたに違いない。

その代償にリユーさんはこの一週間休みなくダイダロス通り中を飛び回っていた。

ある時は酒場などでの聞き込みに徹して。

またある時はシャクテイさんと情報交換をして。

その働きぶりは四人の中で一番だったのは間違いない。

もちろん僕は常にリユーさんのそばにいた訳だけど、僕なんて半分のだけの付き人兼護衛ぐらいの役割しか果たせてないから、リユーさんの働きには到底及ぶはずもない。

僕はリユーさんと一緒にいることができればそれでいい。

だからどれだけリユーさんと一緒に働いて疲れても、それは心地よい疲れでしかない。

リユーさん自身着々と成果が上がり、連続窃盗犯に近づいていくことに大きな達成感を得ているよう。

今のリユーさんはとても充実した生活を送れているように見える。

その充実したリユーさんの生活に僕も貢献できていると考えると僕も充実した生活を送れていると感じることが出来る。

今のリユーさんの瞳は…確かに輝いていて…そして懸命に動く姿は僕の大好きなリユーさんの姿そのものだった。

…だが日に日に疲労を蓄積していくリユーさんを見ることになるのは話が別。

…疲れを必死に隠すリユーさんの姿は僕自身に蓄積される疲労とは比較にならないほどの辛さを僕の心に与えた。

その疲労の蓄積も当然と言えば当然。

たったの一週間で「ガネーシャ・ファミリア」の調査の成果を上回ったという時点でどれだけ睡眠と休息の時間が削られているかは説明する必要もないかもしれない。

リユーさんは充実した生活を送ると同時に常に張り詰め過ぎた生活を送っていたのだ。

そしてその張り詰め過ぎた生活はいつか破綻する…

僕はそう直感していた。

だがリユーさんの充実した様子を見てしまうとどうしても止めようという勇気は生まれず。

もう一週間が経ってしまった。

…そろそろリユーさんに自制してもらわないと…そう何度目か分からない決心をしたこの日。

リユーさんと僕の転機となる事件は起きた。

??

「ではベル。今日も行きましようか？」

「…はい。行きましようか」

そう僕に確認をするリユーさんは粗末なフード付きのロングケープにロングスカートをその身に纏っている。

このスタイルがリユーさんの潜入調査の時のお決まり…らしい。

確かにこのスタイルならダイダロス通りにどこにでもいそうな凄く可愛くてついつい僕の視線が釘付けになってしまうような美人の…

…いや、そんな人リユーさんしかいないからどこにでもはいないか。

などという訳の分からないことをリユーさんの姿を見ながら考え

たのは半分は現実逃避のため。

今日こそリユーさんに休んでもらうように言わないといけない。

…だが話す決心がどうにも付かない。

今日の前にいるリユーさんは今日も調査を進めようと凄く張り切っている。

そんなリユーさんの闘志に水を差すことは僕には…容易にはできない。

その結果今日もリユーさんを止めることができない流れになっていき、時間だけが過ぎていく…かに見えた。

「今日は手始めに近所の酒場で軽食を取りつつ聞き…うつ…うつ…」

「リユツ…リユーさん？どうしました？」

確認をしながら玄関のドアに手を伸ばそうとした途中で唐突に不自然な声を漏らすリユーさん。

ドアへと伸ばされるはずのリユーさんの手は口元を押さえ、リユーさんの歩みも止まる。

その不自然な身振りの原因を掴めない僕は一瞬戸惑うもリユーさんへの心配から距離を縮めようとする。

だがリユーさんはスツと手を上げ僕が近づくのを制止した。

「…大丈夫です。…少し…欠伸をただけです」

…違う。

欠伸ではそうはならない。

欠伸では…ない。僕はそう確信した。

リユーさんは制止すると同時に僕から口元を覆ったまま顔を背けた。そのためリユーさんが口元を隠した理由は分からない。

だがその瞬間垣間見えたリユーさんの顔色は…明らかにおかしかった。

さつきまでとは打って変わった歪んだ表情でどこか…気分が悪そうだった。

…リユーさんは…どこか体調が悪い？

そう予感した僕は即座に尋ねていた。

「あの…リユーさん？もしかして気分が悪かったりしませんか？」

「ちっ…違います。気分が悪くなどありませんっ」

僕の疑念を即座に否定するリユーさん。そのあまりの反応の早さに僕は…逆に疑念を強めた。

…リユーさんは何かを隠そうとしているのではという疑念を抱いたのだ。

僕はその疑念の真偽を確かめるべくリユーさんとの距離を縮める。

「…本当ですか？本当は気分が悪いだけでなく体調が悪かったりしませんか？本当に大丈夫ですか？」

「ベルツ…心配は不要です。私の体調は万全ですからっ…」

「本当に…本当にですか？本当ならまず僕と目を合わせてくれませんか？」

僕がリユーさんの顔色をもう一度確かめるべくリユーさんの顔を覗き込もうとする一方リユーさんは僕から目を背け続ける。

それはまるで僕の疑念から逃げていくかのよう。

余計に疑念を強める僕から逃れようとしているかのようなリユーさんの攻防が続く。

そんな時リユーさんが開けることのなかった玄関のドアが唐突に開かれた。

「あれ？鍵開いてる…ってリユーとベルさんは何をやってるの？」

「シツ…シルさん？」

その声の主はシルさんであった。

…ただどうして？朝からシルさんが来ることなんてこれまでなかったのに…

ただでさえリユーさんの体調に関して疑念で頭が一杯なのにシルさんが現れたことによつてまた一つ疑念が増える。

…今日は一体何が起きてるんだ…？順調に行きすぎた反動で変なことでも起きているのか？なんて心の中で愚痴る。

そんな愚痴を心に秘めながら僕はシルさんに視線を向けることなくりユーさんとの攻防を続けつつシルさんにまたもや増えた疑念を

尋ねていた。

「シルさん？今日はどうなさいました？何か問題でもありましたか？シルさんには今日も聞き込み調査をお頼みしてあって、夕方に情報共有する予定と昨日取り決めてあったはずでしたが」

「あーそれはね？何となく朝のリユーとベルさんはどんな風に過ごしてるのかなーって気になってお邪魔しようかなーって思ったんだけど…いつもこんな風にイチャイチャしてるの？」

「イツ：イチャイチャ!？」

シルさんの答えに今の今まで攻防を繰り返していたはずのリユーさんと僕の声が重なる。

リユーさんと僕は今イチャイチャしてる…のか？なんて不思議に思っているとシルさんは続けて言った。

「え？今ベルさんがリユーにキスを迫っててリユーが照れて避けちゃってるとかそういう状況じゃないの？私から見たらどう見ても二人はイチャイチャしてるように見えるなーベルさんがリユーの顔を覗き込んでリユーが口元を押さえてベルさんを避けてる感じ…まさかもうキスした後？あ、じゃあ私お邪魔虫だったねーごめんなさい」

なっ…なるほど…周囲から見ればそう見えるのか…

じゃない!?

シルさんは言いたいことだけ言い終えるとそのままスーツとドアを閉めて玄関に入りもせずには帰ってしまおうとする。

だがリユーさんを問い詰めている真っ最中のシルさんの登場は大きな力になると予感させた。

…シルさんならリユーさんから聞き出せるかもしれない。

そう思った僕は即座にシルさん呼び止めていた。

「シルさん！待ってください！それは誤解なんです…それはともかく聞いてください！ちよつとリユーさんの体調がおかしいかもしれないんです！」

「ちっ…違います！わっ…私は…」

僕のシルさんへの呼び止めと共に伝えたリユーさんの体調が悪い



かもしれないと言う予想。

僕の呼び止めにリユーさんは慌ててシルさんが戻ってくるのを防ぐためか反論をしようとする。

だがその言葉は続かなかった。

「うっ…うっ…うっ…うっ…」

「リユーさんっ?!リユーさん?!」

リユーさんから再び漏れる不自然な声。

その声と共にリユーさんは崩れるように蹲り、その動きを見逃すなど有り得ない僕も続くように跪く。

そうなれば流石にリユーさんも隠し通すことはできなかった。

口元を押さえるリユーさんの指と指の間からポタポタと漏れる液体。

その液体から漂う異臭に僕は察した。

リユーさんは嘔吐していたのだ、と。

「シッ…シルさん?!早く来てください?!リユーさん?!大丈夫ですか?!大丈夫ですか!?!」

「…リユー?リユー?!どうしたの!?!」

顔色が悪いなどという次元を越えたリユーさんの体調に僕は動揺の極みに達し、声を張り上げてしまう。

その声にシルさんは大慌てで玄関に入ってきてくれる。

僕はリユーさんの気分が少しでも良くなるように背を摩る一方、シルさんはリユーさんの髪を掻き上げその額に手を当てて体温を確認する。

「ちよつと…凄く熱い…リユー熱あるんじゃないの?」

「え?!熱!?!」

「ベルさん…どうして気付かずに調査に出かけようとしてたんですか?」

「いやっ…その…リユーさんが…いえ…今の今まで気付きませんでした。…すみません。僕の注意不足です」

シルさんの失望に満ちた視線に僕は言い訳を呟きかけるが、その言い訳は心の中に封じ込めた。

言い訳などする資格はない。そう思ったから。

…僕の失態だ。

いつかこんな張り詰めた生活が破綻する日があることに気付きながら僕はリユーさんを止められなかった。

リユーさんに疲労が蓄積されているのに気付きながらリユーさんに休息を求められなかった。

こんな風に嘔吐する姿を見せられるまで僕はリユーさんの体調が決定的に悪くなっていることに気付けなかった。

…僕自身の不甲斐なさを本当に呪いたくなる。

だが悔いてばかりでは何も進まない。

今はリユーさんのこの体調にどのように対処するか考えなければ。そう心に決める。

だがその決心の前には障害があった。

それは僕の不甲斐なさではない。

リユーさんであった。

「…だい…じょうぶです…少し…だけ…ですから…何の…問題も…ありません…」

リユーさんは口元を押さえつつも空いた手でリユーさんの背を摩る手を掴む。

そして途切れ途切れになりながらも言葉を紡いでいく。

僕の手を掴んだ意図はその言葉から明白だった。

…リユーさんはこの期に及んでまだ体調に問題がないふりをしようとしている。

どうして？

どうしてそうまでしてリユーさんは頑張り続けようとするんですか？

僕やシルさんがこんなにも心配してるのに。

リユーさんの体調はこんなにも悪くなっているのに。

胸の中に蟠りが溜まり続ける。

「何…言ってるんですか？問題だらけじゃないですか…」

「まさか…問題なんて…ありません…私は…私は…」

「リユーさん…」

「私は…行かなければ…」

リユーさんの名前を呼ぶ。

だけどその僕の声はリユーさんには届かない。

リユーさんの目をじっと見つめる。

だけどリユーさんは目を合わせてもくれない。

「今も…困っている人が…いる…彼女達が救おうとした…困っている人がいる…うっ…だから…私は…行かなければ…」

「リユーさんっ…」

吐き気を催しても尚諦めないリユーさん。

こんなにも僕が情けない声で名前を呼んでいるのに気付いてもくれないリユーさん。

どうして僕の声はリユーさんに届かない？

どうしてこんなにもリユーさんは聞き分けが悪い？

蟠りがどんどん溜まっていく。

「私は…彼女達の正義希望を継がなければ…だから…うう…うう…私は…こんな所で…止まらない…まだ何も…始められていない…」

今のリユーさんに見えているのは僕ではない。

今のリユーさんに見えているのはかつての仲間の方々。

リユーさんは彼女達の背ばかり追っついて。

リユーさんは僕どころか自分自身さえも見えていない。

…それは違う。

リユーさんの正義希望はリユーさんのためのもの。

リユーさんの人生を豊かにするためにあるのであって、リユーさんを苦しめるためにある訳では決してない。

リユーさんを苦しめる正義は…希望とは思えない。

それにリユーさんと僕は一つの正義希望を共有しているはず。

愛希望という正義を。

リユーさんの正義希望に仲間の方々は関係ない。  
リユーさんの今語る正義希望は：リユーさんの正義希望ではない。  
違う。

違う。違う。違う。

溜まる一方の蟠り。

いつまで経つてもリユーさんに届かない僕の声。

どうすれば届かせられる？

どうすればリユーさんに僕達の正義希望を思い出してもらえる？

考えた。

リユーさんが悲痛な声と共に届くことはない仲間の方々の背を必死に追う中で考えた。

どうしたらリユーさんが僕を見てくれるか必死に考えた。

どうしたらリユーさんが幸せに近づけるか考えた。

だが全くその方法を見出さない僕の無能な頭脳。

その無能さに僕は憤るしかない。

この無力感に僕はさらに蟠りを募らせる。

そしてその蟠りをリユーさんはさらに増長させる。

「私は…私の正義希望のために…」

こんなにも僕が悩んでいるのにリユーさんは僕の悩みになど全く気付かず独りよがりに呟き続ける。

そんなリユーさんの態度にもう我慢ができなかった。

もはや僕の心に溜まり続けた蟠りは：もう爆発を避けることができなかつた。

その爆発がこれまでリユーさんに遠慮して自らに課してきた遠慮を全て取り払った。

その爆発がこれまで僕にはできなかつたことを遂行するための力を与えた。

全てはリユーさんに僕の声を届かせるために。

僕は声を張り上げた。

「リユー!!!」

僕のリユーの名を呼ぶ怒鳴り声にリユーの表情が驚きと恐怖で歪んでいたのが分かった。

僕の抑えきれない怒りがリユーにも一瞬で分かったのだろうと思った。

だがそんなことに構うことなどできなかつた。

怒りに吞まれた今の僕にはもうリユーの言葉に聞く耳を持つ余裕などなかつたのだから。

「一回黙ってください。これ以上僕を不快にさせたら僕は何をするか分かりません」

「しかしっ…」

「リユーの正義は人助けにはない!! どうしてそんなことも分からないんですか!?! 【深層】で言ってくれた正義は偽りだったんですか!?! その正義より大事な正義がどこにあるって言うんです!?! 僕への愛も!! 僕達を繋いでくれている愛も!! 僕達二人の正義より大切なものがどこに!?!」

ようやく吐露できたずつと僕の心に溜め込んできた蟠り。

リユーが人助けにこだわり始めて以来ずつと溜まり続けていた蟠り。

この時ようやく溢れ出した。

そして遠慮がなくなった僕はもう止まることはなかつた。

「リユーが何を言おうと今の僕は絶対に聞きません。リユーは僕だけを見ていればいいんです。他の誰も見る必要なんてない。リユーは僕のもんです。人助けのためでも…絶対に渡さない」

僕はずつと言いたかつたことをようやく告げられた。

その言葉に心を動かされてかは分からないが、僕の手を掴んでいたリユーさんの手の力が弱まる。

その機を僕は逃すことはなかつた。

元々リユーさんの背に添えられていた手と共に蹲るリユーさんの膝の下に無理矢理腕を差し込むと、そのまま力任せに持ち上げた。

その目的は言うまでもない。

「シルさん。手が空いてないので戸締り等お願いします」

「うっ…うん。それでリユーとベルさんは？」

「アミッドさんの治療院へ診察してもらうためにリユーを連れて行きます」

「ベツ…ベル!? うぐっ…うう…」

「吐きたくなったら遠慮しなくて大丈夫です。リユーのなら僕は全く気にしません。それよりちゃんと僕の首に腕を絡ませてくださいね? 離したら許しませんから」

「ベル!? きやつ…」

僕の言葉にと言うよりは突然浮き上がらされた反射で僕の首にリユーが腕を絡ませたのを肌で感じた僕はその瞬間には走り出していた。

漏れたリユーの可愛らしい悲鳴にも構う精神的余裕は生憎僕には残されていなかった。

ドアを蹴り開けると、僕は玄関を飛び出す。

これまで冒険者として足の筋力を高めてきたのはこの時のためとばかりに走る僕。

僕は歩き慣れ始めたダイダロス通りの狭い街路を全速力で駆け抜ける。

向かうはアミッドさんの治療院。

リユーの体調の悪化の原因をアミッドさんなら明らかにしてくれる。

今尚吐き気を催すリユーを気に掛けつつ僕は無我夢中に駆けた。

掴むべき正義は過去に在らず

「診察は以上ですが…診察結果は後でお話ししましょう。今は…まずお二人の間で話を済ませてください」

「お気遣いありがとうございます。10分程で話をするのでその後にお越し頂けると嬉しいですよ」

「分かりました。クラネルさんのご希望通りに致します。それでは」

診察を終えた【戦場の聖女】デア・セイントはそれだけ言って病室を立ち去る。残されたのは私とベルだけ。

…今の私はベルへの後ろめたさで一杯で目を合わせられないような心境になっていた。

??

遡れば早朝のこと。

いつも通りベルと共に調査に出向こうとした私は実は寝起きすぐから気怠さを感じていた。

…連日の調査で疲労が溜まっているのは自分自身知っていた。実際の所は今日だけでなく数日前から気怠さぐらいは感じていた。

ただここ数日の中で際立ってその気怠さが酷かったのもまた事実。疲労の蓄積が原因、なんて言葉では流石に許容できないような気怠さだったのは自分自身の身体なので流石に分かる。

だがそんなことで私が調査をやめるなど考えるはずもなく。

私はその体調の不調をベルに隠して調査に向かおうとした。

だが唐突に催してしまった原因不明の吐き気はそんな私の目論見を見事に打ち壊した。

今までは気怠かろうと催すことなどなかった吐き気。

それは私の身体に限界が訪れていたことへの警告だったのかもしれない。

結果その吐き気は私の体調不良をベルに気付かせ、ベルに心配をかけてしまった。

その挙げ句私はそれでも尚調査にこだわり続けたためベルとの押し問答に発展し：

そうして招いてしまったのはベルの怒り。

：今まで見た中で一番激しい怒りだった。

ベルが私に有無も言わずに自らの意見を突き通すことは滅多にない。

そんなベルを引き出してしまふほど私は身勝手な行動を重ねてきた：ということはもはや愚かな私の中でも理解できることであった。何よりベルのぶつけてくれた言葉は：私の心に強く響いた。：私の愚かさをきちんと指摘してくれた。

ベルは私にあまりに大きすぎる一つの過ちを気付かせてくれたのだ。

それは私が一つの正義<sup>希望</sup>を軽視したかのような行動を繰り返してしまっていたという過ちを。

：私はベルの言う通り【深層】で確かに言った。

私達の正義<sup>希望</sup>は、私達を繋ぐ正義<sup>希望</sup>は『愛』であると。

なのに：私は何をした？

ベルに心配をかけた挙げ句、ベルの忠告を無視しようとした。

：何も：変われなかった：

シルと向き合った時に抱いた後悔と反省を寸分たりとも生かすこ

とはできていなかったのだ。

私は何をしている？

私はなぜこうも愚かなのだ？

私は私自身の愚かさを呪う。

だがその一方でベルのある一言には未だ納得できていなかった。



私が体調の不調にも構わず無理をした。それがベルに心配をかけた。それは私の犯してはならなかった過ちだと理解し、反省している。

だが：『人助け』には私の正義希望ではないというベルの指摘は未だ納得ができなかった。

『人助け』は：アリーゼ達と共に長きに渡り取り組み、もはや私の一部を形作っていると云っても過言ではない。

：『人助け』はアリーゼ達の遺した正義希望を実現するために一番為すべき事柄だ。

私は確かに夢の中で輝夜とライラに言われたのだ。

私の幸せを体現するもの。

彼女達が手にすることができなかった幸せ。

それを私が入れることができる、と。

：私のもう一つの正義希望。

『人助け』の先には人々の笑顔が。

人々の笑顔の先には平和と秩序が。

彼女達の求めた未来が：そこにはある。

彼女達が遺したこの正義希望の一助を私は為すことができる。その一助を私は為さなければならぬ。

私が『愛』という私とベルを結ぶ正義希望を無碍にした罪は絶対に償わなければならない。同じ過ちを今度こそ繰り返さないようにしなければならぬ。

：だが私は『人助け』というもう一つの正義希望を捨てることはできない。ベルの言われた通りこれが正義希望ではないと：認めることはできない。

これを正義希望と見做せなくなれば：私は彼女達に顔向けできない。彼女達に分まで幸せになることができない。

アリーゼ達とベル。

人助けと愛。

両立が難しい私の二つの正義<sup>希望</sup>。

私には…この二つの正義<sup>希望</sup>とどう向き合えばいいのか分からない。  
今回のように『人助け』ばかりに意識を向け、ベルに心配をかけるなど論外だ。

かと言つて…今は『人助け』に全意識を注いでいたお陰で溺れないようにしていたベルとの二人での生活に意識を向けるようになれば…私はどうなる？

恐らくベルと過ごす一瞬一瞬が幸せで一杯で…この幸せを失いたくなくなる。

例え立場が悪かろうとこの一瞬を共に過ごせばいいと甘えてしまふ。

『人助け』をしようと思ひもしなくなる。

それが私自身を腐らせ、万が一の時は私達を破滅に追い込む。

『人助け』をしなくなるということはアリーゼ達の正義<sup>希望</sup>を捨てるということだ。

それに今行う人助けは私が功績を立てることで私の立場を回復することも目的としている。…その目的を忘れる訳にはいかない。

そう考えざるを得ないほど私の今の立場は危険をもたらすかねない…言わざるを得ない。

ベルは確かに私とならどんな苦難でも立ち向かうと言ってくれた。

私自身もベルを苦難の道へと巻き込む覚悟を決めた。

だから私はこんなことしなくてもいい。そのはずだ。私はベルを苦しめるくらいならやめるべきだ。

だが…私はアリーゼ達の正義<sup>希望</sup>を捨てる決心ができない。ベルを苦難の道に巻き込まずに済む可能性を捨てられない。

だから…私はベルの望みに完全に応えることはできなかった。

『人助け』は…私のもう一つの正義<sup>希望</sup>だ。そこだけは…譲れない。

とは言つてもその譲れない点は脇に置いてもベルに言わなければならぬことがある。

そんなことは流石に頭の固い私でも分かっていた。

??

「…すみません…なんて言葉ではとてもではないですが、謝罪になりませんよね…ベル」

「…そうですね。謝罪には…ならないです…」

私は真つ先に謝罪になるとも思えない謝罪を口にした。ベルに目さえも合わせることもできずに謝罪した。

ベルの表情は見たくても見れない。だからベルがどんな表情で今の言葉を口にしたのか分からない。

だが私の愚かしさに呆れ果て、怒りまで抱かせてしまっている…ということは言うまでもない。

だからベルに少しでも怒りを収めてもらえるよう私なりに言葉を重ねた。

「…ベルを前にして体調が悪いことを隠したこと。実は朝から気分が優れませんでした…いえ、数日前から体調は万全とは言い難かったです」

「…そうですね。そう…ですよ…」

「…にも関わらず私は調査を強行しようとし、ベルに心配をかけ…」  
ベルに心配をかけた。

それが私の第一の罪。第一に謝罪すべき事柄。

私は自らの罪を懺悔し、ベルに反省し今度こそ改善することを誓わなければならない。そう考え言葉を紡ぎ続けようとした。

だがベルによって途切れさせられた。

「すみません!!」

「…っ? ベツ…ベル?」

私の言葉を途切れさせたのはベルの謝罪。

その謝罪があまりに唐突で私の理解の範疇を越えたものだったので私は思わず顔を上げて、ベルの方に視線を向けていた。

そのベルは私に向かって深々と頭を下げ謝罪の姿勢を見せている。

…どうして？

どうしてベルが謝る？

悪いのは私だ。

ベルに心配をかけた私だ。

ベルの恋人失格な私だ。

どうして？

どうしてベルが涙を流して謝罪している？

「僕が…僕が悪いんです…リユースさんの体調が悪いのに…僕は…気付いていたのに…リユースさんを…お止めできませんでした…その結果…リユースさんの体調をここまで悪化させてしまつて…」

「違うっ…違うっ！どうしてベルが謝るのですか？どうして？どうして!?悪いのは私です!私がベルを振り回して、私が勝手に体調を崩して…なのはどうして…」

「だって僕はリユースを守るって約束したから!!」

「あ…あああ…」

「…敵だろうと病気だろうと何だろうと関係ありません…僕はリユースさんを守れなかった…僕はリユースさんの恋人失格です…僕は…リユースさんを守れなかった…」

私がベルに涙を流させている。

私がベルに責任を感じさせている。

私がベルを苦しめている。

…私は何をしている？

…私は何がしたい？

私の『人助け』というその正義希望とやらはベルを傷つけてまで守らなければならぬのか？

愛する人を傷つけるのが正義希望だとしても言うのか？

違う…あり得ない。あり得ない。正義希望とは私達の生を豊かにして

くれるはずのもの…

これは…本当に私の正義希望なのか？

この相反する二つの正義<sup>希望</sup>を胸に抱いていること自体異常なのではないか？

そんな今更の事実には愕然とする。

そんな今更の事実を突き付けられただけなのに私は思考停止に陥る。

そうして紡ぐべき言葉さえ失ってしまった私はベルの話をもただ聞くことしかできなくなっていた。

「ねえ…リユーさん…？教えてください…リユーさんの正義<sup>希望</sup>は愛なんですよ…？リユーさんと僕は…愛という正義<sup>希望</sup>で結ばれてるんですよ…？そうですよね？違うん…ですか？」

「…」

ベルは尋ねてくる。

ベルは顔を上げ、涙をポロポロと流しながら尋ねてくる。

悲しみと恐怖のもたらす涙でくしゃくしゃになった顔でベルは尋ねてくる。

そんなベルを前にして私は動揺のあまり言葉を詰まらせた。

即答できなかつた。

今尚罪を重ねる私に私自身許せなくなる。

そんな私が私とベルを繋ぐ愛という正義<sup>希望</sup>を語ることを許されるのかさえ分からなくなってきた。

結果ベルに返すことができた答えは恐る恐る縦に首を振ることだけになってしまった。

その答えにベルは続ける。

「そう…ですよ…？僕達の正義<sup>希望</sup>は愛ですよ…？その正義<sup>希望</sup>より大事な正義<sup>希望</sup>は…本当にあるんですか？いえ…分かってるんです…リユーさんにとってその正義<sup>希望</sup>がどれだけ大事か…仲間の方々の遺志だと言われたら…僕はお止めすることもできません…」

「ベ…ル…」

「でも僕はリユーさんにお聞きしたいんです…確かにリユーさんは最近とても充実しているように見えました…最近のリユーさんは『人助け』をしようと一生懸命頑張る姿が…とても輝いてるんです…でも…」

でも…その代わりにリユースさんの体調はどんどん悪くなっていった  
…リユースさんは今こうして体調が凄く悪化してしまっています…仲間  
間の方々は…本当にそれを望むのでしょうか？」

「…あ」

「リユースさんが命を危険に晒してまで…幸せを失う危険を犯してまで  
…努力することを仲間の方々が本当に望むのでしょうか？僕には…  
分かりません。分からないんです。リユースさんの夢がどんな意味が  
あるかも…僕には分からないんです。だから僕は…リユースさんをお  
止めするための言葉を今の今まで持つことさえできませんでした…」  
ベルはそう言うと言つと鼻を嚙りつつ涙の溜まる目を腕で擦る。

そして大きく深呼吸をして覚悟を決めるように目を閉じると、静か  
に言った。

「…すみません。こんな情けない姿でリユースさんの考えに文句まで付  
けてしまって…もう僕は我が儘を言いません。全てリユースさん次第  
です。リユースさんのお考えをお聞かせください」

ベルはそう言ったとき目を閉じたまま沈黙を保った。

私がどう反応するか委ねてくれた…ということ？

ベルがそれ以上何も言ってくれないので言葉に窮する。

だが悪いのが私であり、ベルをここまで追い込んだ私の罪を考えれ  
ば…

何も言わないなど言語道断であった。

「私にとって…愛が私とベルを繋ぐ正義希望であることは間違いありませ  
ん。よってベルにこのように心配をお掛けしたのはあつてはならな  
いことで…私の言葉など信頼に値しないかもしれないかもしれません。それでも  
…今後同じことを繰り返さないと、ベルに誓います。そして謝罪など  
何の意味もないかもしれませんが…それでも…謝らせてください。ベ  
ルの心配を掻き立て、ベルの忠告を無視して私とベルを繋ぐ正義希望を穢  
すような真似をしてしまったこと。心より謝罪します。本当に申し  
訳ありませんでした…」

深々と頭を下げて謝る。

…こんなことでベルに犯した罪を償える訳がない。

それは分かっている。

だとしても…謝らずにいることは論外だと考えての行動であった。そんな私の謝罪にベルは一瞬の間を置いて答えてくれた。

「…お止めできなかった僕にも責任があります。なので謝らないでください。それより…これからどうなさるんですか？そしてもう一つの正義希望のことはどうなさるおつもりですか？」

ベルは言葉短かに私の謝罪を受け取ると、話を今後と…私のもう一つの正義希望に移した。

それに私は顔を上げつつ私の考えを話し始めた。

もちろん今回の反省を生かした考えを、である。

「…まず…【戦場の聖女デア・セイント】の診断次第ですが、しばらくは静養に努め体調を最優先で回復させます。それまでは決して調査に出ようなどとは考えません。…シャクテイには申し訳ないですが、私は…これ以上ベルを裏切り続ける訳にはいきませんから」

「分かりました。僕もそのお考えには賛成です。…リユーさんはもつとご自分の体調を気にするべきだと思います」

「…肝に銘じます。そしてもう一つの正義希望に関してですが…」

今後の対応はもはや言うまでもなかった。だが…もう一つの正義希望に関してだけは未だに迷いが残り、上手く言葉を選べない。

かと言っていつまでも考え込むのは論外であり、私はその迷い全てをベルに打ち明けるのが最善だと判断した。

「…愚かな私でも流石に『人助け』のためにベルを傷つけるのは論外だと分かります。私はその論外な行いをしてしまった訳です。なので今後はベルを傷つける形でその『人助け』をすることがないように心掛けなければならぬと思います。ですが…私にはどう両立すればいいのか分からないのです。私の能力と性格では…両立は多分できません。恐らく今回のようなことを繰り返し返すかもしくはベルとの幸せな生活に浸り『人助け』をしなくなるかの…どちらかです」

「…その正義希望を捨てることは…できないですよ。仲間の方々の正義希望だとりユーさんはお考えでしょうから」

「…私には…それさえも分かりません。輝夜とライラが手に入れるこ

とのできなかつた幸せ……それが今の私は『人助け』を行った先にある平和にあると思つています。そこを目指すために『人助け』を続ける……それが私のもう一つの正義希望だと考えています。ですが……それが真実か私にはもう分かりません。……分からないのです。ベルを傷つける……私自身傷ついていく……アリーゼ達の命さえも奪い去つた……その『人助け』が……本当に私の真の正義希望なのか……私にはもう分かりません」  
私自身考えて。ベルの話聞いて。その結果至つたのがこの結論。

『分からない』

アリーゼ達と共有した正義希望が『人助け』にあつたのは間違いない。  
どれだけ迷おうとも大枠の形として『人助け』を貫いてきたのは間違いない。

だが……今の私にはそれが正義希望なのかもう分からなかつた。

なぜなら現にベルを傷つけている。

なぜなら現に私自身の身体を蝕んでいる。

なぜなら過去にアリーゼ達の命を奪っている。

『人助け』は……正しいはずなのだ。

私もアリーゼ達も……そしてベルも恐らくそう信じていたはず。そうでなければ説明できない行動は多々ある。

その『人助け』が私を救いベルを救い数多の人を救ってきたことも  
確実だ。

だがその正しさは揺らいでいた。

私を心配するベルの中で。

ベルを苦しめてしまった私の中で。

その正しさは揺らいでいる。

だから『分からない』。

……『分からない』のだ。

そして『分からない』中でも迷い続ける中でも私が少しずつ寄りつつある結論は……確かに存在していた。

それもまたベルに伝えなければならなかつた。



「…ただここまで間違いを繰り返す中で私は流石に気付きました。『人助け』は…絶对的に正しい訳ではない。アリーゼ達の正義<sup>希望</sup>であつたとしても…私はもう傾倒する訳にはいかないことが分かつています。ベルとの愛を犠牲にしてまで守らなければならない正義<sup>希望</sup>ではありません」

「リユーさん…」

「…まだ考える時間を頂きたいです。まだアリーゼ達の正義<sup>希望</sup>を捨てると決めることはできません。ですが…最優先にはもうしないと約束します。…今の最優先はベルですから。今の私の一番の正義<sup>希望</sup>は…私とベルを繋ぐ『愛』です」

「…つつーリユーさん！」

私がそう言い終えると、ベルは勢い良く抱きついてくる。

私はそれにどう反応すればいいか、抱き締めていいかさえ迷つてしまう。

だが私を離さないと言わんばかりに私を抱き締めるベルによつて。ベルの口から嗚咽と共に溢れ出した言葉によつて。気付けば私のすべき反応は自ずと定められていた。

「もう…僕に心配をかけないでください…！リユーさんがいなくならないか…本当に…本当に心配で…僕は…僕は…！」

「すみません…つつ…すみません…」

ベルの声に混じる嗚咽。

ベルは私の背をポコポコと叩きながら私を責める。

だがその責める言葉には力がなく。

かと言つて私の心に対しては何物よりも力があつて。

私にはそんな資格はないのに。

ベルの背を撫でながら呟いた謝罪と共に溢れ出してしまう涙。

私には涙を流してしまう資格なんてないのに。

ベルをこんなにも悲しませてしまったことに。

ベルをこんなにも不安にさせてしまったことに。

私は私自身への怒りの涙を抑えられない。

「リユーさん…愛してます…だから…だから…僕達の愛を…僕達の

正義を：見失わないでください…」

「…っ!!…分かつてます。…もう二度と見失いません…私だつてベルを愛しています。…もう絶対に私は…私達の愛を…私達の正義を見失いません」

今更の誓いを行う。

決して流させてはいけなかったベルの涙に。

その涙を流させた自分自身への怒りの籠った私自身の涙に。

私はもう二度と私とベルを繋ぐ『愛』という正義以外を優先することはない。私はもう本当に失いたくない正義を見失わない。

そう私達の涙に誓う。

その誓いのお陰で私はようやくベルの背を抱き締めることができ、同時にその背を優しく撫でる。

…今の抱擁は今までで一番温もりを感じられないような気がした。それは恐らく涙によつて温もりが奪われてしまっているから。温もりが感じられない。

それは何よりも辛いことで。

それは私の罪を心でも肌でも感じている証と言えるかもしれない。それでも私は抱擁をやめなかった。

ベルを泣かせてしまったせめてもの罪滅ぼしにベルとの距離をできるだけ縮め、泣き止んでもらえるように。

私の罪が生み出した温もりの感じられない抱擁が突きつける痛みを私の心に刻み込むために。

私の犯してしまった罪は消えない。

だが未来ならば変えられる。過ちを繰り返さないことはできる。

そう私は心に言い聞かせながらベルの背を撫でた。

私が私とベルに降らせてしまった雨が止むにはしばらく時が必要であった。

## 掴むべき正義はその身に

「お話はお済みですか？お二人とも？」

「…ええ」

「…大丈夫…です…」

ベルとの涙まじりの抱擁からしばらく。

【デア・セイント戦場の聖女】は約束通りの時間に診察結果の報告のために病室を訪れていた。

ただ私もベルも揃って反応が芳しくない。

その理由はつい先程まで抱き合っていた所を【デア・セイント戦場の聖女】のノックで大慌てで距離を取るといふ経緯があったため。

…ただでさえ以前の入院でベルと…イチャ…イチャすることに関して【デア・セイント戦場の聖女】には激怒されている。…二度目はどうなるかなど私は想像したくもない。

さらに私もベルもその時には涙も止まっていたとは言え、それくらいのこと【デア・セイント戦場の聖女】にはバレてしまうかもしれない。

要は【デア・セイント戦場の聖女】への恐怖とバレた時の恥ずかしさを想起するあまり私達の反応が芳しくなくなってしまったという訳であった。

だが【デア・セイント戦場の聖女】はその点に関して一切気にする様子もなく、いっつになく真剣な表情で早々に語り始めた。

「リオンさん。クラネルさん。真剣にお聞きください。診察結果をお伝えします」

「…それほど深刻な病状なんですか？治療法はあるんですよね？リユースさんの体調不良は治るんですよね？」

「落ち着いてください。クラネルさん。順を追って説明しますから」

【デア・セイント戦場の聖女】のあまりに畏まった態度にベルは矢継ぎ早に質問をぶつける。

…その様子が私のことを如何に心配しているかを示していて、そんなベルに嬉しさも罪悪感も感じる私。

一方の【デア・セイント戦場の聖女】は意識して真剣さを保っているかのような様子でベルの質問攻めを受け流す。

…その【戦場の聖女】<sup>デア・セント</sup>の様子が私に若干の不安を掻き立てる中、【戦場の聖女】<sup>デア・セント</sup>は話を再開した。

「まずリオンスさんの症状からおまとめします。微熱、吐き気、気怠さ…ぐらいでしょうか？」

「え…ええ…そうです。私個人としては風邪くらいだと思っていたのですが…」

「吐き気の時点で風邪ではないというのは…僕の心配のしすぎですかね？何か重大な病気の兆候だったり…なんてありませんよね？」

「まず言わせて頂くと、リオンスさんは何かしらの病気ではありません。ただ少々お疲れであると同時に栄養不足と睡眠不足とも見られます。よって数日安静にして頂くことは不可欠だと考えています」

「ふう…よかった。…だそうですね？リユーさん？」

「…分かりました。【戦場の聖女】<sup>デア・セント</sup>の指示通りに致します」

ベルは私が病気でないことに深々と安堵のため息を吐くと共に私に自分の指摘通りではないかとばかりにジト目を向けてくる。

それに私は背が縮こまるような思いをしつつも、こくりと頷いて【戦場の聖女】<sup>デア・セント</sup>の指示を受け入れた。

これで診察の話は終わり。

そう私もベルも思っていた。

だが【戦場の聖女】<sup>デア・セント</sup>の真剣な表情は変わらぬまま。それどころかより深刻な表情に変わっていつているようにも見える。

その様子にはぬか喜びになることを恐れ、【戦場の聖女】<sup>デア・セント</sup>から視線を動かさないままにしておく。

そうすると【戦場の聖女】<sup>デア・セント</sup>はゆつくりと私達に交互に視線を向けながら話し始めた。

「治療に関しては今はそれでいいのです…ただ一つお二人に重大な報告があります。…気を引き締めてお聞きください」

「…っ！はっ…はい」

【戦場の聖女】<sup>デア・セント</sup>の『気を引き締めて』という言葉に私もベルもこれから告げられる内容がただならぬことを察する。

それで一度顔を見合わせた私とベルは二人揃って返事と頷きを

【戦場の聖女】に返す。

そして【戦場の聖女】は…小さく息を吐くと、ゆっくりと淡々と続きを話し始めた。

「リオンさんの話してくださった症状の数々から私はある一つの結論に達しました。リオンさんの症状の原因はつわりにあるのでは、と」

「つわ…り？」

「何ですか？それは？」

【戦場の聖女】の告げた私の病状の原因だという『つわり』という代物。

私もベルも何か分からず顔を見合わせて首を傾げていると、【戦場の聖女】はそのまま話を続ける。

「…お二人ともお分かりにならないならば仕方ありませんね。話を進めましょう。それで私はつわりを疑ったので殿方の前でお話するのは心苦しいですが、先程診察の途中でリオンさんの尿を採取させて頂きました。そしてその尿の【魔道具】による検査の結果が出ました。結果私の疑念は確信に至りました」

【戦場の聖女】のこれより口にする事実。

それは私とベルの予想の範疇から全く外れたもの。

そしてそれは私とベルにとって恐らく一生で一番の喜びをもたらすものであった。

「リオンさん…あなたのお腹にはお子さんがいます。リオンさんは今妊娠なさっているのです」

「…え？」

重なる私とベルの声。

その声はどちらも【戦場の聖女】の言葉の意味を一瞬理解できなかったがために漏れたものであった。

「私のお腹に…」

「子供…？つわり…」

だが頭の中を整理し自らの言葉に置き換えるうちにその言葉の意

味は段々と私とベルの中でも理解が進んでいく。  
そうして私とベルが顔を見合わせた時。  
私達からは想いが溢れ出していた。

「私（僕）達の子供!?!」

再び重なる叫び。その叫びは喜びに満ちていた。  
何より重なったのは声だけではない。

私も思わず破顔していた。

ベルも満面の笑顔を浮かべていた。

先程までの涙と悲しみを吹き飛ばさんばかりの笑みを二人とも浮かべていた。

私達の子供。

ベルとの子供。

その事実が胸に染み渡る。胸が幸福感で一杯になる。

それと同時に無意識に私はベルの温もりを感じたくなる。理由は分からないが、ベルと触れ合いたくなったのだ。

それはベルも同じようだったようで。

ベルは次の瞬間には私に飛びついてきていた。

今日二度目の抱擁。

けれど一度目とはまるで意味が違って。この抱擁は温もりで一杯になっていた。

暖かい…

思わずそう呟いてしまいたくなるほど今のベルとの抱擁は心地良いものであった。

特にベルは私をブンブンと振り回さんばかりに私を抱き締め喜んでくれる。：ベルがそんな風に喜んでくれるのが何よりも喜ばしいとも言えた。

今はベルを笑顔にすることができている…つい少し前にあんなことをしてしまったからこそ感慨も強まっていたのかもかもしれない。

するとベルはガバツと私の肩を引き離し私と向き合える態勢を作

り出すと、弾けそうなほどの満面の笑みと共に言った。

「リューさん!!僕達の子供ですよ!!まさに僕達の愛し合った証!僕達の愛の象徴です!!本当にやりましたね!リューさん!僕嬉しくて嬉しくて今すぐオラリオ中を走り回って自慢して回りたくらいです!」

ベルが嬉しさのあまり恐ろしいことを口走り始めていた。

だが私の思考はすっかりその直前にベルが言ったことに囚われていて、ツツコミを入れる余裕はなかった。

私達の子供が：『僕達の愛し合った証』? 『僕達の愛の象徴』?  
つまり：

私達の子供は私達の正義の象徴?

そう思い至った瞬間どんどん私の頭の中で繋がりは始める【深層】の夢で出会った輝夜とライラの言葉。

まさか：

答えに辿り着き始める私。

私の本当の正義は何かを気付き始めた私。

ベルにブンブン肩を揺られ熱い抱擁をされと振り回される私の身体を他所に私の思考は核心へと近づく。

だが思考の渦に浸る私も喜びに浸るベルも自らの世界に没入しすぎてすっかり忘れていたことが存在していた。

「あの…話はまだ終わっていないのですが…」

「…あ」

ボソリと呟かれた【戦場の聖女】に私もベルも瞬時に意識を現実に戻されられる。

そして気付く。

【戦場の聖女】の目の前でイチヤイチャしてしまったことに。

顔を見合わせるとベルの顔はすっかり青ざめている。…私も恐ら

く同じ。

恐る恐る二人して【戦場の聖女】の方を見て、怒りを呼び起こして  
いないか確かめる。

だが【戦場の聖女】は私達の想像とは全く違う表情をした。

【戦場の聖女】は朗らかな笑顔を浮かべていたのである。

「まずはご懐妊おめでとうございます。そのご様子から見るとリオ  
ンさんのお腹にいらつしやるお子さんはクラネルさんとお子さんで  
間違いないようですね。以前入院なさっていた時からイチヤイチャ  
なさっていたのですぐに納得できました」

「あの…その…イチヤイチャに関しては…」

「ああ。こんな時まで注意するほど私も厳しくはありませんよ。お子  
さんをお持ちになるということは一つの尊い命を授かるということ。  
お喜びになって当然です。念のため確認ですが…お産みになるとい  
う理解でよろしいですね？」

「もちろんです！」

ベルの恐る恐るの確認に【戦場の聖女】は優しい言葉と笑顔を添え  
て祝福してくれる。そして【戦場の聖女】の念のために告げられた確  
認に私もベルも首を即座に縦に振り応じた。

そうすると【戦場の聖女】は笑顔のまま続けた。

「それは何よりです。ではリオンさんのお子さんの状況とお気をつけ  
頂きたいことをお話しします。まずリオンさんのお子さんは妊娠約  
4週間目とお見受けします。そして体調不良も一部は妊娠が原因と  
言えます。とは言っても数日の安静のための入院を除けばまだ入院  
は必要ありません。飲酒・喫煙・激しい運動等の不摂生を控えて頂け  
ればお腹のお子さんには問題ありません」

「…だそうですよ？調査は今後も絶対ダメです。分かりますね？  
リユーさん？」

「…はい。この事実が分かった以上私はもう我が儘を言う訳にはいき  
ません。諦めます」



【戦場の聖女】の説明に合わせてベルが私に釘を刺す。

…本当にベルの心配は的中してしまった訳だ。こうなれば尚のとベルへの申し訳なさで一杯になる。

そしてベルは私の子供の命を救ってくれたとも考えられるのだ。そのことには感謝してもしきれない。

…私はベルに迷惑をかけるだけでなく本当に支えられっぱなしだ。そんな感謝と申し訳なさの入り混じった感慨を抱いてしまう。

それと同時にシャクテイへの申し訳なさも生まれるが…私のお腹にいる我が子のことを考えれば、私が我儘を言うなど言語道断だ。

【戦場の聖女】も言った。

私はもう一つの命を背負う身であると。

もはや私が責任を持つのはベルの人生だけでも無くなった。

ベルとベルとの子供。

二人の命に責任を持つことになったのである。

…今更分かってしまった。

輝夜が私の体調に気を遣うように忠告し、ライラが私に慎重になれと促した理由が。

…忠告を全く活かせぬ私に今頃呆れ果てていることだろう。なんて心の中で自嘲してしまう。

そんなふうを考え込んでみると、【戦場の聖女】は私達に一つの問いを尋ねてきた。

それは私達の子供の話の核心に迫る問いであった。

「それで…一つ気になるのですが、検査の結果リオンさんは妊娠約4週間目と分かったのですが…その時となるとリオンさんとクラネルさんはダンジョンにおられた時期から入院されていた時期…ですよね？」

「…え？」

「…あ…あー」

【戦場の聖女】の質問に首を傾げる私と【戦場の聖女】から目を背けるベル。

その質問の意味を私が図りかねる中、【戦場の聖女】は顔をいつぞや

のイチヤイチャを責める時の険しきで続けた。

「まさか…治療院で…」

「ちっ…違います!?!治療院では手を繋いだりしかしてません!?!…ってあああああ!?!」

ベルは治療院でしていたことを白状した挙句自爆したかのように頭を抱えて叫び声を上げる。

…確かに【戦場の聖女】に当時こっそりイチヤイチャしていたことを白状するのはまずいことは分かる。しかし手を繋ぐぐらいのことをしていたことは既に【戦場の聖女】も知っている訳で…

私はベルがここまで悶絶する理由が皆目見当がつかない。

すると【戦場の聖女】はベルを軽蔑しているかのように見える視線で言った。

「まさか…ダンジョンで…」

「やめてください!?!僕達にとつてはすっごく幸せな思い出なんですけど、他の方に突っ込まれるとメンタルが!?!」

「…いえ。別に責めるつもりは寸分たりともありませんが…お二人とも痛い…ですね。それにしても動物は生命の危機に晒された時に本能的に子孫を残そうと動くと言ったことはありましたか…まさか事実とは…治療師としてとても参考になります」

「真面目に褒めたり納得したりしないでください!?!恥ずかしさで死にそうです!?!」

軽蔑した視線から褒めたり納得したりと表情をコロコロ【戦場の聖女】は変える一方ベルは悶絶し続ける。

そして一人話についていけない私。

ただそれは私の理解するスピードが遅かっただけで。

ダンジョン。

私達にとつての幸せな思い出。

子孫を残そうと動く。

それだけのキーワードが頭に入れば流石の私も察する。

二人は私の妊娠のきっかけの話をしている。

そして…

そのきつかけはあの時【深層】で私とベルが温もりを求め合った時だったのである。

それに気付き二人の話の意味をようやく理解した時。

私の中で何かが弾けた。

「あああああ!?!」

「リュツ…リュウさん!?!」

思わず叫び声を上げてしまう私にベルは驚いた声と共に私の名前を呼ぶ。

だがそれに構ってはいられなかった。

今更のように数多のことに気付いてしまっていたからである。

それを私は衝動的に言葉にしてしまっていた。

「つまり私は…ベルの温もりが欲しいと言ってベルを自らの身体で誘っていた…?これが輝夜が夢の中で言っていた『淫乱』の意味…?」

「ちよ…リュウさん?」

「私の欲していたベルの温もりとはベルとキスで交換する唾液でベルと結ばれた時に私の中に注いでもらったあのほろ苦く…むぐぐ」

「リュウさん!?!お願いだからこれ以上何も言わないでください!?!僕本当に死にます…恥ずかしさで本当に死んじやいますう!?!」

自らが【深層】でベルと行ったことに絶句する私。

見事に口を滑らした私のせいでもう羞恥心で涙目になるベル。

ベルが私の口を押さえたことで私がこれ以上余計な事実を漏らすことは無くなったが、もはや手遅れだった。

「さぞお盛んだったのですね…お二人とも。別に軽蔑はしません…ただ私にはとても真似はできない…とは思います」

何とも言えない表情でそう言う【戦場の聖女】が私とベルに最後のトドメを刺した。

それからしばらく【戦場の聖女】が退室した後も二人して悶絶し続

ける羽目になった。

??

「あの…ベル？先程の【深層】でのことを話して思い出したのですが…」

「…リユーさん。お願いですから【深層】での話は掘り返さないください…確かにリユーさんとするのはすごく気持ち良かったですし、あの時のリユーさんはすごくエッチで今でも忘れられませんし、リユーさんの身体すっごく綺麗でまた見たいな…とか思います。…ですが今はダメです。アミッドさんの視線を思い出してしまって恥ずかしさでもう…うう…」

「エツ…エツチ…私の身体が…綺麗…」

ベルの爆弾発言に思考が停止する私。

ちなみに私は恥ずかしさのあまり枕に顔を突っ込んだままベルの顔を見ることさえできない。

そして爆弾発言をしたベル本人は声が籠っていることから察するに今私の掛け布団を頭に被ったまま…なのだと思う。

二人して何をしているのだと周囲から見られそうだが、二人で【深層】で何をしたのか再認識してしまった以上仕方ないのだと…思う。多分。

ただ話をせっかく切り出したのに出だしで話を詰まらす訳にもいかず私はしばらくの思考停止の後に私は再び切り出した。

「そうではなくて…ですね？今更思い出したのです…そういえばあの時もベルは私をさん付けで呼ばずにいてくれたのだ、と。そして私をこの治療院に連れて来てくださる前も私をさん付けで呼ばずにいてくれました」

「確かに…そうですね。余裕がない時についていさん付けし忘れちゃうと言うか何と言うか…【深層】では初めてで余裕がなかったですし…お連れした時もどんな病気が分からなくて怖かったので…その…すみません」

「いつ…いえ！嫌ではないのです！その…さん付け抜きの方が私は心地良いように思えて…私のことを…リユールと…呼んでくださいませんか？」

私が切り出したのは私の名前をさん付け抜きで呼んで欲しいという事。

…あれだけの罪を犯した直後に不躰過ぎる。

そうどこかで思う私もいたが、心機一転という意味を込めてベルの言葉を欲している自分がいた。

それはその『リユール』という呼び方が私の中で二つの意味を帯びるようになったから。

一つ目は私の全てを愛してくれた時の私の呼び方。…ベルの温もりで満たされた幸福をいつでも思い出せるというのはとても魅力的だ。

二つ目は私を心配し叱ってくれた時の呼び方。…過去の過ちを思い出させてくれるという意味で愚かな私には必要であると言えた。

その二つの意味で私はベルに呼び方を変えてくれるように求めたのである。

その求めにしばらく何も言わないベル。

ベルは多分迷っていたのだろうが、少しの間を置いて言ってくれた。

「…リユール」

「ありがとう…ベル」

「リユール」

「ベル」

噛み締めるようにお互いの名を呼び合う私とベル。

さらにベルとの距離を縮めることができた…そんな気がしたのは私だけだろうか？

そうして段々とまたベルの温もりを感じたくなる私。

そんな私の敷き布団の中に残されていた手は無意識にベルを探していた。

それと同時に立ち始めるゴソゴソという音。

…もしかしたらベルも同じ気持ちになったのかもしれない。  
視界が枕で塞がれたままにも関わらず闇雲にベルの温もりを探す私。

そんな方法ではいつまで経っても見つけれない…と冷たく考える私も心のどこかにいたが、そんな方法にちよつとした愛おしさを感じる気持ちの方が強かった私はそのまま続行する。

それからしばらくして一瞬触れられた温もり。

ベルの手だ。

そう分かった私はベルの手に触れることができた位置の周囲をくまなく探す。

その結果触れ合う私とベルの指先。

絡み合う私とベルの指。

気付けば自然と恋人繋ぎで手を繋いでいる私とベル。

【深層】の時とは違う。

あの時ほど温もりは強く感じることはできないけれど、今だからこそ何だかくすぐったい温もりの交換の仕方。

そんな形で温もりを交換し合うことで私の心もあつたかくなる。

私とベルの間に子供を授かった。

その喜ばしい事実をもう一度心の中で噛み締める。

そうした所私の口は自然と一つの言葉を紡ぎ出していた。

「これから…三人で幸せになるましようね？ベル？」

「ええ。…三人で…三人で幸せになりましよう。リユウ」

三人。

私とベルと私のお腹にいる大切な生命。

その生命は私達の愛の象徴。

その生命こそ私達の<sup>希望</sup>正義の象徴であったのだ。

私は遂に本当のもう一つの<sup>希望</sup>正義が何かに気づくことができたのである。

## その身に宿し正義の導く先

「さて。目一杯リユーを祝福してからかうことができたから今日はこれくらいにしておこうかなー」

「もう…これ以上は…恥ずかしさで…どうにかなりそうです…」

涙が出そうなくらいの勢いで大笑いを続けていたシルがようやく終結宣言を出してくれたことでようやく私の心にも平穏が訪れる。

が、祝福四割からかい六割ぐらいの勢いでダメージを受け続けた私の心はもはや恥ずかしさが限界を越えていた。

そのため穴があったら入ったまま二度と出てこれないのではと疑いたくなるほど。

現に私は布団を被ったまま碌にシルと顔を合わせることもできていない。

シルの誘導尋問によって【深層】でのあんなことやこんなことを思わず漏らしてしまったり。

シルのからかいによって自らの欲望を自爆的に発言してしまったり。

…もう散々だ。

今は外出中のベルに申し訳が立たないほどに。…後々二人でからかわれること間違いなし…かもしれない。

ただシルの言葉の節々からは私とベルの間に子宝が恵まれたことへの祝福の気持ちを感じることができて。

シルに話を切り出した直後は素直に驚かれたり体調を心配されたりお腹を触らせて欲しいとねだられるなど心から喜んでくれているように見えた。…本当にその直後は。

そしてこんな風にはシルと談笑できているのはベルのお陰。

その訳はシルがお見舞いに来た今日より四日前に遡らなければならぬ。

??

私のお腹にベルとの子供が宿っていると発覚してから既に四日が経過した。

入院当日はベルと二人でゆつくりと過ごした私。

その日今更のように気付いたのは同居を始めてからベルと二人でゆつくり過ごしたのはその日が初めてであったということ。

：如何に私が『人助け』という正義希望にばかり執着していたか。

：如何に私がベルとの『愛』という正義希望を無碍にしていたか。

その気づきは私の心に厳然と犯してしまった自らの罪を突き付けた。

その事実のもたらす後悔と反省をベルと一緒に過ごす中で感じずにはいられなかった。

そんな後悔と反省に苛まれる私をベルがリユーと呼んでくださるようになってから数時間を経て、私達の会話は一つの話題に到達した。

それはシャクテイ達「ガネーシャ・ファミリー」に協力するという形で皆さんの力を借りて進めていた連続窃盗犯の調査。

私の入院前の時点で核心まで迫っていたのは確か。

だからこそ私自身休息の時間も惜しんで焦ったというのもまた事実。

だかもはや状況は急変していた。

：私は調査に関わることはできない。

激しい運動がお腹の我が子に問題ある以上、無理を重ねる傾向のある私は関わる訳にはいかなかった。それにそもそも話ベルが関わることを許すはずもなく。

結果私を除いたベル、シル、アーデさんにお頼みするという形で調査は続行される、ということになった。

私が主張して始めたことなのに結局苦労を三人に押しつけてしまう形になってしまふのは申し訳が立たない。

ベルが快く引き受け、解決を約束してくれたのがせめてもの救いであつた。

それから調査を再開したベル達は僅か2日で遂に連続窃盗犯の居



場所を『暫定で』とは言えあつさりと掴んでしまった。

これまでの調査の成果の蓄積でもあるが、シルとアーデさんからは今度は私に代わってベルが張り切りすぎて若干の無理があつたとも聞かされている。：ベルは私には黙っていたが。

：特にアーデさんはそのことに強い不快感を抱いていたよう。

それも当然だ。私がベルに無理を強いたも同然だ。私の責任だ。

：私の始めた行いがベルに苦勞をもたらししている。

：改めて如何に『人助け』という正義が如何に私達の幸せの障害になつてゐるか嫌でも氣付かされる事実であつた。

そうして連続窃盜犯の居場所が分かつたということでもベルとアーデさんは早急の踏み込みを今日決行することになつた。

ベルの強硬な主張によりシャクテイへは事後報告、ということになつた。

ベルが強硬な主張をした理由としては報告のためであろうと私とシャクテイを会わせたくないため。

：要は私が調査に関与しようとした妙な氣を起すことを警戒されてしまつたのだ。

そのため念には念を入れてと、双葉を始めとした私の武器や裝備は全てベルによつて没収。

さらにベルの念入りな警戒は今こうしてシルが私と一緒にいることも証明している。：シルは私の暴走を監視する役割、という訳である。

ただシル的にはそれだけではないのかもしれない、と思ひはする。

なぜならシルがこうして妊娠を祝福してくれたりからかうのもみんな私の不安を取り除くためのようにも感じられるから。

：苦勞を押し付けてしまつたという負い目もあるが、当然のようにベルが怪我をしたりしないか心配だ。

病室に一人残されれば、そんな心配に私は取り憑かれていたかもしれない。

：心配のあまり病室を飛び出してベルに加勢しようとしたかもしれない。

もちろんベルの怒りを買うのも構わず。さらに言うところ赤手空拳であらうともお構いなく。

それを今防いでくれているのがシルの存在であった。今ここにシルがいてくれていることに私はとても感謝している。

ただシルがここにいるのは私が予想していた理由だけではなかったよう。

ようやく祝福とからかいを終えた後、シルは早々に一つの話を持ち出していった。

??

「それでさ？リユー？今から真面目な話をしたいかな？」

「…シル？」

完全に声色を変え真剣さを漂わせるシルに私は深呼吸で気持ちを落ち着かせた後、布団から顔を出してその声に応じる。

絡み合う私とシルの視線。シルの視線は私が今話してもいい状況か見定めるように私の顔に向けられる。

そしてどうやらその見定めは合格だったらしくシルは一度小さく息を吐くと話し始めた。

「今ベルさんとアーデさんが連続窃盗犯の拠点か自宅か分からない場所に踏み込んでるよね？そして私の予想ではこの一件は二人の踏み込みで終わる。だから聞いてみたいの。…今回のリユーは何がいけなかったのかを、ね？」

「私の過ち…ですか？」

「そう。リユーがきちんと分かっているか確認しておいた方がいいかと思っ。どう思う？リユー？」

…シルは私を試している。そう瞬時に悟った。

今の私は一つの尊い生命も背負っている。

なのにこれまでのような愚行を繰り返す訳にはいかない。

過ちは正さなければいけない。

…その過ちを正せるかは私がきちんと分かっているかにかかって

いる…そうシルは言いたいのだと思う。

よって私はシルへの答えを慎重に考えると共に自らの力で正解を導き出さなければならぬ…そう判断した。

「…今回私は二つの過ちを犯したと思っております。一つ目はベルに多大な心配をおかけしたこと。ベルに体調を偽ろうとしたこと。その点に関しては今後過ちを繰り返さないようにするとベルに誓いました」

「私が心配してたのも忘れないでね？あとアーデさんもそれなりに心配してたんだから。…ま、ベルさんが辛そうにリユーを見ているのが見てられないっていう意味だったと聞いてるけど」

「…すみません。シル。ご心配をお掛けして。アーデさんにも後で謝罪しておきます」

「うん。それがいいよ。何より重大な病気という訳ではなかったのは安心したし、ちよつと遅い気もするけどベルさんが早めに決断してくれて本当に良かったよ。…ただ病気じゃない代わりにリユーが気にすべきこともできたもんね」

「…その通りです。それが二つ目の過ちに関わっています」

シルの振りによつてすんなりと話が二つ目の過ちへと移っていく。

二つ目の過ち。シルの言う私が気にすべきこと。

それは言うまでもなく私の妊娠が関わることであった。

「二つ目の過ちは…私自身が妊娠に気付けなかった。妊娠しているにも関わらず不摂生を続け、お腹の我が子に悪影響を及ぼす危険を犯したこと。…危うく私の正義希望を失いかねなかったということ。…これはあまりに重い過ちです」

「リユーの言う通りだね。検査を受けるまで分からなかったとは言え、リユーはベルさんとそういう行為をしてたんだもんね？予想できなかった訳ではないもんね？」

「うう…」

「あーもうからかわないから安心して？さつきはごめん。それより私の質問に答えてね？」

「…ええ。予想できたと…恐らく言うべきでしょう。そしてベルとの

愛を重んじるならば、調査への没頭が論外であったのも理解しています。：私はあらゆる意味で：ベルという意味でも私のお腹にいる我が子という意味でも愛という正義を軽視していたと言わざるを得ません：」

シルにからかわれた時のことをつい思い出してしまった私は一度言葉を詰まらせるが、シルが真剣な表情で謝罪まで加えて続きを促してくれる。

そのお陰で私ははつきりと自らの過ちを言葉にした上で認めることができた：と思う。

そして過ちを言葉にし認めた先に導き出したのは一つの結論であった。

「よって私は：『人助け』と『愛』という今の私の考える二つの正義は両立できないと考えました。今の私には：ベルとお腹にいる我が子への『愛』以上に守るべきものは存在しないと確信します」

「：ならどうするの？リユウ？」

シルは私の結論に具体的な指針を問うてくる。それに私は一瞬の迷いも見せずに答えた。

「ベルとお腹にいる我が子のために『人助け』という過去の正義をこれを機に捨てます。私は今ある尊い正義を：愛を守るために私は変わらなければなりません。私はこれからはベルとお腹の子供を愛し、守るために生きていくつもりです」

私の結論に加えた具体的な指針を聞いたシルはすぐには何も言わない。

ただ私をじつと見つめて見定めているかのよう。

そうして無言の時間が数秒続いた後シルは微笑みとともに私の決意に応えた。

「：いいんじゃない？それがベルさんとお腹の子供のために一番望ましい決断だと思う。私は名も知らない誰かのために頑張るリユウが好き。だけどそれ以上にリユウが大切だと思う誰かのために頑張る

リユーが好き、かな。その時のリユーもまたとっても輝いてるから」  
「シル…」

「それに、ね？これまでのリユーと…ベルさんとダンジョンで愛を誓い合うまでのリユーとまるで今のリユーは違うと思うんだ。今のリユーはね？『冒険者』である前に、『正義の使徒』である前に。ベルさんの『恋人』でベルさんとの子供の『お母さん』なんだよ。私はそう強く思う。リユーは『お母さん』になったの。それを忘れないようにしないと」

「私が…『母親』に？」

ベルの『恋人』。

それはシルに言われるまでもなく分かっている。

だが私が『母親』になったということ。

それはシルに言われるまでほとんど実感がなかった。

だが子宝を我が身に授かった以上当然のこと。

ベルは『父親』になった。

私は『母親』になった。

そんなこと今更なこと。

だがシルに言葉にされたことでより深く実感する。

『母親』になった私の背負う重い責任を。

私が『母親』になれたという事実自体の尊さを。

私は『母親』という言葉を噛み締める。その言葉はとても尊い響きのようにまで思えた。

そしてシルがそれから話を持ち出したのは一人の『母親』のことであつた。

「そしてさ。リユーと私の知ってる『お母さん』と言えば、ミアお母さんだよな？そのミアお母さんが娘と呼ぶ私達にどう接してたかを考えれば、リユーが『母親』として今後どう行動していけばいいかわかるんじゃないかな？」

「ミア母さんを模範に…ということですか？」

シルの話は一理ある。そう私は判断してミア母さんのこれまでの行動を振り返ってみる。

だが…

「…ミア母さんは定期的に私達を鉄拳で沈めている…気がします」  
「…あーうん。えつと…ね？あれは…きつと…愛の拳だったの。うん。きつと…他意はないよ。みんな悪さをしたり失敗をした後だし。…うん。リユーもベルさんやお腹の子供にいつか愛の拳を振るう必要があるかもだし」

「そうなの…ですか？できれば私は…ベルにもお腹にいる我が子にも鉄拳は振るいたくないのですが…」

まず思い浮かんだのは鬼のような形相で拳を振るうミア母さん。

だがシルの反応を見るに明らかに例としては明らかに問題があったようだ。

第一前提にベルやお腹にいる我が子に暴力を振るう自分など考えたくもない。

そのため次の例を思い浮かべるべく考えるが…

「…美味しい料理で私達に笑顔をくれていると思います。ミア母さんの料理は絶品ですから。食を通じてミア母さんは私達に様々なことを教えてくれていると思いますが…」

「うっ…うん。それは私も思う。けど…うん。リユーも料理頑張ろっか？ミアお母さんみたいに食を通じてベルさんやお腹の子供に色々なこと伝えたいもんね」

「…」

…尋常ではないほどの困り顔のシル。

…どうやら私は取り上げるべき例をまた間違えてしまったらしい。しかも二度連続。

料理は私にはミア母さんの腕の領域は到底真似のできない…というか足元にも未だ及んでいない。

第一に『母親』のイメージに直結しているかと言われれば、非常に微妙だと改めて考えて思った。

そのため今度こそ相応しい例を挙げるべく必死に考えた私はもつとミア母さんの『母親』らしさを言い表すに相応しい事柄を口にした。

…なぜ先にそれを言わなかったのか、と突っ込まれそうだったがそれはもちろん覚悟の上で。

「…私達に居場所をくれました。心安らぐ心地よい居場所を。…そうか。そうなのでですね。少し『母親』とは何か…分かった気がします。『母親』とは…誰かの居場所になれる人のことなのですね？私はベルが安心して一緒に過ごすことができる居場所にならないかなければならない。私はお腹にいる我が子が安心して育つことができる居場所にならないかなければならない。…それをミア母さんは自らのあり方で証明しているのですね？」

「それも一つの『母親』のあり方、かな。リユウの言う通りミアお母さんの作ってくれた『豊穡の女主人』という居場所は私達にとってとても心地良いもんね。だからみんなミア母さんの娘として色々あっても留まり続けてる。リユウも同じように心安らぐ心地よいベルさんとお腹の子供の居場所にならないと、ね？」

「ええ…頑張ります。ベルとお腹にいる我が子のために」  
ベルとお腹にいる我が子の居場所になる。

正義を再確認した私の元に宿った新しい目標。

その目標を胸に刻む。

『冒険者』でもなく、『正義の使徒』でもない。

ベルの『恋人』に。

お腹にいる我が子の『母親』に。

私はならなければならない。

私には未だに分からない。

『恋人』として『母親』としてどう振る舞えばいいのか明確には分からない。

だが一つの目標をシルがミア母さんという模範と共に示してくれた。

今はその目標を達成するために邁進しよう。

私はこれまでも今もこれから<sup>希望</sup>も正義との向き合い方を迷い続ける。

一時の目標は手に入れることはできても恐らく答えというものは見つけることはできないだろう。

だが今の私には分かる。

今の私が何を為すべきか。

ノックの音が響く。

その音と共に届く愛しき人の声。

その愛しき人の居場所にどうすればなれるだろうか？

その愛しき人にどうすれば笑顔を浮かべてもらうだろうか？

考える。

愛しき人がドアを開けるまでの僅かな時間であろうと、必死に考える。

そうして導き出した一つの答え。

疲れて帰ってきた愛しき人を出迎えるのだ。

その出迎えの方法は一つだろう。

疲れを吹き飛ばせそうなほどの飛びっきりの笑顔で。

労いの気持ちをきちんと伝えられるような優しい声で。

私は伝える。

私の愛を伝える。

私の正義<sup>希望</sup>を届ける。

愛しき人の姿を認めたその時。

私は導き出した答え通り愛しき人を出迎えた。

「お帰りなさい。ベル」



## 並び立たぬ正義に別れを

「お帰りなさい。ベル」

ドアを開けた瞬間。

僕の耳に届く透き通るような美声。

僕の心を瞬時に浄化してくれたのではと思うほど眩しく美しい微笑み。

そんな美声と微笑みが僕に贈られる。

もう次の瞬間には先程までの調査の疲労も調査の過程で生まれた悩みも全て消し飛ばされたんじゃないかと思いつきました。

それほどまでに目の前にいる僕の自慢の恋人であるリユートの存在は僕にとつての癒しだった。

僕がこれまで調査に精を出してきたのもリユートの笑顔を見るため。リユートに喜んでもらうため。ただそれだけ。

リユートの笑顔と喜びをご褒美としてもらえればそれ以上の僕の喜びはないはずだった。

そのつもりだったのに、リユートは僕に予想を上回るご褒美をくれた。

それは『お帰りなさい』という僕の帰りを迎えてくれる魔法の言葉であった。

??

「もう一回言って頂けませんか?」

「お帰りなさい?」

「もう一回お願いします!」

「お帰り:~:なさい:~:」

「:~:ベル様?いつまでリユート様に同じことを言わせるつもりなのですか?流石のリユート様も困惑気味のようですが:~:」

「はっ:~:すっ:~:すみません!」

気付いた時にはリユートの身体を起こしつつも横たわるベッドの近くの椅子に腰を下ろしていた僕。

「どうやら僕はリユートの『お帰りなさい』の癒し効果のあまり何度もリユートに言ってくれるように頼み込んでしまったらしい。…それも衝動的に。」

それをリリの冷ややかな指摘によって気付かされ、今更のように我に帰る。

うっ…リユートに変な風に思われる…かな？

と、伺うようにリユートの顔を見る。

リユートは最初のうちはリリの言ったように困惑した様子で無言のままだった。

だがすぐに何かを考え込むような思案顔になり、しばらくしてリユートは先程まで見せてくれていた眩しくて美しい微笑みと共に言った。

「つまり…私なりにベルをお出迎えできた…ということですね？それこそベルの苦労を僅かでも労える程度には」

「はい！もちろんです！これからリユートに毎日こんな風に家に帰る度に出迎えてもらえるとと思ったら、もう疲れなんて一切溜まりませんよ！」

「…それは何よりです。せめてものお礼になれば良いのですが…」

「お礼なんてもう！むしろリユートの眩しい笑顔というご褒美を頂けた僕の方がお礼をしたいくらいです！リユートの笑顔は眩しくて美しくて可愛くて…もう言葉では表現できないくらいです！」

「なっ…ベル！それは流石に褒めすぎです！」

「褒め過ぎじゃないですよ！これが真実です！というか頂いたご褒美のお礼にすっごくリユートを抱き締めたくなっただけですけど良いですか？」

「だっ…抱き締める!?しかしそれでは迷惑をかけた私にご褒美を頂いてしまう形に…」

「…あのーリユートにベルさん？私達を放置して息をするようにイチヤイチヤするのやめてくれないかな？私もアーデさんもちよーっと流

石にイラツとききちやうよ?」

「否定は…しません」

「…はっ」

シルさんの突っ込みとリリの気まずげな呟きに事実上リユーと僕だけの世界に入り込んでいた僕達は頬を真っ赤にして我に帰る。

…こう突っ込まれてしまうとリユーを抱き締めようにも凄くやりにくい。…くっ…しばらくお預けかあ…なんて考える僕。

一方のリユーはシルさんの指摘に言い訳を述べようと思っっているのかアタフタしていて凄く可愛い。

そんなことを考えていると、リリがわざとらしい大きな咳払いと共に呑気にイチヤイチャするリユーと僕に首を刺すように低い声で言った。

「…ベル様もリユー様も今日が何の日かお忘れで?ベル様とリリはリユー様とシル様にご報告しなければならぬことがあるとリリは思うのですが」

「…そういえば…そうでした」

「…リリの言う通り…だね」

リリの言葉が浮かれるリユーと僕の気持ちに鎮静化させた。

…僕の方が報告しなければならぬことがある以上僕がそれから目を背けるのは望ましくない。

その内容は…正直気が重い、リユーに話して判断を仰がないわけにはいかず。

僕とリユーが落ち着いたことによつて訪れた厳粛な雰囲気の下、僕は深呼吸をする。そしてリユーとシルさんに交互に視線を向け、二人ともが話を聞ける様子であることを確認した上で話し始めることにした。

「えっと…ですね?まず今日の踏み込みは無事完了しました」

「お怪我はありませんでしたか?ベル?」

「ええ。僕もリリも大丈夫です」

「…良かった」

リユーは深々と息を吐き安堵した様子を見せる。

：リユーには相当心配をさせてしまっていたよう。そのことに僕は心の中で謝る。

僕達に任せてしまったことに負い目を感じているようだとしルさんとリリから聞いてもいるし、それも原因なのかもしれない。

：リユーのための苦勞なら厭わないと何度も言ってるはずなんだけど：優しいリユーの性格だと僕がどう言おうと納得はし難いのかもしれない。

そして僕にもリリにも怪我がなかったというのは全くの偽りのない事実である。

よって僕の気を重くしているのは、別の内容。それを踏み込みの結果とと共に話さざる得ないという訳であった。

「それで：踏み込みの結果ですが：連続窃盗犯には接触できませんでしたか？」

「：接触できたのに逃げられた：みたいな感じですか？ベルさん？」

「：ベル様とリリがいてそんな不手際は流石にしませんよ：普通は：普通は：」

「：一体何があったのですか？ベル？アーデさん？」

歯切れを悪くする僕とリリにリユーもシルさんも不思議そうに首を傾げる。

それも当然だ。連続窃盗犯は「ガネーシャ・ファミリア」の推定では第三級冒険者。僕とリリの二人で手を焼くほどの相手でもない。

連続窃盗犯に手を焼かされる形になり、僕の気を重くさせている原因は他にあった。そしてその原因が問題を引き起こしてしまっていた。：だがそれを話すには躊躇があった：

僕がそうやって言葉を選んでいると、リリが大きな溜息とともに僕に代わってその原因を話してくれた。

「：その連続窃盗犯の方。二人の子供がいる女性の方だったんです」

「：え？それが：何か関係あるの？」

シルさんはリリの言葉にポカンとして首を傾げる。

…それも当然だ。その事実が何か問題をもたらすなど普通は考えられない。

だが僕には問題を引き起こした。

そしてそれを知るリリは溜息混じりにその続きを僕に代わって話し続けてくれた。

「…要はですね。窃盗を繰り返していたのはその方のお子さんを養うためだったそうなんです。何でもそのお子さんは同じファミリアの男性の方とお子さんだったそうで…ですが不幸なことに稼ぐためにダンジョンに潜っていた際にその方はそのファミリアのパーティと一緒に全滅。子育てをしていて離れていた彼女だけが生き残ってしまった。再建に力を注ぐファミリアには稼ぎ手になれない彼女を養う余裕はなく。稼ぐ方法を失った彼女は生活にも困るようになり半分自暴自棄に窃盗に走った…とのことです」

「それでその話を聞いちゃった優しい優しいベルさんが感情移入しちゃって捕まえられなくなった…みたいな流れ？」

「シル様の仰る通りです。ね？ベル様？」

「…うん」

リリの呆れ混じりの説明とシルさんの嫌味の含まれた物言いに僕は背を縮こまらせながら頷く。

…リユートの顔が見れない。リユートが僕の不甲斐ない行いに怒ってしまいそうで怖い。

だが僕には僕なりの言い分があった。それをせめてリユートに伝えるべく僕はリユートに視線を向けられないながらも言い訳を始めた。

「…本当は僕が間違っているのかもしれない。でもっ…！彼女の話は他人事ではない気がして…リユートを一人にして僕がどこか行くと同じことを起こしてしまいそうで怖くて…だから！」

偽りなき本心だった。

犯罪者に同情なんて必要ないのかもしれない。窃盗は罪だ。それは揺るがない。

…だが他人事ではなかった。

彼女の悲痛な事情を話す時の表情は忘れられない。その表情は絶望で染め上げられていた。

…その時僕は彼女を思わずリユーに重ね合わせてしまっていた。僕が彼女と同じ境遇をリユーにもたらす可能性がある。そう考えると怖くて。

その時点で僕は彼女を裁くという判断は消えていた。彼女をどうにかして助きたい。

本来リユーのことは関係ないのに。そう思ってしまった。

僕はそんな思いを込めて。リユーに理解してもらいたくって。

僕は切実な声と共にリユーにその思いを伝えようとする。

そうして思わず顔を上げ視線をリユーに向けていた時。リユーの表情に僕は言葉を詰まらせていた。

なぜならリユーの顔色は完全に青ざめてしまっていたから。

「…つまり…その連続窃盗犯は母親…だったのですか？」

「えっ…はい…そうなりますね…」

「なら…私は…子供達から母親を奪おうとした…？嘘…私は何をしている…？私は…『人助け』の名の下にそのような悪行を働こうとしていたのか？」

「リユー…リユー？」

「そんな…なら私が正しいと思いついていた正義は本当に正しくなかった…？子供から親を奪うことが正義のはずがない…違う…絶対に違う…私は…私は…」

「リユー…おっ…落ち着いてください！」

リユーの肩が震える。

リユーが頭を抱えて動揺する。

リユーの表情が絶望に染まる。

その様子を見ていられなくなった僕はリユーの名を呼び、動揺から引き戻そうと試みる。

だがそれだけではリユートの動揺は深まるばかりでリユートの頭を抱える片手を無理矢理引き寄せ、両手で握り締め少しでも動揺を抑えてもらえないかとさらに試みる。

そんな中リユートはポツリと呟いた。

今のリユートにとって決定的な意味を持つ言葉で。

それはリユートの『人助け』という一つの正義が崩れる合図になった。

「私は…彼女を裁かなければならないと…もう言うことはできない…その裁きは…絶対に正義にはなり得ない…」

それは僕が導き出した答えと同じ。

リユートにとってはこれほどまでの動揺を引き起こす衝撃的な答え。

だが僕にとっては望ましい展開に繋げ得る答えでもある。

リユートを慰めないといけない。

彼女は罪を犯した以上償わなければならず裁きは不可欠である、と。そうリユートに伝えるべきだという常識的な考えが生まれる。

だがリユートが今後『人助け』に執着しないようにこの動揺を利用しなければならぬ。そんな醜い考えも生まれる。

リユートに仲間の方々が抱いていたと思われる正義を汚すような考えを抱かせてはいけない。

リユートをこれ以上『人助け』などという僕達の正義にはなり得ない代物に苦しめさせる訳にはいかない。

僕の心に相反した考えが渦巻く。二つの考えが衝突して僕はリユートにかけるべき言葉を見出せない。

そうして僕までも動揺する中でリユートは呟き続ける。

「この正義では…多くの方に窃盗犯の恐怖から開放される反面確実に不幸になる方を生んでしまう。…これは正義ではない…皆が笑顔になれることを望んだ彼女達の正義ではない…ベル？私はどうすればいいのでしょうか？私は一体どうすれば…」

リユートは僕に救いを求めるように尋ねてくる。

リユーが苦しまずに済むようにする答え。  
リユーを苦悩から救う答え。

それはもう僕の中では一つしかなかった。

リユーの考えが揺らいでいるなら…僕はリユーの幸せのためにその考えを伝えなければならぬ。

僕は決断した。

これまで僕はリユーの話す仲間の方々の正義が本当にリユーの正義になり得るかずっと疑ってきた。

その疑いをこれまでリユーは退けてきたが、今のリユーはその疑いに揺らいでいる。

僕はこれを機にリユーの正義を僕と僕達の子供のための愛だけに  
する。

そんな醜い独占欲も含まれた考えがとうとう僕の思考を占拠した。

そしてその考えはリユーに言葉を紡がせた。

「簡単ですよ？リユー？みんなが笑顔になるための方法が僕には分か  
ります」

「本当ですか!?ベル!?」

「ええ。その女性の悩みがなくなれば窃盗犯がいなくなります。窃盗  
犯がいなくなれば多くの方々が笑顔になります。リユーも笑顔にな  
れます。要はそのための手を打てばいいんです」

「その手とは…」

「実はその女性は生活に困らないようお金をいくらか渡してきてある  
んです。その女性が生活に困らなくなれば窃盗犯は完全にいなくな  
る訳です。もちろん盗品はお返し頂きました。…ま、売り払っちゃつ  
たりしているとのこととで弁償が必要なんですけどね。その手配を僕  
にお任せ頂けませんか?」

「…任せるも何も手配を始めちゃってますよね?ベル様?」

「そうなのですか…なら引き続きベルにお願ひします」

リリのツツコミの通り確かに僕はもう既に僕の考えに基づいてこ



の事件の後処理を始めていた。

：リユーに認めてもらえるか若干の不安はあったが、これで問題ない。あとはリユーに確認を取るだけで済みそうだった。

「その女性に関してはお金を渡した所、窃盗は二度としないと約束してくださいました。なのでお金の心配さえなくなればもう大丈夫でしょう。ただ生活の資金的な支援はいつまでもできる訳ではないので、ミアハ様に何とかならないか相談してみます」

「神ミアハに：なるほど。あのお方なら信頼できそうです」

「：あえて女たらしのミアハ様を選ぶのがなんというか：だね。ベルさん」

「：え？」

後処理の方針を話していると、シルさんに不思議な突っ込みを入れられるが：意味もよく分からないので聞き流して僕は話を続ける。

「それで何事もなければ【ガネーシャ・ファミリア】に身柄を引き渡さずに済むのでは：と考えています。シャクテイさんにはその経過を見た上での報告でいいかと思います。如何ですか？」

「ちよっ：ベル様？それは流石にまずいのでは：」

「：シャクテイに話を通せば即座に身柄を拘束しようと動くと思いません。ベルの言う通り彼女の改心と生活の安定のための時間を確保するためにも報告は遅らせるべきかと」

「：それでは立場回復に繋がらないような：その窃盗犯を【ガネーシャ・ファミリア】に引き渡す、もしくは協力して捕まえる：が目的でしたよね？ついでに言うと、常時連絡を絶やすなという釘を刺された上で」

「その点は：窃盗がなくなったということで大丈夫じゃない：かな？」

「：そう：なのでしようかね？」

リリは納得いかなさそうだが、リユーはすっかり納得してくれた模様。

：恐らくリユーの頭の中は窃盗犯になってしまった女性をどうしたら助けられるかで一杯なのだろう。

もちろん僕もその女性を助きたい。だからリュウの確認を取る前に既に彼女のために便宜を図った。

だが：僕にとって一番大切なのはリュウの安全と笑顔である。

：実はこれはリュウとシャクテイさんの接触を防ぐための方便に過ぎない。

リュウの正義希望が揺らぐ今シャクテイさんとの接触は『豊穡の女王人』における『人助け』への執着を生んだ時のように余計な波を起こす可能性があるから。

そして僕はその女性への後処理を一通り話し終えると、次は僕にとって一番大切なリュウの笑顔を守るための話を切り出した。

「それで：ですね？僕は常々思うんです。リュウはみんなを笑顔にしたいって切に思ってます。それは僕も同じでその考えはとても素晴らしい考えだと思います。ですが：そのためにリュウが笑顔にならないのはおかしいんじゃないかなって思ってしまうんです」

「ベル…」

「だからまずはリュウが笑顔になれるように頑張りましょう？僕もお手伝いします。リュウを笑顔にできるように精一杯頑張ります。なので：今は『人助け』とかリュウ自身の笑顔に関わらない正義希望は一度忘れませんか？その正義希望のせいでリュウが笑顔になれず苦しむのを：僕は見てられないんです」

「それは：分かります。今の私にとって一番大切な正義希望はベルとお腹の中にいる我が子への愛であることは間違いありません。：夢の中で仲間達が伝えようとしてくれた正義希望もこれだったのでと：今は納得できます。：彼女達には子供はいませんでしたから。：この子は私とベルの愛を象徴し、私の幸せを体現してくれる存在なのでは：と思うのです」

リュウはそう言つて自らのお腹をそつと撫でる。

その表情は優しきで満ちていて：リュウが本当にお母さんになったらこんな風に僕達の子供の頭を撫でてくれたりするんだろうな：なんて事まで考えてしまつたり。

リュウが必要のない正義希望のために苦しむことがなくなった先には

こんな幸せそうなりユートの表情が見られる。

そう思うと尚のこと僕は念を押さずにはいられなかった。

「ではリユー？…これからはリユーと僕とお腹の子供の三人で暮らしていきましよう？他のことは気にせずまず僕達が幸せになるために生きていくんです。それがいいと思いませんか？」

「…ベルの言う通りだと思います。以前も言った通りベルを悲しませ、お腹にいる我が子に不幸をもたらすことは私の望みでは到底ありません。もう既に私の決心はシルに話してありましたが、『人助け』という過去の正義希望はこの機に捨てます」

「それは何より…！」

…と喜びかけた僕。

だが僕は今聞き捨てならないことを聞いた気がした。そのせいで言葉を詰まらせる。

『もう既に私の決心はシルに話してありました』…？

僕よりも、前に？シルさんに？

恐る恐る視線をリユーから移すと、そこにはニマニマと笑みを浮かべたシルさんが…

ちよつとシルさん…？

今僕がリユーの説得をしていたはずなのにもう既にリユーの決心が終わってるってどういうことですか？もちろんリユーが決心してくれたこと自体は嬉しいのは当然だけど…

と心の中でぶつぶつとシルさんへの文句を垂れていると、シルさんは勝ち誇ったような表情と共に言った。

「フフーン。ごめんね？ベルさん？リユーがベルさんの恋人としてこれまで以上にイチヤイチャして、ベルさんとの子供をベルさんと一緒に愛情一杯で育てるっていう話は私の方が先に聞いちゃったんだく」

「…えっ？」

「シッ…シル!?確かに私はベルの恋人としてベルとの子供の母親として生きていくと決心したのは確かですが、そこまで言った記憶は…」

「あれーリユーはベルさんとイチャイチャしたくないのー？これまで通りだとあんまりイチャイチャできないんじゃないのかなーそれだとベルさん笑顔になれないよー？」

「ぐう…それもそうです。ベル！ベルの笑顔のためこれからベルと全力でイチャイチャします。…恐らく手加減はできません。…覚悟してください！」

…リユー？全力でイチャイチャするための覚悟って…何？

シルさんのからかい半分の指摘に顔を真っ赤にして凄く曖昧だけどなんだか凄いことを口走るリユーに思わずそう突っ込む。

…これはつまりこれからはリユーにあんなことやこんなことをしても断られない…ということ？

でも僕から何を頼めばいいか分からないし、僕からリユーとイチャイチャしようとするのは恥ずかしいし…

などと一人頭の中で僕が苦悶する一方、シルさんのリユーへのからかいは止まることはなかった。

「それにしてもリユーとベルさんの子供ってどんな子が生まれてくるんだろーね？女の子ならリユーみたいな美人さんかな美人さんかな子になると私は思います」

「シル…私を褒めても何も出てきませんよ…ただ男の子なら常日頃は愛嬌がありつつもいざと言う時はとても凛々しくカッコ良い…そんな子になると私は思います」

「…それってまるつきりベルさんのことだよね？」

「…はっ。シル…お願いですから忘れてください…私は今つついべルの魅力の一つを話してしまい…」

「あー無理だなくベルさんは愛嬌がありつつもいざとなるとカッコ良い…それには私も賛成！アーデさんはどう思いますか？」

「…どうしてリリに話を振るんですか？まあ…リリも同感ですけど」

…そうして気づけば僕だけ話から置いていかれているという現実。

リユーとシルさん、そしてリリはそれからすっかり所謂女子トーク（？）を始めてしまい僕は放置。

…と言ってもその間リユーは時折微笑んだりして終始楽しそう

だったので僕は口を挟むことはなかった。

僕はホツとしたあまり一人考え事をしたかったからそれで良かったから。

：リユーがようやく『人助け』という正義希望を捨ててくれた。

これが正しいのかは分からない。

けれどリユーの笑顔を守るためには絶対に必要だという確信があつて。

だからこそ僕は今回だけはリユーに僕の考えを押し通した。

：この判断がリユーのために必要であつたと僕は信じたい。

これからリユーの笑顔が溢れてくれると信じたい。

そして僕もまたリユーの恋人として、そしてリユーのお腹にいる子供の父親として、覚悟を決めよう。

リユーと僕達の子供のために僕は精一杯頑張ろう。

それこそシルさんではないけど、リユーとこれまで以上イチャイチャして、リユーとの子供を愛情一杯で育てよう。

その覚悟を僕は改めて心の中で密かに決めた。

## 〈懐妊編〉第四章 希望を宿して 何気ない日常を恋人と

「やつと二人だけになれますね？リユー？」

「…ええ。全てベルのお陰です。本当にありがとうございます」

「いえいえ。リユーのためならこれくらいどうってことないですよ」

私のお腹に子供がいると発覚してから数えれば四日になるだろうか。

私は入院による体力の回復を済ませ、ベルはその間に私の持ち込んだ連続窃盗犯の後処理を完了させた。

そのお陰で私とベルは四日ぶりの帰宅を果たすことになった。

帰宅先は調査用の拠点になるはずだったこのダイダロス通りの貸家。

…結局改めて別の場所を借り直すのも手間であるということでも不都合な事情でも生じない限りはこの貸家で当分の間は過ごすとということに入院中の相談で決まっていた。

そして今日はベルによる私と二人で過ごしたいという一点張りによつて二人のみでの帰宅…ということになった。

…本当はこの貸家に本格的に住むとなればそれ相応の準備が必要であり、早々に準備に取り掛かる必要があつた。

そのためシルやアーデさんの力を借りつつその準備を進める…というのが望ましいはずであつたが、ベルの猛反対で翌日に延期。

少々不本意ではあつたが、ベルと全力でイチヤイチャするとお伝えした以上自らの言葉を覆すのも問題。

ということとで今日くらいはベルと二人で過ごし…イチヤイチャしようとは決めたのである。

そうして一通り片付けを終えた私とベルは顔を見合わせる。

二人で過ごす、と言っても特別すべきこともなく。

片付けを終えてしまつてからどうすればいいか私とベルは揃つて困つてしまう。

二人して互いに顔を見合わせたまま棒立ちになる。

それからしばらく見つめ合っているうちに段々恥ずかしくなってきた、頬が熱くなってきたとお互いの顔を見れなくなる…というアクシデントを経て。

一悶着の末にベルが過ごし方に関して話を切り出してくれた。

「えっ…！えっですすね!? とりあえず…一緒にソファアに座ってお話でもしませんか?」

「はっ…はい…それが良いかと…」

そう二人の間で即座に合意が交わされ、少々気まずさもあつた空気が崩される。

そしてササッと並んで座った私達。ただ私とベルの肩と肩の距離が大きく思えてしまった。

…イチャイチャするなら…もつと距離を縮めなければ。

そう思い立った私はベルに気まずい空気を打ち崩してくれたお礼代わりにほんの少しベルに寄る。それと共にベルの手の甲にそつと触れながらベルの顔を見つめ、一つお願いを試みることにした。

「…ベル?手を…繋いで頂けませんか?ベルの温もりを…感じたい気分なのです」

「あっ…えっ…ええ!もっ…もちろんです!」

微笑みと共に告げた私のお願いにベルは表情を綻ばせ快諾してくれる。

指と指を絡ませ掌と掌を合わせて繋がれる私とベルの手が温もりを交換し合う。

その暖かさに心を和ませながら私はポツリと呟いた。

「…こんな風に落ち着いて手を繋げるのは…【深層】の時のような気がします…」

「…それもそうです。それはきつとりリユウの悩みがようやくみんな解消されたお陰ではないですかね? 【深層】から帰ってきてからのリユウは悩みっぱなしでしたから…それこそ【深層】の時よりも」

「…ベルの言う通りです」

私は思い返してみる。

シルとの関係。

過去の正義<sup>希望</sup>。

：周囲から見れば些細でも私にとっては重大な悩み。

ベルの言う通り【深層】から帰ってきて以来ずっとそれらの悩みに悩まされてばかりだった気がする。

だが今はどうか？

私はベルへの愛という本当に大切な正義<sup>希望</sup>をより深く心に刻み込むことができている。

それだけでなくベルとの愛の象徴でもある私とベルの愛によって恵まれた私のお腹にいる大切な我が子というもう一つの正義<sup>希望</sup>。その存在を私はようやく認知することができている。

ベルの恋人として。

これから生まれてくる私達の子供の母親として。

私の心はいつになく正義<sup>希望</sup>に満たされている：そんな気がした。

そんな私の満ち足りた思いを察したかのようにベルは私の手を握りしめる力をほんの少し強めながら言う。

「そして：こんな日がこれからもずっと続くんです。リユーと僕が平穩に幸せに暮らせる日常が：そんな日常に遠くないうちに僕達の子供も加わって：もつともつと僕達の日常は幸せで満ちていくんです」

「きつと：そうでしょう。ベルといればそんな幸せな日常が手に入る：私はそう信じることができます。もちろん私もベルと私達の子供の幸せのために努力を惜しみません。私の持つ全ての力を以て：」

「そんな気張らなくてもいいですよ？僕にとってはリユーがそばにいて笑顔でいてくれればそれでいいんですから」

「しかし：これまでベルに散々迷惑をかけておいて何もしない：などということは私にはできません。精一杯ベルを笑顔に出来るように頑張ります」

「：分かりました。一緒に笑顔になれるようにこれから頑張っていきましよう？リユー？」

「ええ。もちろんです。ベル」

何気ない日常。



それが私達の幸せに暮らせる日常。

…今なら私はその大切さを重々理解できる。

これまではずっと平穩からは程遠い生活をずっと続けていて。

その生活が如何に私の今の正義希望にとつて障害となり得るか気付いてしまった今だからこそベルの言う『平穩に幸せに暮らせる日常』が如何にと尊いかに気付けた気がした。

そしてその日常を私とベルは努力を重ねてこれから守っていかなければならぬ。

ベルのため。

ベルとの間に恵まれた我が子のため。

…私自身のため。

その決意を改めてベルと共に固める。

この決意は何度確認しても多いなんてことはないと思ふ。

…なぜなら私は頭に血が上るとすぐに大切なことを忘れてしまう傾向があるから。

だから何度も何度も確認して刻み込む。同じ過ちを繰り返さないために。

そんな決意を私が固める一方ベルは遠い目をして呟く。

「結婚式に…新婚旅行に…出産…これからは幸せで一杯のイベントばかりですから。どれも今から僕はすつごく楽しみです」

「けっ…結婚…？ベルはそこまで考えているのですか？」

ベルの口からサラリと飛び出した『結婚』という言葉に私は正直驚く。

私達は恋人。

「そこまでは私も当然理解していた。

だが結婚して…そして夫婦になる…そういう未来は私の発想を越えていた。

ベルがそこまでの未来を私と共に考えてくれているのが私は嬉しい。

私とベルが夫婦になるという明るい未来が私の心を満たしていく。そして私が思わず口にしてしまった呟きにベルはさも当然のよう

に返す。

「え？もちろんですよ？リユースは母親になって、僕は父親になります。責任を取るという意味よりカリユースと生まれてくる子供のために結婚は是非ともしたいと思ってるんですけど…ダメでしたか？リユース？」

「めっ…滅相もない！私も当然ベルと結婚したいです！ならば私とベルは恋人を越えて婚約者、という理解で大丈夫ですか？」

「ふふ…そうですね。僕達は婚約者です。僕達は婚約者なんです」

不安そうな眼差しと共に私に結婚の意志がないのか尋ねてくるベルに私は大慌てで否定する。

私がベルと結婚したくないなんてことあるわけもない。

…つまりは私がベルよりも視野が狭く未来が見えていなかった…ということ？

…やはり私はベルの婚約者としてベルと共有しなければならぬ考えをきちんと共有できてないような…

と、自虐的考えに陥っていく私を他所にベルは婚約者という言葉で噛み締めるように二度呟く。

そうしてベルはふと何かを思い立ったように私の顔を覗き込みつつ言った。

「そういえばすごく今更なんですけど…お腹に子供がいるとは言ってもお腹に何か変化はあるんですか？僕にはよく分からんですけど…」

「え？…それは…デア・セイント【戦場の聖女】のお話によるとまだ目立った変化はないとのこと。ですが来週頃には子供の心臓の鼓動が始まるのか」「そうなんですか…少しずつお腹の中で成長していつているんですね…そう考えると、なんだか嬉しくありません？」

「同感です。私のお腹でベルとの子供がすくすくと成長していると考えると…私も嬉しいです。どんな子供が生まれてきてくれるのか今から楽しみでもあります」

「あーシルさん達とその話ですっごく盛り上がってましたもんねー」

「…ベル？」

ベルと子供の成長に関して考えを共有できていたことに先程抱いた自虐的な考えをほんの少し打ち消すことができた私。

だが逆にベルはなぜか唐突に頬を膨らませて不満げな表情を浮かべる。

わざとベルが頬を膨らませていると丸分かりなこともあり、ベルに可愛さを感じてしまう…

…という点は置いておいてベルの不満の理由が分からない私は首を傾げつつベルを見つめる。

するとベルはその不満そうな表情を打ち消したかと思えば、得意げにも見える笑みと共に言った。

「あ、そうですねーちよつとリューにお願いしてもいいですか？リューのお腹に近づいてみたいです。僕達の子供をそばで感じたいなあ…なんてつい思ってしまった」

「いいですけど…特に変化はありませんよ?」

「その点は大丈夫ですから。いいですね?リュー?」

「えっ…ええ」

「ありがとうございます!」

食い気味に私のお腹に関心を示すベルに私は戸惑うが、断る理由も特になく私はすぐに承諾する。

その承諾にベルは笑顔で礼を告げると、早速身体を傾け私のお腹にゆっくりと近づき耳を当てる。

そしてベルはふうと息を吐くと、耳を澄ませるように黙り込んだ。

その間これは膝枕に近いようで違う…お腹枕?

などというよく分からない疑問にぶつかっていたが、ベルの呟きによつてその疑問はどこかに吹き飛ばされた。

「…やつぱり聞こえませんかね」

「それは…当然です」

「ははは…でもリューの温もりを別の形で感じられて何だか心地いいです」

「それは良かったです」

…どうやら案の定というか私のお腹に耳を当てても何も分からない

かつたらしい。

ただベルは私のお腹の上に顔を置くことを心地よいと言ってくれた。

それだけでも私にとっては意味のある行為だったと思えた。

「あの…これはシルさんはやってませんかよね？」

「シル…ですか？シルは私のお腹に触りはしましたが、ベルと同じ行為はしていません。それがどうかしましたか？」

「…良しー」

私のお腹の上でガッツポーズを決めるベル。

…もしかしてベルはベルと同じくらいに私と距離が近いシルに嫉妬していた…

だから先程不満そうな表情を浮かべていた？とベルの考えを私は推測してみる。

その間にもベルは余程私のお腹の上をお気に召したらしく耳を私のお腹にスリスリ擦り始めたり、私の顔を時折見上げてはにこつと笑みを浮かべるといふ愛らしさまで感じる行動を繰り返す。

可愛らしいとしか表現できないベルの様子を私は微笑みを浮かべながら眺めつつ繋がれたままのベルの手を握り締める。

何気なくベルと触れ合える心地よい時間。

そんな時間を過ごしていた私とベルの耳にその和んだ空気を読まぬ音が鳴り響いた。

くううう…

「…あ」

「…えっ？」

響き渡る間抜けさまで感じてしまうような音。

…その音は…明らかに私のお腹から放たれていた。

そしてその原因は…

「…今の音…お腹の子供の泣き声だったりとか!？」

「えっ…!?ちっ…ちっ」

盛大に勘違いを起こしたベルはガバツと身体を起こし、興味津々に私のお腹を眺める。

…違うんです!?

ベル。お腹の中の子供は泣き声を上げたりなどこの時期にできるはずもなく…

「あ、もしかして僕がそばにいるのを気付いて反応してくれたとかですか？流石僕達の子供です！僕達の愛がちゃんと伝わってるんですね！」

「ベツ…ベル!?実は…その…」

勘違いしたままのベルは嬉しそうに私に話す。

…お陰で尚更話を切り出せない。

原因が原因で普通に話すだけでも恥ずかしい。

その上ベルの勘違いのお陰でさらに話しくくなる。

うっ…ベルに話せばベルに恥をかかせてしまうことに…

などと戸惑っているうちにベルの勘違いはさらにエスカレートしていく。

「反応してくれてありがとうね。パパはここですよ〜ママと一緒に会える日を楽しみにしてまちゅからね〜」

私のお腹に楽し気に声まで掛けだしてしまったベルに私はもう耐えられなかった。

この際ベルに恥をかかせてしまっても仕方ない。

私の恥など尚のことどうでもいい。

今言う機会を逃せばベルはさらに恥を重ねることになる。

それだけは何としてでも防がなければならなかった。

私はベルにショックを与える覚悟を決めて、とうとう声を上げることができた。

「違うんです！これは私が空腹でお腹が鳴っただけなんです！」

「…え。えっ…ええええええ!?!」

ベルはショックのあまり後ろに飛び退きつつ叫ぶ。

…その反応も私には十分理解できてしまう。…もし私がベルの立場だったら…恥ずかしさで…

「じゃあつまり僕は…ただただリユーのお腹に話しかけていたんですか？お腹の子供には一切関係ないのにな？」

「…」

「若干の赤ちゃん言葉で？しかもリユーのお腹の上で？これはまさかおじいちゃんの言う『あかちゃんぶれい』…!?いや、違いますよね!? 違いますよ!」

「…?」

ベルが意味不明な言葉まで口走りながら悶絶する。

…すみません。

ベル：私が恥を恐れたばかりに…

そう申し訳なさを感じるが、今更遅い。

ベルは私に向かって救いを求めるように叫んだ。

「リユー!?お願いだからさっきのことはどうか忘れてください!」

ベルの懇願に程近い叫びに私はコクリと頷いて、ベルの醜態を忘れたということにする。

…ですがすみません。ベル。

そう心の中で謝らなければならない。

なぜならどんな形であれベルの私達の子供への愛を感じることができた今のベルを私は多分忘れることはできないから。

こうしてベルの求めに反して私の記憶にはベルの今の行動の全てが刻み込まれたのであった。

ベルの私と私達の子供への愛の深さを感じさせてくれる大切な大切な記憶として。

## 心と心を繋ぐ愛情料理…？

ぐううう…

部屋の中にお腹の鳴る音が響き渡る。

少し情けなさまで感じさせる音を発していたのはリユーと僕のお腹。

そして原因はお腹を鳴らしながら頭を抱えるリユーにある。

「ぐううう…」

「…リユー？もうそろそろやめませんか？」

文字に起こせばお腹の鳴る音と全く変わらぬ唸り声を上げるのはリユー。

リユーに僕は呆れ半分心配半分で中止を提案する。

だがリユーは諦められなかった。

例え空腹に苛まれようとも。

リユーは一つの答えを見つけ出さなければならなかったから。

僕の好物という(リユーにとって)とってもとっても大切な答えを。

僕の好物を自らの力で気付き、その僕の好物を自らの力で作り僕を喜ばせるまでは…

リユーは絶対に諦められない…とリユーが言っていた。

リユーの僕を喜ばせたいと思ってくれていることは凄く嬉しい。

リユーの手料理は僕だって当然食べてみたいし、僕の好物であれば尚嬉しい。

だが…僕には記憶がないのだ。

リユーに僕の好物を話したこと自体。

なのにリユーは自力で僕の好物を探り当てようとしている。

なぜこんな不思議な挑戦にリユーが挑んでいるかと言うと…

「…ダメです。あともう一步で…もう一步でベルの好物が分かる…気がするんです。あと少してベルの考えが読めるような…」

「あの…確かに僕達が以心伝心の仲になれたらすっごい嬉しいっていうのは同感ですけど…その…ですね?」

「ああ…感じてきました…この芳しい香り…これは…」

「それ絶対空腹が起こす幻覚ですからね!!リユー!!近くに芳しい香りを発する食べ物なんてありませんから!」

空腹が起こす幻覚としか考えられない何かを感じ取り始めまでしたリユーに僕はもはや悲鳴を上げていた。

まとめて話せば、リユーは僕の考えを読めると証明するために僕の好物を予測しようと頑張っているのだ。

僕の考えが読めるようになれば、以心伝心となり僕達の関係がより深まる…と。

空腹は僕達の間を深めるための言わば苦行…?

その苦行を僕達の愛のために頑張るリユーは凄く愛おしい。

今尚目を閉じ瞑想に没頭しながら唸り続けるリユーを想わず抱きしめたくなる。

ただ一言だけ漏らしたい。

…僕はこんなことになるとは予想もしていなかった、と。

僕はリユーの手料理を食べるために空腹のまま一時間以上も待たされることになるとは思いもしなかった、と。

リユー…

もう僕お腹ペコペコです…

リユーの愛の強さには僕の精神的にはお腹一杯だけど、本物の空腹は愛だけでは満たされず。

ぐううう…と再び僕のお腹が鳴る。

…こんな事態に発展した発端はリユーのお腹が鳴った時にあった。

??

「…分かりました。色々ありましたが、リユーのお腹が鳴ったんです



ね。よく分かりました…分かりましたから…」

「はい…その…色々忘れますのでそろそろ話を進めたいのですが…」

リユーのお腹が鳴る音をお腹の中の子供の泣き声だと盛大に勘違いしてからしばらく。

僕の悶絶が終結するまではしばらくの時が必要になった。

そうして僕の羞恥心がようやく少し和らぎ、リユーの顔を見れるようになった所で僕達の会話は再開されていた。

「…では昼食食べますか？調査中は酒場や屋台で適当に済ませてましたもんね…どうしましょう…？」

「確かにあんぱんと牛乳のような軽食ばかりでしたね」

「…前からお聞きしたかったんですけど、その組み合わせってどこで知ったんですか？」

「え？シルが教えてくれました。何でも頭を使うのに必要な糖分と身体を動かすのに必要な栄養を両方摂取できるように、と適切な組み合わせを教えてくださったんです。それにあんぱんの中の具材である小豆には疲労回復効果があるそうで…」

「そうなんですか？…ってまたシルさんですか…」

リユーが軽食であろうと健康に気を使って選んでいたという事実には少々驚きを覚えると共に僕の健康のことも気を使ってくれたという事実が分かり、ちよつと嬉しくなる。

「…まあそんな些細な気遣いだけではリユーの体調不良を防ぐことはできなかつただけだ。」

それはともかくどうにもその組み合わせが変だ。

「…どうしてあんぱんと牛乳？あんぱんは極東の菓子パンだと聞き、あえて選ぶ理由がよく分からない。」

そもそも第一前提としてシルさん情報というのが疑いを呼ぶ。

「…というかまたシルさんですか。リユー？」

本当にリユーはシルさんのこと好きだなあ…なんて嫉妬していると、リユーは急に畏まった表情で僕に視線を向けてきた。

「それで…今日の昼食に関してですが、時間もありませんし外で買う軽食ではなく家で作る本格的な料理…は如何でしょうか？」

「家で作る本格的な料理…ですか？」

家で作る本格的な料理…それもリユーからの提案。

これって…

「ええ。是非この機会にベルに私の料理を振る舞って差し上げたいのです」

リユーの手料理を食べられる!?

「ほっ…本当ですか!?リユー!!今日遂に僕はリユーの手料理を食べられるんですね!？」

「えっ…ええ…」

僕は初手料理に感極まって食いつくようにリユーと距離を締め肩を抱いてしまう。

…いや、リユーは食べませんよ？

それはともかく僕の勢いにリユーは若干戸惑い気味ながらも話を続けた。

「…ベルは私の手料理がそんなに食べたいのですか？」

「もちろんです!リユーの愛が一杯込もった料理が食べられると思うと、もう心どころか体も踊り出しちゃいそうです!」

「ベツ…ベルは大袈裟過ぎます。…ですが…ご期待に添えるように最善を尽くしましょう」

僕の歡喜にリユーは頬を赤らめるのもそこそこに。

リユーは表情を引き締め、まるでダンジョンに挑む前の覚悟と緊張で一杯の表情に様変わりする。

…あのーリユー?料理ってそんなに覚悟と緊張が必要ですかね?

…とツツコミを心で入れつつも僕はそのツツコミを抑えて尋ねた。

「ちなみにリユーは何を作ってくださいる予定なんですか？」

「今日は是非ベルの好物を作って差し上げたいと考えています」

「僕の好物…ですか？」

その時僕はもうすでに疑問を抱いていた。

僕はいつリユーに僕の好物を伝えたのだろう、と。

…もう既にリユーに手料理を食べたいと伝えてしまっている以上、この時点でもう後の祭りだったかもしれない。

だがもうちよつと早くリユーを止められたら良かった…と僕は後々後悔することになる。

「ええ。ベルの好物です。なので今から予測してみます」

「予測…え？リユー？何を言ってる…」

「私はベルの好物をこれまでにお聞きしていないので予測して当てなければ、料理を作ることもしかないので」

「え…あ…はい？」

話を素つ頓狂な方向に進めていくリユーに僕は思わずポカーンとしてしまう。

だがそのままブーツとしている訳にもいかず、今回は僕もツツコミを入れた。

「あの…リユー？僕の好物を予測なんかしなくても僕が普通に教えて…」

「…それではダメなのです。これは手料理を以てベルに愛を伝えるための試練なのですから」

「試練って何ですか!?!リユー!」

さらに話をおかしい方向に進めていくリユーに僕は衝撃のあまり叫びに程近い声を上げてしまう。

とは言ってもリユーにとっては全くおかしな方向ではなかった…らしい。

それをリユーの独白によって知ってしまった僕はリユーのためという意味でも手料理を食べたいという意味でも引けなくなってしまうのだ。

「…ベルには私の考えが読めます。ですが愚かな私にはベルの考えが読めません。これは婚約者として望ましくない状況です。このままではベルのことを理解することもできない最低な婚約者に…なってしまいます。そんな状況は一刻も早く脱却しなければ…ベルに顔向けできません」

「リユー…」

リユートの独白が漏らしたのは不安。

僕はリユートの正義に対する思いを理解して、その理解の元リユートの考えを読み行動してきた。

：その一方でリユートは僕のリユートへの愛の深さを：申し訳ないけど理解しきれていないような行動を繰り返してしまっていた。

別に僕としてはリユートが幸せであれば問題はないんだけど、そんな状況にリユートは納得できるはずもなく。

この不公平で不均衡なリユートと僕の関係を一刻も早く改善したいとリユートは思っているのだと：僕にも理解できた。

「それに：ベルは私をつい嬉しくなってしまうような事ばかりしてくださいます。まるで私の考えを完全に読みきっているかのよう。それはとても幸せなのですが：お陰で私はベルにずっと翻弄されてばかりで：私もベルにもっと喜んで頂いたり照れて頂いたりしたいのです！ベルばかり不公平です！」

「リユツ：リユート！」

次にリユートが漏らしたのは僕への嫉妬。

それも途方もなく可愛らしい嫉妬。

僕がリユートを喜ばせたり照れさせてくれる。

それはリユートにとって幸せ。

そんな僕にとって嬉しい言葉を聞かせてもらえる僕も幸せ。

だけどその一方でリユートは言うほど僕を喜ばせたり照れさせたりできていない：訳ではないですよ？リユート？

なぜなら今こうしてリユートが幸せだと言葉にしつつリユート自身が凄く照れているのを見られるのは僕にとって凄く喜ばしい。

さらにリユートをここまで僕が幸せにして照れさせていると考えると、僕まで恥ずかしくなってくる。

ただ僕の本心をイマイチ汲み取れていないリユートは止まるはずもなく。

リユートはこの僕の好物当ての試練をこのように総括した。

「なのでこれは私がベルと互いの考えが分かり合える以心伝心の仲になるための第一歩です！ベルの好物を当てて少しでもベルの考えを

理解していることを証明して見せます！そしてその好物を…なんとか…作って…ベルに手料理を以て愛を伝えるのです！」

…最後の方に宣言が詰まり気味かつトーン下げ気味になったのはどうしてだろうか？

そう小さな疑問を抱いたものの、リユウの覚悟の詰まった宣言を聞かされて僕が断れるはずもなく。

僕は応援の気持ちを込めた笑みと共にリユウの覚悟を受け入れた。「分かりました。僕もリユウと以心伝心の仲になりたいという気持ちは一緒です。僕にたくさん愛を伝えてください。手料理も楽しみにします」

「…っ…はい！頑張ります！」

感極まった表情と共に僕の言葉にコクリと頷いて応じるリユウ。

こうしてリユウの僕の好物を当てようという半分ゲームみたいな試練が始まったのだが…ここからが試練と言うより…苦行の始まりだった。

「ミートソースパスタですか？」

「あっ…あれは…ちよつと嫌な思い出が…」

「では…カルボナーラですか？」

「うーん…言うほど好きではないですね…」

「では…パエリアは？」

「…『豊穰の女主人』のメニューで見ましたが、食べたことないですね…」

「…スクランブルエッグ？」

「好きでも嫌いでもないと言うか…」

…このときふと気づく。

リユウの頭の中の料理のレパートリーって僕の想像以上に少ないんじゃないかって。

なぜなら最初に出てきた料理の名前がほとんど『豊穰の女主人』のメニューの料理ばかりだったから。違うとしても初歩的な料理ばかり。

そして『豊穰の女主人』のメニューだと分かって聞いている僕は特に何も考えず率直に感想を口にしてしまった。

それもまた判断ミスだった。

…早々にリユースの料理のレパートリーが底を尽きてしまったのである。

「あと…どのような料理がありましたか…?」

「…え?」

「はっ…ブラッドサウルの温泉卵ですか!」

「…ブラッド…サウルス?...卵?...食べれるんですか?それ...?」

「くううう...」

これ以後はリユースは頭を抱え唸るばかり。

気付けばリユースのお腹だけでなく僕のお腹まで鳴り出してしまふ。

そしてリユースの唸り声とハーモニーを…醸し出しはしない僕達のお腹はリユースの思考を妨げようとするように定期的に情けない音を鳴り響かせる。

そうして一時間以上が経過した。

??

「ああ…ベル…すみません。…私は無力です…ベルの好物が…分からない…」

「…リユース」

…当然と言えば当然では?というツツコミを僕は喉の奥に何とか仕舞い込みつつ。

そうして僕が掛けるべき言葉に困り果てていると、リユースは諦めかけてしまっている影響かどんどん負のスパイラルに突入していく。

「…私にはベルの考えが分からない…ベルの恋人に…相応しく…」

ぐううう…

「…ない…?」

…お腹の鳴る音に重い雰囲気打ち崩されながらもリユースが落ち込み始めているのは事実で。

僕はリユーをどうやったら慰められるか。

もしくはどうやったらリユーの納得する方法で僕の好物を知ってもらえるか考える。

…そもそも好物を全くヒントなしに当てるなんて不可能に近い…と思うのは僕だけ？

僕がリユーの考えを当てられるのはリユーが仲間の方々のことを大事に思っていることと困っている人を見過ごせずつい助けたくなってしまうということを理解しているからで…

…好物を当てるのに僕の性格とか分かっても役に立たないよなあ…と思ってしまう。

ただリユーが試練に選んでしまった以上リユーは意地でも変えようとするはずもなく…

このまま行くと昼食抜きでは済まなくなる予感までしてくる。そんな時僕は今更のように気付いた。

何も好物を直接教える必要はない。ヒントでいいではないか、と。そしてリユーにも分かりやすいヒントは即座に思い浮かんでいた。

「えつと…そろそろお昼時終わりそうですね」

「…すみません。私が無力で無能でポンコツで…」

「きつと今頃神様大繁盛してるんでしょね〜」

「神様…とベルが言うとなれば神へステイア…神へステイア…」

そう。簡単なヒントだ。

神様のバイトはリユーも知っているはず。

リユーは気付いてくれる。

僕の好物…ということになる食べ物か何かリユーは気付いてくれる。

そう信じて僕は呟き、リユーに縋るような視線を向ける。

…お腹が空いてそろそろ何か食べたかったから。こんな時はリユーの手料理をお腹いっぱい食べないと気が済まない。

そんな考えを抱きつつリユーを見つめる。

一方のリユーは落ち込む様子から一転して考え込み始めた様子。

そうしてしばらくが過ぎてハッと目を大きく見開いたリユー。

リユーは突進してきそうな勢いで僕との距離を縮め、僕の肩を抱くとどうとう答えを叫んだ。

「じゃが丸くん！じゃが丸くんなのですね!?ベルの好物はじゃが丸くん!?!」

「そつ…そうですね！僕じゃが丸くん大好きなんですよ！」

「そうですねか…じゃが丸くん…ベルの好物はじゃが丸くん…良かった…何とかベルの好物が分かりました…危うく当てるまで絶食する覚悟を決めることになるかと…」

…そこまでするつもりだったんですか？リユー？という呆れと驚きが混じった眩きは心に封じ込めるとして。

リユーのあまりの勢いに一瞬戸惑い混じりになりつつも威勢よく僕の好物だとアピールした結果リユーは深々と溜息を吐き、へたりと全身を背もたれに委ねる。

…相当気張っていたんだらうなあ…僕の好物を当てるために。

…と嬉しくありつつもその本気の出す方向のズレを感じずにはいられない僕。

それでも僕はリユーに労いの言葉と頑張って考えてくれたお礼を伝えようと口を開こうとする。

だがリユーにとつてはここからが本番だったと僕は忘れていた。

僕が口を開く前にリユーは自らの頬を叩いて気を入れ直すと、勢いよく立ち上がって言った。

「じゃが丸くん。必ずやベルの好物を作ってみせます。待っていてください」

「ちよつ…」

今から作り始めたら食べられるのってさらに一時間後では…？それは流石に空腹で…

とリユーを止めようと思いつ僕。

だが僕もリユーも決定的なことを見落としていたことに気付かなかった。

そしてそれに先に気付いたのは料理を始めようとした他でもないリユーであった。



「…あ。よく考えたら…じゃが丸くんの材料を…全く揃えていません」

「…それは…そうですね…」

「さらに揚げるための油の準備も…調理器具の準備も…」

「…」

「…」

「…外の屋台でじゃが丸くん二人分買ってきますね」

「…そうして…頂きたいです」

「…この際神様にお頼みしてじゃが丸くんの美味しく揚がるコツとかお聞きするのは如何かなーって思いますが」

「…それも…出来ればお願いします…是非…神ヘスティアの技術を学んでみたいので…」

こうしてリユートの手料理は神様お手製のじゃが丸くんに変貌を遂げることになった。

僕は自分自身お腹を空かせていたこともあり、そそくさと部屋を出た。

…リユートが尚のこと凹む様子を見ていられなかったがために。

…流石にこればかりは…擁護のしようもないと思ってしまった僕であった。

??

「くっ…私は何をやっているのでしょうか…」

私の後悔で埋め尽くされた眩きが部屋に響く。

ベルは今神ヘスティアの屋台にじゃが丸くんを買いに出かけており部屋には私一人。

まだベルが部屋を出てからそんなに時は経っておらず、私は未だ自らの大失態によるショックに打ちひしがれていた。

ベルの眩きのお陰でベルの好物は分かった。

…あの眩きはベルの気遣いによるヒントだったようにも思え、私がベルの考えを読み取れたということにはできないようにも思えたが

…あれは恐らくベルの優しさの現れ。

ベルは私がベルの好物を当てられずに悩んでいるのを見かねて呟いてくれたのだと思う。

よってこれ以上自らの矜持に固執してベルの別の好物を当てようなどとは流石に私も考えなかった。

そのためじゃが丸くんを何とか作り、ベルに初めての手料理を振る舞いたかった。

じゃが丸くんは一時期『豊穰の女主人』でも扱っていたことがあるほどのオラリオの名物料理。

…どうして私はそんな料理を思い出せなかったのだろうか？

と、自らの記憶力の悪さに辟易した挙句の準備不足の数々。

…逆に私は過去の私に問いたい。

生活するための準備がほぼできていないこの部屋で一体どうやって私は自炊しようと思ったのだろうか、と。

まだまだベルの婚約者として私は精進が足らな過ぎる……どうにかしなければ……と考えていたその時。

部屋の呼び鈴が鳴った。

…ベル？

そう思ったが、神ヘステイアの屋台は近所にはない。

…余程空腹に耐えられず急いで買いに向かったのではない限りこんな短時間で戻って来れるはずはない。

では誰？

私は万が一を警戒せずにはいられない。何かあるかなど分かるはずもない。

よって武器となる双葉を探すも…

…ベルに勝手に調査に向かわないようにと以前に双葉を回収されていたことをすっかり忘れていた私。

結果丸腰という不安の残る形で玄関へと向かう。

そしてゆつくりと扉を開けて、呼び鈴を鳴らした主を確かめると：  
そこには完全に予想外の人物が不気味さを感じずにはいられない  
笑みと共に立っていた。

「やあ。リユーちゃん？久しぶりだね。ちよつと話があるんだけどい  
いかな？」

## 愛を叫ぶは希望を守るため

「やあ。リユーちゃん？久しぶりだね。ちよつと話があるんだけどいいかな？」

不気味な笑みと共にそう告げられた私の背は思わず硬直していた。  
なぜこのタイミングで？

なぜベルが留守の絶妙なタイミングで？

いや、そもそもなぜこの人物が私たちの元に？

：それ以前になぜ私達の居場所を知られている？

ここのごとは「ヘステイア・ファミリア」の方々とシルとミア母さんしか知らないはずで…

疑問が尽きない。

違和感が尽きない。

だから私の心に恐怖が生まれる。その恐怖のせいで言葉が出てこない。

：何だ？この気持ちの悪い背筋の寒気は？私は動揺しているのか？

そんなこと考えるまでもなかった。私は確かに恐怖を感じ、動揺している。

そのせいで言葉を紡ぎ出せず、僅かに脚まで震え始めている。

私は突然玄関前に姿を現した人物を前にあり得ないほどに物怖じしていたのだ。

そしてそんな状況を招き寄せた人物はまるで私の心境を完全に見抜き嘲笑うようにぐにやりと頬を歪めて言った。

「おいおい。そんなに驚くことないじゃないか？俺はリユーちゃんに何度も助けを求めたこともあるリユーちゃんの友人のアスフィの主神であるヘルメスだぜ？…まさか色ボケたせいで記憶が飛んじやつた…なんてことはないだろう？」

裏に潜む悪意を敢えて隠そうとしないかのような笑みと意図的に釘を刺すような言葉を並び立てる神物が私の目の前にいた。

神ヘルメス。

【中層】でベルが生死の境を彷徨った際に私をベルの救出への同行を誘い、私とベルの接点の一部となった神物。

：不自然なまでにベルの周囲に出没し、きな臭さを感じずにはいられない神物。

そんな神物がこのタイミングに現れたということ…

それは私のよく外れる勘でさえも外しようがない危機の合図に他ならなかった。

だからこそ…私は気を引き締めてこの神物とは向き合わねばならない。

神ヘルメスの突然の来訪という異常事態による動揺だけでなくベルに手料理を振る舞えなかったショックを打ち払うという意味でも冷静沈着に対面するための心の準備が必要であった。

恐怖に立ち向かい、動揺を抑えることで神を相手に怯まないための準備が。

そしてその準備はこの数瞬の沈黙の間に整えることができた。

そのため私は一度目を閉じ小さく息を吐いた後、神ヘルメスの目をじっと見据えてようやく言葉紡ぎ出した。

「…何用でしょうか？神ヘルメス？当然あなたの顔は忘れるはずもありませんが…」

「そうか！それは良かった！じゃあ話は聞いてもらえるね？とっても大事な話なんだ。君にとっても。ベル君にとっても…ね？」

「…なぜベルのことを…などと聞いても野暮なのでしょうね。あなたの前では」

「そうだねえ。俺が知らないことはない…知れないことはない…そう君は思っておいた方がいいと思うぜ？」

「その大事な話…聞きましょう」

早々にベルの名を持ち出してきた時点で私は神ヘルメスへの詮索

が無意味であることは明白であった。よってその神ヘルメスの言う『大事な話』へと話を移す。

私の素直な反応に神ヘルメスは待つてましたとばかりに頬を歪めると、続きを話し始めた。

「リユーちゃん…君とベル君のことは大体俺も分かってるんだ。君達が交際していて、子供までできたこと。ダンジョンの…それも【深層】で子作りなんて偉業俺は今まで聞いたこともない。もうオラリオの神々の間では噂になってるぜ？それこそオラリオ中に広まるのも時間の問題かもなあ」

「なっ…どうしてそこまで漏れて…」

「だから言っただろ？俺の知れないことはないってね。心配しなくても君の友人は誰も裏切つてない。アミツドちゃんの治療院のカルテをちよつと覗かせてもらっただけさ」

「…私達の【深層】での行いが…オラリオ中に…はは…ははは…」  
「…ってこれは本題じゃない上に何故か俺の予想とは反応が違うような…」

それは衝撃的かつ愕然とせざるを得ない事実であった。

…私とベルの【深層】での行いがオラリオの神々に知れ渡り、遠くないうちにオラリオ中に拡散される…

その行いは夢の中で輝夜が『淫乱』と評した行いであり、エルフとして醜聞以外の何物でもない噂である。

広まった醜聞のお陰で私とベルは外に出る度に奇異の視線に晒される。

それだけでなく私の生存を知らしめることにも繋がりが、再び命を狙われるようになりうる。

これが…私とベルが交際したことにより生じてしまう障害…

それは当然私に動揺をもたらし得る事実であった。

だが…今はもう違った。

ベルは私と共に茨の道を進んでくれると言ってくれたのだ。

ならば…

奇異の視線や命を狙われることは大きな問題ではない。

もしベルとお腹の中の子供の幸せの障害となり得るならベルと共  
に対処を考えてほしいだけのこと。

あるのは…かなり重めの恥だけ。

これくらいなら私もベルも耐えられる…はず。

定期的に恥ずかしさのあまり悶絶する羽目になりそうだが…死に  
はしない…はず。

よって私は恥という意味では耐えきれずとも、絶望や動揺という意  
味では心が揺らぐことはなかった。

だから頬が熱くなり、ベル以外には見せられない表情になろうとも  
絶望で表情が歪むことだけはなかった。

…それになぜか神ヘルメスの方が困惑しているのは何故だろうか  
？

と恥に耐えつつ思っていると、神ヘルメスは恐らく私のせいで途切  
れた話を再開した。

「それで…だ。子供ができたことには素直に祝福の言葉を贈ろう。お  
めでどう」

「ありがとうございます」

「でもね？リ्यूちゃん？君は少々やってはいけないことを繰り返して  
いるのに気付いていないようなんだ」

「やっては…ならないこと？…私が何をしたと言うのです？」

神ヘルメスがサラリと祝福してくれたのに礼を告げたものの、次の  
瞬間に神ヘルメスは目を細めてそう告げる。

『やってはならないこと』

そんなことに身の覚えもない私は警戒を抱きつつ首を傾げ問い返  
す。

神ヘルメスが告げたのは私の全く知らぬ事実であった。

「…今から少し前…実は都市が滅亡の危機にあつてオラリオ中のファ  
ミリアが動員されたらう？」

「…え？…そうだったの…ですか？」

「それさえも知らないのかい…まあ当然か。リ्यूちゃんがベル君を  
離さないために治療院で面会謝絶にしてた時期だからね。お陰で俺

はベル君に協力してもらおうと思ったのに怪我の回復が第一の優しいアミッドちゃんに断られてしまったてねえ：ベル君はこの戦いで英雄になる機会を逃してしまったんだ」

「…はあ」

神ヘルメスは情緒豊かにそう語る。

だが：私は適当な相槌以上を返すことができなかった。

：都市の危機があったと言われても治療院には騒がしい日が数日あった記憶があろうとも、私達がいた病室には特に情報は届けられていなかった。お陰で私は実感する余地もない。

その上面会謝絶にしたのは私ではなくベル。

：確かに治療院で私はベルの手を握り出来るだけ離すまいとしていたが、神ヘルメスの言う意味とは程遠い。

怪我の回復を優先するのも道理で怪我にも構わず戦いに巻き込もうとすることこそ道理が通らない。

：ベルに私の体調を酷く案じさせてしまった今だからこそ思えること。

今ならばその戦いに協力を求められてもベルに断らせ私自身断ることができると思えた。

一番大切なのは私とベルの愛。

私達の正義<sup>希望</sup>。

：同じ状況を経験していないせいとか全く私の心に響かない神ヘルメスの言葉に私がポカンとする中、神ヘルメスは調子を変えずに語り続けた。

「…まあ俺としてもあのタイミングで英雄<sup>ジョーカー</sup>を切りたくはなかった。それに結局ベル君がいなくても勝ってしまったのだからまあいい。けどそれからもリユーちゃんは『やってはいけないこと』をした。あれ以来ベル君はダンジョンに行っていないそうじゃないか」

「それが…何か？」

「何か？じゃないよ！リユーちゃん！ベル君は英雄になるんだ！『最



後の英雄』に！なのにこんな所で立ち止まってどうする!?いくら女の子のためだからってこれはいけない！このままではベル君は『最後の英雄』になれない！」

「…はあ」

神ヘルメスの熱い語りによくついて行けない私は適当な返事を返す他ない。

…何をこの神は熱く語っている？

つまり…

ベルがダンジョンに行かないのが気に入らない？

ベルが半分冒険者をやめているのが気に入らない？

ベルが英雄になれないのが気に入らない？

そうぼんやりと神ヘルメスの語りの意味を私が把握し始める中、神ヘルメスはこの語りの趣旨をととう叫んだ。

「リユーちゃん。君はベル君が英雄になる道を妨げている！君はベル君の将来の邪魔をしているんだ！」

ベルの将来の邪魔…

その言葉は流石に私の心にも響く。

私自身が以前そんなことを考えたことがあったから。

だが今はもう違った。

だから私が言うべきことは…神ヘルメスの思惑であろうこととは正反対のことであった。

「だから何ですか？言いたいことはそれだけですか？」

「…え？」

今度は神ヘルメスがポカーンと口を開ける番になったようだった。

そして語る番は私に巡り、私は淡々と語り始めた。

「まず聞きましょう。ベルがいつ英雄になりたいと言いましたか？神ヘルメスにお節介を焼かれてまでして英雄になりたいと言いつ言いま

したか？」

「それは…ね？リユーチゃん…」

「残念なことに私は知りません。確かに私は【深層】から戻って以来何度も何度もベルの想いを確かめ、勘違いを繰り返し、間違え続けました。ですがようやく私にも分かったんです。ようやくベルの本当の願いが分かったんです。今の私はそう信じてるんです。何がベルの本当の願いか分かりますか？それが少なくとも『英雄になること』ではないのは間違いありません。それは完全なる神ヘルメスの勘違いです」

「なぜそう言い切れるんだい？」

「なぜ？そんなものベル自身の口から聞いていないからです。面会謝絶をしたのが他ならぬベルだからです。ダンジョンに行くのをやめたのが他ならぬベルだからです。神ヘルメスはそれを何一つ知らなかった。にも関わらずどうしてベルが英雄になりたいと願っていると言いつけるのか私の方が理解できません」

私は神ヘルメスの論理を一刀両断した。

ベルの願いが『英雄になること』ではない。それは間違いのないことであつたから。

そして今の私にはその代わりにベルの願いが…ベルの正義が分かる。

「今の私は知っています。迷走を繰り返した末にようやく辿り着きました。ベルの願いは…ベルの正義は…私と私とベルの子供が幸せであること…私と我が子への愛…それらこそがベルの正義です。ベルには他の正義は存在しないんです」

「はは…まさか…ベル君はずっと英雄になりたいって思ってるに…」  
「だからなぜあなたが決め付けるのですか!!まさか私よりもベルへの愛が強いと気取るつもりですか!!私を愚弄しているのですか!!それだけでなくその英雄という称号が私以上に愛されていても言うのですか!?!ふざけないでください…私とベルを繋ぐ愛と我が子以上に大切な存在があなたとベルの間にあるとでも言うつもりですか!?!」

「リュツ…リユーちゃん？」

頭に血が昇っていた。

相手が神だろうと関係なかった。

一々口を挟んでくる神が忌々しかったから。

今更のように古傷を抉ってくるのが煩わしかったから。

私は怒りに任せるままに爆発した。

「ええー確かに私は過ちを散々に繰り返し、ベルを傷つけました！ベルにじゃが丸君さえも振る舞うことのできないポンコツ糞雑魚エルフです！今のままではベルの婚約者としても我が子の母親としても失格になりかねない状況でしょう！」

「じゃ…じゃが丸くん？」

「その後悔は私の心から一生消えないでしょうし、ベルも忘れることにはないでしょう…私がこれから相応しい力を手にすることができかさえ分かりません…ですが!!そんな暗い過去があるからこそ私はより奮起できる！私はより正しい選択を選ぶために熟考することができる！無力であるが故に努力を忘れない！私はベルと我が子のために最善の選択を選び取る！私はベルにずっとそばにいと約束しました！私はベルを茨の道へと巻き込む覚悟を決めました！私はもうイチヤイチャだろうとラブラブだろうとベルを全力で愛する決心をしたのです！その私の約束と覚悟と決心にあなた如きのお節介が敵うとでも!？」

「いやあ…それは…というかりユーちゃん色々凄いいこと言ってるような…」

「まさか！確かに私はベルに嫌われる危険は多々抱えているような最低な女です…ですが少なくとも神ヘルメスにベルへの愛で劣るとは思いません！なぜなら私とベルには我が子という私とベルの愛の象徴が存在するから！我が子がいる限り私達の愛は不滅です！あなたがそんな私の愛に及ぶとでも!？」

「だって俺男神だし流石に子供は…」

「黙ってください！ともかく！愛するベルのため！ベルとの間に恵まれた大切な我が子のため！私は二人を幸せにするために全身全霊を

もって臨む！私はこの身に宿す全ての愛を二人に注ぐ！それが私の約束であり覚悟であり決心です！それを汚すなら：私はベルの婚約者として：ベルとの間に恵まれた我が子の母親として：果たすべき責務を果たします」

「果たすべき責務：リユーちゃん：その目はなんだい：まるで神であろうと殺しちやいそうなハイライトの消えた目は：いいのかい？そんな目を向けて：というか果たすべき責務って：」

神ヘルメスは恐れを隠そうとするように頬を歪める。

だが今の歪んだ笑みはもはや私を動揺させるためには何の役にも立たなかった。

：さつきからこの神は何を言っているのだろうか？それぐらいのことしか考えられなかったから。

適当な返事ばかりで碌に私に返事も返せず。

所詮ベルへの愛では私には到底及ばぬことの証明。

ベルの願いが分かるなど聞いて呆れる。

確かに私はベルの考え全てをベルのように読み取れる訳ではない。

だが流石の私もベルの考えと行動の核心は既に理解している。

ただもつとベルのことを理解したいと願い、ベルの好物を当てようと努力しただけのことだ。

ベルの考えの核心を理解している以上私が為すべきことは明白。

私もそのベルの考えの核心を共有し、同じ結論を導き出さなければならぬ。

私がベルの私への愛に劣らぬ愛をベルに捧げていることを証明するため。

かつてベルがミア母さんに『荒技』を使つてでも私の幸せを守ると言ってくれたように。

今度は私が神ヘルメスに同じ覚悟を言い放った。

「言うまでもないでしょう？神ヘルメス？ベルと我が子の幸せの障害となりうる神相手ならば：神殺しの大罪も辞さないという意味です」

「リュウ・リュウちゃん…まつ…真面目に言ってるのかい?」

「真面目も何も婚約者として母親として妻として夫と我が子の幸せを守るのは当然では?」

「いやあ…それは流石に…」

「第一にベルも同じ覚悟を抱いていますので私が許してもベルが許さないように思えますが?」

「はは…ははは…冗談だろう?リュウちゃん?冗談だろう?ベル君?はは…じゃあどうなるんだい…英雄は…世界を救う『最後の英雄』は…」

神ヘルメスは引きつった笑顔で放心しかけているかのよう。

だがそんな神ヘルメスの相手をこれ以上する意味もなく。

恐らくベルもじゃが丸君を買い、神ヘステイアを連れて戻ってくるはず。

…英雄云々の話はともかく神ヘルメスに妙な形で私とベルが目をつけられてしまっている可能性があることはベルに伝えなければ。

そう結論を出した私はもう次の行動を起こしていた。

「ということですのでお引き取りを。念のため繰り返し言わせて頂きますが、ベルと我が子の幸せの障害になるならば一切の情状酌量の余地はありませんので」

「ちよつ…でつ…?!いだああ?!指が指があ…?!指取れちゃうリュウちゃん!」

「…この際やり過ぎも致し方ありません。引き抜いてください」

「L v. 4 の力で締められたドアからどう指を引き抜けと言ってるんだい?!リュウちゃん!」

…色々閉じられた扉の外で雑音が響きかせながらも。

「あともう一つ!!リュウちゃんをシャクテイちゃんが探してるぜ!?君達シャクテイちゃんに居場所を伝えてなかったんだろ?!それをついでに伝えようとして来たのに!」

…さらにもう一つ頭が痛くなる厄介事を私に思い出させながらも。

神ヘルメスはようやく私とベルの愛の巣から立ち退いてくれたのであった。

## 愛の叫びは希望を守るため 〈事後談〉

「なぜなら私とベルには我が子という私とベルの愛の象徴が存在するから！我が子がいる限り私達の愛は不滅です！あなたがそんな私の愛に及ぶとでも!？」

「…これエルフ君の声…だよね？エルフ君は…ベル君の出迎えのために玄関にいる訳じゃない…ね？」

「…そうです…ね」

「ベツ…ベル君大丈夫かい？」

「ちよつと…恥ずかしさのあまり立ち眩みしただけですから…ははは…」

「どう考えても『だけ』ではないよね?!ベル君!？」

昼食用にじやが丸君を買うと共に神様に一緒に来てもらうことを頼んだ帰り道。

ようやくリユーとまた同じ部屋で過ごせるだけでなく昼食も食べられる!…そう思った帰り道。

突然ダイダロス通りの狭い街路に響き渡った声に僕も神様も自らの耳を疑った。

…その声は…明らかにリユーの声だった。

それも周囲に普通に聞こえそうな大声で僕への愛を叫ぶリユー。

僕は早々に恥ずかしさで思わず尻餅を付いてしまいそうなほどの目眩を覚える。

僕と神様は状況を図りかねたこともあり、リユーの声を上げている家には戻れずそばの路地に隠れるという不思議な行動を取らざるを得なくなった。

そして一度暴走し始めた後のリユーは止め役がいなければ暴走し続けるということを僕は誰よりも知っているつもりで。

僕の予想はごく普通に的中した。

「愛するベルのため！ベルとの間に恵まれた大切な我が子のため！私は二人を幸せにするために全身全霊をもって臨む！私はこの身に宿

す全ての愛を二人に注ぐ！それが私の約束であり覚悟であり決心です！」

「…愛されてるねえ。ベル君もお腹の中の赤ちゃんも、さ。君達はいい夫婦になれそうだよ」

「…お褒めの言葉は嬉しいんですが、その神様のニヤニヤのせいで僕精神的にどうにかなりそうなんですけど…」

「言うまでもないでしょう？神ヘルメス？ベルと我が子の幸せの障害となりうる神相手ならば…神殺しの大罪も辞さないという意味です」  
「…エルフ君と話してるのはヘルメスか…ってベル君？その視線…殺意籠もってるのは気のせいじゃないよね？そうだよね？」

「僕のいない隙にヘルメス様が…それも僕達の幸せの障害に…？はは…はははは…もちろん神殺しぐらい余裕ですよ？リユー？」

…と色々リユーの恥を知らないかのような大音声をかきさらされた事情を把握することになった僕と神様。

ヘルメス様…もとい邪神ヘルメスは結局そのままリユーに撃退されたようであった。

そのお陰で入れ違いのように帰宅する形になった僕と神様。

…そしてそんな流れになると、リユーも気付いてしまう訳で…帰宅して早速一悶着が起きることになった。

??

「…え？こんなに早くベルと神ヘステイアがお越しになったということとは…」

「あーうん。…全部聞いちゃったね。うん」

「…大好きです。リユー。もうリユーの想いを聞いたら居てもたつても居られなくて…もう抱き締めていいですか？いいですよね？」

「全部…聞かれ…そっ…そんな…はう…」

今更のように自分が如何に恥ずかしい恥ずかしい発言を連発して

いたかを悟り放心状態に陥るリユー。

その原因を見聞きしてそのリユーの暴走具合に戸惑いがちな神様。そしてその原因を見聞きしてリユーの愛の深さを改めて教えてもらい、リユーを抱きしめたくて仕方なくなっていた僕。

玄関で1時間弱ぶりの再会を果たしたリユーと僕は玄関で再会の抱擁を交わしていた。

「…ベル？先程の話は全て忘れて頂けませんか？そのっ…ベルに聞かれていたとは思わず…」

「忘れられませんよ。だってリユーの僕への愛が一杯詰まったお話だったんですから。僕は絶対忘れません」

「しかしっ…」

「あと…恥ずかしかったのは聞いてた僕も一緒ですから。この恥ずかしさを一緒に背負いましょう？ね？リユー？」

「うう…ベルがそう仰るならば…致し方ありません。ベルとなら恥ずかしさにも耐えられます…多分」

恥ずかしさを共有しあうように抱き合うリユーと僕。

リユーは最後に若干不安の残る言葉を残しつつもそれ以上言い募ることはなく、リユーはとりあえず恥ずかしさを段々と受け入れられるようになってきたよう。

そうして一方的でもあった抱擁がリユーが落ち着きを取り戻したことでお互いの背に手を回す相互的なものになり…

神様がその一人世界から取り残された状態の神様がボソリと文句を呟いて二人揃って我に帰った後。

三人でじゃが丸君を食べながらの話し合いということになった。

もちろんその話題は当初予定されていたじゃが丸君の作り方の伝授とはならず、邪神ヘルメスの関わる内容であった。

「それで…どこまでお二人は話をお聞きに？」

「えっと…『なぜなら私とベルには我が子という私とベルの愛の象徴が存在するから！』の辺りだっけ？」

「そうだったと思います」

「ぐふっ…そこから…聞かれていたのですね…」



…その話題に入った途端耳の先まで真っ赤になって恥ずかしがる姿からジャガ丸君を吹き出してむせる姿までリユーはいつでも可愛いなあ…という個人的な感想はともかく。

恐らく僕と神様が聞き取ったのはリユーが聞いた話の極々一部。よつてリユーの口から詳細を共有する必要があった。

「…一部というかかなり私と神ヘルメスの話はお聞きだったようなのでご存知ないであろう部分を手短にお話しします。まず…神ヘスティア？私とベルが入院中に都市が滅亡の危機にあったというのは真実ですか？」

「…都市が滅亡の危機…そんなことがあったんですか？神様？」

「…ええ…君達はイチャイチャしてばかりでそんな浮世離れた状況把握になつてたのかい…」

リユーの質問に僕も疑念を共有した僕も共に尋ねると、神様は呆れ返つたと言つても差し支えのない表情でそう言う、僕達の質問に答えてくださった。

「…ああ。確かにベル君が僕達の面会を断り始めた後にそういう事件があつてサポーター君達も駆り出されたよ。それでヘルメスはベル君も駆り出そうとしたんだけど、重傷だからと僕が断つてアミツド君も断つて、ベル君自身面会謝絶にして話の流れた…なんてことあつたね。それでそのことを僕はベル君に話そうとしたけど…」

「けど…とは神ヘスティア？何かあつたのですか？」

「それが…ベル君はエルフ君のことで頭が一杯で話す機会が今の今までなかったな…つて」

「あつ…あー」

「…なるほど。とりあえずこの点は神ヘルメスの虚言ではない…」と」

…そう言われてふと気づく。

…そういえばいつか神様の口から邪神ヘルメスの名前が出てたな…と。そして今もこれからもリユーのことで頭も心も一杯な僕はずっとそんな話聞く気にもならないんだろうな…と思っていた。

…リユーと僕達の子供の幸せの障害になると分かるまでは。

すると神様がその都市の危機というのが事実だと確認をした

リユーは話を続けた。

「要は…です。その都市の危機と…そして近日のベルのダンジョン探索の中止。これが神ヘルメスのお気には召さなかったそうです。ベルは英雄になりたいと思ってるから、私の存在は邪魔だ…と。ですが…」

「そんな訳ないじゃないですか。僕の気持ちを最近話した記憶もない相手にどうして決め付けられないといけないんですかね？僕はリユーとリユーとの子供を幸せにする。それ以上に大切なことはありませんよ」

「…っ！です…よね。そうですね。やはり私の予想は正しかった…神ヘルメスよりも私の方がベルのことが分かっていた。ベルへの愛で神ヘルメスに劣るはずなどなかった…！」

「そんなの当然ですよ。僕のことを一番愛してくれているのはリユーに決まってるじゃないですか。ね？」

「…ええっ！…そうですね！…そうですね！」

リユーは嬉しそうにコクコクと頷く。

僕としてはリユー以外に愛されても言うほど嬉しくないと言うか…

第一にリユーを邪魔者扱いする邪神ヘルメスに愛されるなんて願い下げとしか言いようがない。

それはともかく…

きつと僕の好物を当てられなかった後で僕の考えを読み取れず考えを共有できないと思いつめた後だったからこそリユーにとってより大きな意味を持ったんだと思う。

リユーは邪神ヘルメスに叫びながら僕の考えを必死に予想して…そしてその予想が外れていないか不安だったんだと思う。

だけどリユーの予想が外れる訳なんてなくて。

僕にとって大切なのはリユーとリユーとの子供だけで。

それこそダンジョン探索を通して得られる名誉なんて及ぶはずもなく。

僕はリユーの婚約者でリユーとの子供の父親。

それ以上に大切な役割なんて存在するはずもなかった。

リユーと僕はここでまた想いを共有し合うことができたのだ。

それをリユーは一層感慨深く感じている。当然僕もそれが嬉しい。

…それこそ僕の好物を当てられることよりもこういう形で想いを通じ合わせて以心伝心の仲になれた方がいいよね…なんて思いもして。

ひとまずはこれでさっきのリユーの憂いはすっかり晴れたようでも何よりと言ったところだった。

…少しは邪神ヘルメスにも感謝をしないとイケないかも。リユーの憂いを取り除く助けになってくれたという意味で。もちろんリユーを邪魔者扱いしたことは寸分たりとも許すつもりはないけど。

ただ邪神ヘルメスはいいいことばかりしてくれた訳もなく。

その点はまた一人取り残され不満そうにじやが丸君を頬張っていた神様が切り出すことになった。

「…で？君達の愛の深さはよく分かったぜ？ベル君は英雄になることよりエルフ君のそばにいたいことを大切にしていることはもう僕からすれば今更だ。…ただヘルメスに知られたということはまずいんじゃないかい？」

「…その通りです。実は問題が二つありまして…」

「二つも…ですか？」

リユーの先ほどまでの朗らかな表情から打って変わった重々しい表情に僕も気を引き締めるしかない。

問題が二つ…

それは僕達が交際を始めた時点で直面することが分かっていた障害で。

僕はすっかり『人助け』からリユーを遠ざけたことで障害を取り除いた気になっていたけど、そんな簡単には話は進んでくれないなかつたようだ。

「まず…私とベルが子供に恵まれたことが神々の間で噂になっているそうです。…それも経緯付きで」

「経緯付きって…まっ…まさか？」

「…そのまさかです」

経緯付き…それはつまり…

「…そのベル君とエルフ君の表情を見るに何をしたのかよく分かったよ。…純情でそういうことには手を出さないように見せかけて実は年齢相応のことに興味があつたんだね。一人とも、ね。もちろん子供ができたと分かつている以上そういう経験をしたのは分かつてるんだけどね？」

「…うっ」

…神様にその『経緯』を早々に読まれ、リユーも僕も言葉を詰まらせ恥を耐え忍ぶ。

神様でさえこの呆れ顔かつその『経緯』を容易に察ししてしまうとなれば…

…噂好きの神様達を相手にすれば僕達の子供ができたその『経緯』は尾鰭が付いて拡散されることに…？

ぼっ…僕はただ手の中に収まるぐらいのリユーの…がすごく柔らかくていつまでも揉んでいたいと思つたくらいで…あとずつとリユーと繋がって温もりを分け合いたいって思つたぐらいで…

別に僕は変なことをした訳じゃ…

「…いやあ…それが声に漏れるのはアウトだぜ？ベル君？なんだいベル君は小さめの女の子のが好きなのかい？…まるでだから僕はダメだったみたいな…」

「…えっ…えっ？」

「…ベル。私の貧相な身体がそんなに良かったと言つてくださるのは嬉しくもあり、ある意味で残念でもあるという非常に複雑な気持ちで受け止めなければなりません…」

「…声出てました？」

「…うん（ええ）」

神様は残念そうに、リユーは複雑そうな表情で僕に視線を向けて声を揃えて頷く。

…まずい。

ただでさえ変態じみた発言を漏らしてしまつたらしい上にリユー

は言葉通り複雑そうな表情で…ショックを受けているようにも見える。

それもそうだ。これではまるで僕達の子供ができたのが僕がリユウの身体目当てだったかのようで…いや、実際の所はリユウが僕の上に率先して跨つてた気がするけど…

それはともかく。誤解を解く必要があると即断した僕は否定の言葉を早口に叫んでいた。

「いつ…今のは違うんです！確かにリユウのお胸がすつごく可愛くていつまでも揉んでいたいなーとは思ってます。最近揉ませてもらってないので本当は揉みたいですし…でもリユウも知つての通り僕はそんなおねだりしたことがないですよ？それは僕がリユウと一緒に暮らしたいと思つたのが、そんな理由ではなくてただリユウと一緒にいるだけで幸せになれるからです。だから別にリユウのお胸にこだわってる訳ではないというか…」

「…でもベルは私の胸を揉みたい…んですよね？」

「…え？」

「なら…揉みますか？ベルがお望みなら…いい…ですよ？ベルを幸せにするためなら何でも…しますから。ね？」

頬をほんのり赤らめたままの上目遣い。

纏っている服のボタンに掛けられた指先。

僕の心の何処かには確かに存在していた欲望を叶える誘惑の言葉。

そこにはとつても可愛くて言葉では説明できない魅力に溢れてて

…少しエッチな僕の婚約者がいた。

それはまるで【深層】のあの情事にしか見ることができなかった僕にとつてとつてもとつても貴重なリユウの一面で…

僕はその誘惑に瞬時に悩殺されていた。

そしてその誘惑のままに頷こうとしたが…

リユウも僕ももう一人の神物がこの部屋にいることをすっかり忘れていた。

「きつ…君達は僕の目の前で何てことを話してるんだああああ?!?!?」

「はっ…」

その時リユーと僕は二人揃って現実を意識を引き戻される。

…神様がいなかったらこのままリユーの誘惑のままになっていたかも…なんて我に帰る時間さえ残念なことに神様は与えてくれなかった。

「僕がいるのに息をするようにイチヤイチャして!?こんな風じゃ噂好きの神じゃなくてもすぐに噂が広まるぞ!何せ本人達が見せびらかすようにイチヤイチャするんだからねっ!」

「…そっ…それは…」

「そのせいでエルフ君の居場所がバレて再び命を狙われる可能性がある!それが二つ目の問題だ!これをどう君達は解決するつもりなんだい!」

「それは…私とベルの…」

「…愛の力で?」

「君達は真面目に考えているのかい!」

神様は…明らかにキレていた。

リユーと僕のイチヤイチャを散々に見せつけられてもう耐えられなくなつてたんだと…思う。

そしてリユーも大概だけど神様も暴走を始めると誰にも手をつけられなかった。

「そんな呑気な考えで呑気にイチヤイチャしてるから君達はすれ違ふんだ!もつと真面目に話し合うんだ!考えを共有しようたつてそんな調子じゃミスが出るぜ!きちんと対処策を見出さないと絶対後で後悔するぞ!」

「はっ…はい!」

「じゃあ…二つ目の問題はいい!それより【ガネーシャ・ファミア】の団長君がエルフ君を探してるっていう話はどうするんだい!」

「えっと…僕は…リユーとシャクテイさんが会うのは反対というか…」

「…なぜです?ベル?私は早急に会わなければならないと思いますが

…」

…ただ神様の暴走は本当にリユーと僕の将来を気遣ったので。神様の誘導のお陰で僕達は今更というかようやくというかきちんとした議論を始めることができている。

そんな神様の気遣いには感謝を覚えずにはいられない。

そして辿り着いた話題は事実上僕の判断で怠っていたシャクテイさんへの報告。その報告を怠った結果シャクテイさんがリユーを探しているという件についてであった。

僕はリユーの問いに答える。

シャクテイさんにリユーを会わせたくない理由。それはこのシャクテイさんに会うことになるきっかけとなった出来事も関わっていた。

「…リユーがシャクテイさんに会うと…また…」

「また…私が『人助け』に奔走してしまいそう…そう思うのですね？ベルは？」

「…はい」

リユーは僕の不安を瞬時に読み取りそう告げる。

…リユーの言う通り僕はリユーが再び『人助け』に奔走しそうで怖かった。

それまでは僕達の正義が愛であると説いたはずのリユー自身がシャクテイさんに会った途端に忘れてしまったのだ。

…リユーが同じ道に舞い戻りそうで怖い。

これはリユーのためでもあり、僕たちのためでもあり、僕のがままでもあった。

そんな不安を抱く僕にリユーはしばらくじっと僕の目を見つめたかと思えば、ふわりと微笑み僕の手を取りつつ言ってくれた。

それは僕の不安を取り除いてくれる僕の望んでいた言葉であった。

「大丈夫です。私はもうそんな過ちを繰り返しません。私のこの胸にあるのはベルと我が子への愛…それだけです。私はもう二度と正義を見失いませんから。シャクテイに会っただけで私のベルへの愛が揺らぐ訳ないではないですか」

「…っ！もちろんです！」

「ベル。流石にシャクティに協力をこちらから申し出た以上これ以上姿を隠し続けるのは申し訳ないと思います。よって私はベルと共にシャクティと会いたいと思います。それでもダメでしょうか？私を…私のベルへの愛を信じて頂けませんか？」

リユーは真つ当な理由を口にするだけでなく僕の不安を完全に取り除くために僕の同席という条件まで付けてくれる。

その上リユーの僕への愛を信じて欲しいと言ってくれる。

そしてリユーの僕への愛を当然のように信じている僕の返す回答は自ずと決まっていた。

以前とは違い僕はリユーの説得に僕は不安をすっかり取り除くことができていたのだ。

リユーが僕の手伝えてくれる温もりのお陰か。

それともリユーの上目遣いのお陰か。

それともリユーと僕がより以心伝心の中に近づいていたからか。

僕はリユーの言葉を信じて、答えた。

「分かりました。一緒にシャクティさんに会いましょう。僕達は以心伝心の仲で一心同体です。二人で挑めばどんな困難だって立ち向かえます。まずはシャクティさんとの話から…一つずつ問題と向き合っていないか」と

「…っ！ええ！そうです！ベル！私達は今や以心伝心の仲で一心同体です！いつでも私達は一緒に行動しなくては！」

「リユー…」

「ベル…」

こうしてリユーと僕の間にとまった合意。

通じ合ったリユーと僕の心。

温もりを交換し合いながら触れ合う僕達の手。

それらが僕達の距離が縮まるように導いていく。

そうして段々と近付くりユーと僕の顔。

目の前にはリユーの柔らかかそうな唇が…



「…つて君達はまたまた何をやってるんだ?!?!真面目に話し合え!?!」

…もう一度飛んでくる神様の怒号。

実は神様は僕達の気遣い…と言うよりは僕達がイチヤイチャするのを見たくなくて話を進めようとしたのでは…

などと言う野暮な考えが僕の心に宿る中で僕達の幸せに満ちた未来を守るための対処が三人で話し合われた。

その未来を守るための最初の障害となり得るのがシヤクテイさんとの会談。

その会談に向けてリユールと僕は心の準備を進め、数日後会談の日を迎えることになる。

## 街へ出掛けてお買い物

「…やっぱりこの部屋…殺風景…ではないですか？」

「それは…ええ。その通りです」

ベルの作ってくれた簡素な朝食を食べ終え、ベルと肩を寄せ合いのんびりとくつろいでいる時のこと。

ベルが唐突に漏らした呟きには同意せざるを得なかった。

私達の視界に映る殺風景なものは、私とベルの住む部屋のこと。

…所謂：シルの言う『リユーとベルさんの愛の巣』のこと。

これはあくまでシルがそう表現したのであって、念を押して主張するが私が名付けた訳ではない。

ただ私に積極的にこの部屋でベルと一緒に愛を育んでいこうという意志があるのは言うまでもないことで、この『愛の巣』という表現は凄く気に入っている。

その証拠に『愛の巣』という言葉を頭の中で反駁するだけで幸せな気分が頭が今にも蕩けてしまいそうに…

…というのはともかくベルが私達の愛の巣が殺風景だと評したのには理由がある。

要はとにかく必要最低限の家具や日用品しか置かれていないのだ。

以前の私の感覚からすれば当然であった。あくまでこの部屋は調査に用いる仮の拠点に過ぎなかったから、必要以上の物は一切必要なかった。実際問題当時は寝る時以外この部屋は用いていなかったことが以前の私の感覚正しさを証明している。

だが状況は変わった。

調査は終わり、この部屋は仮の拠点から二人で…いやお腹の中にいる我が子を加えて三人で暮らす愛の巣になった。

そうなれば自ずと必要な物も増やさざるを得ない。

…ここまで物がないと暮らす分には不便だ。それをベルが伝えようとしているのだと私には分かった。

ならば、と私はベルの方に向き直り、先手を打つように提案することを試みた。

「では…この殺風景な部屋を…一緒に華やかにしませんか？」

「えっ…いいんですか？」

「もちろんです。なので…えっと…ですね？あの…その…」

だがいざベルに提案しようとした所で私は言葉を詰まらせる。

部屋を華やかにする…即ち目的は家具を揃えたりすることだと考えられる。

ただそれ以上に大事なものは『ベルと一緒に』という点。

ベルと一緒に家具を揃える…つまりベルと一緒に買い物をするということ。

これは所謂…デッ…デッ…『デート』と…呼ばれる行為なのではないか？

そう気づいてしまった瞬間私の顔はポツと急に熱くなり、私は続きの言葉を紡げなくなってしまったのだ。

『デート』という言葉をお口にすることを恥ずかしさで思わず躊躇してしまう私。

だが当然ベルとのデートには是非とも行きたいという思いがあまりに強く、このまま何も言わないというわけにはいかない。

だから私は『デート』という言葉をお口にしようと必死になる。

そんな中勝手に恥ずかしがって頬を赤く染めているであろう私を見て、ベルはポワンとまるで私に見惚れているかのような表情を…

…見惚れている？ベルが私に見惚れている!？」

まさか…そんなこと…これは所詮ただの私の勝手な思い込みで…

しかしベルは私の表情に釘付けになっている上に若干うつとりして頬が赤くなっている気も…

…と、完全に脱線した思考に邪魔されつつも私はしばらくの間ベルと無言で見つめ合う時間を終えて、ようやく『デート』という言葉をお口にすることができた。

「だからっ…デッ…デデデ…デートをしましえんか？」

「…えっ？」

「…あ」

…噛んだ。

凄く肝心な提案の場面で私は噛んだ。

ただでさえ『デート』という言葉だけでも恥ずかしいのに…

「いっ…今のはなしです!? わっ…忘れてください!」

「いっ…嫌です! ぼっ…僕は絶対忘れませんから!」

「どうしてです!?!」

「そんなのリューと一緒にデートをして、イチャイチャしたいからに決まってるじゃないですか!!」

噛んでしまった事実を闇に葬るために直前の言葉を取り消そうとする私にベルは断固とした表情で拒絶の意思を示す。

ベルに拒絶されるとは思いもしなかった私は即座にその理由を問い返すと、ベルは恥ずかしさを覆い隠すためかのように大声で自らの思いを叫んでくれた。

ベルの叫びから分かったこと。それは…

私とベルのデートをしたいという思いは一致していたということであった。

「ベルもデートをしたいの…ですか?」

「もちろんです! この部屋をリュウの言うように華やかにしたいっていう思いもありますが、それ以上にリュウとデートをしたいな…って…デートは初めてですし」

「そういえばそう…ですね。ならば今からデートにお付き合い…頂けますか?」

「喜んで! リューとデート! そう考えるだけで僕はとっても幸せです! リュー大好き!」

「なっ…ベル!?!」

私はベルに遠慮がちに本当に私とデートをしたいのか確認してみる。

そんな私にベルは満面の笑みを浮かべて快諾してくれるだけでなく、そのまま抱きしめてまでくれた。

私とベルの考えは一緒だった。やっぱり私とベルは以心伝心。そ

う改めて確認する。

そしてベルはデートをしたいという言葉だけでなく抱擁までしてください、とても幸せな気分にならせてくれた。

そこまでベルにしてもらってしまったら、私もそれ相応のことをしないとベルに愛を示せない、と思いつく。

だから抱擁される中でベルの温もりを感じつつ、私はベルの耳元に近づき小声で呟いた。

「…ベル。私も大好きです。ベルにこれだけ私とのデートを喜んで頂けて…私は婚約者としてとても幸せ者です」

そう言いつつベルを抱き締め返すと、ベルはポソリと言った。

「…そのリ्यूー？これってみんなわざと…ですか？シルさんに教えてもらったとか…そういうことですか？」

「何の…ことですか？ベル？」

シルに教えてもらった…？一体何を？

私はベルの問いの意味を図りかね、困惑する。

ベルの言葉から察するに…何か私はまずいことをしてしまった…？

そう一瞬の逡巡で思い至った私は思わず息ができなくなる。

だが私の危惧は完全に的外れだった。

…それは想定した方向性とは全く違った…という意味だけではあつたが。

私は『シルに教えてもらった』というベルの言葉の意味をきちんと理解すべきだったのだ。

「…例えば今僕の耳元で僕のことを好きだつて囁いてくれたのとか…わざと…ですか？」

「普通にベルへの愛をお伝えしたかっただけで特別何か意図があつた訳ではないのですが…」

「あとさつきデートをしたいか確認してくださいました時も…ちよつと上目遣いでしたし…」

「…え？別にそのようなつもりは…」

「さらに先程リ्यूーが囁んだ時も…まさかみんなわざとじゃないです

よね?」

「ちつ…違います!…どうしてそのようなことをベルは疑うのですか!? シルには何も教わっていません!!」

ベルは私の無意識な行動をなぜかわざとでシルに教えられたと疑っている。

そんな疑いをベルに抱かれる謂れはない。そもそもベルはなぜそのようなことを確かめようとするのかが分からない。

するとベルは躊躇いがちにその理由を述べた。

「だって…今のリユーいつも以上に可愛かったので何かあるのかなーと。僕の婚約者のあまりの可愛さに僕の心臓すっごくドキドキしちゃいましたよ。さてはリユー…天然…ですか?」

「ベツベル?!?!」

この後私が茹で蛸の如く真っ赤に染め上げられたのは言うまでもない。

私はベルに可愛いと褒められた嬉しさと無意識にベルを半分誘惑するような行いをしていたという恥ずかしい事実のせいでしばらくの間ベルの腕の中で悶絶する羽目になった。

…悪いのは私ではない。私のことを可愛いとベタ褒めしたベルが悪い。

決してベルの言う『天然』ではない…はず。

ただそれもシルの関与を事前に否定してしまったせいで、もう可能性が私が『天然』であるか私自ら誘惑したかの二択しか残されない訳で…

私は進退極まり、ベルの温もりの中に逃げ込み、答えを出すことを放棄した。

このお陰で私とベルのデートが本当の意味で始まるまでには二時間の時を要することになった。

…これは決してお互いを抱き締めてるうちに離れられなくなった…という訳ではない。

??

「じゃあまずは家具を揃えましょうか？ベル？何が必要だと思いますか？」

「うーん…やっぱり衣装箆筒とか…ですかね？」

ようやくと言った形で買い物に出掛けることができた私とベルはダイダロス通りを出て、市場に来ていた。

そうしてベルに必要なものを確認すると、真っ先に口にしたのは衣装箆筒であった。

…ただこの意見に私はあまり積極的に賛成できなかった。

「…衣装箆筒は不要かと。別に私は服にこだわりはありませんし、持っている服もそう多くはありません。なので衣装箆筒など買っても無駄遣いかと…」

「なっ…何を言ってるんですか！何言っちゃってるんですか！リユー！それは違いますよ!!」

「ベツ…ベル？」

唐突に声を張り上げ、私の意見に猛反発するベルに私は困惑する。

だがベルのもたらす私の困惑はこの程度まだ序の口に過ぎなかった。

「いいですか？リユー？リユーはですね。とっても可愛いんです。それこそ服を着ていても着てなくてもウエイトレス姿も冒険者の姿もワンピース姿もドレス姿も女神様みたいに美しくて可愛いんです。そんなリユーが僕の婚約者って考えると、僕はとっても幸せな気分になれるんです」

「服を着ていなくてもとは…ベル…あなた…今ここがどのような場所か考えて…」

「でも…リユーのその考えはいけません！リユーはどれだけ服がリユーの魅力を高めてくれるか分かってません！リユーは色んな服を試して着てみることでさらにさらに可愛くなれるんです！リユーにはリユーの魅力を高めてくれる服がたくさん必要で、その服を収納

するため大きな衣装箆筒が絶対に必要なんです!」

「だっ…だからベル!?…ここは公共の場でっ…周囲の視線が!」

…痛い。周囲の視線が痛すぎる。爆死しろと言わんばかりの殺意の籠った視線が私達に数多突き付けられている。

そんな殺気を感じられぬ視線も少なくないが、それはそれで妙に微笑ましく見守っているとやわんばかりの生暖かい視線ばかり。

熱弁するベルを他所に私は尋常ではない居心地の悪さを感じさせられていた。

その原因がベルが私のことを可愛いと連呼していることにあるのは言うまでもない。

…あと『服を着ていなくとも』という言葉がいつかの【深層】での情事を私の脳裏に呼び起こしてしまったというのもあるが。

だがベルは私が居心地の悪さを感じていることもその視線達にも気付くことはなく。

ベルの熱弁は止まらなかった。

それだけでなく私が反論する方向をベルとは違えてしまったせいで、私はベルを止める機会を失ってしまっただけで済んだ。

「ということでリ्यूー!衣装箆筒よりも前に服を買に行きましょう!リ्यूーは自分の目で服一つでどれだけさらに可愛くなれるかちゃんと知るべきです!」

「ちよ…ベル!」

ベルは無言を言わさぬとばかりに私の手を掴み、目的地のはずの家具屋とは全く違う方向に向かい始めてしまう。

それを本当は止めるべきだったのだが…

「僕はリ्यूーの可愛い姿をもっと見たいんです!」

…という言葉に思考を奪われて、ベルの成すがままにされるのを許してしまっただけであった。

??

「如何…ですか?流石に私には似合わ…」



「すっごく可愛いです！やっぱりウエイトレス姿もお似合いなので大丈夫だと思ってましたが、リユーにはスカートがお似合いです！あ、次こつちを試して頂けますか？以前のリユーのワンピース姿も是非見てみたいので」

「え、あ…はい。分かりました」

ベルの選んだ上下の服を着替えて着衣室のカーテンをめくってベルに確かめると、ベルは私をベタ褒めした上でさらに追加の服をひよいと渡してくる。

これで…6着目か？

エルフ向けの服を売る店に入ってからも既に1時間以上経過していた。その間ずっと私はベルの着せ替え人形状態になっている。

現にちやつかりベルは着替える前の服を回収する抜け目さを見せ、その上私が着替えを終える度に新しい服の組み合わせを用意してくるという徹底ぶり。

お陰で私は脱いでは着ての繰り返し。

ただそんな作業もベルが私の着替えた後の姿を見る度に一喜一憂して、可愛いとか綺麗とか口々に褒めてくれるので私としても決して気分が悪いものではない。…というかベルにこれだけ喜んでもらえるなら私も段々楽しくなってくる。

そんな感じに当初は服になど関心がなかったものの、気付けばベルの反応を楽しみにしつつ積極的に新たに渡されたワンピースに着替えていく私。

そうしてベルの反応を見ようと、私は再びカーテンをめくった。

「あ、リユー！やっぱり白いワンピースは清楚なリユーにお似合いですね！その服を着こなすリユーも最高です！」

「ありがとうございます」

またも聞かせてもらえた遠慮の一切ないベルの賛辞に私は恥ずかしさを感じつつも素直にお礼を伝えた。

…本当は店の中にいる周囲の同胞の客や店員の視線が恐ろしく痛いのだが、私は気にするのをやめた。

何せ嫉妬等々によると思われる痛い視線を集めるに済まず、異種族

のヒューマンであるせいで余計に同胞の不快感を買ってしまったているベルが全く気にせず店内の服を選び回っているのである。

：なら妻として私も堂々としなければ、立場がない。

そう思い至ったことで私も堂々と恥ずかしがり堂々とベルとの試着デッ：デートを楽しもうと決めたのだ。

周囲の視線など気にせず私とベル二人の世界で思いっきり幸せになろう、と。

そんな思いでデッ：デートを楽しんでいた私がベルを見てみると、ふとあること気付く。

ベルの手にはこれまで私が着たうちでベルが大絶賛した服があったのである。上下合わせれば7着もである。

「あの…ベル？その服は…」

「あ、今から買ってきますね？そのワンピースは着たまま購入できるように店員さんに頼んでみますのでご心配なく！」

「ぜっ…全部買うおつもりなのですか!?お待ちくださいベル!?そんなに買って頂く訳には…というかまず私はただ試着した姿をお見せして、ベルに喜んで頂ければそれでいいと…」

早速先程試着した服を買いに行こうと背を翻すベルを慌てて私は止めようとする。

正直私はその言葉通り買ってもらうつもりはなかったのだ。

だが振り返ったベルの説得に私はあっさり折れることになった。

「やっぱリリユーは服には興味持てません…かね？僕のためにお洒落はしたくない…ですか？」

「ベル…」

「リリユーが嫌ならいいんです。買うのは諦め…」

「いっ…いえ！私はベルのためには是非ともお洒落したいです！すみません、やっぱり欲しいです！」

：私が購入を拒絶しようとしたことでベルがシユンと沈んでしまっいそうなのは見ていられなかった。

そのため私はベルのために、そしてベルの笑顔を見たい私自身のために服を買って頂こうと決意したのだった。

その私の言葉にベルはパーツと花が咲くように笑みを浮かべて言った。

「ありがとうございます！実はリユーにプレゼントを渡したくて、それで最初に服が買いたいなって思ったんですよね」

「私にプレゼント…ですか？」

「そうです。お気に召して頂けたら嬉しいんですが…」

「それはもちろんベルからのプレゼントなら何でも嬉しいです！ありがとうございます！」

ベルからの私へのプレゼント。

そう考えるだけで私の心は幸せで一杯になりそうだった。

そんなベルの想いを形として受け取れるとなると、嬉しさが溢れそうになる。

プレゼントが何かは正直大事ではない。

ベルが買ってくれようとしている服はベルが選び、ベルがプレゼントとして買ってくれる服。そんな定められることになる意味が大事なのだ。

私は即座にベルの買ってくれる服を大切に着させて頂き、またその時にベルに喜んで頂けるよう頑張ろうと心に決める。

そうして結果的に心の底から服を購入することに納得した私はベルと一緒に実際に購入するために精算に向かった。

ただ…

「合計で126000ヴァリスになります」

「…え？」

「あ…」

「…足りませんか？ベル？」

「もちろん足りませんよ！ただこれで予算を全部使い切ることになるので買物は終わり…ですね」

「…」

…私の服に予算を投入しすぎてその後のデートは事実上のウィンドウショッピングに成り果てることになった。

それはそれで楽しかったのだが…というかベルと一緒に並んで手

を繋いで歩ける時点で幸せで一杯なのは言うまでもないのだが…

この後私達は本来の買い物の目的を帰宅後に思い出し、二人揃って言葉を失うことになる。

## 〈懐妊編〉第五章 希望の守り方を手探る中で 秘密を明かして

「なるほど…な。…リオンも【白兔の脚】ラビット・フットも色々苦勞が絶えなかったということとはよく分かった。…まあなぜその流れで子供ができるのかだけはさっぱり分からないが…」

「だからシャクティ！私達が子宝に恵まれたということは私とベルの愛が如何に強固なものかを証明する証だと…！」

「お願いだからリユー!?それ以上勢い任せに愛という言葉を連呼しないでください!!周囲の視線がああ!!」

「リオン…分かった…分かった。リオンの【白兔の脚】ラビット・フットへの愛は誰よりも深い。分かったから頼むから落ち着いてくれないか?」

「…ようやくお分かり頂けたようで何よりです。シャクティ」

リユーと僕の間大切な子宝が恵まれるまでの経緯を話し終えた後のこと。

シャクティさんは頷いて納得したと言葉にしつつもその表情からはやっぱり理解不能という雰囲気<sub>レ</sub>が抜けきっていない。

…それだけ【深層】での出来事が子供を授かるのに繋がったという経緯が衝撃的なのだろうなあ…と僕は思いはするも。

未だにシャクティさんにリユーと僕の愛を否定されたことへの憤りが拭いきれないのか…

それとも経緯をシャクティさんに結果的に話す羽目になったことによる恥ずかしさを隠すためなのか…

そこら辺のリユーの考えまでは読めないものの、少なくとも言えることはリユーが暴走のあまり自爆発言を連発しているということは考えるまでもなく分かる。

お陰で僕はリユーの暴走を抑えるために奔走し続ける羽目になっていた。

そうしてシャクティさんが半分投げやりにリユーと僕の愛を認めただことでリユーの暴走は収束し…話はようやく次の段階へと進んだ。

「それで：結局その連続窃盗犯の犯行が止まったということとは本当に二人が更生させてしまった：そういうことなのか？」

「ええ。居場所はお伝え出来ませんが、今は職を手に入れ普通の生活を送り窃盗には一切携わっていません。再開されれば話は考え物ですが：恐らく大丈夫であろうと、ベルは仰っています」

シャクテイさんの質問にリユーは僕に代わって答える。

ちなみに言うとその連続窃盗犯だった例の女性は今はミアハ様の『青の葉舗』にお手伝いとして雇い入れてもらっている。

「ミアハ・ファミリア」の懐事情の影響で収入は決して良くはないけど窃盗をして稼ぐよりは余程生活は安定しているらしい。何より善神と呼ばれているミアハ様がお優しくしてくれるだろうから、僕としては不安はない。

色々とナーザさんからは小言を聞かされる羽目になったけど：ともかく彼女に関しては問題なさそう。

こうして連続窃盗犯に関わる一件は無事解決した：と言う訳には残念なことにシャクテイさんの怪訝そうな表情を見るに進みそうになかった。

「：それは理解した。私達としては本当は裁きを受けさせる必要もあるのではないが：再犯がないなら一応良しとしよう。だがその代わりに連続窃盗犯の逮捕に協力したという事実自体も消えるぞ？名誉回復の手配が難しくなるが：それでも構わないのか？」

シャクテイさんの言う通りだった。

元々連続窃盗犯の逮捕に協力しようという話に進んだきつかけの一つは協力の功績でリユーの名誉回復をしてもらおうという算段だった。

にもかかわらず逮捕自体が行われなかったということはリユーがその機会を喪失したことと同義。

そういう意味では僕達が連続窃盗犯の調査に費やした労力は全て無駄になる：そうシャクテイさんは言いたいのだと思う。

無駄骨にしないためにもここは彼女をシャクテイさんに引き渡すのが僕達にとって本来は最善なの：だろう。

だがリユーと僕の場合はそういう判断に至ることは決してなかった。

「…構いません。この汚名は元々私の過去の過ちが生んだものであり自業自得。それにベルも受け入れてくださった以上私はもう名誉など意に介しません。ただ私とベルと我が子の三人でこれからも暮らしていくことができればそれでいいです。彼女達の生活より私の名誉などが重要などとは到底考えられません。シャクテイに配慮をお願いしておきながら申し訳ありません。そして…連続窃盗犯であった彼女へも情状酌量の余地を…検討頂きたいです」

「…彼女も進んで犯罪を犯したかった訳ではなかったようですし…窃盗の被害はなくなつて、彼女は犯罪に手を染めずに済んだ…その成果だけで僕達は十分です。…それに誰かの犠牲で僕達の幸せは成り立つとは思えませんから。このような形でこの一件は終わり…にしたいです。シャクテイさんにはご迷惑をおかけします。申し訳ありません」

リユーと僕はシャクテイさんに名誉回復の話は立ち消えにさせてもいいという形で考えが一致していた。

その時点でわざわざ配慮してくれたシャクテイさんには無駄な骨折りをしてもらったことになってしまった。だから二人で率直に頭を下げて謝る。

同時にリユーと僕は連続窃盗犯であった女性達一家の生活も壊したくないと願っていた。

リユーの言うように名誉よりも彼女達の生活を守ることの方が優先…ただその僕達の願いはシャクテイさんにさらなる配慮を求めると同義であるため、そういう意味でも僕達は二人で頭を下げていた。

僕達二人の言葉にシャクテイさんは腕を組んで考え込むことしばらく。

僕達の要望に小声で応じた。

「…分かった。配慮するように手配しよう。本当は私としては見知らぬ犯罪者よりもリオン達の安全を盤石にしたいと切に思うのだが…まあ仕方ない。リオン達がそう言うならもう私はこれ以上何も言う

まい。その者に関してはこちらで一件落着としよう。このことはくれぐれも内密に頼むぞ？見逃すという意味では特例中の特例だからな」

「ええ。承知しています。ご配慮感謝します。シヤクテイ」

「僕からもお礼を。ありがとうございます」

「別にいいさ。私としては犯罪が減ってくれるなら何の文句もない。それに：リオンが犯罪者を許し、助けるために奔走する：そうか。ふっ：巡り巡って：か」

シヤクテイさんは特例であることを強調しつつも僕達の要望を快諾してくれる。それにリユーと僕は間を置かず感謝の意を伝える。

そして何やら微笑みと共に感慨深げにシヤクテイさんが呟いた僕には理解できないことの意味を僕は考えていると、話が途切れたのを機としてリユーが別の話題を切り出した。

「あの：シヤクテイ？それで一つ相談があるのですが、よろしいでしょうか？」

「ん？なんだ？私が役に立てるのであれば、何でも相談に乗るが：」

「是非お頼みます。実は神ヘルメスに関してなのですが：」

「：神ヘルメス？」

リユーの言葉にシヤクテイさんは訝しむように目を細める。

リユーの切り出した話題とはヘルメス様：いや、邪神ヘルメスに関して。

あの邪神はリユーと淫らに距離を縮めただけでなくリユーと僕の愛に火種を撒こうとするというやつてはならないことに手を染めた。

その時はリユーが僕達の愛の強さをダイダロス通り中に響かせんばかりに熱弁してあの邪神だけでなく僕まで危うく撃沈されそうになったのだが：

問題はあれだけでは終わらずこれからの僕達の生活に支障をもたらしかねないことは明白。

よってシヤクテイさんに一度相談してみようと僕達の間で結論を出していたのである。

リユーが一通り邪神ヘルメスの関わるこれまでの経緯を話し終えると、シヤクテイさんは腕を組みなおしつっ喰った。



「…なるほど。要は神ヘルメスは【白兔の脚】ラビット・フットがダンジョン探索を怠るようになったのをよく思っていない…そしてその原因がリオンにあると考えている…と。それは事実だとして…一番の解決策は【白兔の脚】ラビット・フットがダンジョン探索を再開することにあるが…」

「どうしてリユートのそばから離れないといけないんですか？僕は大好きなリユートといつまでもずっとそばにいます。離れてる時間は最小限にするならダンジョン探索する暇なんてあるわけないじゃないですか」

「…っ！ベルツ！私も同じ気持ちです！ずっと一緒にいましょうね？ベル？」

「もちろんですよ！リユート！僕達はずっと一緒にです！」

「…という調子なので神ヘルメスの要望は叶う余地は全くない。だから不穏な動きを起こしかねない…そういうことか。よく分かった。分かったからそれ以上イチャつくな。いい加減話が進まん」

改めてリユートと僕がいつまでも一緒にいることを確認し合った僕は互いの顔を見合わせて微笑み合う。

そしてもう一度肩を寄せ合って互いの距離をさつきまでと同じように縮めるのだが…シャクティさんは完全に呆れ顔。

…僕達は何か問題のあることをしただろうか？

と思っていると、シャクティさんはその場の雰囲気を一変しようとするかのように咳払いをした後に話を続けた。

「…ともかく。神ヘルメスは掴みどころがない神で若干の不安があるが、神ヘルメスのそばには常識人でリオンとも親しいアンドロメダがいる。だから私は特に不測の事態が起こるとは考えられないが…」

「私達も一応シャクティと同じように思っています。とは言え警戒は必要かと思ってしまう…なぜ神ヘルメスが私とベルとあととはごく数人しか知らないはずのダイダロス通りにある私達だけの愛の巣に現れることができたのか見当がつかず…」

「当然誰もあの邪神に僕達の愛の巣の場所は伝えてないはずなのに…ですよ？これだけでもどれだけリユートと僕の愛で結ばれた仲を引き裂きたいかの執念が分かる気がして…」

「…愛の巢？じゃ…邪神？愛の巢？は？待て。頭の中を整理する。妙な言葉を口走るな。むず痒くて考えがまとまらない」

シャクテイさんは僕達の説明が途中なのにも関わらず手を小さく挙げて話を打ち切るように求めてくる。

…どうしてシャクテイさんは身震いまでして僕の話のを止めたのだろうか？

ともかくシャクテイさんに静寂を求められたお陰で手持無沙汰になつたりリユーと僕。

僕達は繋いだままになっていた手で指を絡め合つたり互いの温もりを堪能したり等々とシャクテイさんに見えないようにじゃれ合う。

衆目の前で堂々とリユーとイチヤイチャするのは恥ずかしさで死にそうになるけど、人前でこっそりリユーとイチヤイチャすることは楽しさを見出し始めた僕。

どうやら治療院でアミッドさんの目から逃れながらリユーとイチヤイチャして以来僕はその楽しさと興奮が忘れられなかつたらしい。

それに加えて最近リユーが積極的にイチヤイチャするという宣言してくれたこともあって、時折こうして隠れてリユーと秘め事のようにイチヤイチャしている。

リユーも自らの宣言のこともあってか結構積極的に応じてくれて、リユーの表情をこっそり伺えばとても幸せそうに惚けているように見える。

そんな感じに互いに良いことづくめということだこっそり手持無沙汰にイチヤイチャしていると、シャクテイさんが窺うようにこちらを見てくる。

…シャクテイさんの考え事は終わったのだろうか？

そんな風にぼんやり考えつつリユーの手の柔らかさを堪能していると、シャクテイさんがぼそりと呟いた。

「…幸せ一杯の恋人同士の時間を堪能中の所非常に申し訳ないが、一つ気づいたことを話してもいいか？」

「…え？」

「…その表情気付いてなかったとでも言わんばかりなのは気のせいかな？」

…どうやらシャクテイさんに気付かれていたらしい。

ただリユーも僕も気づかれずにやっていた『つもり』だったので、ついついシャクテイさんになぜ気付けたのか尋ねてしまうが…

「あの…シャクテイ？どうして私達が幸せ一杯の時間を過ごしていると…」

「まずはリオンの今まで見たことのない頬を赤く染めてデレデレしている様子から。…というか何の躊躇もなく今が幸せ一杯だと認めるのだな。…まあそれは当然いいこと、か」

「デツ…デデデ…デレデレ!？」

「確かに今のリユーは特に可愛いというのは納得ですね…じゃあシャクテイさんはリユーの表情から…」

「それだけの訳がないだろう？」ラビット・フット「白兔の脚」の鼻の下を伸ばしたかのような表情で一目瞭然だが…まさか自覚なしか？かなりだらしなかつたぞ？」

「ごふっ…!？」

「べべべ…ベルがだらしないなどっ！シャクテイ！流石に失礼ですよ！確かに鼻の下を伸ばしたかのような表情という表現は的を射ている気もしなくもないですが…」

…シャクテイさんの真つ当な観察報告にリユーも僕も見事に撃沈された。

そのせいで僕達は多分シャクテイさんにも気づかれているであろうが、こっ所り互いの手を離し肩と肩の距離も作り直してシャクテイさんの話を真面目に聞く姿勢を作り出すことになった。

そんな僕達の態度に何をシャクテイさんが考えているのか…というのにも僕は考えたくもない。

するとシャクテイさんはまた咳払いをした上で本題に入った。

「それで…だ。リオン？さつきダイダロス通りに今住む家があると言ったな？聞き違いではないな？」

「えっ…ええ。場所はお教えするのは気が進みませんが、確かにダイ

ダロス通りだと言いました」

「そうか…なら残念だが地区までなら私も目星が付いた」

「…目星？」

「つまり…場所が大体分かった…ということですか？」

リユーと僕の恐る恐る紡がれた確認にシャクテイさんは無言で頷く。

ただリユーも僕もシャクテイさんには居場所をダイダロス通りだという手掛かり以外提供していない以上、具体的な場所がシャクテイさんには分かるはずはない。そう思った僕達はシャクテイさんの言葉に半信半疑だった。

だが半信半疑になった原因は単にリユーと僕の認識が甘かっただけのこと。

そう…僕達がシャクテイさんに提供していた手掛かりはそれだけではなかったのだ…

「気付くわけないだろう…噂としては知っていた最近市場などに出没し、ダイダロス通りの西の方の地区に戻っていくというエルフとヒューマンの新婚夫婦…その周囲の視線も気にせずべたべたして顰蹙を買う者達がリオンと【ラビット・フット白兔の脚】だと誰が気付くか…」

「…しっ…新婚夫婦…ちっ…違いますよ？そんな…まだ私達は結婚して…ああでも結婚ですか…確かに私とベルは婚約者ですし、いつ結婚しても問題は一切ない…ならばそろそろ結婚を検討するのも…」

「…リユー？確かに夫婦と勘違いされるのは悪い気は全くしませんし、結婚は是非ともしたいですが…そういう呑気な話じゃない気が…」

リユーはシャクテイさんに夫婦と勘違いされた噂が流れていることに頬を赤らめ腰をくねくねさせて嬉しそうにしている。

…が、シャクテイさんの表情からしてとてもではないが良い話とは思えない。

確かにリユーと同じように僕もリユーと早く結婚したいし、リユーがこれほど結婚式を幸せそうな表情で語ってくれるなら是非とも結婚式は盛大にリユーが喜んでくれるようにしないと心に決める。

だが今はそんな呑気なことを考えている場合ではない。

そしてその危惧が正しいと証明するようにシャクテイさんは言葉を連ねた。

「リオン。【白兔の脚】ラビット・フットの言う通りそんな呑気に考えている場合ではないぞ。：私がこうもあつさり気付けたということはリオンが生存しているという事実が公然化する日はそう遠くないと考えて間違いないと思う」

「…え？…え？私の生存が公然化する…？つまり…」

シャクテイさんの言葉によつて結婚という幸せな未来に吸い寄せられて没入していたリユーだけの世界から現実世界に意識を引き戻されたリユー。

そのリユーはようやくシャクテイさんの言葉の意味を理解し、顔を青ざめさせる。

言うまでもなく僕もシャクテイさんの言いたいことは分かっている。

：僕達の前途には未だに厄介な問題が存在していたのだ。

「…場合によつては再びリオンの身に危険が迫る可能性がある…早急に対策が必要だぞ？何か考えはあるのか？リオン？【白兔の脚】ラビット・フット？」

…この後神様と話し合つても対策をほとんど打ち出せなかったリユーも僕も無言になるしかなかった。

この時シャクテイさんに相談して良かったと思うのは、これからもう少し後の話。

結果的にこの日がリユーと僕の生活に新たな転機をもたらすことになるのである。

## 何気ない日常の守り方

シャクティへの相談から二日が経った。

だが私とベルは未だ対策を決定するには至っていなかった。

シャクティの提示した案は三つ。

一つ目は神ヘルメスの介入を防ぐためにベルがダンジョン探索を再開すること。出産後にも探索に私も同行するようにすれば私の名誉も長期的にはその貢献度で回復される余地がある…と。

二つ目は「ガネーシャ・ファミリア」に協力して治安維持に貢献すること。私の名誉回復だけでなくベルの貢献も示せるため、神ヘルメスの態度も軟化する余地がある…と。

三つ目はダイダロス通りにひたすら息を潜めて暮らすこと。神ヘルメスの動向は読めないが、軽拳妄動を慎めば私の生存の噂が拡散されるのを少しは防げるかもしれない…と。

これら三つのどれかに、という決心が私にもベルにもできなかったのである。

そうして二日間も二人でずっと一緒に家で過ごしたにも関わらず本格的な詮議もせず、時に時を浪費した。

ただただ二人肩を寄せ合って今の幸福に身を浸し、現実から目を逸らしていたのである。

それほど私とベルにとって今の二人だけの生活は幸せで甘えたくもなるもので…そして絶対に壊したくないものだった。

シャクティの提示した三つの案はどれを取ってもこの生活を必然的に破壊してしまう。

だから私もベルも決心を渋るしかなかった。

だが目を背け続ければ、何の対策も取れないまま最悪の事態を迎えるのは想像に難くない。

これまでなら私一人の命だといいい加減に自暴自棄といっても過言ではない考え方で行動できた。

しかし今は大切な婚約者であるベルがいる。私のお腹の中には大切な我が子がいる。

そんな乱雑な考え方を採用するなど言語道断だった。

この事態に陥った原因の大半が私にある以上現実から目を背けるなど論外だった。

そう思いつつも話を切り出すための一言を告げられず：私は短期的には有意義で幸せでも長期的には無意味で破滅へと無為に転がり落ちる二日をベルと共に過ごしてしまった。

だがこれ以上の時間の空費は流石にまずい。

ようやく決心を下すための覚悟を決めた私はとうとういつも通り私の隣でマグカップ片手に朗らかな表情をしているベルに話を切り出した。

「…ベル？これ以上決心を遅らせるのは望ましくありません。だから…」

「まだその話はやめておきませんか？リユー？僕はもう少しだけ…もう少しだけリユーと何も考えずただただ二人で何気ない日常を過ごしていたいんですが…」

ベルは私の切り出そうとした話題を理解した上で首を振り、私の肩に自らの頭を預けて甘えるようにそう呟く。

その呟きに私の覚悟が揺らぐがぬはざがない。私だってベルと一緒に何気ない日常を過ごし続けたい。

だが：そんな甘えを抱き続ければ、私達三人の未来はより暗いものになっていってしまう。

私達の大切な正義<sup>希望</sup>を失う事態に繋がってしまうかもしれない。

私はベルへの愛もベルとの愛の証明である我が子も失いたくない。だから心を鬼にしてベルの誘惑を拒絶した。

「…ダメです。今この時間で決心しなければ、正義<sup>希望</sup>を…守るために」

私はその言葉と共に正義<sup>希望</sup>を守りたいという意志を示すために左手では自らのお腹を撫で、右手ではベルの背を摩る。

今の私が両手で今触れることができている正義を何としてでも守らないといけない……それが私の揺るがぬ覚悟だ。

私はその覚悟をできる限り身ぶりでベルに伝えようと試みる。

するとベルは小さく溜息を吐いた。そして左手は私の腰に手を回し、マグカップをそばに置いた右手は私のお腹へと伸ばし、ベルは静かに言った。

「……すみません。リユートの言う通りそろそろ決心しないとダメですよ。ね。つい甘えてしまいました。この何も考えずにただただリユート二人で過ごせる時間が幸せでつい……」

「それは私も同じですよ。ベル。私もできることなら悩みなどなくベルと二人で過ごす時間を大切にしたいのです。……ですがそれが叶わぬ苦難が目の前にある以上私達は目を背けるわけにはいかないでしょう」

「その通りです。……その通りなんです……シャクティさんの提案はどれも僕達には受け入れがたい……そういう結論が出てましたよね……？」

「うっ……」

決心をするための覚悟はできていた。だがどの提案を選び取るかという意味では全く決心の準備が整っていないというのが私の心の中の実情。

決心の準備も整えずに覚悟を決めた私とは違い、決心をすると覚悟を決めた以上ベルはシャクティの提示した案の問題の核心へと話を進めた。

「まず一つ目の提案ですが……ダンジョン探索の再開は論外です。リユートを置いてダンジョンに行くなど考えられませんし、リユートの同行も……」

「お腹の子の安全を考えれば論外……その意味で治安維持への貢献もあり得ません。そもそも同じ過ちを繰り返すなど……あつてはならないことです。治安維持に関しては検討にも値しないと言うべきでしょう」

「……結局一つ目も二つ目も論外ですよね？」

私とベルの考えは最初から一致していた。私のお腹に子供を宿し



ている時点で二つとも現状では論外なのである。

確かに一つ目の提案はとりあえずベルだけダンジョン探索を再開すれば神ヘルメスの余計な動きは防げるのでは…とシャクティが言ったものの、ベルは断固として拒否し話は流れた。

私も自らのこれまでの軽拳妄動がベルに如何に心配と不安を与えていたのか深々と反省する身であるためその拒否を窘めることもできず。

現状では私とベルが一緒に行動し続けることがベルの心配と不安を取り除くのに一番適切という判断の元私はベルの考えに賛成した。

二つ目に至ってはこれまでの私の軽拳妄動の根本的問題である時点で私にとってもベルにとっても論外であった。

それで残るのは三つ目の提案なのだが…

「それに息を潜めてって…僕達今もダイダロス通りに住んで息を潜めてますよね？何をどう改善すればいいんですか？」

「…市場などダイダロス通りの外に出向くな…ということでしょうか？しかしそれでは私達は生活することさえできませんよ？」

「…」

三つ目は…改善点自体が私達に見えてこない。つまり無策と同じのように感じられること。

これは第一前提として提案として数えられるのか自体が私の中で疑問だった。

「…やっぱり僕達がイチヤイチャするのが目立つのがダメなんですかね…？確かに視線とかは結構感じますし、そのせいで息を潜められないとシャクティさんは解釈してるんですかね？」

「それは…私への気遣いがいつも満ちていて…さらにいつもは私を時にはカッコよく守り、時には厳しく諭してくれるのに、唐突に可愛さまで見せてくれる…そんなベルの姿が周囲の視線を集めているのではないですか？」

「ちっ…違いますよ！モンスターや悪人の前では凛々しく木刀を振るっているのに、僕の前ではすっごく照れて可愛さを振り撒いているリユースが周囲の視線を集めてるんです！リユースの凛々しさと可愛さ

のギャップのせいです！」

「なっ…ベルの魅力の方が視線をつ…！」

「いえいえ！リユーの魅力が視線を！」

ベルが息を潜めて暮らせず目立つ理由があるのでは？と指摘し始めるも盛大に脱線を開始する私とベル。

辿り着いたのは私とベルのどちらの魅力が視線を集めているかという論点。

そんな論点で論じ合えば、互いの魅力を語り合うという事態に繋がり…

…自らが口走り相手の口走った甘い言葉の数々を前にお互いにも経ずに恥ずかしさで撃沈した。

そんなハプニングのせいで議論は見事に数分間途絶した後、耳の先まで赤く染まったベルがぼそりと話を再開した。

「…ともかくリユーの魅力が減らさせるようなことも僕のリユーへの愛を伝えるための行動も絶対やめたたくありません」

「…同感です。ベルの魅力を減らす方法があるとは思えませんが、私もベルに愛を伝えないようにするなど考えられません」

「誰かに僕達の愛に水を差されたくないですもんね」

「それに…愛を伝えるのをやめた結果私とベルに万が一が起きる危険性を考えれば…論外です」

私の脳裏に浮かんだのは『人助け』を優先するあまりベルへの愛を伝えることを怠った忌まわしき過去。

あの過去を繰り返さないために私は精一杯いつでもどこでもベルへの愛を伝えようと決めた以上、その愛情表現を怠るなど論外。

それにベルの言う通り他人に私達の愛に水を差されることもあり得なかつた。

ただそういう結論に達すると…

「…どの提案も受け入れられない…という結論に前と同じように達しますよね？リユー？」

「うう…」

ベルの導き出した結論に私は反論もできない。

…結局のところ私もベルも決心ができないのだ。  
その決心をするには何かを諦める必要があつて。

そしてその何かを諦めてしまえば私達の幸せな今は失われる。  
それだけは私もベルも許すことができない。

こうして振り出しにまた戻つてきてしまった私達。

流れるように沈黙に陥つてしまう中私は現実逃避するように遠い  
目で呟いた。

「…本当は近いうちに落ち着いた状況で結婚式をまず挙げたかつたの  
…ですがね」

「結婚式…ですか。落ち着いた状況なら確かにすぐに挙げるための準備  
もできたんでしようけどね…ちなみにリユー的には結婚式の要望  
とかつてありますか？」

「できれば…誰もいない夜の森で二人きり。月に私達の永遠の愛を改  
めて誓い合う…というのが良いのですが…」

「ははっ…とつてもロマンチックでいいですね」

「ちよっ…ベル？あなた馬鹿にしてませんか？」

「ちっ…違いますよお！ただリユーらしいと言えぱリユーらしくて  
…」

私が触れたのはシャクティとの話でも出ていた結婚式に関して。

もしこのような困難な状況に置かれていなければ、結婚式もすぐに  
挙げられていただろうに…と私もベルも思わずにはいられなかつた  
のだ。

そしてベルが尋ねてきた私の要望に私は真面目に答えたにも関わ  
らず、ベルは面白おかしそうにくすくすと笑い出す始末。

その様子に私は少し不満で膨れ面になるも、ベルは笑い続けたまま  
話を続けた。

「そうですね。夜の森で月に僕達の永遠の愛を誓う…絶対に忘れられ  
ない結婚式になりそうですか…でも迷宮都市オラリオに森なんてありまし  
たっけ？」

「森なら十八階層に…」

「でも月は見えませんか？」

「…確かに。ただ十八階層には仲間達がいるので、そこで密かに結婚式を挙げたい…という気持ちもあります」

「…そうですね。なら十八階層で結婚式というのもいい案ですね。考えてみましょうか」

迷宮都市オラリオで森のある場所ということで真つ先に頭に浮かんだのは、十八階層。

…私のかつての大切な仲間達が眠る場所。

十八階層で結婚式という形で私とベルが愛を誓い合うというのとても魅力的に映った。

そういえばベルと結ばれ我が子を授かってから未だ私は十八階層に出向いたことはない。

確かに夢の中でアリーゼ達には色々言われはしたが…やはり私は彼女達の前で色々報告しておきたかった。

私はベルと我が子という大切な存在に恵まれて幸せになることができた、と。

あなた達とは違う正義希望であろうともこれまでと同じように自らの胸に抱く正義希望のために生き続ける、と。

それで当初私の話した構想からは外れるものの、私はつつい実現したいと思ってしまう。

その気持ちをベルは察してくれたようで微笑みと共に頷いてくれる。

さらにベルはちよつと恥ずかしそうに視線を逸らしつつも魅力的な提案まで加えてくれた。

「結婚式を実際に十八階層で挙げられるかはともかくとして…十八階層に一回お忍びで行きませんか？デートも…兼ねて」

「ふふっ…そうですね。是非行きたいです。結婚式の下見という意味でも。十八階層ならデツ…デート場所として…相応しいでしょうし」

そうして流れに任せてとばかりに十八階層にデートに行くことを約束として成立させる私達。

未だに『デート』という言葉を口にするだけでも恥ずかしさがこみあげてくるが、デートに行きたいという気持ちは私とベルの間で言うまでもなく一致していたためすんなりと話は進んでいった。

「ちなみに森があつて月が見える場所はどこにあるんでしょうね？」

「私の記憶の範疇では迷宮都市の中にそのような素晴らしい条件が揃った場所は記憶にありませんが……」

「ん？迷宮都市の中に？迷宮都市の中に……迷宮都市の中に……あああああああ!!!」

「ベツ……ベル!? 一体どうしたのですか!？」

私の話した条件の揃った場所を考えているだけのはずのベルが唐突に叫び出しながら勢いよく立ち上がる。

ベルの不可解な反応に私は戸惑いを隠せずにいる中。

ベルの頭には天啓が舞い降りていた。

「そうです！……そうですよ!!! 迷宮都市を出れば万事解決じゃないですか!!」

## 何気ない日常の守り方（2）

「はああ?!?!?オラリオオ  
迷宮都市を出るですって?!?!?  
なるほどなるほど…」

昨日結婚式の構想をリユーと話し合う最中偶然か必然か導き出すことができたリユーと僕の今の日常を守り抜くための方法。

迷宮都市を出るといふ選択。

その選択についてリユーと僕は一日話し合って、話を僕達なりに詰めた結果次の日にリリとシルさんに相談しようという判断に至り、今こうして二人を前に話したのだが…

リリは衝撃のあまり叫び声を上げ、シルさんも顎に手を当てての思案顔…

…どうやら二人とも反応が芳しくない。

「迷宮都市を出れば、神ヘルメスも容易に介入できないでしょう。さらに迷宮都市を出れば身を隠すのはそう難しくはないはず。私達が平穩に暮らしていくなら、迷宮都市を出るのが一番最短で容易な解決策かと」

「それにリユーも僕も面倒ごとに巻き込まれずに済む。結構いい案だとリユーと僕は思ったんだけど、リリはどう思う?…」

「それは迷宮都市を離れば、単純な話ダンジョンで命を落とす危険もなくなりますし、これまでのような面倒ごととも減るかもしれませんか…」

「…あとは結婚式の開催場所探しも」

「精霊に出会えそうなほど美しくて神秘的な森…もちろん僕にとつてはリユーは本物の精霊よりも美しくて可愛いんですけど、あとは綺麗な月が眺められる場所でしたよね?絶対見つけましようね?リユー?」

「…ええ。私達の結婚する運命の地を必ずや見つけて…!」

「…お二人とも迷宮都市を出たい理由ってまさか単に結婚式の開催場

所を探したいとかそんな理由じゃないですよね?そうですよね?」

リユーと僕はリリの説得のために迷宮都市オラリオを出る利益を説くも…

リユーが本音とも言える結婚式の開催場所を探すという別の目的を口走ってしまい、それに僕も思わず同調してしまい見事に信憑性を減らす結果に終わる。

：お陰で僕達の真の目的を勘繰ったりリリがジト目で問い詰めてくるという状況に陥ってしまった。

そんな状況を打開するように口を開いてくれたがシルさんであった。

「私はリユーとベルさんの考えには一利あると思いますよ?」

「ですよね!?シルさん!」

「流石シル!分かってくれますか!」

微妙な反応のリリとは違ってシルさんは賛同の意を示してくれる。

シルさんの好意的な反応にリユーと僕はリリのジト目から救われたいという意味でも食いつくが…

「誰もいない夜の森で月に私達の永遠の愛を改めて誓い合うのなら確かに迷宮都市オラリオにいい場所ないもんね?リユー?」

「そうなんです。そこが私とベルの現在困っている点で…」

「でも大丈夫!迷宮都市オラリオの外ならたくさんそういう場所があるだろうからこれから探していけばいいんだよ!」

「なるほど…たくさん好条件の揃った場所がある…つまり条件に見合った場所ならば何度でも結婚式を挙げて良いということでは…」

「…つてそつちですかあああ!?!結婚式の方!?!?」

「え?違うの?ベルさん?結婚式の場所の方が大事じゃない?」

「そうですね。迷宮都市オラリオを出るからにはきちんと好条件の揃った場所を計画を立てて探さなければ」

「えええええ!?!その前に迷宮都市オラリオを出る利点をリリに話すのが先では!?!?」

「…シル様もそつち側なんですね。言うまでもなく説得力がより減じました」

…だがシルさんの擁護したのはリユーの口走った結婚式の方につ

いて。

リユーは昨日から結婚式の場所探しに熱意を燃やしているため、シルさんが話に乗ってくれたことでより勢いを増して結婚式へのこだわりを見せる。

もちろん僕との結婚式をそれほど嬉しきほどまでに心待ちにしてくれているのは僕的にもとても嬉しいのだけど…

…まずはこの困難な状況を打開して平穏な日常を確立してからにしたいという本音があったりなかったり。

ただ今のシルさんの反応は半分冗談だったようでシルさんは咳払いと共に雰囲気を一新しく加えて話した。

「…アーデさんは迷宮都市からお出になったことがほぼないんですよね？」

「ええ。アルテミス様の一件の一度きりですが…」

「ならあまり迷宮都市の外での経験はあまり多くないのでしょけど、結構迷宮都市の外も楽しいですよ？迷宮都市には確かに世界の中心とも言えるので全てがあるのかもしれない。富も名声も何もかも。でも迷宮都市の外だからこそ手に入れられるものもたくさんあります」

「例えばリユーと僕の永遠の愛とかですかね？」

「例えば私とベルの愛の巢に相応しい場所等ですかね？」

「そうそう！流石リユーとベルさん！分かってますね！」

「…このお三方は本当に真面目に物事を考えているんですかね…？」

シルさんは雰囲気を一新したかと思えば、リユーと僕の便乗によって雰囲気は浮かれた方向に逆戻り…

あれ？これは便乗したリユーと僕が悪いのか便乗できるように誘導したシルさんが悪いのかどっちなんだ？

という疑問を一人僕が抱える中、シルさんは話をさらに進めていった。

「ま、ということではリユーとベルさんの提案に賛成です！」

「…ということはシル様も同行なさるつもりで？」

「もちろん！アーデさんはどうなさるんですか？」



「それは…少し検討のお時間を頂いて、ヘステイア様達にご相談してからです。そう簡単に決める訳にはいきません。…が、多分同行させて頂くと思います。リユウ様とのお約束もありますので」

「ええ。可能ならば共に来てくださると嬉しいです。アーデさんの知恵はとても頼りになりますので」

「そういう所であつさりアーデさんの同行を求めちゃう辺りがお人好しなんだよなあ…リユウは」

「そう言うシルはそのようにあつさりご決断してしまつて大丈夫なのですか？…主にミア母さんという意味で」

「うん！ミアお母さんにはきちんと話しておくから大丈夫！それにそろそろ新しい伴侶を探さないとなーなんてね」

「おーず…ですか？」

「そう！私の旦那様を探さないとなーつて！」

「だつ…旦那様!?シルツ！それは一体どういう意味です!？」

「だつてリユウがベルさんと結婚するならリユウと同じタイミングで結婚式つて言うのもありかなーつて」

「そつ…そんな軽い気持ちで結婚を考へてはダメです！シルの伴侶になるような殿方ならば厳正かつ慎重にお選びしなければ…」

…という風に僕を完全に放置してリユウとシルさんは話を盛大に脱線させていつていた。

そして話の脱線は最初は会話に参加していたはずのリリまで置いてきぼりにして、すっかり話題は迷宮都市オラリオを出ることから離れていく。

そのため見かねたように溜息を吐いたりリリは話題を無理矢理元の話に引き戻してくれた。

…ただし完全に樂觀的になつていた僕達に爆弾を投下する形で。

「それ…で…ですね？結婚式をお挙げになるのはリリとしては別に結構です。ですがまず迷宮都市オラリオを出られないことには話にならないでしょう。お三方は迷宮都市オラリオを出る時の問題をお気づきでないの？」

「…どういう意味？リリ？」

「何かありましたっけ？アーデさん？」

「はっ…忘れる所でした。迷宮都市オラリオを出る前に十八階層にベルとデー  
トに…いえ、結婚式の場所の下見に行かなければ」

「あっそうでした！それも忘れてはダメですね！」

「そうそうそれです。リユー様。ベル様。デートも大事ですよね…  
と、リリが言うとても思っただんですかあああああ!!!」

リユーの指摘で迷宮都市オラリオを出ることで頭がいっぱいで一瞬忘れか  
けていた十八階層でのデートを思い出す僕。

…だがどうやらリリ的には完全に的外れだったらしくリリは我慢  
の限界だと言わんばかりに声を張り上げる。

「どうか十八階層に行くとかまたまたお二人はお目立ちになるつも  
りですか!？」

「えっ…隠れて行けば問題なくない?」

「そういう問題じゃないでしょう!?!そういう問題じゃ!?!」

「アーデさん…私とベルの神聖なるデッ…デートの約束に関して介入  
されるのは些か不愉快で…」

「もうっ!その点はどうぞお好きに!!迷宮都市オラリオを出ることさえできれ  
ば、迷宮都市オラリオ内でどう思われていようとしたこっちゃんないでしょう  
!!」

僕が18階層に行くことに何が問題あるのかと首を傾げる一方  
リユーはデートに関してリリに介入されることにあからさまにムツ  
と不機嫌そうな表情を見せる。

そんな僕達の反応に匙を投げたかのように自暴自棄に叫ぶりり  
であつたが、指摘すべき点は指摘することを忘れないでいてくれた。

「ですがその迷宮都市オラリオを出ること自体が問題です!ギルドがそう簡単  
に『はいそうですか』と許可を出すと追ってるのですか!?!ベル様も  
リユー様も迷宮都市オラリオの中でも有数の実力を誇る冒険者なんですよ!?!」  
「…あ」

「…」

「あーそういういえばそういう問題もあつたっけ?迷宮都市オラリオというかギル  
ドってそういう手続きがすっごく面倒だよね」

リリの指摘に僕は茫然となり、リユーは言葉を失い、シルさんも納

得したように呟いた。

：リリの言う通りそう簡単に事が運ぶとは思えない。

僕もリユースもLv. 4の冒険者。ギルドからすれば貴重な戦力だろう。

リリが言いたいのはそんな貴重な戦力が流出するのを迷宮都市から流出するのを簡単に許すのかという点である。

そんなリリの指摘を三人揃って瞬時に否定できなかつたということと自体指摘が正しいという証明に他ならなかつた。

「：お三方ともようやくお気づきになつたよう。対策を取らないと上手く事を進められませんよ?」

「じゃあギルドに許可を…」

「リリの視界に映つてるその頭は飾りか何かですか。ベル様? そんな話をすれば許可を出すような相手とは思えません。下手に口を滑らせれば、迷宮都市を出る機会を失います。論外です。馬鹿ですか」

「私もアーデさんと同意見だなあ。残念なことに世界はリユースやベルさんみたいなお人好しだけで動いてるわけじゃないんだよ? という事でアーデさんのにも密かに迷宮都市を出るのが良いと考えているので?」

「仕方ないでしょう。ヘルメス様が万が一にも妙な動きをするならば、迷宮都市を出た後も消息を掴まれたら厄介です。密かに迷宮都市を出るのがベストかと」

「ですよねーその手段をどうするか…ですけど…」

「：迷宮都市の城門の警備の穴を突いて迷宮都市の外に出るとか簡単にできる訳ないですよねえ…」

とんとん拍子に迷宮都市を正規にギルドから許可を得るのではなく密かに出るといふ形で意見を一致させたリリとシルさん。

：僕が論破されボロクソに言われるだけでは済まず、流れでリユースと僕がお人好しと罵倒気味に評価を下されていたような…

それはともかくリリとシルさんが話を進めつつもその手段に関しては案がないようで言葉を詰まらせる。

そんな中しばらく顎に手を当てた凜々しい表情で何かを考えてい

たりリユ。

リユの様子があまりにカツコよくて思わず見惚れてしまった僕であったが、見惚れて完全に思考停止していた僕と違ってリユは頭をフル回転させていたらしい。

「…まず一案は商会に金を融通して積み荷に紛れ込ませてもらうという方法が存在します」

「商会にお金を…なるほど。それなら密かに…」

「ですが相手は【ガネーシャ・ファミリア】。そのような幼稚な策では本当に私達を迷宮都市<sup>オラリオ</sup>から出したいくないとギルドが考え指示が飛んだ場合は簡単に見破られることでしょう。なので恐らく不可能。城門も強行突破は流石に無理が過ぎるので論外」

「ならば？」

「一番堅実な策はシャクティに便宜を図って頂くことだと私は思います」

「…可能なのですか？リユ様？」

「シャクティは私からの相談なら快く引き受けてくださると言ってくれました。簡単に話が進むと保証ができる訳ではありませんが、成算はあります」

「なるほど…確かにそれが一番堅実です。リユ様の仰る通りにすべきかもしれません」

「私も同感かな？シャクティさんならリユのために動いてくれそうだし、何より信頼できるからね」

リユの慧眼な意見がリリとシルさんを一発で納得させる。

凄いいリユ…僕の意見なんて一蹴されたのに…と感心してリユを尊敬の眼差しで眺める。

が、リリとシルさんはむしろ正反対の考えを抱いていたようだった。

「…リユ様もベル様の影響でポンコツでない時はこれだけ頭脳が働いているのに…どうしてベル様の影響があると色々とあれなのでしょうね…」

「ポツ…ポンコツ!?!」

「それは私も思わずにはいられないよね〜カッコいいリユーが好き  
身としてはちよつとだけ残念。ベルさんのせいで最近色ぼけてデレ  
デレなポンコツなりユーしか拝められないし」

「シルまで私をポンコツと…わっ…私はポンコツではありません!」

「いや、リユー様はポンコツですよ?主にベル様のせいで」

「そうそう。リユーはポンコツ。主にベルさんのせいで」

「くうう…いいでしょう!!ベルが原因でポンコツになっているので  
あれば…愛するベルのためポンコツという汚名であろうと甘んじて  
受け入れましょう!!愛するベルのことを想えばこの程度恥ではない  
!!」

「やーい。ポンコツリユ〜」

「…リユー様は覚悟決め過ぎでは?単にからかっただけのつもりだっ  
たのですが…あとシル様は調子に乗りすぎかと」

…どうやらリユーはさっきのリユーの凛々しさからなぜ最近の  
リユーはポンコツなのか?という話に辿り着いていたらしい。

しかも原因は僕である、と。

僕がリユーをポンコツにしているという自覚は僕的にはほぼない  
んだけど…

ちよつとポンコツ気味で可愛いリユーも強くて頼りになるカッコ  
いいリユーもどちらも僕は大好きなので、僕的には問題ないというか  
何と言うか…

ただリユーが僕のためにポンコツという不名誉な称号を受け入れ  
てしまったのは良かったのか悪かったのかはよく分からない。

確かに僕的には不名誉な称号でも僕が原因ならと受け入れてくれ  
たことには嬉しさを覚えはするけど…

僕の大切なリユーがポンコツポンコツと呼ばれるのはあんまり嬉  
しくないような…

などと考えている時点で僕はまたもや完全に話から置いてけぼり。

そのため僕は恥ずかしがりながらも僕を『愛するベル』と呼んで叫  
んでくれているリユーを頬を緩ませつつ眺める。

こんな可愛いリユーを守るためにも迷宮都市オラリオから何と出ても出なければ。

そう改めて覚悟を心の中で決めつつ僕は二人の会話を見守った。

こうして僕は全く貢献できなかつたが、迷宮都市オラリオから出るためにシヤクテイさんの力を借りるといふ形で僕達は動き出すことになったのであつた。

〈懐妊編〉第六章 当世の希望を過去に問う

二人はデートへ向かう道中に

リユーと僕が子宝に恵まれたと分かってからもう三週間が経った。これから遠くないうちに迷宮都市オラリオを出なければならぬという難事を抱える僕達。

ただそれよりも先に忘れてはならない大切なあることをしなければならぬ。

それはデート。

迷宮都市オラリオを出る前に二人で十八階層にデートに行こうという約束を絶対にリユーも僕も果たしたい。

理由は二つ。

一つ目はリユーの結婚式の場所の希望である『誰もいない夜の森』という条件の整った迷宮アンダーリゾートの楽園と呼ばれる十八階層を下見するため。リユーの期待に沿うことができるなら、そこで是非とも結婚式を催したい。

そしてそこで月に僕達の永遠の愛を誓う。

誓いのキスとかするのかな？

誰もいないという条件を考えれば、結婚披露宴は別で催せばいいのかな？

…等々考えるだけで僕の心は喜びで踊り狂いそうになるけど、理由はそれだけではない。

もう一つの理由は十八階層にあるリユーの仲間の方々のお墓詣りをするため。

…正直リユーがどうしてこのタイミングでのお墓詣りを望んだのかはきちんとは聞いていない。

確かにリユーと僕が交際し始めた頃から考えると、初めてということになる。

なら単なる僕達の交際報告?…とあっさり納得するのが難しい程度には色々なことが【深層】での決死行以来僕達の間にはあって。

『人助け』という仲間の方々が抱いていた正義<sup>希望</sup>を捨ててしまったこと?

仲間の方々が守っていた迷宮都市<sup>オラリオ</sup>を出てしまうこと?

迷宮都市<sup>オラリオ</sup>を出れば滅多に会いに来れなくなってしまうこと?

リユーと僕の間の子宝に恵まれたこと?

リユーと僕が愛を育み、幸せな生活を手に入れられるように頑張っていること?

考えれば考えるほどリユーが考えそうなことが思い浮かぶ。僕にとっての良いことも悪いことも。

もしかしたらこれら全部かもしれないし、どれか一部だけかもしれない。

少なくとも言えることはリユーの後悔を聞くことになりそうなのが怖くてリユーが何を考えているか結局聞けないでいるということ。

聞くべきなのかもしれない…そう思いつつ僕はデートに赴く日までも聞くことなく時を過ごした。

ただ無為に過ごした訳では決していない。

デートの日までもたくさん手を繋いだり肩を寄せ合ったりして、リユーとさらにさらに距離を縮めるためにイチヤイチャしていたのは当然だ。

だがそういう意味だけでもなく色々準備や情報収集が必要だったのだ。

十八階層とは言うまでもなくダンジョンにある。

即ちデートに行くためにはまずダンジョンを踏破しなければならないのである。そのお陰で懸念点が二つ生じた。

一つ目は人目を避ける必要があったということ。



この条件を満たすためにリリの協力を得て、大規模ファミリアの遠征やゴライアスの出現時期などの情報をきちんとデートの日程の考慮に入れた。これでこの条件は満たせたと思う。

そして何より重要なのがリユーのお腹には大切な僕達の子供がいるといるということ。

リユーの身にも僕達の子供にも万が一など決してあつてはならない。

僕も今ではLv. 4の第二級冒険者。中層までのモンスターに遅れをとる心配はない。

ただリユーとダンジョンに行く…となると、リユーの優しくて生真面目な性格上問題が発生してしまう。

リユーがダンジョンで力になりたいと主張したのだ。言うまでもなくモンスターとの戦闘に関して。

リユーの配置は前衛でモンスターと接近して交戦する一番危険な配置。

リユーが傷つく可能性を僕が承諾できるはずもない。

なら魔法を使いこなすリユーなら後衛で…と安直に考えたくなくなるも、魔法も精神力マインドをたくさん必要な上に乱発できるような代物ではない。

…そしてリユーは僕を守るためなら乱発も辞さないという可能性は十分考えられ、リユーに過度な負担を強いることになる。

それに加えて僕の心の中にはリユーを守ってカッコいい所を見せたいという欲もあつて…

僕は前衛でも後衛でもリユーに戦闘に参加してもらうのはやめた方がいいと僕一人でリユーを護衛することを強硬に主張したものの…

一方のリユーは僕一人に傷つく可能性を押し付けるなど論外と二人での共闘をこれまた強硬に主張して。

正面から意見がすれ違った僕達は危うく喧嘩にまで発展しそうになる。

こんな形で危うくデートに行く前に喧嘩状態に突入しそうになっ

てしまうリユーと僕。

デートは準備段階で悲しくも立ち消えになってしまう…かと僕は思わず戦慄した。

だがそんな時僕達を救ってくれたのは一人の修羅場ミアに現れた聖女ミツであった。

☆

「…あの時【戦場の聖女】にお会いしていなければ、こうして今デートに向かえていたか…正直分かりませんね」

「…その通りです。あのタイミシングでアミッドさんの治療院に行こうとしていた僕達の強運とアミッドさんのお言葉には言葉にならないくらい感謝してます」

場所は【中層】十八階層に向かう途中。

リユーと僕は何とか喧嘩を回避して今日デートの日程を滞りなく進めることができていた。

その立役者はリユーと僕の話に既に出てきているアミッドさんであった。

「妊娠八週間目ならある程度の運動なら問題ないと仰ってくれたお陰で少なくともダンジョンに向かつてても良いと仰ってくれたのは本当に良かったです。…私もベルもすっかりそこに関しては頭から抜け落ちていたのでお訪ねして正解でした」

「うっ…そういえばそうでした」

まず大前提。戦闘に参加しようとしまいと、ダンジョン探索にリユーが赴いていいのか否か。

単に戦闘を行うから危険という点だけでなく、ダンジョンを戦闘を経ずに踏破するだけでも激しい運動か否か評価が分かれるとも言える。

…この点に関してはリユーも僕もすっかり忘れていた。

お互いにデートに行くこと自体は前提だったので問題があるという認識自体が存在してなかったのだ。

そのためにリユーが戦闘に加わるか否かという点が争点となって危うく喧嘩に発展しかけた訳で：

だがそんな望ましくない状況に僕達を露とも知らないアミッドさんは、僕達の望んだ確認がそちらだと早合点してしまった。

その結果リユーの言ったようなことを教えてもらった訳なのだが、それだけに留まらずアミッドさんは僕達の喧嘩が発展する前に有難くも妥協点を偶然流れで提示してくれたのだ。

「確かにベルと【戦場の聖女】<sup>デア・セイント</sup>の仰る通り私が前衛で戦うのは危険…：万が一負傷でもすれば、お腹の中の我が子に危険が及ぶ恐れまである…それは分かつてはいたのです。分かつては…いたのですが…」

「リユーのお気持ちは十分に分かつてるから大丈夫ですよ。…僕も守られるだけは嫌だと思えますから。せめて共に戦いたい…：そう思うリユーのお気持ちはよく分かります。でも…：お腹の中のリユーと僕達の子供への方が一だけはどうしても怖くて…」

「そんなすれ違った私とベルの思いを汲み取り、【戦場の聖女】<sup>デア・セイント</sup>は私達を喧嘩の危機から救ってくださいました」

「…アミッドさんには感謝してもしきれませね」

「同感です。感謝の言葉だけでは足りないのではと思ってしまうほどには」

そうアミッドさんへの感謝の気持ちを言葉にしつつ僕は振り返って視線を交わすと共に、僕達の視線は同時にある一点に向く。

実を言うと、僕とリユーは言葉を交わしつつもいつものように並んで話してはいなかった。

僕はリユーの少し前にリユーを守るようにナイフ片手に周囲を警戒していた。

ただリユーの望み通り僕一人で戦うという状況を回避するための所謂秘密兵器が僕達の視線の先にはあった。

それはリユーの携えている弓矢であった。

【戦場の聖女】<sup>デア・セイント</sup>の案は私とベルの思いを両方汲んでくださった素晴ら

しいものでした。弓を扱うというのは言うなれば中衛職。前衛のように前線で戦うこともなく、後衛のように精神力を消費することもない」

「さらに妊娠中でもお腹の膨らみが目立ち始めるまでは大丈夫だとアミッドさんが仰ってましたもんね。これならリユーと一緒に戦えて、リユーの危険を最小限に抑えられる…アミッドさんの案には本当に助けて頂きました。あつ…ミノタウロスの群れが…」

「ですね。ベルは前に集中を。援護します」

「はいっ！」

アミッドさんの提案してくれたのはリユーが弓矢を手に中衛職を務めること。

これなら僕の望みであるリユーとお腹の中の僕達の子供が危険に晒されないということもリユーの望みである僕と共に戦うことも両方満たせるという訳だ。

この提案がリユーと僕の望み両方を叶え、喧嘩の危機を消滅させてくれたのだ。

そんな確認を僕達がしていると言うのに、全く空気を読まずに出現する十体のミノタウロスの群れ。

その出現に気付いた僕は思わず呟くとリユーは気を引き締めた表情で背負っている矢筒から矢を引き抜く。

そうして矢を番えたリユーは僕に前を向くように促した。

リユーの促しに応じた僕はリユーと僕の会話の時間を邪魔した罰を与えなければと思に至る。

そんな考えと共に僕は息を吐くと、ナイフを構え前へ前へと駆け始める。

【深層】で一緒に戦って以来の二人でモンスターに挑む戦い。

リユーと僕は婚約者なのだから、例えモンスター相手の戦いであろうとこれはもう共同作業なのでは？

…なんて気軽な考えを抱けたのは【上層】にいる頃だけであった。

「ふっ…」

リユーの短い息遣いが聞こえる。

そして次の瞬間にはミノタウロスの群れに向かって駆ける僕の視界には風を切るように僕を追い抜いていく矢が映る。

それも二本。ついでに言うとも別々のミノタウロスの胸部の魔石を的確に貫き、瞬時に灰に変えていった。

その様子に目を奪われつつ僕が走る間にもリユースは短い息遣いと共に次々に新たな矢を解き放っていく。

僕がミノタウロスに接近戦を始めた時には、リユースの矢によって既に四体のミノタウロスが灰になっていた。

最終的な戦績は僕が三体のミノタウロスを倒している間にリユースの放った矢が七体のミノタウロスを葬るという…

これだと…

僕がリユースを前衛として守っているというよりは、中衛のリユースに僕の方が守られてるのでは？

そう思わずにはいられない僕。

これでは心の奥底で思い描いていたリユースを守ってカツコいい所を見せるという計画が完全に台無し。

そのため僕は周囲に新たなモンスターが現れていないか確認した上でどうとう我慢ができずリユースの元に駆け戻り、尋ねていた。

「あの…リユース？リユースは今までだと確かに【深層】でのナイフの投擲が凄く上手かったのは覚えていますが、前衛のイメージが強くて…リユースって弓を扱えたんですね…それもすごく上手く僕が呆気にとられちゃうぐらいに。知らなかったです。流星ですね。リユースは」

「そっ…そうですか？あっ…ありがとうございます。私がベルのお役に立てて何よりです」

駆け寄った僕は誉め言葉で誤魔化しつつも逆にリユースに僕が守られてしまったことへの不満を含んだ言葉を漏らす。

だがリユースはそんな僕の情けない思いには一切気付かず、素直に誉め言葉と受け取った。

だからリユースは嬉しそうに微笑みを僕に向けてくる。

リユートの笑顔を見た瞬間僕の中の蟠りは一瞬で浄化するように消えていた。

…そうだった。リユートにとってはこの状況が一番嬉しいんだ。

リユートは僕のことを守りたい。

リユートの望みは僕を守るための力になりたい。

リユートの望みは喧嘩になりそうになった時点で…いや、【深層】で愛を誓い合った頃から既に僕は知っていたはず。

なのに僕は身勝手に不満を抱いて、リユートの思いを考えずにただ自分の欲だけのために一方的にリユートを守ろうとした。

…これでは僕はリユートのことを本当に思いやれていないではないか。

そう気づかされた僕は深く反省し、自らの考えを改めなければと考える。

そんな風に僕が自省していると、リユートは小さな声で呟いた。

「…ベルの仰る通り私は原則前衛で最近弓は扱ったことはありませんでした。ただ故郷では弓術も人並み以上に嗜んでいました。なのでその当時の勘がようやく戻ってきたと言った所です」

「リユートの故郷の勘…ですか？」

そう聞いて僕はほんの少し驚きを覚えずにはいられなかった。

なぜならリユートの口から『故郷』という言葉を聞くのはほとんど初めてだったから。

最近は何日一緒にいるからたくさんリユートとはお話しするけれど、『故郷』の話聞くのは初めて。

だから僕は思わず好奇心をそそられて尋ねていた。

「そういえばリユートの『故郷』のお話はあまり聞いたことないですね。いつかお話を…」

「…すみません。口が滑りました。今の話は忘れてください」

「えっ…？あっ…はい」

僕の問いに対してリユートは目を背けて話をバツサリと打ち切った。

まるで『故郷』の話はしたくないと言うかのように。

…そういえばリユートから以前エルフの慣習を忌んで『故郷』を飛び

出したという話を少しだけ聞いたことを今更のように思い出す。

多分リユーにとつては『故郷』の話はあまり思い出したくない出来事があるのだろう…

そうリユーの反応から察した僕はそのまま口を閉ざす。

その結果不意に奇妙な沈黙の時間が訪れてしまうが、それはすぐさまリユーが打ち壊してくれた。

それもなぜか恥ずかしそうに視線を泳がせて照れているかのような様子で。

「ですが私としてもここまで腕が良かった記憶はないのです。だから…その…これは…ベルのお陰です」

「え？僕の…お陰ですか？」

「そうです…ベルを守りたいという想い…ベルへの愛が私の弓術の腕前を格段に向上させたのだと思います」

つまり…

リユーの弓術の上手さは僕への愛の強さのお陰であり、僕を守ってくれたのはリユーの僕への愛の力ということ？

「…抱き締めていいですか？」

「…え？」

「リユーをすっごく今抱き締めたいです。僕達は今デート場所に向かう最中…デート中だと言っても差し支えないんです。だから…」

抱き締めた。

目の前で恥ずかしそうに僕への愛の力のお陰だと語ってくれるリユーが愛おし過ぎる。

頬を赤くして僕への愛を語ってくれるリユーを今すぐにでも抱き締めた。

そういえば今日はまだリユーとほとんど触れ合った記憶もない。

せっかくのデートだと言うのに手を繋いで甘い雰囲気を感じることにさえもできないのは凄く不本意。

きつとそのストレスでリユーに対してあんな不満を抱いてしまっ

ただと勝手に結論づけた僕は、リユーへの距離を縮めて今すぐにも抱き締めようと動く。

が、リユーは弓を持ったままの両腕を前に突き出し、僕のそれ以上の接近を遮った。

「ダメです…抱擁は…ダメです…」

「どっ…どうしてですか？今日まだ一度もリユーの温もりを感じてなくて実は僕少し辛いんですけど…」

「ダメなものはダメなんです…！いけません！今抱擁したら…！」

「どうしてですか?!リユー!!」

リユーを抱き締めたくて仕方ない僕となぜか僕の求めを拒むリユーの押し問答が起きる。

最近のリユーが僕からの抱き締めたいという申し出を断る事はほとんどなかったから、僕は尚のこと理由が分からない。

そしてリユーはリユーで首を何度も振って頑として自らの主張を譲ろうとしない。

ただ頬を赤くしてというのは変わらずのため、何か事情があるのだろうと察する。

するとリユーは観念したように事情を吐露してくれた。

「…今ベルに抱き締められたら弓を引けなくなってしまうです…」

「…へ？」

「だから今ベルに抱き締められてしまうと、心が幸せ一杯になってしまって気が緩み戦う気などなくなってしまうと言っているのです!!」

リユーは目を瞑って勢い任せにそう叫ぶ。

…つまりリユーが今日僕とほとんど触れ合わなかったのはダンジョン探索の間気を引き締めたままにするため？

ということはリユーはダンジョン探索を頑張るために僕と触れ合うのを我慢して…いたり？

なら僕の婚約者さん可愛すぎでは？



そう僕が今更の結論に改めて辿り着いた所、リユーはどうやら本当に色々と観念してしまっていたらしくさらに凄いことを吐露し始めた。

「ええー私だってベルと抱擁できないのがとつても心苦しいです！本当は今すぐにベルの胸に飛び込んで抱き締め合つたままダンジョン探索を進めていきたいぐらいです！」

：リユー？流石にそれは無理があるのでは？でも僕的にも手を繋いでぐらいならいいよなあ…と思ってるし…

「しかし私は中衛でベルは前衛！ダンジョン探索を効率的に進め、危険を最小限に抑えるためには私達の今の距離は仕方ないのです！これは…言わば私達の愛に立ちはだかる試練のようなもの！」

あつ…僕達の愛に立ちはだかる試練…たつ確かに…

「なのでっ…その…この試練を乗り越えたら試練を乗り越えるべく頑張った私に御褒美をくださいませんか!?わっ…私も共に試練を乗り越えるために努力して下さるベルのお望みのことをしますから…」

上目遣いと『御褒美のおねだり』という最強コンボで僕を誘惑してくるリユー。

言葉では表現できないほど可愛かった。

僕達の愛に立ちはだかる試練の制限なんてなかったら、今すぐにもキスの雨を降らしたくなるくらい。

当然僕はリユーの可愛らしい誘惑に瞬時に悩殺されていた。

「はい!!もちろんです!!リユー!!!」

僕は試練を乗り越えたらリユーにたくさん御褒美をあげようと心に決めた。

密かにリユーが僕の望みを聞いてくれるという言葉に期待も抱きつつ…

## 懐かしき希望を前に

周囲の水晶のもたらす僅かな光を頼りに私とベルは木々の合間を進んでいた。

場所は十八階層。

迷宮アンダーリゾートの楽園とも呼ばれるダンジョン内の安全階層セーフティポイント。

人目を避けるために水晶の発光が減少する所謂ダンジョンの『夜』に当たる時間を意図して狙い、私とベルは十八階層の森に入り込んでいた。

そうして一つの目的地に向けて私の記憶の案内の元、私達はしばらくの間森の小道を進んでいき。

私達は小さく開けた空間に辿り着いた。

彼女達が待つ場所に。

「アストレア・ファミリア」の仲間達仲間が眠る場所に。

この静かな雰囲気を壊さないようにするように私もベルも一言も発さない。

私はその場に徐に跪くと、私の背に背負ってきたバックパックを下ろす。

バックパックを開けてまず取り出したのは、一つの鉢。

青々とした葉を茂らせた植物の植わる鉢の持ち主はベルであった。

その鉢を私はそばで待っていたベルに丁寧に渡す。

そして私が次に取り出したのは花束と瓶。

紫色の花々が咲き誇る花束と中の酒がタプタプと音を立てる瓶を両手に持って私は立ち上がった。

向かう先は十字の彼女達が眠る十の証が並ぶ場所。

私はその一人一人を前に跪いては花束から一本一本引き抜いては手向け、そして酒を飲ませるように捧げる。

一方のベルは私から受け取った鉢をアリーゼの前に供えると共に一礼する。

それからは私と同じように一人一人を前に跪いては手を合わせてくれた。

そんなベルの振る舞いに感謝を覚えつつも私は仲間達への挨拶を粛々と進めていく。

挨拶と共に伝えるのは私の近況。

私はベルという世界で一番だと誇れる伴侶と共に過ごすことができているということ。

私はベルとの間に世界で一番尊い子宝に恵まれることができたということ。

そしてこれから恐らく迷宮都市オラリオを離れることになり、アリーゼ達に会いに来ることができなくなってしまうかもしれないということ。

そうして私とベルはアリーゼの墓の前ですれ違いつつ十回の繰り返しのように決して繰り返してはならない挨拶を続けた。

私は花束の最後の一輪を引き抜き、瓶からは最後の一滴も捧げ終える。

みんなへの挨拶はこれで終えた。

だから一足先に挨拶を終えて、アリーゼのいる中央に正座で座り私を待つてくれているであろうベルの隣に私もまた座った。

「挨拶…できましたか？」

「…ええ。お陰様で。ベルもみんなに挨拶してください、ありがとうございます」

「いえ。リユウの大切な仲間の方々ですから。挨拶を欠かす訳にはいきません」

二人並んで座ることしばらく。

ベルが小さな声で私に話しかけてくる。それに私は礼と共に応じた。

そうして私達の間でお互いに気を使ってか途絶えていた会話が少しずつ戻り始めた。

「そういえば…ベルはどうして鉢を供えることにしたのかお聞きして

「ませんでしたね」

「わざわざすみません。安全に運ぶためとはいえ、リユーに持たせてしまつて…ここまで持つてくるの重かつたですよね？」

「いっ…いえ。決して不満があるとかではないのです。ただあえて私と同じ花束ではなく鉢を選んだということは理由があるのでは…そう思つたので」

私が触れたのは目の前のアリーゼの元に供えられている鉢のこと。今回はこれまでとは違い、十八階層で摘んだ花ではなく地上で購入した花をアリーゼ達に供えたいという希望をベルに伝えてあつた。

：決して買い物という名のデートの機会を増やしたかつたとかではない。

私はただ近くで摘んだ花ではなく意味のこもつた相應しい花をアリーゼ達に供えたいと思つたのだ。

：もしかしたら今回が一生で最後のアリーゼ達への挨拶になる可能性もあるのだから。

そのため私はこんな小さな心遣いも怠るまいと花束を購入してきましたのだ。

そんな思いを汲んでか率先して買い物に付き合つてくれたベルのこと。

鉢に植わる植物を選んだのも何かしらの意味があるに違いない。

：決して買い物という名のデートを楽しんでいただけではないはず。

そんな期待と関心を抱きつつ私は尋ねていた。

するとベルは自らの選んだ鉢に視線を送りつつ私の問いに答えてくれた。

「この植物は花束では買えなくて、鉢しかなかったというのが本当の事情です。そして不便でもこの植物をあえて選んだのはこの植物に込められた花言葉がリユーの仲間の方々に捧げるのに一番相應しいと思わず一目惚れしてしまつたからです」

「一目惚れ…ですか？」

ベルが苦笑いしつつ『一目惚れ』という表現を用いたことに目を丸

くする私。

同時に花言葉を理由に選んだという点は私の感性との共通点を見出し、やはり私とベルの心は繋がっているのだと嬉しくもなる。

するとベルの告げたその一目惚れした花言葉は私にベルへのさらなる共感を呼び起こすことになった。

「この植物の名前はオモト…と言います。花言葉は『崇高な精神』と『相続』です」

「『崇高な精神』と『相続』…ですか？」

「そうです。『崇高な精神』はリユーと共に迷宮都市オラリオを守るために戦っていたリユーの仲間の方々に一番相応しいと思えました。今の迷宮都市オラリオの平和があるのは間違いなくリユー含めた「アストレア・ファミリア」の方々の尽力のお陰。皆さんの尽力への敬意を示すのは『崇高な精神』という花言葉はまさに的確でした」

「…っー」

ベルの『崇高な精神』という花言葉に込められた思いを聞かされた私は思わず涙ぐみそうになった。

ベルが私の大切な仲間達のことをそのように思ってくれている。

それは私にとっても嬉しいことであった。

そしてそんな私が嬉しくなってしまうような言葉を聞かされてしまふと、ついついもう一つの『相続』という花言葉に込められた意味にも期待してしまう。

するとベルはそんな私の期待にきちんと応えてくれた。

「そして『相続』はこれまでリユーの心の支えになってくれたことへの感謝と共にこれからは僕がリユーの心を支えていくということ皆さんにお伝えするために一番相応しいと思いました。これからは皆さんの役割を引き継いで今度は僕がリユーと共に戦いリユーと共に希望正義を掴み取るために力を尽くす…そんな覚悟を皆さんに伝えたいんです」

「ベルッ…っー」

ベルの『相続』という花言葉に込められた思いに私はさらに感極まる。

ベルがアリーゼ達に自らの覚悟を伝えてくれる。

さらに言えばベルの覚悟はアリーゼ達だけでなく私にも伝わってくる。

改めてアリーゼ達と私に正義希望を守り続けることへの覚悟を見せてくれるベルには頼もしさと信頼を覚えずにはいられなかった。

そしてベルの覚悟に応えるために私も何かしなければという衝動も生まれ始める。

その衝動にどう応えれば良いか考え込む私に今度はベルが逆に尋ねてきた。

「僕がこのオモトを選んだ理由はお話ししたので是非お聞きしたいんですけど…リユーはこの紫色の花をどうして選んだのですか？以前ここに来た時は十八階層で摘んだ白い花をお供えしてた記憶があるので…」

「確かにそうでしたが…よっ…よく覚えていますよね？そのような細かいことを」

「それはもちろんリユーとの大切な思い出ですから」

「ベツ…ベル…！それはもちろん私にとっても大切な思い出であることは言うまでもありませんが…！」

ベルは今度は私のアリーゼ達にお供えした花に関して触れてくれた。

同時に触れられた以前のアリーゼ達の元を訪れた記憶をさらりと『大切な思い出』と語り、詳細なことまで覚えてくれているベル。

そんなベルに嬉しさと若干の恥ずかしさを覚えさせられつつ、私はベルの問いに答えた。

「この花は…ダングクという名の花です。私もベルと同じく花言葉が相応しいと思ったのでこの花を選びました」

「リユーも僕も花言葉を理由にお供えする花を選ぶだなんて…やつぱりリユーと僕は心が通じ合ってるんですね！」

「もっ…もちろんです！私達は一心同体なんですからこれくらい当たり前に違いありません！」

私が花言葉を理由に選んだと話すと、ベルは早々に私と全く同じ結

論に辿り着く。

お陰で同じ花言葉を理由に選んだということだけではなくこれを根拠に心が通じ合っていると考えたという意味でも見事に私とベルは考えを一致させていたことが明らかになる。

これによって私は改めて私とベルの間の愛の深さを実感しつつ中断されたベルの問いへの回答を再開した。

「それで…私はダンギクの花言葉は『忘れ得ぬ思い』…です」

「…『忘れ得ぬ思い』…ですか？」

「ええ。今の私にとっての正義はベルとの愛。そしてこのお腹に宿る我が子です。これからの私はベルと我が子との間に愛を育むことに全意識を集中させるつもりです。今の私にとって二人以上に大切な存在はいませんから」

「…でも？」

「…アリーゼ達のことを忘れたくないという思いはあります。アリーゼ達を忘れてはならないという思いはあります。彼女達はかつての私にとっての正義希望を教えてくれた存在で…そして正義希望そのものではないから。だからこの花言葉を以てアリーゼ達と自らに『忘れ得ぬ思い』を伝えたいと思い、ダンギクを選びました」

「…」

私の説明にそれ以上ベルは何かを言うことはなかった。

ベルはただただアリーゼ達に視線を向ける。  
ベルが何を考えているのかまでは私には読み取ることができなかった。

だから私もベルと共にアリーゼ達に視線を向けながら思考の沼に沈む。

実はベルにはきちんと伝えなかつたことがある。

ダンギクのもう一つの花言葉。

それは『悩み』。

…私は心の何処かで未だ迷っていた。

本当にアリーゼ達と共に尽力してきた『人助け』という正義希望を捨て

ていいのか。

…迷うべきではない。

『人助け』という正義がベルとの愛と我が子という今の私にとって一番尊い正義に危険を及ぼすならそんな正義は捨てる<sup>希望</sup>と決めた。

今の私にとっての正義はアリーゼ達と共有し得る物ではない<sup>希望</sup>。

過去にとつての私の正義はベルと我が子と共に共有し得る物ではない。

分かつてはいる。

だが…

口では、ベルの前では、完全に捨てる<sup>希望</sup>と言いつつも。

完全にだけはアリーゼ達への顔向けという意味で難しかった。

そんな思いも込めて選んだダンギク。

ベルへの後ろめたさがないかと言われれば嘘になる。

その後ろめたさが尚のこと私を急き立てる。

ベルの覚悟に応えるべきだ、と。

ベルの覚悟に並びうる私達の正義への覚悟を示すべきだ、と<sup>希望</sup>。

アリーゼ達のことアリーゼ達と共に背負ってきた正義も完全に

は忘れない。

その思いはダンギクの花言葉を通じて示した。

一方でベルへの思いはこの場において何一つ示せていない。

ベルがオモトの花言葉を通じて示してくれたのに、である。

なら私も何らかの形でベルに示さなければ。

そう思うも残念なことに私はタンギクとは別でベルに贈るための花を準備するような周到さはなく。

ならば…

私は行動を以てベルへの思いを示すしか選択肢はなかった。

そう判断した私は沈黙を破った。

「ベツ…ベル？一つよろしいですか？」



「…どうしました?」

「ふと…思っただんです。私の手をこれまで取ることができたのはベル以外だとアリーゼとシルだけ…きつと異性であるベルと触れ合うことができるとはとてもではありませんが、アリーゼ達は信じられないような気がするのです」

「つまり…?」

「…キスを…しませんか?ここで。私達の愛をアリーゼ達に証明するために」

意を決してそう告げた私。

ベルの覚悟に応え自らのベルへの思いを伝える方法に一番相応しいのはこれしかないと思ったのだ。

だが私に視線を移したベルが意外にも難色を示した。

ただそれには理由があつて…

「いいんですか?それって…愛の誓いのキスを仲間の方々の前でするってことですよね?」

「はっ…!?!」

「つまり…皆さんの前でキスを見せる…誰もいない夜の森でっていう条件の『誰もいない』を満たせてない気が…リユウがいいならいいんですよ?ただ実際のところはどうなんだろうと、念のため確認を…」  
頬に一気に熱が集まる。

ベルの言う通りだ。

ここで私達の愛を証明するためにキスをするとなれば、愛の誓いのキスも同然。

なら…できれば私の求める条件を満たしてくれれば嬉しい。

そもそも十八階層に来た理由の一つにはここならその条件を満たせる可能性が高いという推測があつただから。

十八階層でベルとキスをするのは最初からデートの予定として

ある程度織り込み済みであったはず。

ただ十八階層のピンポイントここでは流石にまずかった。

…ここではアリーゼ達の前。『誰もいない』という条件を満たせていない。

それも赤の他人ではなくアリーゼ達の前というのは私的には尚のことまずかった。

…いくら私とベルの愛を証明するためとはいえ、恥ずかし過ぎて強行した後には後悔しかねない。

そう結論を出した私は慌てて発言を撤回しようと思うも…

私の発言権は既に奪われていた。

それも口を塞がれるという形で。

私の視界に映るベルの赤い瞳。

ベルがもう既に私の唇を奪っていたのだ。

「んんんん〜?!?!」

考えに耽っている間に起きた突然の出来事に私は声にならない声を張り上げる。

だがベルを突き飛ばしてでも離れさせるなどという真似はできるはずもなく。

それどころかベルの唇から伝えられる温もりに脳が蕩けるような感覚を覚え始める。

早々に私は思考力を喪失し、ベルをあっさり受け入れた。

そうしてベルの与えてくれる温もりを堪能しようとするも…

最初の触れ合いをベルはすぐに切り上げてしまう。

「あっ…ダメでしたか? リューからの誘いなので別に問題ないかと。…あと僕もリューと同じように仲間の方々に僕達の愛の強さを見せつけたいなあと思ったのですが」

ベルは頬を赤くしたまま視線を泳がせてそう言う。

先程までの思考力があれば私は断っていただろう。

だがこの時の私は思考力を喪失していた。

…仕方ない。

今日はダンジョン探索の影響もあって私はベルとほとんど触れ合うことができていなかった。

それなのに突然訪れた濃密なベルとの接触。

その強烈な刺激に私は耐えられなかったのだ。

悪いのはダンジョン。

私が恥を忘れ仲間達にベルとのキスを見せびらかす淫乱エルフだとかそういうことは決してあり得ない。

頭の中でアリーゼが笑い転げ、輝夜が愕然とし、ライラが呆れ返っているような気がするが…きつと気のせいだ。

そう誰に伝えているのか分からない言い訳を思い浮かべるも、私はそんなことを考える余裕もすぐに消えた。

私の頭の中はもうベルの温もりがもつと欲しいという欲望に埋め尽くされていたから。

「ダメじゃ……ないですっ！もつと…もつとベルとキスしたいですっ！」

そうとだけ伝えようと、私は一瞬の間も惜しいとばかりにベルの首に腕を回しベルの唇に縋りつくように距離を縮める。

それにベルもまた私の背を抱いてくれ、私とベルの唇は重なり合った。

この温もりが欲しかった。

ベルにダンジョン探索が終わった暁には御褒美が欲しいと伝えてあったけれど、その欲しかった御褒美こそベルが唇と唇を通じて伝えてくれる温もり。

結果的に流れではあるけれども私は一番欲しかった御褒美をベルに与えてもらうことができた。

呼吸も忘れて何度も重なり合う私とベルの唇。

一瞬離れることがあっても銀色の糸が私とベルを繋ぎ続ける。

そしてその糸が切れる前に私とベルの距離は消し去られ、再び互いの唇を貪るように何度も何度も重ね合う。

「ベルッ……愛してますー！愛してますっ！」

「僕もっ……リユーー！大好きです!!」

言葉でも愛を確かめ合い。

唇を通じて交換し合うキスでも愛を確かめ合い。

ベルとの愛以外全てを忘れて、私はベルと共にキスを通じて愛に溺れた。

私達は自らの愛をとことんアリーゼ達に証明することになった。

……のだが、それはあくまで結果論。

私は後々結局自らが衝動的に為したことに羞恥心のあまり悶え苦しむことになる。

## 二人だけの夜の森で

「…」

「…」

夜の森の中。

リユーと僕は肅々と野営の準備を進めていた。

…ただし奇妙な沈黙をリユーと僕の間にも漂わせつつ。

「…」

「…」

二人の共同作業で準備していたテントが立て終わる。

そうなるにあとは二人でテントに入って寝るだけ。

リユーの仲間の方々のお墓を訪ねる以上のプランが十八階層の森の散策以外特にはない僕達に残された目的はそれしかなかった。

ただ二人揃って視線を交わすこともできず、テントが立て終わったのにそわそわとテントの入り口近くで立ち尽くすという意味不明な状況に陥る。

…そう。リユーの仲間の方々のお墓でのが問題なのだ。

…最初のうちは何にも問題はなかった。普通のお墓詣りで二人で皆さんに挨拶をして回っただけ。

ただその後のリユーによる僕達の愛を皆さんに証明するためにキスしようという発想が少々まずかった。

その時の僕は気付くことはなかったが、そのキスは今日初めてのリユーとのスキンシップ。

僕がダンジョン探索中から欲求不満で妙な考えに走ってしまうほど待ち望んでいたスキンシップ。

それをリユーが自ら要望してくれた。

そうなるも本当に最初の一瞬は自制心もあったが…

自制心のもたらした僕の遠慮の一言がリユーのおねだりを引き出してしまった。

リユーのおねだりの貴重さと可愛さはもう言葉では表現できないほど。

ということ僕の自制心は瞬時に爆砕し、僕はリユーとの待ち望んだキスを思う存分堪能する方向へと驀進した。

：それからの時間の経過の記憶が僕には全くない。

気付いたら僕とリユーの間の地面には大きな丸い濡れた跡ができていて。

これだけで何と言うか如何にリユーと僕がキスにのめり込んでいたか分かるような分らないような…

さらに言うとうと気付いた理由、つまり僕が我に返ったのもリユーが唐突にキスをやめたからという受動的な理由で。

僕がリユーのくれる温もりを渴望していたか分かるような…気がする。

その時僕はあまりに唐突過ぎて思わずリユーの温もり欲しさに吸い付くようにリユーとの距離を縮め直そうとした。

だがリユーの手のひらに見事に止められてしまう。：見事に僕の鼻をリユーの手のひらに押し潰されながら。

そうして何事かと思えばどうやらリユーはモンスターの殺気を感じていたようで、瞬時に腰に差していたリユーの愛用する小太刀双葉を投擲していた。

そんなリユーの瞬時の対応のお陰で万事解決。

それから滞りなくリユーと僕の温もりの交換を再開できる…という風にはいかなかった。

なぜならリユーもまたモンスターのせいでも我に返ってしまったから。

リユーの投擲した双葉がモンスターを灰に変えてから、二人して視線を送るのは僕達の激しい激しいキスを見守っていたであろうリユーの仲間の方々のお墓。

別にお墓がいきなり話し出すとかそういうことはない。

お墓に見られたという表現もどこかおかしい。

だが愛を証明するため…：というにはあまりに激し過ぎるキスを見せてしまった気がする…：というのはリユーと僕の間で瞬時に共有されていたらしい考えで。

顔を見合わせた時には羞恥心に完全に飲み込まれていた僕達の動きは早かった。

即座に二人して荷物をまとめたリユーと僕は逃げるようにその場を立ち去った。

だが羞恥心から逃れられるということはそれこそ記憶を消しでもしない限り無理な話で。

僕達は羞恥心に憑りつかれ、二人してやらかした行為に悶えつつ無言を貫き通すことしかできなくなった。

何かお互いにきちんとした会話を始めてしまうと、どうしてもそこで行った激しい激しいキスの話に至ってしまいそうだったから。

結果僕達は野営地探しの間も野営地の準備の間も沈黙と一定の距離を保ちながら行動する羽目になった。

そうして時を過ごしてきたのだが、もう限界。テントはここまで二人で運べる量の影響で一つだけ。

つまりはリユーと僕は同じテントの中で寝なければならぬといううこと。

そして加えて言うところのテント凄く小さい。

二人で入るのもギリギリなくらい。

：もう距離が取ることができないということ。

そのため二人してテントの入り口近くでそわそわするということ意味不明な状況に陥っていたのだ。

だがこのまま一晩中立ち尽くしている訳にもいかず。

僕は意を決してリユーに話しかけようと試みた。

「あつ：あの！」

見事に被るリユーと僕の声。

：どうやら心が通じ合っていると、空気を変えようとするタイミングまで被ってしまうらしい。

だがこういう時に被ってしまうと思わず黙り込んでしまうもので。そこまで心が通じ合っているせいで二人して再び黙り込み、結局沈

黙に逆戻りする。

とは言えそのまま黙り込み続ける訳にもいかず、今度は被らないようにと願いつつも一度僕から話を切り出そうと試みた。

「…テントに…入りませんか？そろそろ寝て休まないといけませんし…」

「…そう…ですね…」

最初の切り出しは成功した。

僕のたどたどしい提案をリユースは言葉を途切れ途切れにはしつつも即座に受け入れてくれる。やはりリユースも同じ提案をさつきは言葉にしようとしていたのかもしれない。

そうしてようやくテントの中に入ったリユースと僕。

テントの中には事前に二枚の毛布が準備してあって、寝る時に心地悪くないように敷物も敷いてある。

だから寝る準備は整っている。ということまでテントのドアの布を下ろして、完全に真っ暗闇になるテントの中。

僕もリユースも無言のまま自分用の毛布を被り、目を閉じて眠ろうとするも…

…眠れる訳がなかった。

隣にリユースがいる。

それもついさつきあれほど激しいキスを交わしたりリユースが…

そう考えると、妙な興奮を覚えてしまつて眠ろうにも眠れない。

それに僕にはダンジョンの『朝』を迎える前に…というか地上へ戻る前の十八階層にいる間にリユースに渡したいものがあるのに…

眠れないのだから渡す好機だというのに僕はこれまた例の妙の興奮のせいで上手くリユースに声をかけることもできないでいる。

…言うなればテントの中に誘うのが僕にとつての限界だった。

結果僕は迷いを抱きながら時間を無為に過ごすという事態に陥っている、リユースがぼそりと呟いた。

「…起きていますか？」

「…えっ…はい。おっ…起きてます」

僕に代わって勇気を振り絞ってくれたのはリユースであった。



「…眠れそうですか？」

「いえ…その…はい…まだ眠れなさそうです」

「…分かります。私もすぐには眠れそうにありません。その…理由は…言わなくてもいいですよね？」

「はい…大丈夫です」

僕はリユートの問いに躊躇しつつも素直に眠れずにいることを同意する。…ただどうやらリユートも眠れそうにないようだ。

…僕達の間で眠れない理由はもはや暗黙の了解なのでお互いにそれ以上追及することは控えた。

するとリユートは付け加えるように言った。

「もし眠れないならば…しばらくテントの中から空でも見上げませんか？ご存じですが、十八階層の夜空はとても綺麗ですから」

「そう…ですね。そうしましょうか」

リユートが提案してくれたのは夜空を眺めること。

どちらにせよ眠れない上にまだやり残したことがある僕が断る理由もない。

僕はリユートの提案を受け入れ、自らの身体を起こした。

そしてテントのドアの布を捲り上げた僕はその近くで腰を下ろそうとするも…

「…これだとすぐく見にくいですね…」

「…それは…気付きませんでした」

…テントが小さ過ぎて僕が正座しただけでも視線がテントに遮られるという想定外。

それには同じように身体を起こして夜空を見上げる準備を整えようとしていたリユートにとっても同じだったよう。

「なら…寝そべりながら…というのは如何ですか？」

「ねっ…寝そべりながら…ですか？…いいですね！そうしましょうー！」

僕は思わず唾を呑む。

二人で寝そべりながら夜空を見上げる。

シチュエーションがそう表現して想起するだけでも何だか僕には

非常に魅惑的に聞こえた。

これは尚のこと僕のやり残したことを果たすための雰囲気として最高なのでは？

そう思い至って早々に心が昂り始めた僕は上ずった声で即座に受け入れる。

そんな僕の反応にリユーは驚きで一瞬目を丸くしたものの、すぐにふわりと微笑んでくれる。

そうしてリユーも僕も姿勢を変えるべくごそごそと動く。

こつそりと自らのバツクパツクをそばに引き寄せつつ、僕はリユーの提案通り寝そべり肘をついた状態で夜空を見上げた。

視界に映るのは星のような僅かな輝きの光を示す水晶に彩られた夜空。

…ずっとリユーの事ばかり考えて見ていたからほとんど気にしてなかったけど、とても神秘的で綺麗な景色であった。

ただやっぱり僕的には気になるのは夜空よりもリユーであって。

僕は密かに窺うように横目でリユーに視線を送る。

リユーは僕が視線を送った同時に見計らったように呟いた。

「綺麗…ですよね？ベル？」

「えっ…はい。とっても綺麗です」

「…この夜空を見ると改めてアリーゼ達が命を落とした後に眠る場所を選んだ理由が分かる気がします。これだけ美しい景色を見られる場所で一生眠ることが出来るなら幸せ…そう考えることもできるのでしょうか。今の私にはアリーゼ達の思いが…分かる」

「リユー…」

リユーはどこか遠くを見るような表情で夜空を見上げる。

…また仲間の方々のことを思い出しているのだろうか？

…また過去の正義の<sup>希望</sup>のことを考えているのだろうか？

リユーの心情を慮ると、僕としてはあまりいい気分ではない。

今はリユーと僕のデートの最中。

…なら僕のことを見ていて欲しい。  
僕だけを見ていて欲しい。

あの仲間の方々のお墓の前でした僕達の愛の証明になる熱い熱いキスを交わした時のように。

なんて身勝手な考えを僕が脳裏によぎらせていると、リユーはまるで僕の考えを読んだかのように話題を転換し始めた。

「ですが…私にとってこの夜空を通じて見出せる幸せはアリーゼ達とは違います。私はこの夜空に死後の安寧ではなく未来の幸福を見出したい」

「…え？」

「確かに月はありません。ですが…私とベルしかいないという条件と誰もいない夜の森という条件は整っています。だから私は…ここで改めて私達の永遠の愛を誓い合いたいと思いました」

「リユツ…リユー？」

「ベル…私はあなたのことを心の底から愛しています。だから…」

「ちよおおつと待ってください!!大変申し訳ないのですが、一回ストップで!」

「…え？」

リユーが顔色を青ざめさせる。

…リユーの余計な不安を与えることになるのは分かりきっていた。このタイミングで遮ってはまるでリユーの求める僕達の永遠の愛を誓い合うのを断ると取られても仕方ない状況。

それでも僕はリユーの言葉を一旦中断してもらうしかなかった。

なぜならリユーの『だから…』の後に続く言葉は分かりきっていたから。

多分…『結婚しましょう』だった。

…リユーはリユーの望む条件が整ったこの場所で所謂プロポーズを実行しようとしていた。

だがその思惑は僕のやり残したことと見事に被っていて。

せつかくの準備を無駄にしては…と思ってしまった僕は思わずリユーを引き止めてしまったのだ。

かと言つて長い間リユーを待たせれば余計な不安をリユーの中で増長させるだけ。

そう思えば思うほど逸る僕は慌ててそばに寄せておいた自らのバックパックを開けて、目当てのものを取り出した。

「もったいぶるようにここまでリユーに見つからないように  
プロポーズ用のブレゼント  
こっそり持ち込んだあるものを。」

「…すみません。リユーのお言葉をお聞きする前に是非受け取って頂きたいものがありました」

「…この花を…ですか？」

「リユーとお供えの花を買いに行った際にこっそり買っておいただけです」

僕がリユーの前に差し出したのは純白の一輪の花であった。

その花を前にリユーの顔色は少し良くなりつつも、リユーは唐突に僕が花を差し出したことへの理解は及ばないようで不思議そうに花を凝視する。

そんなリユーに僕はなぜこのタイミングでこの花を差し出したのか説明する。

「そういえば…ダンジョン探索が終わったらお互いに御褒美を渡さな  
いか…という話がありましたよね？」

「あつ…確かにそうです。ただアリーゼ達の前で御褒美はたくさん頂  
けたというかもうお腹一杯というか何と言うか…あ」

「リユーツ…リユー！その話はっ…」

まずこの花はリユーに御褒美のために事前に準備しておいたと説明するはずが…

…リユーがあ那时的キスの嵐を御褒美と捉えていると語りながら、  
見事にリユーと僕両方の地雷を踏み抜き。

僕達の会話は自らの脳裏で描かれる恥ずかしい恥ずかしい回想によつて途絶した。

お陰で会話を再開するにはしばらくの無言の時間が必要になって

しまった。

「えつと…あーそれで…ですね？この花をリユーに御褒美として差し上げたいんです。そして僕にとつての御褒美はこの花を受け取って頂くこと。それだけでいいんです」

「…え？しかしそれでは私からの御褒美としてはベルの御褒美とあまりに不釣り合いのような…」

「いえ、不釣り合いなんかじゃないんです」

リユーの指摘を僕はゆつくりと首を振って否定した。

不釣り合いではないのだ。

なぜならこの花にもまた花言葉があつて…

「この花の名前はフロックスと言います。また花言葉の影響を受けて…なんですが、花言葉は二つ。一つ目は『私達は魂で結ばれている』。僕達二人で共有する花として相応しいと思いませんか？」

『私達は魂で結ばれている』…まさに私とベルの以心伝心な関係を象徴するような花言葉…流石ベル。そんな素晴らしい花言葉のある花を見つけてくださるとは…それでももう一つの意味とは？」

僕の教えた一つ目の意味に嬉しそうに微笑んでくれるリユー。

もうこの時にはリユーの表情もすっかり不安の消えた温かみのある表情に戻ってくれていた。

それに安堵しつつ僕はリユーの興味の示してくれたもう一つの花言葉を口にした。

「二つ目の花言葉は…『あなたの望みを受けます』…です」

「あつ…」

リユーは瞬時に察してくれる。

僕がこの花を選んだ理由も。

リユーの言葉を途中で差し止めた理由も。

僕は実は花屋さんで勤めたことがあるというリリからあることを聞いていた。

それは結婚前の男性が定期的にフロックスを買い求めに来るとのこと。

理由はフロックスの花言葉にあつて、フロックスを贈ることには大

きな意味があると分かった。

フロックスを贈ることは結婚の承諾を求めることと同義。  
フロックスを受け取ることは結婚を承諾したことと同義。

このフロックスはプロポーズをするのにまさに相応しい花だったのだ。

確かに赤いバラを辺り一面埋め尽くすくらい目一杯用意するとうことも考えたけど、ダンジョンにこっそり持ち込むのは不可能で別の機会にと断念。

何より純白というのがリユーに似合う気がしてこの花を即決してしまっただ。

そして僕はこのデートをリユーと決めた時点から結婚式は話を別としても少なくとも十八階層でプロポーズをしようと心に決めていた。

だから僕は事前に準備を進め、デートの実行にもこだわった訳で：ただそのこだわりがリユーからのプロポーズを衝動的に遮ってしまふというアクシデントを招いたのはまずかったと心の中で反省する。

よって僕はその反省を生かすためにも一つの提案をリユーにすることにした。

「このフロックスは僕からしますが：そのプロポーズは一緒にしませんか？二人揃ってプロポーズする方が心が通じ合っている感じがあつていいような気がすると言いますか何と言いますか：」

「ふふっ…お気遣いありがとうございます。ではベルの言う通り二人で同時にプロポーズ：としましょうか？」

「…っ…はい！」

リユーはリユーのプロポーズを遮った償いとも言える気遣いに勘付きつつも微笑みと共に僕の提案を受け入れてくれる。

そうしてリユーと僕はフロックスの花を間に挟み、お互いの瞳を見つめ合う。

同時にプロポーズのタイミングを合わせるためお互いの口の微動さえも見逃さぬよう視線を送る。

リユートの口が小さく開いた。

リユートに合わせて僕も口を開き、そしてフロックスの花をリユートの前に捧げる。

そしてプロポーズの言葉は紡がれた。

「結婚しましょう。リユート（ベル）」

交わされるプロポーズの言葉。

お互いに浮かべる一点の曇りもない笑顔。

その言葉と笑顔の生み出す甘く幸せで満ち溢れた雰囲気にも心も身体も蕩けるような感覚を覚えながらもリユートと僕は見つめ合う。

リユートはすぐさまフロックスの花を受け取ってくれた。

そしてこの永遠の愛の誓いの象徴とも言える行為を求めてくれた。

「では…誓いのキスを…」

「そう…ですね…誓いのキス…しましょう」

それ以上の言葉はもういらなかった。

確認だけを済ませたリユートと僕は見つめ合ったままゆっくりと距離を縮めていく。

寝そべっているという体勢の影響もあって距離を縮めにくい。

それでもゆっくりとゆっくりと距離を縮めたリユートと僕の唇が

そつと触れ合う。

お互いに伝わり合う暖かな温もり。

激しさは全くない。

静かにお互いの唇の感触を確認しあうだけのようなキス。

けれどそんなキスがもたらす幸福感もあの激しい激しいキスには全く遜色なかった。

それだけでなくずっと僕の中で消えなかった興奮がスツと消えていくような感覚まで覚えた。

今回の静かで優しいキスは何だか安らぎのようなものを僕に与え

てくれたのだ。

それを感じたのは僕だけでなくリユースもだったようで。

リユースと僕は誓いのキスを終えた後は少し前までとは違った心地よい静けさの元でもうしばらく夜空を眺めた。

そしてお互いに目配せだけで就寝を伝えあった僕達は眠りに就くことにした。

その時はもう眠れないなんてことはなくぐっすりと熟睡することができていた僕であった。



## 繋げたい二つの希望

プロポーズの言葉と誓いのキスを交わして、ようやく眠りに就いたはずの私。

けれど唐突に瞼を照らす光のお陰で無理矢理目を覚まされてしまった。

テントの中のはずである以上このような眩しい光が差し込むはずがないのに…

「だってこれ夢だもの。何でもありな訳よ！リオン！」

「…アリー…ゼ？」

唐突に響いた明るい声に導かれて目を開けてみれば、そこには…

満面の笑みを浮かべるアリーゼがいた。

そうか…夢なのか。

そうあつさりとアリーゼの言葉を受け入れた私は今の状況を飲み込む。

ただ一つだけこの状況に疑問を抱いたので、その点だけはアリーゼに尋ねることにした。

「今回の夢は…アリーゼだけなのですか？」

「ん？あつそうよ？一つは所謂夢によくあるご都合主義ね！あつ…でもこれ神様達の言う『めたい』話だから言わない方がいいのかしら？」

「…アリーゼは何を言っているのですか？」

ただその疑問にアリーゼは得意顔でよく分からないことを宣い、私はアリーゼの説明が正直全く理解できない。

それが思わず表情に出たのかアリーゼは真剣な表情に切り替えた上で話を続けた。

「…という裏事情もあるんだけど、本題はこっちなね。リオンが色々私達の前で報告してくれたこと。リオンのこれから。それをリオンに話すためにみんなを代表して私が夢に出てきた…といった所かしら？あとは私だからこそ…という意味もあるわね」

「…？アリーゼ…私に分かるように話してください…つまりは私がアリーゼ達に報告したことへの返答…的な形ということですか？」

「そうそう！流石リオン！話が早くて助かるわ！」

「そういうことなら最初から単純明快に話してください…」

…とは言えアリーゼは真面目にそうに語りつつも話がイマイチきちんと進まなかったのだが。

ともかくようやく私とアリーゼの会話は本題へと入り始めた。

「それにしても最後に夢で会ってからリオンったら六週間しか経っていないのに色々暴走してるお陰でどれから触れればいいか分からないのよね〜」

「ぼっ…暴走!?それほどのことを私は為した記憶は…」

「…私達の前であれだけ激しいキスをしておいてよくそんなこと言えるわね。輝夜は言葉を失って愕然としてたし、ライラとかもう笑い転げてたわよ？まあそれ以上に耐性がないから見るに堪えなかったというか何と言うか…」

「…」

アリーゼの指摘に私は見事に反論できなくなった。

…確かに暴走した自覚がないかと言われれば…嘘になる。

そうして黙り込んだ私を前にアリーゼは言った。

「まあ白兔君関連のことは今は置いておくわ。それよりあなたの悩み。とつとと解消しないとね」

「私の…悩み？」

「何もとぼける必要ないでしょう？あなたの考えは私達に筒抜け。ダンギクを選んで私達に贈ってくれた理由もみんな知ってるんだから」  
「…そうでした。アリーゼ…あなたはどうか考えで私は…どうすべきなのでしょうか？」

私はアリーゼに即座に尋ねていた。

ダンギクの花言葉は『忘れ得ぬ思い』と『悩み』。

…私は未だに『人助け』というアリーゼ達と共に背負ってきた正義<sup>希望</sup>を完全に捨てていいのか迷っていた。

できることならその正義<sup>希望</sup>の担い手であったアリーゼ達の言葉が欲

しいと心の何処かで思っていたのも事実。

アリーゼの言葉が何かの鍵になると私は思い、つつい尋ねていたのだ。

だが：アリーゼが腕を組みつつ告げた言葉は私の求めるようなものではなかった。

「それこそ私達に頼りつつ出して良い答えではないわ」

「それ…は…」

「あんたには答えが分かっているはず。いいえ。分からないといけなはず。リオン？今のあんたはどういう存在？教えて？」

「ベルの婚約者で：お腹にいる我が子の母親です：しかし私はつ：あなた達の正義をつ：！」

分かっている。私の立場は。

私の立場を考えれば、アリーゼ達と共に背負った正義は忘れないといけない。

それは分かっている。分かっているはずなのに…

捨てられない。

捨ててしまうと、アリーゼ達を忘れることになりそうで…

私は大切なかけがえのない友であったアリーゼ達を忘れたくなくて…

だから：私は…

「それが今のリオンにとっての唯一無二の回答。あんたは白兎君の婚約者で母親でもある。白兎君とお腹にいる赤ちゃんへの『愛』という正義を守るといふ重大な責務がある。それ以外は気にする必要がないと言っても過言ではないわ」

けれどもアリーゼは鋭い視線と共に私に決然とそんな迷いは捨てるように宣告した。

予想の範疇の言葉ではある。

アリーゼが私でも気付けるようなことを気付けないなど考えにくいから。

アリーゼに言われるまでもなくベルとお腹の中にいる我が子への『愛』という正義希望を守ることのみが唯一無二の回答であることは分かっているのだ。

だが：そう簡単に受け入れて過去の正義希望を捨てられるようだったら、今の今まで悩んでいるはずもない。

それにアリーゼは正義とは何かを：

「そうよ。リオン。確かに唯一無二の正義は存在しないと私達は知っている。唯一無二の正義が存在しない以上私達は迷い続け、そして進み続けながら答えを探さないといけない。そういう意味では二つ正義希望の間で迷うリオンは間違っていない。だけどね？リオン自身知る通り私達と共に背負ってきた『人助け』という正義希望と今のリオンの白兎君とお腹にいる赤ちゃんへの『愛』という正義希望は両立できない」「それは分かっていますっ！しかしっ：私はっ！」

「だから『今は』忘れなさい。リオン。永遠に両立できないわけでもないし、どちらにせよ迷わざるを得なくなる日は必ずやってくる。だからこそ今は悩む必要も迷う必要もない。捨てるとは言わないけど、『今は』忘れるべきよ。ただ二人との『愛』を育み、二人へ『愛』を注ぐことのみを全意識を集中させないと。今がその『愛』にとつて一番大切な時期なのだから。その邪魔になるなら『人助け』という正義希望を嫌でも想起させる私達のことさえも一度完全に忘れるべきよ」

「アッ：アリーゼ!?!いつ：嫌です！それだけは嫌です!!私は何があるうともあなた達のことを忘れたりはいらない!!」

アリーゼは果てにベルと我が子への『愛』の邪魔になるなら自分達の存在さえも忘れるべきだと説く。

アリーゼ達を忘れることなど到底できず、それをアリーゼの口から言われるのはとても残酷で辛いことで。

私は首を何度も横に振りながら悲鳴に程近い声で反論を叫ぶ。

そんな私の反論にアリーゼは意も介さず説得を続けてくると思いききや：

アリーゼはこめかみに指を当てつつわざとらしい溜息を吐いて、説得とは違う話を始めた。

「はあ…どーしてそんなにリオンは私達のこと大好きなのかしらねえ…私的には凄く嬉しいというか『白兎君どーだ！私とリオンの絆は突然現れた男などの介入だけでは切れないんだぞ！』…って感じだけど…余計な気を散らすことに繋がるなら話は別。割と本気でリオン大好き白兎君にリオンを解放しろとそろそろ恨まれかねないし…」  
「アリーゼは何を言って…」

「結局またお節介が必要…かしらね。輝夜とライラじゃないけど、ほんと手がかかるわよね…私達のリオンは…」

「おっ…お節介？」

「ということでリオン？私から一つ提案があるの？聞く気はあるかしら？リオンにとっても悪い話じゃないと思うわ」

「てっ…提案？」

話を完全に逸らしたかに見えるアリーゼは何か提案を持ち出してくる。

私は思わず身構えるもアリーゼ自身が私にとって悪い話ではないと言っているのだ。

なら…ということでは頷いてアリーゼの提案を聞くことにした。

「で…まず提案の導入の話として言わないとね。改めてだけど、妊娠おめでと。あんたと白兎君が子宝に恵まれたこととても嬉しく思うわ」

「あっ…ありがとうございます」

提案を話す前に、とアリーゼが持ち出した話は私の妊娠に関して。

今更ながらさらりとアリーゼは私のお腹に子供がいることには触れていたものの、妊娠自体に関することは何も言っていなかったと気付かされる。

そうしてアリーゼの祝福の言葉に恥ずかしさを覚えつつも微笑みと共にお礼を返す私。

そんな私を見てかアリーゼはクスクスと笑いつつ言った。

「それにしても本当によく笑うようになったわね。最近のリオンは。これも白兎君とお腹にいる赤ちゃんパワーなのかしら？」

「えっそれは…そうだと思います。ベルと過ごす毎日はとても幸せで

…そして遠くないうちに我が子に会えると思うと待ち遠しくて仕方ありませんから。そのお陰で思わず零れてしまうのだと…思いません」

「そう…そんなに今のリオンは幸せなんだ。うん。良かった！良かった！今のリオンの幸せは仮に私がそばにいてもあげられた幸せじゃないし、私達結構こういう色恋沙汰と無縁だったからなくでも輝夜もライラも一つの幸せの形でリオンの正義希望になり得る物と表現するくらいには私達もどれだけ幸せになれるかは分かってるつもり。だから私達は心からリオンを祝福したいと思う」

「アリーゼ…」

「で…もうリオンだったら輝夜とライラの忠告を見事に生かしそびれかけたわよね？」

「うぐっ…」

ジト目で詰問してくるアリーゼに私は言葉を詰まらす。

…輝夜とライラが【深層】での夢の中でもう一つの正義希望のことは事前に教えてもらってあった。

もう一つの正義希望を私は当初『人助け』にあると解釈したが、もちろんそれは盛大な勘違い。

本物のもう一つの正義希望はお腹にいる我が子であった。

それに気付かずに私は『人助け』に総力を投じ、私は危うく我が子を危険に晒すリスクまで犯した。

…アリーゼの言う通り私は輝夜とライラの事前の忠告を全く生かせていなかった。

今でこそ自制した行動ができているから忠告を生かしているとも言えるとはいえ、大失態は大失態だった。

「ほんと輝夜もライラも呆れ返ってたわよ？ポンコツエルフどころか超糞雑魚愚昧妖精だった」

「…返す言葉もありません」

「そしてこれだけのことがあっても私達との正義希望を忘れられないとなるとリオンったら相当な重度なのよね…」

「…」

アリーゼの詰問に私は黙り込むことしかできなくなる。

するとアリーゼは一度咳払いをして雰囲気の一掃を図ったかと思えば、話を最初に話し出した提案へと戻した。

「ということで清く正しく聡明な私からの提案があります。リオンが正義への迷いを一時的でも抑えることのできるただ一つの方法です」

「そつ…その提案とは…？」

似合わないと言っても過言ではない妙な畏まり具合で提案へと話を進めるアリーゼ。

私が問い返した後、飛び出した次の一言はこれまたアリーゼらしい突拍子もない発言であった。

「リオン！お腹の中にいる赤ちゃんの名前を『アリーゼ』にしなさい！」

「…は？」

お腹にいる我が子の名前を『アリーゼ』にすべき。

人差し指でビシツと私のお腹を指さしたアリーゼ。

ただアリーゼの提案はあまりにも脈絡がないために私の理解は全く及ばない。

お陰で私はポカンと口を呆けてアリーゼを見つめることしかできない。

一方のアリーゼもどうして私がそんな表情をするのか分からないとばかりに首を傾げつつ言う。

「…あれ？ダメだったかしら？だってまだお腹にいる赤ちゃんの名前決めてないでしょ？」

「それはそうですが…あまりに突拍子もないですし、まず私達の子供の名前はベルと決めるつもりだったんです！」

「うわっ…唐突に溢れ出す夫婦愛！何よ！私にはリオンの子供に名付ける権利がないって言うの！？ひどい！ひどいわ！リオン！！」

「うっ…しかしっ…私とベルの子供である以上、ベルの意見をお聞きするのは当然のことです！」

私の我が子の名前はベルと二人で決めるといふ発言にアリーゼは不満を顕わにしてごねる。

そんな理不尽な不平を宣うアリーゼに心を抉られつつも私はベルと二人で我が子の名前を決めるといふ考えは譲るつもりはなく。

私の強固な決意を見てかアリーゼは攻め口を変えるように言った。

「とうかりオンのお腹にいる子供自身が私と言うか何と言うか…」

「…何を言っているのですか?」

「そつ…それはともかく私の提案には利点があるわ!まずリオンの赤ちゃんに私の名前を付けて毎日のように呼ぶことになれば、リオンは私達のことを忘れたんじゃないかっていう不安に襲われずに済むわ!」

「はっ…それは確かに…」

「さらにさらにリオンの赤ちゃんの名前を『アリーゼ』にすれば、『アリーゼ』という名前はこれまでの正義希望と今の正義希望両方を象徴する言葉になる!同時に繰り返し呼んでいくうちに今の正義希望を象徴する意味が強くなっていく」

「そうすればこれまでの正義希望への迷いも薄れていく…そういうことですか?」

私とベルの子供に『アリーゼ』と名付ける意味をアリーゼは語る。

私がアリーゼ達を忘れていない証明とすると同時に意識的に『アリーゼ』と呼ぶことで私の中の正義希望を更新していく。

アリーゼの提案は…確かに私の中の正義希望への迷いをなくすために効果があるようにも聞こえた。

とは言えその正義希望の『更新』自体に私は気が進んでいない訳で…

「リオン?そうごちやごちや考える必要は正直ないわよ?さつきも言ったけど、今でないだけでどちらにせよ再びこれまでの正義希望に関してで悩む日は来る。その悩む日をもたらすのはきつとこの子よ」

「…私とベルの子供が?」

「そう。リオンが悩んだようにこの子もきつと同じ悩みを抱く。何せリオンと白兔君の子供よ?『人助け』に無関心でいられると思う?」「それは…その通りです。私とベルの子供ですから…きつと…困って



いる人を見過ごせない」

「だからこの子が悩みをもたらすその日までにはリオンは忘れても問題ない。その時私達と共に戦った『正義の使徒』として、白兎君と共に生きていく『妻』として、この子の『母親』として、リオンは答えを見つげるために迷えばいい。もちろん白兎君とこの子と一緒に、ね？」

しやがみ込み私の腹部近くに顔を近づけつつアリーゼはそう語る。今のアリーゼの話はなぜかスツと私は飲み込むことができた。

理由は分からないが、不思議な説得力の強さを感じたのだ。迷うのは今ではなく未来。

迷うのは私とベル二人だけではなく私とベルと我が子の三人で。

それなら…いいかもしれない。

完全にアリーゼ達と背負った正義希望を捨てるわけではない。

いつか三人で向き合い、アリーゼ達のことを三人で思い出す。

もしかしたら我が子にアリーゼ達のことを語る日も来るのかもしれない。

もしかしたら再び我が子とアリーゼ達の正義希望を担う日が来るのかもしれない。

そう考えると、辛さを感じずにはいられずとも楽しみにも思えなくもない。

そんな未来の日常を得るためにも今はかつての正義希望を忘れなくてはいけない。

アリーゼの言うように永遠にではない。いつか思い出さざるを得ない日が来る。

その日を私がどう受け止めるのかは未来の私にしか分からない。だが…

今の私はその日がいつか来るならば、かつての正義希望を忘れてもいい。そう思えた。

「…分かりました。アリーゼのお陰でようやくキツパリと心の中が整

理できた気がします。捨てるのではなく一時的に忘れるだけ。いつか来るであろうその日まではベルと我が子への『愛』を何物よりも大切に、生きていくことにします」

「そう。それが一番だわ。それでお腹にいる子供の名前は『アリーゼ』で決定？」

「それはベルと話し合った上で決めます」

「そこにはこだわるとね!？」

「当然です。ベルとの『愛』を何物よりも大切にするのなら、ここでアリーゼの提案に闇雲に従ってはならないと思うので」

「それはそうだけれどくまあそれはいいわ。リオンの言い分はきつと正しいと言わなければならないから」

私の決意を聞いて、アリーゼは満足そうに頷く。

そうして改めて我が子に付ける名前を『アリーゼ』にするのか尋ねてくる。

だが私はやはりと言うか私はベルに聞いた上でという考えを貫く。これはアリーゼの話を聞いたからこそ尚のこと貫くべき考えのように思えた。

ただ私はアリーゼの言葉を全く無視するというつもりはなかった。「ですが…ベルに聞いてみます。実際問題私は我が子に相応しい名前というものは正直分かりません。『アリーゼ』なら…私の慕うヒューマンの名前なら我が子の名前に相応しいに違いありませんから。ベルと考えが一致したら、採用するかもしれません」

「そう。ありがとう。リオンにそう思ってもらえるのはとっても光栄ね。ま、清く正しく聡明な私なら当然かしらね？どちらにせよどんな名前をもらえるか期待して待つてるわ」

ベルと考えが一致すれば、『アリーゼ』と名付けるかもしれない。それは本心からの言葉であった。

アリーゼが私にとって大切で今でも尊敬しているヒューマンだということとは全く揺らがないから。

私の本心を込めた言葉にアリーゼはいつも通りの冗談交じりに答えながらも嬉しそうに微笑む。

するとアリーゼは唐突に私のお腹に近づいてくる。

「…つてアリーゼはいきなり何をつ…!」

「せっかくだからこの子にも意見を聞いてみるのもありかなって。どう? あなたはどんな名前がいい?」

「アリーゼ!? お腹の子に話しかけても答えてはくれませんよ!! それにつ… 私のお腹に頬をすりすりしないてください!! くっ… くすぐったいです!」

「え? そうなの? じゃあ遠慮なくもつと…」

「ひゃうっ!?! アツ… アリーゼ!?!」

アリーゼは何を始めるかと思えば、私のお腹に頬を擦り付け始め、私はくすぐったさに悶える。

これ以上好きにはさせまいと動きたいも、アリーゼはやめるどころかさらに妙なことを口走った。

「え? 何々? アリーゼお姉さんみたいになるために私もアリーゼっていう名前がいい? 流石リオンの子供ね! よく分かってるわ。私の名前を名乗ればもれなく清く正しく聡明になれるから、是非そうすべきね!」

「なっ…何を言っているのですか!?! お腹が勝手に話し出す訳っ…ベルと同じことをしないでください!?!」

「…え? 白兔君私と同じことをやったの? もちろんジョークとして…よね?」

「…」

「あーリオンがこのタイミングで黙り込むってことは真面目にやっちゃったのねえ…白兔君も面白い所あるのね。流石はポンコツのリュウの彼氏だとも言えるけど…ちよつと驚き」

…すみません。ベル。思わず胸の内に封印していたはずのベルの黒歴史をアリーゼに口走ってしまいました…

そう後悔しつつもアリーゼg私のお腹にもたらす温もりに私は意識が朦朧としてくる。

段々とぼやけてくる視界。

そうか…そろそろ夢が終わるのか…

そう私は直感しつつも、私は夢の中のアリーゼの姿を目に焼き付けようと、必死に目を凝らす。

するとなぜかアリーゼの姿が吸い込まれるように私のお腹に消えていった。

私の視界は真っ暗になった。

## 分かちたい二つの希望

「…兎くーん。白兎くーん」

妙に快活な声が聞こえてくる。

その声に招き寄せられるように僕は目を開くと、僕の目の前に向き合うように立っていたのは一人の女性。

「おっ…目覚めたようね。おはよう！白兎君！そして初めまして、ね」  
赤髪に緑色の瞳を持つ目の前の女性は挨拶と共に眩しいと表現したくなるほどの明るい笑顔を浮かべる。

この特徴を持つ人物を僕は知っている…ような気がした。

もしかして…

状況を分析した結果一つの結論に至った僕は即座に尋ねていた。

「あなたは…リユーのお仲間のアリーゼ・ローヴェルさんだったり…  
しますか？」

「あら、勘が鋭いわね。そうよ！清く正しく聡明な美少女冒険者アリーゼ・ローヴェルとは私のことよ！」

「…これ夢ですか？」

「それも…明察…なんだけど、なんか反応が鈍いわね？まるで美少女冒険者を名乗れるのはリオンだけと言わんばかりに」

「アリーゼさんがどうかはともかくリユーが美少女で僕の愛する婚約者なのは今更じゃないですか」

「そ…く…と…う!?!がはっ…流星はリオンの選んだ殿方…暴走具合が尋常じゃないわ…」

夢ならば何を言っても問題ないだろうとばかりに僕はリユーへの愛を語る。

なぜか僕の愛を語りたくて仕方なくなつたのだ。

…相手がリユーのお仲間でも未だにリユーの話に定期的に出てくるアリーゼさんを前にしたからだろうか？

よく分からないけど、僕の中では変な対抗心みたいな物が湧き上がってきているかのように見える。

そして一方のアリーゼさんは僕のリユーへの愛を証明する言葉に

大袈裟な言葉遣いとリアクションで驚きを見せる。

：こんな調子の女性だとリユーは相当振り回されていたのではと、若干ブーメラン気味なことを考える僕。

するとアリーゼさんは大袈裟な身ぶりに一区切り付けるように大きく息を吐いて言った。

「さて：あなたのリオンへの愛情の深さを早速見せつけられた訳だけど、まずは私から一言。あなたリオンと付き合ってるらしいわね？」  
「はい！というか先程プロポーズもしたので名実ともに婚約者になりましたが…」

「知ってるわ。色々見せつけられたというかあなたの記憶は大体筒抜けだからほぼ私は知ってる。あんたがりオンにこれまで何をしてきたかも…」

「…え？」

アリーゼさんはわなわなと肩を震わせ、まるで僕がリユーに悪事を働いたかを糾弾しようとしているかのようで…

：まずい。この夢の中のアリーゼさんは明らかにリユーと僕のことを祝福してくれなさそう。

そう嫌な予感がした時にはもう手遅れだった。

「まず白兔君は告白前にも関わらずリオンが求めてきたからってリオンの初めてを奪った！まずこれ自体私は許せないわ！」

「ぐふっ…！それは確かにお互いの想いを確かめる前でしたけど…でも後でお互い両想いだと分かったのだから何も問題ないじゃないですか！」

「そういうことじゃないのよ！そういうことじゃ！私だってリオンと何度も添い寝したし、リオンの秘密の場所をお触りしたこともある！でもあなたと同じ段階までは男の子じゃないからできなかったのよ！というか私が男の子じゃリオンに近づけたかもよく分からないし！」

「添い寝!?僕が初めてじゃなかったんですか…って!?リユーの秘密の場所をお触りってなんですか!?僕もあの時はたくさん触りましたけどお!とつても綺麗でまた見たいですし、リユーをあの時みたいに気

持ちよくさせてあげたいと思いますけど！どうしてアリーゼさんの方が先なんですか!？」

「ふふーん！いいでしょう！私を舐めてもらっては困るわ！でも私はリオンのあそこをあなたほどトロトロにしたことはないのよ！だからあなたにだいぶ後れを取ってる!?!どーしてあなたなら問題なかったのかしら!？」

「それはリユーと僕が愛という正義希望を共有してるからで…の前に話が凄く下品になってるのは気のせいですか!?!こんな話もうやめません!?!」

最初にアリーゼさんが追及を開始したのは【深層】でのリユーと僕の告白…ではなくまさかの情事に関して。

思わず勢いのまま反論していたが、リユーにはとてもではないが聞かれたくないような下品な話に発展していたことに気付かされる。

そのため僕は我に返って話を打ち切ろうとする。

だがアリーゼさんは僕の言葉を見事にスルーした。

「まだ言いたいことは終わってないから！諸々不満はあるけど、あれは白兎君アウトよ！アウト！私達の前でリオンと一杯激しくてあつーいキスしたの！絶対わざとでしょ！わざと私達に見せびらかそうとしたんでしょ!?!それにリオンはすっかり色ボケてポンコツになってるからあなたの誘導に引っかかって…」

「だったらどうなんですか!?!もし僕があそこでリユーと愛の溢れるキスをしたのが、これからのリユーはあなた達と背負っていた『人助け』という正義希望じゃなくて僕と二人の子供と一緒に育んでいく『愛』という正義希望だとあなた達の前で明確に証明するためだったら！あなた達には僕の思惑に何か文句があるというのですか!?!」

「どうもしないし、文句もないわ！私達が願うのはただリオンが幸せであることだけなんだから！リオンの選んだ正義希望こそがリオンにとって必要な正義希望よ！私達に何の不満があるというのかしら!?!」

「じゃあどうしてアリーゼさんは僕に文句を言うように突っかかってくるんですか!?!」

「それは個人的に白兎君のことが羨ましいからに決まってるじゃない

！正義希望の話とは全く別の話よ！ずるい！白兔君つたらずる過ぎるわ  
！私のリオンを返しなさい！」

「ええええええええ！アリーゼさんまさかりユウのこと好きだったとか  
そういう感じなんですか!？」

アリーゼさんと僕の間で白熱する論戦。

次にアリーゼさんが追及し始めたのはアリーゼさん達のお墓の前  
でリユウと激しい激しいキスを交わした事。

実際の所アリーゼさんの指摘が凶星だった僕は逆ギレ気味に何の  
問題があるのかと開き直すように応じる。

その結果発覚したのは今までのアリーゼさんの追及の根本にあつ  
たのは、アリーゼさんのリユウへの愛情。

まさかのアリーゼさんの爆弾発言に僕は衝撃のあまり叫ぶ。

：リユウの話からは明らかにそういう雰囲気はなかった。

つまりリユウは鈍感でアリーゼさんの想いに気付いてなかったと  
か：そういうこと？

なら逆にリユウに僕の想いを気付いてもらえて、伝えることができ  
た僕は間違いなくアリーゼさんよりもリユウの中で存在が大き  
くなったも同然で：

つまりアリーゼさんよりも僕の方が凄いです？

そう確信した僕は優越感に浸りつつアリーゼさんに反攻とばかり  
に追及を始めようとするも。

：アリーゼさんの勢いに合わせて声を張り上げていたせい息切  
れを起こしてしまい、続きの言葉を発せず。

そしてアリーゼさんも同じような状況に陥ったようで、二人して息  
を整えるという一時休戦を経た上で先程までよりは落ち着いた雰囲気  
気で話は再開されることになった。

「ともかく：私個人としてはリオンを白兔君にとられたことは極めて  
遺憾よ：でも個人的な想いを抜きにすれば、私達はこれからのリオン  
はあなたの言うようにあなた達三人の間で育む『愛』という正義希望を何



物よりも尊ぶべきだと思う。なのにリオンは私達と担った過去の正義希望をどうにも忘れられないように…」

「それは…気付いています。何度もリユーは僕の前では捨てる忘れると言ってくれてますが、どこか完全にはできていないみたいで…僕としては今すぐにも忘れて今一番大切な正義希望のことだけを考えて欲しいのですが…」

「私達もそうして欲しいのは山々よ？でもリオンが頑として忘れられないのは多分私達のせい…そしてリオン自身の性格のせいでもある…から」

「簡単にはやっぱり捨てることはできないでしょう…ね」

先程までの応酬の時とは打って変わってアリーゼさんと僕の間では考えが一致する。

アリーゼさん達が過去のアリーゼさん達と共有した正義希望よりも今のリユーと僕が共有する正義希望の方が大事だという考えを一致させることができた僕は少しだけ安心する。

恐らくアリーゼさん達の願いをリユーは無視できないだろうから。そういう意味ではリユーの枷になり得る要素が一つ減ったと言っているかもしれない。

だがそんなアリーゼさん達の思いをリユーは恐らく知ることにはできないはず。

その上そもそも話リユーは困っている人を見過ごすことができない性格だ。

だから『人助け』という正義希望に関心を抱かないように…というのはリユーにとつてかなり難しいことであるのは明白。

…このような形で懸念点までアリーゼさんと一致してしまったのは僕的にはあまり喜ばしいことではなかった。

「どうにかして僕と僕達の子供のことだけを考えるようになってくれれば嬉しいんですけど…僕に思い浮かぶ方法と言えば、リユーにとにかく幸せを感じてもらえるように頑張るくらいしか思い浮かばなくて…」

「それがあお激しい激しいキスだったのね!?!…っていうのはともか

く。私的にはそれが一番地道で確実な方法だと思うわよ？時間をかけて少しずつ…そうやってリオンの潔癖な所も変わってきた。ならこれからも同じように時間をかけてリオンが過去の私達と共有してきた正義希望に惑わされないようにしていくのが一番だと思うわ」

「でも少し前の時の連続窃盗犯の調査の時みたいに時間に任せていたら手遅れになる可能性もある気がして…」

「…焦ってる？白兔君？」

「…はい」

先程までは散々ふざけているように見えたアリーゼさんが心配するように目を細めて尋ねてきた問いは凄く的確だった。

その鋭い指摘に僕は素直に首を縦に振らざるを得ない。

アリーゼさんの言う通り僕は焦りを覚えている。

一刻も早くリユーには僕と僕達の子供への『愛』だけを考えて欲しい。

そして少しでもたくさん幸せをリユーには感じて欲しい。

そのためには正直言つて『人助け』という過去の正義希望は邪魔とも言える。

だから僕はその正義希望を忘れてもらえるように上書きするように僕なりに手を考えてきた。

その手がリユーとできる限りイチャイチャすること。

これはリユー自身も僕達の『愛』という正義希望を守るために為すべきことだと捉え、リユーの方からも積極的に動いてくれている。

だから僕もリユーの想いに応えるという意味でも僕独自の考えという意味でもリユーとイチャイチャして温もりを交換し合うことは積極的に動こうと頑張っている。

…色々と恥ずかしいことをやってしまったり、お互いに限度を忘れて後々後悔することも少なくないけど。

それでもリユーと僕が得る羞恥心や後悔は決して気分の悪いものではなくて。むしろ…幸せのスパイスになるといっつか何と言うか。

ともかく今だって僕なりにリユーの頭の中を僕達の『愛』という正義希望で満たすために努力はできているはず。

ただこの方法の決定的な問題は時間がかかることと成果が出ているのか明白には分からないこと。

これまで長い間リユウの正義が『人助け』にあった以上、考えを改めていくのに時間がかかるのはある意味当然の話。

そしてリユウは『人助け』に取り組む時と僕とイチヤイチャする時ではまるで雰囲気が違う。

…これはリユウの中でこの二つの正義が完全に別々に考えられている証なのかもしれない。となれば恐らくリユウの頭の中から消し去るための方法としてのイチヤイチャは不適切ということになってしまう。

この二つの問題がもたらすのはリユウが再び『人助け』という過去の正義に舞い戻ろうとするのではないかという懸念。

その懸念が僕の焦りに繋がっていたのだ。

懸念を解消する決定的な手立てが見つからないという事実は僕に解決できぬ悩みを与えていた。

「白兎君の気持ちは分かるわ。ただやっぱり時間をかけて解決するしかないとも言える。だからいくら焦って行動しても空回るだけかもしれない」

「だとしても何かあつてからでは遅い訳で…!」

「そう。だから清く正しく聡明なアリーゼお姉さんからとっておきの提案があります!どう?聞く?聞いてみる?」

「きつ…聞いてみます」

焦る僕に食い気味に提案があると言ってくるアリーゼさん。

妙にテンションが高くニマニマと笑っている所から見て、嫌な予感しかしらないけど…それでも僕だけでは解決策も見出せない訳で。

リユウのために。

僕達の『愛』という正義のために。

僕は悪魔の囁きかもしれないアリーゼさんの提案を聞くことにした。

そうして僕の若干息を飲みつつ告げた承諾の言葉にアリーゼさんは胸を張りながらその提案を高々と宣言した。

「リオンのお腹の中にいる赤ちゃんの名前を『アリーゼ』にしなさい！それがリオンの正義希望を白兔君と二人の赤ちゃんへの『愛』だけにする唯一の方法よ！」

「…僕達の子供の名前を…『アリーゼ』…に…？」

僕はアリーゼさんの提案に思わず首を傾げる。

僕達の子供の名前を決めるとどうしてリユートの正義希望が僕と僕達の子供への『愛』だけになるのだろうか？

そう疑問を当初は抱くもふと気づく。

…そうすればこれからのリユートがまず思い出す『アリーゼ』は目の前にいる仲間の『アリーゼ』ではなく僕達の子供の『アリーゼ』になるのでは…と。

そうして段々とリユートの中の大切な『アリーゼ』は仲間から僕達の子供に代わって…

最終的にはリユートの中の大切な正義希望も仲間の方々と共有したものから僕と僕達の子供と共有するものに代わる？

しばらく思考を巡らせた末に僕はそんな結論を見出し、アリーゼさんの提案への賛成に傾きかけるも。

…アリーゼさんのこれまでのリユートへの振る舞いから直前の嫌な予感の一つの予測に辿り着いた。

「…実は僕達の子供に『アリーゼ』という名前を付けて、形は違えどリユートの愛をアリーゼさんのものにしようとかそういうこと考えてませんか？」

「なっ…ななな何のことかしら!?アリーゼお姉さんさっぱり分からないな」

「…凶星ですよ。絶対凶星ですよね!?!」

僕の指摘にあからさまに挙動不審になり、吹けもしない口笛まで吹こうとするアリーゼさんを見て、僕の予測は確信に変わった。

リユーを愛してるのは僕だけ！

リユーの愛をアリーゼさんに渡すなど以ての外だ！

そう思いアリーゼさんの提案を即座に拒絶しようとするも…

僕には決定的な弱みがあることをすっかり忘れていた。

「でも白兔君は私の提案を受け入れるしかないわよね？だってあなた自身その効果を理解してるし、他の手立てもないもの」

「うぐつ…」

「心配はいらないわ。効果は确实。一時的になら私達と担った正義を  
リオンは忘れられるわ。ただし『アリーゼ』という名前を付けようと  
付けまいと、結局はリオンが私達の正義を再び思い出す日が来るのは  
間違いない」

「…え？それはどういう意味ですか？それじゃあ最初から打つ手がな  
いでも…」

アリーゼさんの言葉に疑念を抱く僕。

結局はリユーがアリーゼさん達と担った正義を思い出すのであれ  
ば、どんな手も意味がないではないか。

そう思うもアリーゼさんは僕が全く考えもしていなかったことに  
ついて触れた。

「考えてみなさいよ？リオンと白兔君の子供よ？困ってる人を見過ご  
せると思う？『人助け』に無関心でいられると思う？」

「つまり…僕達の子供がリユーに再び同じ悩みを呼び起こす…という  
ことですか？」

「そういうこと。ある意味これは宿命みたいなもの。逃れることはで  
きない。だとしても…『アリーゼ』という名前を付けることでその宿  
命を一時的には遠ざけられる。少しでもリオンが平穩に暮らせる  
日々を作り出すことはできる。そして私も二人の子供を介して力を  
貸すこともできるかもしれない。どうする？私の提案受け入れる？  
それとも断る？私的には白兔君敵には悪くはないと思うんだけど？」

アリーゼさんはそう言う終わると、僕の判断を待つとばかりに口を

閉ざした。

ただ考えるための時間は僕には必要なかった。

リユースさんの事を想えば、答えは一つだったからである。

「…分かりました。僕達の子供の名前は『アリーズ』にしないかとリユースに提案してみます。もちろんリユースの考え次第ですけど、少なくとも僕は『アリーズ』という名前を付けることに賛成します。…リユースの平穏な生活のためなら如何なる小さなことであろうとすべきですから。アリーズさんもお力を貸してくださいさるなら、ぜひお願いしたいです」

「そう。なら契約成立ね」

僕の言葉にアリーズさんは満足そうに頷くと、僕の前に手をそつと差し出して来る。

契約という言葉から僕とアリーズさんのリユースのために協力する約束の証のためだろうと察した僕。

僕はアリーズさんの意図をくみ取って、アリーズさんの手を取った。

「全てはリユースの幸せのために。これからお願いします。アリーズさん」

「全てはリオンの幸せのために。これからよろしくね？白兔君」

リユースの幸せのため僕とアリーズさんは固い握手を交わして、協力を誓い合う。

リユースと共に背負ってきた正義希望は違う僕とアリーズさん。けれどリユースのことを大切に想う気持ちは同じ。

リユースのことを第一に考えてくれるシルさんへの信頼と同じ信頼をアリーズさんには早々に抱くことができていた。

ただ…リユースのことを『僕と同じように』大切に想っているというのがシルさんとは違って少々厄介な点だった。

「さて…白兔君？リオンの幸せのために協力するのは確定だけど、近いうちにリオンの愛は私が独り占めするつもりだから、そこら辺のことよろしくね？」

「…はい？何言ってるんですか!?リユウの愛は僕のものですよ！」

「でも子供ができた女性って言うのはね？旦那さんよりも大体子供の方が大事になるものなのよ。大丈夫！多分旦那さんへの愛と可愛い可愛い子供への愛は別よ？だから心配せずリオンとイチヤイチャする私を羨ましそうに指を咥えてみてればいいのよ！今の私がどれだけ辛いか実感すればいいんだわ！」

「いやいや、確かにリユウが他の人とイチヤイチャしてるのを見るのは死ぬほど辛いつていうのは分かります。ただだからこそリユウを渡す訳ないじゃないですか！リユウが愛してるのは何があるうと僕ですよ？だって僕達の子供はあくまでリユウと僕の愛の結晶なんですから。つまりはリユウは僕のことを一番愛してるんです！相手が僕の子供であると、絶対リユウの愛を独占させたりはしません!!」

「あーリオンの旦那さんの愛がおーもーい！こんな旦那さんじゃリオンが可哀そうだわ！」

「天界から帰ってきて、僕達の子供に移ってリユウの愛を得ようとするあなたの言うことですか!?僕のリユウは絶対に渡しません！」  
「何をおく！リオンは元々私のリオンだったのよ！白兔君は大人しく私にリオンを返しなさい!!」

「嫌です！あなたこそ大人しく僕達のそばでリユウと僕がイチヤイチャするのを指を咥えて見てればいいんです！」

…という感じに協力関係を築いたはずが、早々にリユウを巡ってギャーギャーと口論を開始する僕とアリーゼさん。

夢の中でもこの調子だと僕達の子供が成長したらどうなることやら…

そう思いつつ意味があるのかよく分からない口論を続けるうちに僕の意識は段々と遠のいていったのであった。

## 二人で決めた希望の名前

優しく温かな光が瞼を照らしてくる。

その光に導かれるように私はゆっくりと目を開けた。

：アリーゼと話すごうできた。一言一言までは覚えていなくとも忘れようのない確固たる記憶がある。

そしてアリーゼにとても大事な話をされた。

今すぐにもベルに相談しなければならぬ大事な話が。

私はそう思い立った途端に、隣にいるであろうベルに今すぐにも話しかけようと身体をベルの方に向ける。

が：

聞こえてきたのはベルのすーすーという寝息。

熟睡したままのベルの無防備であどけない寝顔。

そんなベルを見てしまうと私はベルの眠りを邪魔するなど到底考えることができなくて。

：頭の中でアリーゼが少々騒いでいる気がしなくもないが、私はベルを起こすのをやめた。

結果目が折角覚めたのに手持無沙汰になってしまった私は音が立たぬよう気をつけながらも徐に手を伸ばす。

私の手が触れたのはベルの綺麗な白い髪。

ベルの寝顔を見ているうちに無性に触れてみたくなったのだ。

短い髪をくるくると私の指に巻いてみたり、髪を優しく優しく撫でてみたり。

ベルの髪に触れていくうちに不思議な楽しさを覚え始める私。

私はベルが目を覚まさないのをいいことに見出してしまった不思議な楽しさの虜になっていく。

「んん…」

「あっ…」

ただそんな風にベルの髪や頭を撫で回してしまえば、ベルが目覚めてしまうのもある意味致し方ないことで。

「…ああ。リユー…おはようございます」



「おっ…おはようございます。ベル。…すみません。起こして…しまいました…その…ベルの眠りを邪魔してしまって本当に申し訳…」  
ベルがうつすらと目を開き朝の挨拶を私に贈ってくれる。

私が快楽を追及したがためにベルを起こしてしまった。  
罪悪感を覚えずにはいられなくなってしまった私は謝罪を口にすると共に慌ててベルの髪を撫でていた手を自らの布団の中に引っ込めようとする。

だがその手をベルは瞬時に掴んで止めると、私の目をまだ眠そうな細い目のままポツリと言った。

「…気持ちよかったの…もう少し…撫でていてくれませんか？」  
「はっ…はい…」

…あどけない表情でベルの告げられたお願いに私の心は一瞬にして射抜かれた。

そのため私はそれ以上手を引っ込めることなく私の手はベルの髪へと舞い戻っていた。

そうして再開される私によるベルの髪撫で。

ベルは目を覚ましたからか私の髪を撫でる一挙一動に反応するようにくすぐったそうにしたり、気持ちよさそうにしたり…

先程まで感じていた不思議な楽しさがさらに私の中で倍加したような気がした。

ベルの髪を撫でるのはなぜか楽しい。

そんな新しい趣味を発掘してしまった私はベルの髪を撫で続けてそのまましばらく時を過ごす。

その後二十分くらいが経った頃合いだろうか。

この頃にはすっかり目を覚ましたベルは私に髪を撫でられながら私の空いたもう一方の手を両手で握り締めていた。

言葉を交わすことなくほとんど距離を作らずベルと私が布団の中で過ごす何気ない一時。

そんな一時をずっと謳歌するのも良いのだが…というか二十分も

謳歌し続けても尚私的には物足りないのだが。

ただ頭の中にいるアリーゼがそろそろ煩くなってきたような気がしたので、私はようやく話を切り出した。

「そういえば…ベル？実は私から一つ相談があるんです？」

「相談…ですか？あつ…実は僕からも相談が…」

「えっ…ベルもですか？」

「リユーもだっただんですね…」

何の偶然か朝起きてすぐに私もベルも相談したい事柄があるという状況に二人揃って小さな驚きを見せずにはいられない。

ただ私は心の何処かで納得している部分もあった。

同時にベルが何を相談しようとしているのか直感から分かったような気もした。

だから私は一つの提案を試みることにした。

「ならば…ベル？お互いの相談を一緒に言ってみませんか？」

「つまり…リユーはリユーと僕の相談したい内容が一緒だと考えている…そういうことですか？」

「はい…私とベルは以心伝心の仲なので恐らく相談したい内容も一緒なのでは…そう考えています」

「なるほど…分かりました。リユーの提案通りにしましょう」

一緒に相談内容を伝えないかという私の提案に当初は迷いをベルは示すも即座に承諾してくれる。

私とベルは以心伝心の仲で一心同体と言っても過言ではない。

ならば相談するタイミングが一緒にも相談する内容が一緒にも当然そうなる。

私とベルは一呼吸置いた後、互いの相談の内容を告げた。

「私（僕）達の子供の名前を決めませんか？」

「…っ！リユー（ベル）!!」

私の直感の外れることなく私とベルが以心伝心の仲であることがまた再確認できた。

その喜びを共有した私とベルは互いの名前を呼び合い、固く手を結び合う。

私もベルも相談しようとしていた事柄は私達の子供の名前。

私のお腹に子供を授かってからもう既に八週間。

そろそろ名前を決めても遅くない頃合いだと私だけでなくベルも考えたのであろう。

何より私は夢の中でアリーゼに一つの提案をされ、ベルとの相談の上で受け入れることにしていた。

ベルが私とアリーゼの提案にどんな反応を見せるかは分からない。だから問題なのはこれからであった。

私は喜びに浸り続けて話が進まないのもまずいと考え、咳払いをして浮かれた気分を沈めてから話を再開する。

「それで…です。ベルには我が子に付けたいご希望の名前はありますか？」

「…はい。一つあります。リユースはどうですか？」

「私も…あります。大切な意味のこもった一つの名前が」

「そうですねか…ならこの名前も一緒に言うことにしませんか？以心伝心の仲の僕達ならきつとその名前も一緒だと思うので」

「分かりました。ベルがそう仰るなら…私は拒む理由はありません」

私はベルの提案に即座に乗った。

ベルがそう言うなら…きっと私とベルの望んだ我が子の名前は一緒だろう。そう信じたからである。

もう一度息を吸いなおしてタイミングを合わせようと試みる私とベル。

二人揃って口にした名前は私とベルを結ぶ愛への信頼を寸分たりとも裏切らぬものであった。

「私（僕）達の子供の名前は『アリーゼ』にしませんか？」

見事に、としか言いようがないことだったのかもしれない。

何の偶然だろうか。

それとも必然でもあつたのだろうか？

私とベルの望む我が子の名前は『アリーゼ』で本当に一致してしまつたのである。

いくら私とベルが以心伝心の仲とは言え私も若干の驚きは覚えずにはいられない。

そのため思わず私はベルに問い返していた。

「ベル…本当に宜しいので？『アリーゼ』という名前は…ベルも恐らく私の仲間の名前だと分かっているはずですよ」

「もちろんです。アリーゼさんは…『アストレア・ファミリア』でリユーさんと共に他の人の幸せを守るために戦つたお方だと思つています。そんなアリーゼさん名前を頂ければ、僕達の子供は他の人の幸せのために頑張れる素敵な人に成長してくれるんじゃないか…そう僕は信じています。そして僕にはきつと劣りますが、アリーゼさんはリユーさんのことを凄く愛していたお方なんだと思います。だから僕達の子供がリユーさんを今まで以上に幸せにしてくれる存在になることを願つて…僕は『アリーゼ』という名前が一番相応しいと考えました」

「ベルッ…」

ベルの『アリーゼ』という名前を選んでくれた理由の説明に私は思わず感極まつて瞳を潤ませてしまう。

ベルはアリーゼに一度も会つたことがないのに本当にアリーゼのことがよく分かっている。

私の大切な仲間のことにベルが好印象を抱いてくれることはやはり私にとつて嬉しいことであつた。

それも私とベルの子供の名前に選んでくれるほどなら尚更である。

ただ『僕にはきつと劣りますが』という言葉でベルが棘を含み気味に強調した辺りは少々気になるが…

それはともかくとしてベルが『アリーゼ』という名前を選んでくれた理由を説明してくれた以上私もお返しに説明しなければと考えた。

「ベルに多くを言われてしまつた気もしますが…アリーゼは…とても明るく周囲に笑顔と希望をもたらししてくれる太陽のような素晴らし

い方でした。まるで私にとってのベルのように。私は私達の子供にアリーゼのように生きて欲しい…そう願っています」

「なるほど…ちなみにお聞きしますが、アリーゼさんと僕のどちらの方がリユーさんにとって素晴らしいんですか？」

「…え？なぜそのようなことをお聞きになるのですか？私にとってベルもアリーゼも尊敬しているヒューマンであり…」

一瞬納得しかけたかと思いきや思わぬことを尋ねてくるベル。

驚きもあって私は本心のままにベルもアリーゼも尊敬していると告げてしまう。

が、ベルが私の回答に対して浮かべたのは頬を膨らませた強い不満を顕わにした表情。

私はベルの望んでいない回答を返してしまい、ベルに不満と不安を与えてしまったのだと瞬時に理解する。

そのため私は慌て気味に言葉を付け加えた。

「あつ…ただ尊敬という意味では、です。愛という意味ではベルだけです。確かにベルもアリーゼも多くの方に笑顔と希望をもたらしていました、私にとつては…愛するベルこそが唯一無二です。ベル以上に笑顔と希望をもたらしてくださる方はいません。私が愛しているのはこれまででもこれからもベルだけです」

「ですよ？リユーが愛してるのは僕だけですよね？」

「もちろんです！私が他の誰を愛するのでしょうか！私が愛してるのはベルただ一人です！」

「ふふつ…すみません。ちよつと意地悪なことを聞いてしまいました。リユーの想いはきつと僕達の子供に伝わりますよ。そして僕達の子供は僕達の願い通り育ってくれる…そうに違いありません」

私のベルだけを愛しているという言葉にクスリと笑って謝ってくるベル。

得意げな表情になっているのは私の気のせいだろうか…？

それはともかく改めてベルは私の理由の説明を力づけるようなことを言い、微笑みと共に頷く。ベルは私の説明に納得してくれたようだった。

実は私は私達の子供に『アリーゼ』と名付ける本当の理由をベルに語っていない。

なぜならこれまでの正義への迷いもアリーゼ達を忘れてしまわな  
いかという不安もベルは知る必要はないから。

どちらもベルに余計な不安を与えるだけである上に我が子にこの  
名前を付けた時点で忘れるはずの迷いと不安だ。

何よりこんな身勝手な母親の思いをベルが知る必要は何処にもな  
い。私がただ心の中に秘めていれればいい事柄だ。

私達の子供には：『アリーゼ』にはただアリーゼ・ローヴェルのよ  
うに生きて欲しいという願いが伝わってくれることのみを私は願っ  
た。

こうして互いの『アリーゼ』という名前を選んだ理由を伝え合った  
私とベル。

これ以上話し合う必要もない。私とベルの心は通じ合い、多くを語  
ることなく私達の子供の名前は決めることができたのである。

今日から私とベルの子供の名前は『アリーゼ』だ。

しばらく表情を綻ばせて見つめ合った後、ベルはゆっくりと私のお  
腹へと手を伸ばしてくる。

そうしてベルの視線は私の顔からお腹の方へ移ると共にその手は  
私のお腹を優しく撫でてきたかと思うと、ベルは優しい声色で呟い  
た。

「アリーゼ…パパがママとアリーゼを幸せにするから…安心して僕達  
に顔を見せてね？僕達は待ってるから」

「ベル…」

ベルは私のお腹に向かってそう語り掛ける。

言うまでもなくアリーゼが答えてくれることはない。

だがベルはあえてその言葉を口にした。

ベルが私達の子供に名前を付けたのを機に自らの決意を改めて口  
にし、再確認しようとしているのだと私は察した。

だから私がこれからすべきこともまた一つであった。

私もまたベルと同じようにお腹へと手を伸ばし、撫でるように触れると静かに自らの決意を告げた。

「アリーゼ：…不甲斐ない母ですが…それでもあなたと父であるベルを幸せにするため力を尽くすと約束します。だから早く会いたいです。アリーゼ。私は：ベルと共にあなたに会える日を心待ちにしています」

私の語り掛けた決意にベルは笑顔を浮かべてくれる。

私とベルで。

私とベルの二人で。

アリーゼを幸せにする。

そして私達三人で幸せになる。

そんな幸せな日々を得るために私達が為すべきことはまだあった。

それは迷宮都市<sup>オラリオ</sup>の脱出。

今回のデートを終えればその私達の為すべきことに挑まなければならなかった。

## 〈懐妊編〉第七章 希望を守る旅へ

### 友の助力を求めて

ベルとの十八階層でのデートから二日。

私達は問題に何一つ直面することなく幸せと充実感に満たされたデートを終え、無事地上に帰還した。

迷宮都市<sup>オラリオ</sup>を出ることと私がベルと結ばれ子宝に恵まれたことをアリーゼ達に報告することができた。

私とベルの子供を『アリーゼ』と名付けるといふ決断をベルと二人で下すことができた。

このデートの二日間は恐らく私にとってもベルにとっても一生忘れられない日々の一つになったに違いない。

そしてこのデートを終えた今私にもベルにも迷宮都市<sup>オラリオ</sup>には未練は多くない。

私達の愛という正義<sup>希望</sup>のため。

私達の愛の結晶でもあるアリーゼという正義<sup>希望</sup>を守るため。

私達は早速迷宮都市<sup>オラリオ</sup>を出るべく準備を開始した。

その準備とは「ガネーシャ・ファミリア」団長シャクテイ・ヴァルマの助けを借りることであった。

☆

「何っ？ 迷宮都市<sup>オラリオ</sup>を出るだど…？」

「はい。それが私とベルの決断です」

「リユーと僕が今説明した通りです。ご協力頂けませんか？ シャクテイさん？」

シャクテイとの密会の約束を『豊穡の女主人』でした私とベルはシャクテイと向き合って早々迷宮都市<sup>オラリオ</sup>を出るといふ考えをシャクテイに伝えた。



私達の決断にシャクティは理解できないとばかりに顔を顰める。ある意味当然かもしれない。なぜならシャクティが事前に提案してくれていた案は皆迷宮都市オラリオに残ることを前提にしたもの。

シャクティの中では迷宮都市オラリオを出るといふ考え自体が想定範囲外だったのだろう。

だが私とベルの中では違った。

なぜなら私達にとって一番大事なのは私とベルを繋ぐ愛と私達の子供であるアリーゼなのだから。

シャクティの芳しくない表情を見受けて、私とベルは顔を見合わせ視線を交わす。

視線を交わした結果私とベルは説明を加えようという考えで一致したと、私とベルは以心伝心の仲なので察する。

そうして改めてシャクティの方に向き直って私達は続けようとする、徐にシャクティが口を開いた。

「確かに…お前達の考えは一理ある…いや、正しいと言うべきなのかもしれないな」

「…え？」

シャクティから返ってきたのは納得の言葉。

シャクティは今尚顔は顰めたままだが、今確かに私達の決断が正しいと評したのだ。

シャクティの評価に思わず声を揃えて驚きを示してしまう私とベル。

そんな私達にシャクティは苦笑い気味に告げる。

「私が言うのは心苦しいが、迷宮都市オラリオの仲は思いの外治安は良くない。お前達の子供の教育にもあまり望ましくないと考えられるだろう。神ヘルメスのような真意の分からない神がうろつくような街で子供を育てることはとてもではないができない……そんなリオン達の考えには同意せざるを得ない。子供のためにも迷宮都市オラリオを出て、故郷に戻ろうという考えは正しい」

「…教育？ベル？確かに神ヘルメスの存在は警戒すべきだとは思って  
ましたが…迷宮都市オラリオは子育てや教育に向いてないのですか？」

「ぼっ…僕に聞かれても…僕は迷宮都市オラリオの外で迷宮都市オラリオを憧れの場所  
として育ってきたから、別に向いてないとは思わないと言うか…それ  
に子育てや教育のことは僕にはよく分かりませんし…」

「…私も故郷の方が余程教育には望ましくありませんし…子育てに至っ  
ては絶対できないですし…迷宮都市オラリオの方がまだ良い気も…」

シヤクティは私達の心情を慮って納得したのだろうかと思えばした  
のだが…

私もベルも揃って教育や子育てに迷宮都市オラリオが問題があるという  
シヤクティの発想に追いつけず、小声でシヤクティの発想をどう受け  
止めれば良いのか相談しあう。

そしてその密談は当然シヤクティにも聞こえていて、シヤクティは  
呆れ顔を浮かべて言った。

「…そんな小声で話していても聞こえるぞ？私には。なんだ？子供の  
ことを気掛かりに思っただけで判断したと推察したのだが」

「それは言うまでもありません。私もベルもアリーゼのことを気掛か  
りに思っただけ…」

「ん？アリーゼ？」

「あ、私達の子供の名前です。ベルと二人で話し合っただけです。  
お分かりでしょうか…」

「ああ。皆まで言われなくても分かる。…そうか。良い名前だと思  
う。お前達の子供が彼女のようになり高い女性になってくれること  
を祈っている」

「ありがとうございます…え？女性？どうしてシヤクティは女の子だと  
思っているのですか？」

「違うのか？アリーゼだと女性の名前だろうか？」

「…ベル？どうしましょう？これは少々まずかったですね…」

「…すみません。全く考えがそこまで及んでませんでした」

「…まさかお前達子供の性別が分かりもしないのに子供の名前を決め  
たのか？」

まさにシャクティの指摘通りで私もベルも今更の如く青ざめる。

：アリーゼに夢の中で言われたからというだけで決めたに程近かったため、もし男の子が生まれたら…という想定を私は一切していなかったのだ。

賛同したベルの事情は分からないが、ベルも謝罪してくれた辺り考えが及んでいなかった模様。

頭の中のアリーゼがなぜか凄くいい笑顔で問題ないとばかりに親指を立てているような気もするが…

シャクティに指摘してもらい気付いた以上私もベルも何も考えないという訳にはいかなかった。

「…帰ったら男の子だった時の名前を決めましょうか？リユー？」

「そうしましょう…私も考えが足りませんでした…」

「いえ、僕も気づかなかったので…ともかくシャクティさんのお陰で早めに気付きました」

即座に男の子の時の名前を決めようと考えを一致させる私とベル。すると私達にシャクティはふと思い浮かんだように尋ねてくる。

「ちなみに聞くが、そんなに前達は女の子が欲しかったのか？」

「…？別にそうではありませんよ？私はただアリーゼのような周囲に笑顔と希望をもたらす方に育って欲しいと願ったからで…私としては男の子でも女の子でもベルとの子供ならどちらでも嬉しいと言うか…」

「僕も同じ感じです。僕達の子供にはアリーゼさんのような他の人の幸せのために頑張れる子に育って欲しいと思ったからで…僕としても男の子でも女の子でもリユーとの子供ならどちらでも大歓迎ですし…」

「ベルに似た男の子であれば、優しくてカッコよいとても素敵な殿方に…」

「リユーに似た女の子であれば、優しくて可愛いとっても素敵な女性に…」

シャクティの質問に私もベルも首を傾げつつ以心伝心の仲なのでとても似通った答えを返す。

私にとつてもベルにとつても大事なのは私とベルの子供であるという事。

私達にとつては男の子でも女の子でもどちらも等しく大切だということはこの場を借りて確認することができた。

そうして私の中ではあまり想定になかった男の子だった場合の我が子の姿が浮かび：思わず頬が緩む。

だが私の妄想はシャクティの一言で呆気なく打ち切られることになった。

「お前達。話はそれくらいでいい。これ以上放っておくとまた惚気られそうだ：それで迷宮都市オラリオを出たらどうする？私は子育てをするなら二人の両親がいるであろう故郷に戻る方が良いとお前達が判断したのだろうと推察していたが、二人の反応を見るからにそのつもりはないんだな？」

「：はい。少なくとも私の故郷はエルフの他種族蔑視の因習が強いためベルと子育てすることはとてもではありませんが、不可能です。私の両親も受け入れるとは考えられません。そもそも私は密かに里を飛び出した身ですし：」

「僕も：唯一の家族だったおじいちゃんがなくなって故郷には戻る場所がありません。なので：」

「：配慮が足りなかったな。余計なことを聞いた。すまない。ただ故郷という当てがないなら迷宮都市オラリオを出てどうするつもりだったんだ？」

「：」

「：」

「：まさか何も考えていなかった：とは言わないよな？」

「なっ：何も無い訳ではありません！」

「そうです！僕達にもちゃんと考えがあります！」

「ではなぜ即答しなかった？何か私に話しにくいことでもあるのか？」

シャクティは視線を鋭くしてそう尋ね、私もベルも揃って背を縮こまらせる羽目になる。

シャクティは故郷の話が私にとってもベルにとっても良い思い出がないことを察し、話を逸らしてくれるも生憎私達の芳しくない反応は変わらなかつた。

とは言え先程までの苦々しい気分という意味での芳しくないからはまるで含む意味合いが違う私達の芳しくない反応。

：私達は迷宮都市オラリオを出たらどうするつもりだったかというシャクティの質問に答えられない。

なぜなら考えはあつてもシャクティの期待には全く沿わない：というか子育て云々を一切考慮に含んでいない考えだったからである。私もベルも話せばどんな反応をシャクティが返すか分かりきっているため、伝えるか否かで迷う。

だがシャクティの絶えず向けてくる冷たく鋭い視線に私もベルも耐えられず、互いに顔を見合わせて頷き合つて合意を確認した後で大人しく白状することになった。

「…私達の迷宮都市オラリオを出る理由は…結婚式を挙げるのに相応しい場所を探すため」

「実はリユーのお望みの場所が迷宮都市オラリオの中では見つからなくて…だから『誰もいない夜の森で月に私達の永遠の愛を誓い合う』という条件が適う場所を探す…むぐつ！もぐもぐつ…」

「ベルッ！そこまで話す必要がどこにあるんですか!?そこまで話したらシャクティがどんな表情を浮かべるか…」

「…なるほど。要は子育て云々より結婚式のことですら頭一杯で何も考えていなかったと。そういうことなのだな？お前達は？」

「…ああ」

「むぐつ！げほっげほっげほつ…リユッ…リユー！いくら何でも窒息死しますから!？」

口を滑らしたベルの口を封じるも既に手遅れ。

シャクティは深読みしすぎたことを後悔しているとばかりに絶対零度の視線を私達に突き立て、私はもう完全に立つ瀬がない。

茫然として思わずベルの口を塞ぐ私の手の力が弱まったために呼吸を再開できたベルは声を張り上げるも私には恥のあまり反応も返

せない。

そんな私の茫然自失な状態を見かねてかベルは反論するように言った。

「でっ…でもちゃんと僕達の愛の巣を一緒に探そうってリユーと話はきちんとしてありましたし！」

「だが見通しは甘かった。現にお前達はどこに定住し、どこで子供を育てていくかの具体的な考えが一切ない。違うか？」

「うっ…うう」

「子供がいない身の私でも分かるぞ？愛情と気概だけでは大切な家族は守れない。お前達の見通しの甘さがお前達自身だけでなくまだ生まれてもいないお前達の子供を殺す可能性があるんだぞ？それだけの責任があることをお前達は自覚しているのか？」

「…」

私もベルも返す言葉を見つけることができなかった。

シャクティの言う通りだ。

私もベルも愛だ結婚式だ子供の名前だと浮かれてばかりで具体的に未来をどう過ごしていくかにほとんど考えを広げることができていなかった。

そんな甘さが私達自身だけでなくアリーゼをも殺してしまう可能性がある…

シャクティの言葉は否定しようがなかった。

私もベルも目を伏せて自らの浅慮を反省することしかできない。

そんな時シャクティは続けて言った。

「だが…お前達はまだ若いし、冒険者として生きてきたせいで子育てに関しては分からぬことも少なくないだろう。だから周囲を頼れ。周囲の力を借りろ。少なくとも私は力を貸そう。お前達の要望通り迷宮都市<sup>オラリオ</sup>を出るための根回しは私が責任を持って行おう」

「シャクティ…！ありがとう…」

シャクティが私達への協力を受け入れてくれたことに私は感謝の意を伝えようと言葉を紡ごうとする。

だがシャクティの本当に伝えたいことはここからであった。

「だからっ…大切な家族を…絶対に喪ってはならない。私と同じ後悔を…繰り返し返すな。お前達はそのために冒険者をやめ、迷宮都市オラリオを出るのだろうか？それが大切な家族のために最善だと…思ったのだろうか？私が考えたこともなかった…可能性を信じて」

「!?」

瞳を揺らし、そう告げたシヤクテイ。

シヤクテイの言葉の真意が…私には分かっってしまう。

…アーデイのことだ。

シヤクテイにとっての大切な家族でたった一人の妹であったアーデイを喪ってしまった後悔のことをシヤクテイは言っている。

冒険者をやめて迷宮都市オラリオを出ることで大切な家族を危険から遠ざける。

私とベルが私達自身とアリーゼのために掴み取ろうとしている可能性だ。

シヤクテイがアーデイのためにもう掴み取ることができない可能性だ。

シヤクテイの後悔を私とベルに繰り返し返すなど伝えてくれている。

シヤクテイのアーデイへの想いと後悔が詰まった言葉が…私の胸に響かぬはずがなかった。

私は深々と頷いて答える。

「…はい。その通りです。大切な家族のため…私達が冒険者をやめ迷宮都市オラリオを出る必要があると考えたのは紛れもない事実です。シヤクテイのお言葉…肝に銘じます。そして…シヤクテイの後悔を繰り返し返さぬことをここに誓いましょう。私は…必ずや大切な家族であるベルとアリーゼを守り抜きます」

「僕も…シヤクテイさんのお言葉を心に刻みます。何物にもリユーとアリーゼを奪わせることはしません。お約束します」

「そうか…お前達？その言葉忘れるなよ？愚かにも忘れ誓約を破れば、私と…そしてあの子が決して許さないだろう」

私はシャクテイに誓約を立て、アーデイのことを知らず話が鮮明には把握できていないベルも続けてシャクテイに約束する。

そんな私達の言葉にシャクテイは深々と頷き、満足そうな表情を浮かべてくれる。

こうして私とベルはシャクテイに親としての自覚の甘さを指摘され自省すると同時にシャクテイの協力を得ることに成功する。

私達は四日後暗闇に紛れて迷宮都市オラリオを出ることになった。

これで万が一でもない限り私達は滞りなく迷宮都市オラリオを出ることができるに違いない。

その際にはシャクテイ達「ガネーシャ・ファミリア」の警備する門の通過を特別に便宜を図ってもらおうというお墨付きを得た上で、である。

シャクテイの話によればギルドが執着を見せて追手を差し向けることはほとんどあり得ず、迷宮都市オラリオを密かに出て行方を晦ませることさえできれば安全だと言う。

私達はイマイチ認知していないことであつたが、何せ迷宮都市オラリオではファミリアの夜逃げの如き出奔が少なくなきギルドも全てを引き止めるつもりは流石にないそうさ。

神ヘルメスも一応の懸念材料だが、私とベルだけのためにファミリアを動かしたり、ましてギルドを動かすことはないだろうというのがシャクテイの予測。

シャクテイの協力と予測のお陰で私もベルも安心して迷宮都市オラリオを出ることができるといことになる。

よって問題になつてくるのはシャクテイに指摘された通り迷宮都市オラリオを出た後である。

シャクテイもその後簡単に決められる事柄でもないし急いで決めるべきではないと付け加えられたが、私もベルも考えを深めない訳でいいと捉えられる訳もなく。



私とベルは今後迷宮都市オラリオを出た後どのような過ごし方をしていくかという大きな課題に真正面から向き合わざるを得なくなる。

## 旅支度の最中に

「…最近リユー少し食が細いですよね？食欲湧きませんか？やっぱり…」

「…えつと…それは…」

シヤクテイさんから迷宮都市オラリオを出るための助力を得た翌日のお昼時のこと。

僕が作ったお手軽なサンドイッチを啄むように少しずつ食べているリユーに僕はそう尋ねていた。

僕の問いにリユーは目を伏せて戸惑いを見せる。きつと答えにくいことを僕に伝えないといけないため躊躇してしまっているのだらう。

そう思った僕はリユーの躊躇を和らげるために笑顔浮かべて言った。

「大丈夫です。僕にとってはリユーの体調が一番大切ですから。僕には何でも遠慮なく言ってください。食事についても色々考えてみますから」

「…すみません。食事の準備もほとんどベルに任せてしまって…私は…」

「気にしないでください！これくらいのお手伝いしないと、夫として失格ですよ！僕を頼ってください。リユー？僕には直接アリーゼのためにできることがないから…少しでも力になりたいんです」

「ベルツ…」

リユーが自虐的な呟きと共に憂鬱な気分に入しかけるのを防ぎ、リユーの体調が第一だという本心を伝える僕。

僕のリユーを元気づけるための言葉にリユーは視線を僕に向け瞳を潤ませる。

リユーが自虐しかけた通り現在食事の準備は調理は僕が受け持ち、リユーはお皿の準備とか楽な仕事だけという分担で行っている。

これはリユーが以前の僕の好物を当てるために絶食しかけた…という事件の経験から僕が提案した結果始まった分担。

…少なくともアリーゼが産まれるまではリユーに料理を任せると色々almazい…という判断を密かに僕が下し、リユーには手伝いをしたいという名目で認めてもらった。

リユーは今のよう僕に任せっきりにすることを気に病んでいるのが僕としては凄く心苦しいが…とにかく色々な意味で僕は譲る訳にはいかない。

そんな僕の密かな考えに思いを巡らせていると、リユーは小さく息を吐き僕の問いにゆっくりと答え始めてくれた。

「先にお伝えしますが、ベルの作ったサンドイッチが美味しくない訳ではないのです。野菜をきちんと摂れて食べやすい食事は今の私では準備できませんし、このサンドイッチを食べているだけでベルの氣遣いと愛情を感じる事ができると言うか…」

「そつ…そうですか？ありがとうございます。でもサンドイッチくらい誰でも作れ…なつ…何でもないです」

「…？」  
僕はお礼を伝えた流れで危うく余計なことを口走りそうになり、慌てて口を閉ざす。

リユーが首を傾げるのみで聞こえてなかったらしいのが救いだつた。

最近聞いたシルさんの話によるとリユーはサンドイッチをなぜか黒炭に変えたことがあるとか…

となるとリユーは多分サンドイッチを作れないのは明白。

…リユーの手料理を楽しむにしていた三週間前の僕は知らなかったことだが、リユーは料理がほとんどできなかったのである。

後々シルさんのお陰(?)で知ることになった事実が(少なくともリユーよりはましだと思われる)僕が料理を担当するようになった理由だつたり…

それはともかくとしてリユーの今の話は前置きだったのはリユー自身の口振りからも分かり、僕が慌てて口を閉ざした後少しだけ間を置いた後リユーは続きを話してくれた。

「…ですがベルのご指摘通り食欲はあまりないです。恐らく

【戦場の聖女】から事前に説明を受けていたつわりだと思われま

「…ですよね」

リユートの体調を僕が特に気に掛けていた原因はつわり。つわりとは妊娠した初期に起こる吐き気や嘔吐のこと。

リユートは今まさにそのつわりに悩まされる時期にあり、アミツドさんから事前に気を付けるように注意を受けていたのだ。

そのため僕はデートと一緒に行ってリユートの気分転換を図る傍らリユートの体調をずっと心配になっていたのだ。

「ちなみに吐き気とかは大丈夫ですか？僕が気付いてないだけとかではないかと心配で…」

「その点はご心配なく。食欲が湧かず、時折気分が悪くなったりはしますがそれ以上の症状は誓ってありません。…今度ばかりは隠したりなどしませんよ」

「あつ…すみません。そういうつもりで言った訳では…」

「いえ、謝らないでください。ベル。私はベルに過大な心配をお掛けしてしまうような過ちを既に犯してしまっています。ベルが悪いのではなく私が悪いのです。本当に申し訳ありませんでした。ベル」

「うっ…うっ…」

心配のあまり僕は思わず口を滑らせてしまったことに気付くも手遅れであった。

リユートと僕が想起してしまったのは恐らくアリーゼがリユートのお腹にいと分かった際のこと。

当時のリユートは僕に体調不良を隠していて、僕もまたリユートが嘔吐してしまうまで指摘することができなかった僕達二人の苦い記憶である。

二人してその記憶に辿り着いてしまったため、揃って謝罪し合う沈んだ雰囲気陥ってしまう。

…この雰囲気を何とか打開しなければ。

そう僕が思い至った矢先にリユートが先に口を開いていた。

「ただ…それほど私は辛くはありません。【戦場の聖女】の説明を聞いた限りでは病気の如く辛いものかと思っていました。先日はベルと

二人でデートに出かけても差し支えのないほど。体調が凄く悪いというほどでもありません。全ては…ベルのお陰です」

「ぼっ…僕のお陰…ですか？」

リユートの言葉に僕は思わず目を丸くする。リユーが僕のお陰と言ってくれる理由がイマイチよく分からなかったからである。

僕は実際にリユーのつわりの辛さが分かる訳でもないし、つわりの辛さを代わってあげることもできない。

それがずっと僕の中では心苦しくて仕方がなかった。

だがそんな僕の想いにリユーは気付いてくれたのかもしれない。

リユーは僕の瞳をじっと見つめ、朗らかな微笑みを向けて頷いた後に言ってくれた。

「そうです。ベルのお陰です。ベルはこうして食事の準備をしてくださっています。それも野菜など栄養に気を使った食事をです。それに私の気分の悪い時に何気なく水を用意して下さったり、他にも様々な家事を手伝ってくださいます。…それこそ私の仕事がなくなる程度には」

「それはっ…僕にはそれくらいしかできないからでっ…それに今のリユーに無理をしていただく訳にはいきませんしっ！」

「そんなベルの気遣いがあるだけでも私はとても心強いのですよ。ベル。何よりベルはいつでも私のそばにいてくれます。愛するベルが辛いときにそばにいてくださる…私はその事実だけでもつわりの辛さなど吹き飛びます。だから全てはベルのお陰なのです。ベルがこんな私のそばにいてくださることに心からの感謝を。ベルが私の夫で良かったと改めて思います」

「リユッ…リユー！」

リユーが僕に微笑みと共に伝えてくれた僕への感謝の言葉に僕は感極まる。

僕の気遣いが少しでもリユーの心の支えになっている。

僕がいることが少しでもリユーの辛さを減らすための役に立っている。

そうリユーの口から聞かせてもらえるだけで僕のずっと感じてい

た心苦しきはスーツと和らいでいくように感じられた。

僕は感極まるあまり瞳に涙を溜めて、今すぐにもリユウの伝えてくれた感謝の言葉のお礼に抱き締めたくなる。

だがその思いを叶えるべく席を立ちかけた僕をリユウは手を小さく上げつつ制止した。

「お待ちを。お気持ちには分かります…私も今とてもベルに抱き締められたい気分です…ベルに抱き締められたら…食欲も湧いてくるかもしれない…」

「なっ…なら今すぐにも抱き締めます！リユウが食欲を取り戻すためなら僕は何でもしますよ！」

「しっ…しかしっ！今ベルに抱き締められると食事などどうでも良くなってしまうそうで…なので食事を優先しましょう。ね？ベル？」

「リユウがそう言うなら…分かりました。ちなみにそのサンドイッチは食べられますか？」

「はい…時間はかかるかもしれませんが、食べられると思います」

「そうですか。なら一応大丈夫ですね…急がずゆっくり食べてくださいね？リユウ？」

凄く抱き締められたいかのような迷いがリユウ自身の言葉と態度から溢れ出ているが、他ならぬリユウ自身がやめるべきと強く言ったので大人しく僕も引き下がりに腰を下ろす。

とりあえずは今の僕としてはリユウがきちんと食事を食べてくれて栄養をきちんと摂ってくれば良いので無理に抱き締めようとは動かない。

ただ…リユウが凄く抱き締めて欲しいそうにしているという事実が変わらないので食事が終わったらすぐにも抱き締めようと固く決心する。

こうして僕がそばにすることがリユウのつわりの辛さを和らげるという事実がリユウをより積極的に抱き締める大義名分になったと確信した僕。

さらに僕はリユウのお陰で自らの抱えていた心苦しさを取り除くができ、僕の気遣いに感謝の想いを伝えてくれたリユウの気遣いに僕

は感謝を覚えずにはいられない。

とは言え心配はそう簡単には消えないものでつつい加えて僕は聞いてしまっていた。

「それで…リユーが体調に問題がないなら良いんですが、三日後に迷宮都市オラリオを出るという予定のまま問題ないですかね？リユーの食欲の問題は体力の問題にも直結しますし、リユーが万全な体調な時まで遅らせるのも考えた方が良いかもと思わず考えてしまうのですが…」

「ベルの心配は分かります。ただ私としては長く迷宮都市オラリオに留まり続ける方が問題かとも思えます。時を過ごせば過ごすほど私達の噂が広まる可能性は高まりますし、神ヘルメスの動向も気掛かりです。何より私のつわりはそう短期間で終わるとも限らないようですから。シヤクテイの提示して下さった三日後が【ガネーシヤ・ファミリア】的にも都合が良い以上、予定通りが一番かと」

「そうですか…リユーがそう言うならそれでいいのですが」

僕は納得が少々できていない一面を抱えながらもリユーの言葉に理解を示し、それ以上は追及しない。

リユーの言う通り僕達の噂に関しても邪神ヘルメスに関しても気掛かり。

さらに言うとりユーのつわりも今がピークとは言えいつ終わるかまではアミッドさんにも分からないそう。

そのためリユーの考えが一番正しいということは僕にも分かった。

ただ僕としてはリユーの体調が万全でない以上リユーのこともアリーゼのことも心配な訳で…

僕は心配を抱えつつもこれ以上は我儘になると心配を封じ込め、話を転換することにした。

「それでこの三日間はどうか過ぎましょう？僕としては迷宮都市オラリオを出ることを神様達とかにお伝えするのが良いかとも思うのですが」

「ベルの仰る通りです。ベルも私も様々な方にお世話になってますから、挨拶をきちんとお伝えすることは肝要かと。私もミア母さんや同僚達に挨拶をしておきたいですし。何より…迷宮都市オラリオを出た後どう

過ごしていくかは私達二人の知恵だけではなく多くの方の知恵を借りるべきです」

「それは…確かにそうです。リユウの仰る通り迷宮都市を出た後のことに関しては他の方の知恵を借りた方が良いです」

一瞬にして考えを一致させたリユウと僕はそう言つて表情を複雑にしつつも頷き合う。

実のところ未だ僕達が迷宮都市を出ると知っているのは僕達を除けばシルさんとリリとシヤクテイさんのみ。

人目に付かないようにと『竈火の館』などには近寄らないようにしていたため、話をする機会を失っていたのだ。

…デートしている時間があるなら伝えるべきではないのかという点はリユウも僕も今の今までですっかり忘れていたということ。

ともかくとして三日のうちに僕もリユウも挨拶をしておきたいお世話になった皆さんには会っておかなければという考えが一致するのはある意味で当然であった。

加えて迷宮都市を出た後のことは僕もリユウもほとんど考えを深めることができずにいるため、神様や他の方の意見を聞くのは是非とも必要なことであった。

その考えの延長線か今度はリユウの方が口を開いて、一つの提案をしてくれる。

「あと少なくともシルやアーデさんと共に迷宮都市を出るのならば、わざわざ幾度も密会するという形を取らずに同じ場所で過ごす方が良いような気がします…如何ですか？二人と同じ場所に住めばよりにたくさんの話ができるので迷宮都市を出た後のことのお考えも深まりやすくなるのではないのでしょうか？」

「あつ…あー」

リユウの提案したのはシルさんとリリと一緒に迷宮都市を出るなら、同じ場所にいた方が良いのではないかという点。

…リユウの言うことは間違っていない。確かに密会という形を何度も取っていると目撃されたり尾行されるリスクも高い。そのリスクを考えれば同じ場所に住むべきなのかもしれない。



だがリユーは忘れている。

こんな生活を送れているのはシルさんとリリがないからであるということ。

「でも…リユーは良いんですか？」

「何が…ですか？」

「…シルさんとリリがいたら、二人で肩を寄せ合ってお話がしにくくなりますよ？抱きしめ合ったりするとシルさんには押搦られて、リリには冷たい視線を向けられたりするかもしれませんよ？」

「はっ…！」

僕の指摘にリユーはハッと息を飲む。

リユーもどうやらシルさんとリリがないことによるメリツト…僕達が二人でいることがいかに大事かようやく気付いてくれたらしい。

「そう…ですね。ベルと肩を寄せ合ってお話しできなくなることも抱き締め合うこともしにくくなるのは…非常に望ましくありません。もしそんな事態に立ち至れば私は気が滅入ってしまいそうです…」

「なら絶対にダメですよ！だからシルさんとリリとは迷宮都市を出るまでばらばらの場所で住むということと良くないですか？迷宮都市を出た後のことはそう急ぐ必要もないかもですし…」

「そっ…そうですね。今の生活もとても大事ですから…ベルがそれで問題ないと仰るなら…」

「もちろん問題はないです！リユーとの二人での生活が一番です！」  
「なら…このままと致しましょうか」

こうしてリユーを説得できた僕はリユーと二人だけの甘い生活を守り通した。

…ただし迷宮都市を出た後のことを考えるとという大事なことを事実上先送りにした上で、だが。

それはともかくとして迷宮都市を出る日が段々と近づいてくる中僕達は少しずつ準備を進めていくのであった。

ちなみに食事を終えた後リユーを滅茶苦茶抱き締めて、一杯温もりを交換し合ったのは言うまでもない。

## 希望を守る旅へ

月の光に照らされたリユー・僕・シルさん・リリの四人は迷宮都市オラリオの郊外の森の中にいた。

シャクテイさんと約束した日の夜、無事予定通りシャクテイさんの手直しのお陰で迷宮都市オラリオを出ることができたのだ。

だが迷宮都市オラリオを無事出れたからと必ずしも油断して良い…という訳ではなかった。

「ね？リユーにベルさん？そろそろ休憩を挟んでもいいんじゃないかなーって思うんだけど、どう？結構迷宮都市オラリオを出てから休みなしに歩いてると思うんだけど…」

そう愚痴を漏らしたのは僕達に同行すると早くから宣言していたシルさんであった。

だがシルさんの愚痴を即座にリリとリユーが封じる。

「ダメです。シル様。万が一に備えて迷宮都市オラリオからできる限り離れなければならぬんです。ギルドやヘルメス様が何か行動を起こす可能性も完全に消滅した訳でもありませんから」

「アーデさんの仰る通りです。神ヘステイアやシャクテイ、アンドロメダの口添えのお陰で一応は問題ないとお聞きしていますが、万が一には備えるべきかと。なので申し訳ありませんが、シル？もう少し頑張ってください。夜が明けるまでに近くの街に入ることができれば休めますので」

「うーん…了解。私的には問題なんて起きない気がするけど…まあいいよ。アーデさんとリユーの言う通りにして頑張るよ」

二人の言葉にシルさんは愚痴を封じ込められ、納得した様子。お陰で僕が口添えする必要もなかった。

そのため引き続き誰一人歩みを止めることなく歩き続ける。

リユーの言う通り近くの街に入ることができきるまでは完全に安心する訳にもいかず僕達は少々先を急ぎながら進んだ。

そしてリユーの言う通り今こうして何事もなく迷宮都市オラリオを出ることができているのは神様やシャクテイさん、アスフィさんのお陰。

シャクテイさんが迷宮都市オラリオを出るために門の警備に手を回してくれたのは周知の事実だから話の向く先はまずは神様に関してであつた。

「それにしてもヘステイア様がよくベルさんと一緒に迷宮都市オラリオを出るっていう話にはならなかったですよ〜ヘステイア様ならお引止めになるか絶対に付いていこうとするかと」

「それは…ヘステイア様が私とベルの愛の巢を邪魔をしてはいけなとお気遣いなさつて…」

「あとは迷宮都市オラリオに残る皆のためという意味もありますね。ギルドへの対応でも神様が残った方が良いと話し合いの結果になりました」

シルさんが意外そうに神様が同行しなかったことに関して触れ、その理由はリユーと僕が説明した通り。

リユーの言つたりユーと僕の愛の巢の邪魔はできないと凄く渋々としか言いようがない表情で神様が言つたのも事実。

僕が言つた通りヴェルフ達みんなが迷宮都市オラリオに残る以上僕が迷宮都市オラリオを出るからと神様が同行する訳にはいかないというも事実。

特に戦力の流出を嫌うギルドに対しては僕一人の流出はともかく「ヘステイア・ファミリア」全体の流出は断固反対するであろうという観点からの判断であつた。

ギルドに関しては神様がウラノス様と直々に話を進め、僕が迷宮都市オラリオを出ることを認めてもらうことができしており、ギルドは僕達が迷宮都市オラリオを出ることは暗黙の了解…ということになっているはず。

そして神様はギルドとの交渉を引き受け僕達四人だけで迷宮都市オラリオを出ることを認める代わりに一つだけ条件を付けていた。

「代わりに一カ月に一度はヘステイア様達に連絡をするように仰せつかつています。さらに定住する場所を決めた際にはお会いしたいとのことその場所をお伝えするといふ話になっています」

「身の危険を考えるなら本当は誰にも居場所を知られないようにしなければならぬと思うんですけどね…」

「確かにリリの言う通りかもしれないけど、神様達も心配するだろうからね？」

「それに私達としても親しくしてくださいました方々と永久の別れというのは流石に辛いものがあると言いますか…」

「ベル様とリユー様お二人の言い分は当然リリも理解するのですが…」

神様の出した条件とは定期的に連絡をし、住む場所が決まったらきちんと伝えること。

僕とリリの恩恵は神様に残してもらったままで神様に僕達の安否は分かるとは言え、心配なものは心配と言われてしまい、神様の条件に従うことになった。

この点に関してはリユーも僕も賛成。

なにせ迷宮都市<sup>オラリオ</sup>を出るのはリユーの事情もあつて住み心地が良くないからにすぎず、本当は親しかつたみんなと別れるのは不本意だったのは揺らがない。

そのため僕は神様やファミリアのみんなへの連絡を約束してきている。

それはリユーも一緒の訳だが、リユーに関しては一抹の不安とも言うべき部分があり、リリはその点を触れない訳がなかった。

「ただ…「ヘルメス・ファミリア」にお伝えする点はどうにも気になります。リユー様のご友人だからという事情は十分理解しますが…」

「その点はどうかご了解ください。アーデさん。アンドロメダはただ私の友人だからというだけでなく今回の神ヘルメスの不穏な動きを封じるために手を打ってくださいった恩があります。そんな彼女の恩に報いるため…そして彼女がこれから私との友情を維持していきたいと仰ってくれた以上、私には断る訳にはいきません」

「僕も確かに不安はない訳ではないですが…それでもアスフィさんならきつと大丈夫だと思おうよ？邪神ヘルメスをあれだけボコボコにして僕達の前に引きずり出してくれたんだから」

「ああ…あれは見てて本当に爽快だったけど…うん。きつとアスフィさんなら大丈夫だね」

「あれはあれで問題だったと思うんですが…」

リリが触れたのはリユーがアスフィさんとの連絡を維持すること

に決めた点に関して。

アスファイさんの主神である邪神ヘルメスが僕に歪んだ執着を見せていた以上、連絡を維持して僕達の居場所を知られるのは問題だというリリの言い分は当然理解するのだが…

邪神ヘルメスの脅威は現状では杞憂と見て問題ないというのがリユーと僕の見解で、僕達四人全員の頭に浮かんだのは二日前のある事件であった。

その事件とはアスファイさんが僕達の家で邪神ヘルメスを連れてきたこと。

それも縄で縛って身体中痣だらけにされた状態の邪神ヘルメスを。シルさんの言ったように爽快だったとか清々したとかいう思いがなかった訳でもなかったが、当初は何事かと居合わせたシルさんとり含めた四人で反応に窮すしかなかった。

ただその後加えられたアスファイさんの説明によれば邪神ヘルメスはならず者を雇って僕達を襲撃することを企んでいたとか云々。

そしてアスファイさんが主神の不穏な振る舞いを関知して事前に防いだ上で謝罪のためにわざわざ僕達の家まで訪れてくれたそうだ。

当初リユーの命を狙った邪神ヘルメスを許す理由もないと僕が神殺しも辞さないという考えで処断を主張し、リリも後顧の憂いは断つべきとの理由で何らかの処置を主張した。

だがシルさんは神殺しを行えば迷宮都市オラリオを出るだけでは收拾が付かなくなると主張し、心優しいリユーもアスファイさんの謝罪もあって邪神ヘルメスを許すように僕に言った。

そのため僕達四人の考えは二分され膠着状態になるかと思われたが、先に譲ったのは僕の方であった。リユーにとっての大切な友人であるアスファイさんの誠意を無碍にする訳にはいかなかった。

結果邪神ヘルメスは何事もなく放免ということになり、未然に不穏な動きを防いでくれたアスファイさんにリユーは多大な感謝を覚え今後も友人関係を維持しようとしてリユーとアスファイさんが誓い合う感動的な話が展開されたのだが…

リリが一抹の不安を覚える理由も分かるし、僕としても本心では邪

神ヘルメスという不安要素を残したのは些か気掛かり。

ただリユーがアスフイさんとの友情を維持できたことに心から安堵している様子だったので僕からはその後加えて言い募ることはなかった。

ちなみに言うとりユーが連絡を維持することに決めたのはアスフイさんに加えて『豊穡の女主人』の皆さんとシャクテイさん。

僕は僕で連絡を維持しようと決めた親しい人達がいる以上、リユーの親しい人達との連絡を止めるのも不公平だというのが僕の中での一応の結論だった。

「…リユー様が必要以上の事柄をお伝えしなければ多分大丈夫でしょう。ヘルメス様もあの場では妙な企てを起こさないと神の名に誓って仰ってましたし」

「そうそう。ヘルメス様に関してはご心配なく、私的にもヘルメス様はズーッと余計なことをベルさんやリユーにしているのが目障りだったんですよねーアスフイさんの制裁程度じゃヘルメス様は懲りないと思うので少し『手配』をしておいたのもう心配はいりません！」

「…シル？あなた今度は一体何を手配したんですか？」

「ふふつりユーが心配するようなのは一切してないから大丈夫だよ？ちよつと釘を刺しておいただけだから」

「…シル…あなたという人は…」

リリの渋々の納得にシルさんは目が笑っていない薄ら寒くなるような笑みで何かを『手配』したと宣う。

シルさんの言葉にリユーは元より僕も表情が引き攣るが、シルさんは笑みを崩さずその『手配』の具体的な内容は言葉にしない。

そのためシルさんの『手配』はシルさん自身が話題を変えたことによつて僕達に若干の恐怖を感じさせつつも闇に葬られることになった。

「ちなみにリユー？ベルさん？今更ですけど、一つお聞きしても良いですか？」

「何です（か）？シル（さん）」

「ふふっ…またハモりましたね？」

「それはもう私とベルは以心伝心の仲で…」

「リユーと僕の心はいつでも繋がってますから！」

シルさんの質問にリユーと僕は同時に返事をして、僕達の様子にシルさんはクスリと笑う。

そしてリユーも僕もさも当然だと胸を張って僕達の以心伝心具合を誇っていると、シルさんは僕達の瞳を交互に見つめた後一つの確認を言葉にした。

「迷宮都市を出てリユーもベルさんも後悔してないですか？」

シルさんが言葉にしたのは迷宮都市を出て後悔がないかという最終確認。

リユーも僕も迷宮都市ですつと冒険者を続けてきた訳で…

迷宮都市を出るということは冒険者を本当の意味でやめることと同義と言っても良いのかもしれない。

それはこれまでの人生の価値観が大きく変わり得る契機とも言えて。

この判断を下して後悔する可能性がない…とは言い難いと評すべきなのかもしれない。

リユーと僕は互いの顔を見合わせお互いが何を考えているか無言のまま視線を交わすことで理解しようとする。

そうして少なくともリユーの瞳は後悔のような負の感情は一切映していないように見受けられた。

リユーが一切負の感情を抱いていないならリユーの幸せを願う僕が負の感情を抱く可能性など寸分たりともあり得ず。

互いの考えを暗黙のうちに通わせた僕達はシルさんに視線を戻すと、それぞれの言葉でシルさんの最終確認への答えを紡ぎ出した。

「私が後悔することなどあり得ませんよ。シル？迷宮都市を出ることは私とベルの正義を守るために不可欠な行動でした。私とベルの愛を守るため…そしてアリーゼを守るため。私は今後決して迷宮都市



を出たことを後悔しないと誓いましょう」

「僕も後悔することなどあり得ません。シルさん。迷宮都市に留まり続けることがリユーとアリーゼの幸せの障害になるならば、出るというのが当然の判断です。それに親しいみんなとは距離が離れても永遠の別れでもないですし、そこまで大きな苦痛でもないと言うか」

「その点はベルと同感です。だからこそ気掛かりなのでがシルとアデさんです。…その私達の個人的な都合で迷宮都市を出ることになつてしまい…後悔していませんか？」

「あつ…そうです。シルさんの質問に質問を返すようですが…僕からもその点は確認しておきたいと…思つてしまいますね」

リユーも僕も自分達自身と大切な子供であるアリーゼのためという確固たる理由があるから迷宮都市を出ることに戸惑いはない。

だがシルさんとリリの場合はどうか？ っいついその点で揃つて不安を抱いてしまったリユーと僕。

そんな僕達二人にシルさんもリリも表情を綻ばせながら答えてくれた。

「ふふつ…私は私で伴侶を探すために迷宮都市を出てきたんだから、私が後悔する訳ないでしょう？ それに私はリユーとベルさん、そしてこれから生まれてくるアリーゼちゃんはどう成長していくのかすつごく楽しみにしてるの。だからリユーとベルさんが気掛かりに思う必要なんてないよ？」

「リリは…そもそも迷宮都市に留まることに執着する理由がありません。ベル様がお幸せになる手助けができれば良いと言うか…あとはそうですね。シル様と似ていてベル様とリユー様のお子さんがどのように成長していくか関心はあります。少なくともリリは進んでベル様とリユー様に同行しています。なのでリリが後悔することだけはあり得ません」

シルさんとリリの返してくれた答えはそれぞれ後悔がなく自分達の目的の元で僕達に同行してくれているということ。

そして何よりアリーゼの成長を楽しみにして同行してくれているという言葉はリユーにとつても僕にとつてもとても嬉しい言葉で

あつた。

アリーゼが生まれてくることをみんなが楽しみに思ってくれている。

この事實はこれから生まれてくるアリーゼにとっても親としてリユーと僕にとっても幸せで尊いこと。

僕は改めてアリーゼに会える日を待ち遠しく思う気持ちが強くなつた気がした。

こうしてリユーも僕も二人の意志を改めて知ることができたことで不安を打ち消すことができた。

だが実は僕達の心を蝕みうる要素が未だ残っており、今はリユーも僕も目を逸らしているだけだったのだ。

「それでベル様もリユー様も未だにお話を聞いていないのですが、迷宮都市を出た後どうなさるおつもりで？」

「…」

「…」

「…まさか結局結論が出なかったのですか？」

リリが青ざめつつそう尋ねてくるが、リユーも僕も答えることができない。

確かに迷宮都市オラリオを出た後親しかったみんななどの連絡を取るという話はすることができて、リユーも僕も安堵することができた。

だが一時の別れを名残惜しむあまり迷宮都市オラリオを出た後どう生活していくかの具体的な相談をする機会を二人揃ってすっかり逸してしまつたのである。

そのため結局リユーも僕も迷宮都市オラリオを出た後の考えはないと言っても過言ではなくリリが僕達の無思慮に青ざめるのはある意味仕方ない所があつた。

このように事実上無計画で迷宮都市オラリオを飛び出してしまったリユーと僕はこの後またも問題に直面することになってしまうのである。